

昭和54年度

浪岡城跡発掘調査報告書

# 浪岡城跡Ⅲ

浪岡町教育委員会

## 発刊にあたって

浪岡城跡を「史跡公園」として、一般公開することを目的として、発掘調査を進めてまいりましたが、調査計画7年目のうちの2年目の報告書を刊行することになりました。

報告書作成に当っては、弘前大学・虎尾、村越両教授をはじめ、金沢大学佐々木助教授等の指導、助言を賜わり心から感謝申し上げます。

さて、まぼろしの城「浪岡城」とか、津軽為信に滅ぼされた城跡しろあととか、話題を呼んでいる浪岡城跡も、発掘調査が進むにつれ、真相解明のための一端とも言える遺構・遺物等の発見により着々とその成果を上げているところがあります。

今後はさらに発掘と併行して整備計画を進めてまいり所存でありますので、関係各位の一層のご指導をお願いする次第であります。

最後に、本報告書が広く関係各位に活用され、文化財保護の一助にもなれば幸いです。

昭和56年3月31日

浪岡町教育委員会

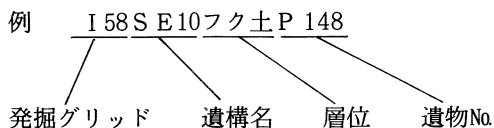
教育長 村上良民

## 例 言

1. 本書は、史跡浪岡城跡環境整備計画策定のため昭和54年度におこなった発掘調査の報告書である。
2. 発掘調査は、国・県の補助を受け、総事業費 10,000,000円で浪岡町・浪岡町教育委員会が行なった。
3. 発掘調査および出土遺物の整理は、昭和54年6月2日から昭和56年1月31日まで行なった。
4. 本書は、本文5項目、挿図(Fig.) 54枚、図版(PL.) 52枚、表(Ch.) 20枚で構成し、執筆は奈良岡洋一がIV-10・11、その他を工藤清泰が担当した。
5. 遺物の中で、特に陶磁器に関しては、調査特別顧問佐々木達夫氏、東京大学名誉教授三上次男氏のご指導によるところが多大であった。記して感謝申し上げる次第である。
6. 発掘調査および遺物整理の段階で、つぎの方々ならびに関係機関のご指導・ご助言・ご協力をいただいた。厚くお礼申し上げる次第である。(順不同・敬称略)

文化庁、青森県教育庁文化課、青森県埋蔵文化財調査センター、福井県一乗谷朝倉氏遺跡調査研究所、奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター、岩手県教育庁文化課、岩手県埋蔵文化財センター、京都市埋蔵文化財調査研究所、東北歴史資料館、弘前大学考古学研究室、石川県立埋蔵文化財センター、青森県立郷土館、北上市立博物館、秋田市立秋田城跡調査事務所、弘前市教育委員会、広島県草戸千軒町遺跡調査研究所、鈴木克彦、岩本義雄、大橋康二、本堂寿一、平田天秋、藤沼邦彦、昆野靖、石川長喜、吉岡康暢、橋口定志、小川貴司

7. 遺物に関して、陶磁器、鉄製品などはすべて通しナンバーとし、写真Noと挿図Noは符合するようにした。
8. 表(ch.)中の出土区については、発掘グリッド・遺構名・層位・遺物Noの順に記載している。



# 本文目次

序文			
I. 調査にいたる経緯	3	4. 鍋	121
II. 調査経過の概略	9	5. 火打金	123
III. 検出遺構	10	6. 火箸	123
A. 平場の遺構	10	7. かすがい	123
1. 平場の層序	10	8. 釘	126
2. 土居跡	15	9. その他	126
3. 竪穴遺構	15	C. 銅製品	133
4. 井戸跡	58	1. 罈	133
5. 不明遺構	62	2. 切羽	133
B. 堀跡の遺構	66	3. 小柄	133
1. 堀跡の層序	66	4. 筭	133
2. 井戸跡	75	5. 足	133
IV. 出土遺物	79	6. 高台	133
A. 陶磁器類	79	7. その他	133
1. 青磁	79	D. 石製品	137
2. 白磁	85	1. 硯	137
3. 染付	88	2. 砥石	137
4. 美濃・瀬戸(灰釉・鉄釉)	92	3. 石臼	137
5. 朝鮮・唐津	99	4. その他	140
6. その他の陶器	99	E. 古銭	140
7. 瓦器	102	V. まとめ	146
8. 播鉢	105		
9. 溶解物付着土器	109		
10. 土師器	110		
11. 須恵器	110		
B. 鉄製品	115		
1. 刀	115		
2. 鉄鍬	115		
3. 小札	117		

## 挿 図 (Figures) 目 次

Fig. 1	浪岡城跡の位置 .....	2
Fig. 2	浪岡城跡全体図 .....	5・6
Fig. 3	グリッド配置図 .....	7・8
Fig. 4	北館平場発掘区全体図 .....	11・12
Fig. 5	H58・59・60区北壁セクション図 .....	13・14
Fig. 6	S T 09・S T 31・S T 32・S T 33実測図 .....	17・18
Fig. 7	S T 10実測図 .....	21
Fig. 8	S T 12実測図 .....	23
Fig. 9	S T 13実測図 .....	25・26
Fig. 10	S T 14実測図 .....	29
Fig. 11	S T 15・S E 08実測図 .....	31
Fig. 12	S T 16・S E 09実測図 .....	33
Fig. 13	S T 17実測図 .....	34
Fig. 14	S T 18実測図 .....	36
Fig. 15	S T 19・S T 24実測図 .....	38
Fig. 16	S T 20実測図 .....	40
Fig. 17	S T 21実測図 .....	42
Fig. 18	S T 23実測図 .....	45
Fig. 19	S T 25実測図 .....	47
Fig. 20	S T 26実測図 .....	49
Fig. 21	S T 28実測図 .....	50
Fig. 22	S T 30実測図 .....	52
Fig. 23	S T 11・S T 34・S T 35・S T 36・S E 16実測図 .....	55・56
Fig. 24	S E 10実測図 .....	59
Fig. 25	S E 12実測図 .....	61
Fig. 26	S X 01実測図 .....	62
Fig. 27	S X 02実測図 .....	63
Fig. 28	S X 03実測図 .....	64
Fig. 29	N・O・P-54・55区平面図 .....	67
Fig. 30	(1)O55区北壁 (2)O55区西壁 (S E 11断面図) (3)S E 11井戸枠側面実測図 .....	69・70
Fig. 31	N・O・P・Q-54区西壁断面図 .....	71・72
Fig. 32	(1)S E 14石組 (2)S E 14木枠検出状況 .....	77
Fig. 33	青磁実測図 .....	84
Fig. 34	白磁染付実測図 .....	87
Fig. 35	染付実測図 .....	91
Fig. 36	美濃・瀬戸実測図 .....	96
Fig. 37	唐津・他実測図 .....	100
Fig. 38	瓦器実測図 .....	104
Fig. 39	播鉢実測図 .....	107
Fig. 40	溶解物付着土器・座金・銅滓実測図 .....	109
Fig. 41	土師器・須恵器実測図 .....	111
Fig. 42	須恵器実測図 .....	113
Fig. 43	鉄製品実測図Ⅰ (武具) .....	116
Fig. 44	鉄製品実測図Ⅱ (小札) .....	118
Fig. 45	鉄製品実測図Ⅲ (小札) .....	119
Fig. 46	鉄製品実測図Ⅳ (鍋等) .....	122
Fig. 47	鉄製品実測図Ⅴ (火箸・火打金・他) .....	124
Fig. 48	鉄製品実測図Ⅵ (釘・かすがい・他) .....	125
Fig. 49	銅製品実測図Ⅰ (鐺・切羽・筭・足・他) .....	134
Fig. 50	銅製品実測図Ⅱ (香炉・台・他) .....	135
Fig. 51	石製品実測図 (硯・砥石・他) .....	138
Fig. 52	古銭拓影図(1) .....	141
Fig. 53	古銭拓影図(2) .....	142
Fig. 54	古銭拓影図(3) .....	143

## 図 版 (PLates) 目 次

PL. 1	浪岡城跡航空写真	1
PL. 2	北館平場発掘区全景	10
PL. 3	S T 09・S T 31・S T 32・S T 33 (東より)	19
PL. 4	S T 09・S T 31・S T 32・S T 33 (北より)	19
PL. 5	S T 10 (北より)	21
PL. 6	S T 12 (南より)	22
PL. 7	S T 13 (西より)	27
PL. 8	S T 14 (南より)	28
PL. 9	S T 15・S E 08 (北より)	30
PL.10	S T 16・S T 30・S E 09 (東より)	32
PL.11	S T 18 (北より)	35
PL.12	S T 19・S T 24 (東より)	37
PL.13	S T 20 (北より)	39
PL.14	S T 21 (東より)	41
PL.15	S T 22 (東より)	43
PL.16	S T 23 (東より)	44
PL.17	S T 25 (南より)	46
PL.18	S T 26 (東より)	48
PL.19	S T 28 (西より)	51
PL.20	S T 34 (東より)	53
PL.21	S T 33 (1)炭化材出土状態 (2)炭化米出土状態	20
PL.22	S T 35・S T 36・S E 17・S T 11 (南より)	57
PL.23	S T 38	57
PL.24	S E 10	60
PL.25	S E 10遺物出土状態 (1)かすがい (2)刀 (3)ねり鉢 (4)木材	60
PL.26	S E 15	61
PL.27	S X 02	62
PL.28	J-57区 (S X 05)	65
PL.29	N・O-54・55区堀跡全景	68
PL.30	堀跡 (1)発掘風景 (2)堀跡・土塁検出状況	73
PL.31	N・O-54区西壁断面図	74
PL.32	S E 11 (1)井戸枠検出状況 (2)井戸枠全景 (北より) (3)側板除去状態	76
PL.33	S E 11枠組状態 (隅柱と横棧)	77
PL.34	S E 14 (1)石組出土状態 (2)木枠出土状態 (3)完掘状況	78
PL.35	青磁	80
PL.36	青磁	82
PL.37	白磁	86
PL.38	染付	89
PL.39	美濃	93
PL.40	美濃・染付	95
PL.41	朝鮮・唐津・天目・他	98
PL.42	不明陶器・溶解物付着土器	101
PL.43	瓦器	103
PL.44	擂鉢	106
PL.45	ねり鉢	108
PL.46	土師器・須恵器	112
PL.47	須恵器	114
PL.48	鉄製品 I (刀・かすがい・火打金・他)	129
PL.49	鉄製品 II (小札・鉄鏃・他)	130
PL.50	鉄製品 III (鍋・釘・他)	131
PL.51	鉄製品 IV・銅製品	132
PL.52	石製品	139

## 表 (Chart) 目 次

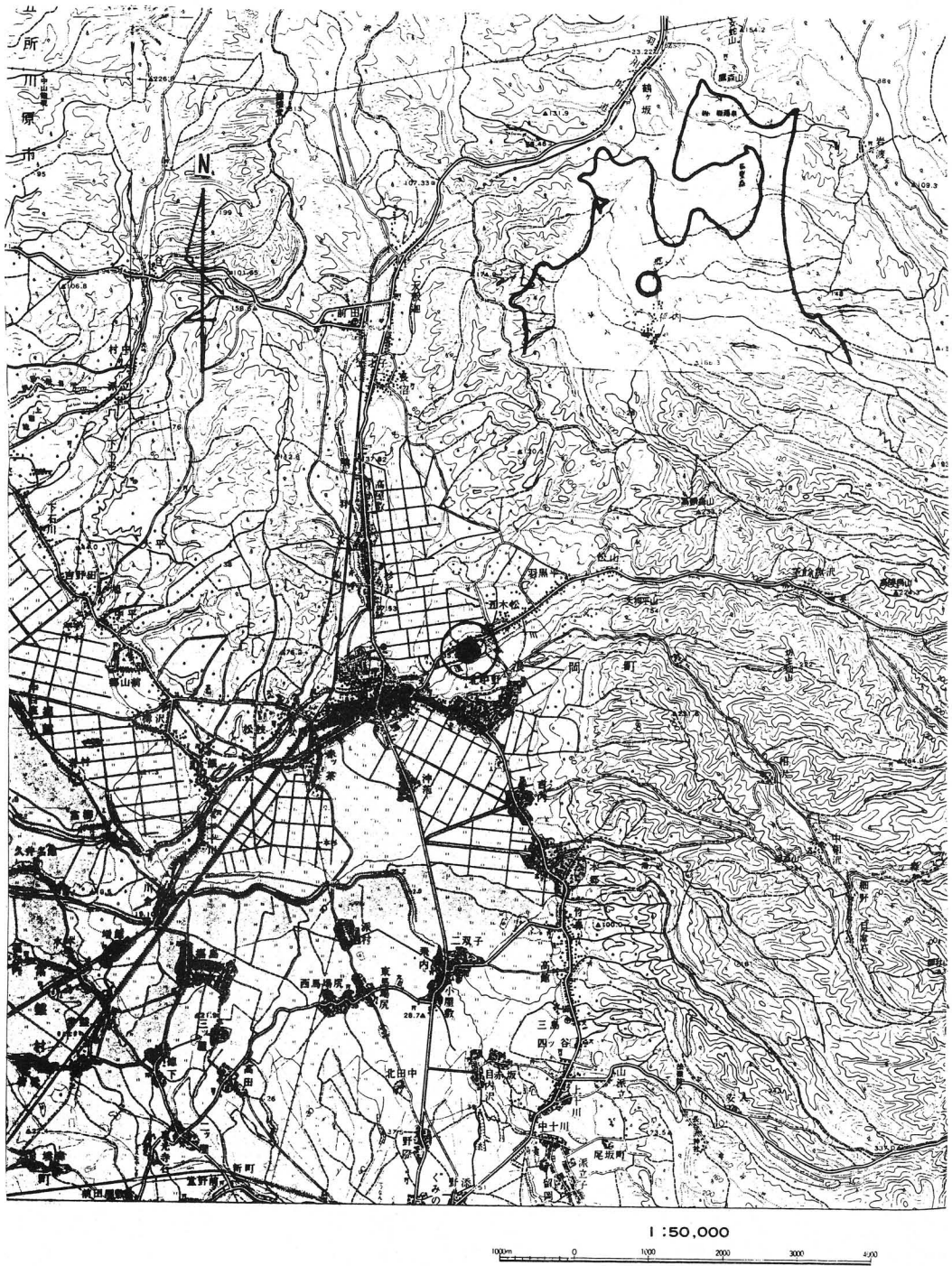
Ch. 1	遺物挿図・図版対比表 (青磁) .....	83
Ch. 2	“ “ (白磁) .....	87
Ch. 3	“ “ (染付) .....	90
Ch. 4	“ “ (美濃・瀬戸) .....	97
Ch. 5	“ “ (朝鮮・唐津・不明陶器) .....	100
Ch. 6	“ “ (瓦器) .....	102
Ch. 7	“ “ (播鉢) .....	108
Ch. 8	“ “ (溶解物付着土器) .....	109
Ch. 9	“ “ (土師器・須恵器) .....	114
Ch. 10	小札出土区別一覧表 .....	117
Ch. 11	小札計測表 .....	120
Ch. 12	鉄製品計測表 (刀・火箸・火打金など) .....	126
Ch. 13	鉄鏃計測表 .....	127
Ch. 14	鉄鍋他計測表 .....	127
Ch. 15	その他の鉄製品計測表 .....	127
Ch. 16	鉄釘計測表 .....	128
Ch. 17	銅製品計測表 .....	136
Ch. 18	石製品計測表 .....	140
Ch. 19	古銭名称別出土表 .....	140
Ch. 20	古銭集計表 .....	143

PL. 1 浪岡城跡航空写真





Fig. 1 浪岡城跡の位置



# I 調査にいたる経緯

なみおか  
史跡浪岡城跡は、青森県南津軽郡浪岡町大字浪岡字五所・林本、大字五本松字松本地内に所在し（Fig.1参照）、昭和15年2月10日に国の史跡に指定されている。史跡指定地面積215,800㎡のうち、昭和44年度から同49年度までに実施された公有化事業により、188,300㎡は町有地となった。（Fig.2参照）城跡は、東から新館・東館・猿楽館・北館・内館・西館・検校館・無名の8郭より構成されており、各郭は幅10mほどの堀割によって分割されている。（城跡の環境と現状に関しては「浪岡城跡Ⅰ・Ⅱ」を参照のこと）

本年度の調査は、昨年に引き続き、浪岡城跡環境整備計画策定のため国・県の援助を受けて行った調査で、7年計画の2年目にあたるものである。

## 昭和54年度史跡浪岡城跡発掘調査要項

### 1. 調査の目的

史跡浪岡城跡は、昭和44年から始まった公有化事業により東館・猿楽館・北館・西館・検校館およびその間の堀が町有地となり、「町民の憩いの場」としての史跡公園化への第1段階を終了している。浪岡町は、長期的見通しのもとに、昭和52年度から埋蔵文化財の調査を開始し、北畠氏居城としての浪岡城に歴史的解明を加えようとしている。この事業は、将来、環境整備・保存管理事業をおこなう時に貴重な基礎資料として活用され、さらには町民の文化財保護意識の昂揚にも貢献できると考えられる。

本年度は、当城跡の中心的居館と推定される北館の調査を中心に、建築遺構の検出・出土遺物の発見に努めることを目的としておこなう。

### 2. 調査期間

事前作業 昭和54年5月21日 ～ 6月2日

発掘作業 昭和54年6月4日 ～ 10月3日

整理作業 昭和54年10月4日 ～ 昭和55年3月31日（実質昭和56年1月31日まで）

### 3. 調査員等

調査特別顧問	虎尾 俊哉	弘前大学教育学部教授
〃	村越 潔	弘前大学教育学部教授
〃	佐々木達夫	金沢大学法文学部講師（現文学部助教授）
調査員	佐藤 仁	県立弘前高等学校教諭
〃	葛西 善一	浪岡町文化財審議委員
〃	宇野 栄二	浪岡町文化財審議委員
〃	小笠原 勲	町立浪岡中学校教諭

調査員	村上 巖	町立浪岡中学校教諭
〃	奈良岡洋一	県立藤崎園芸高等学校講師
調査事務担当	工藤 清泰	浪岡町教育委員会
調査協力員	弘前大学考古学研究室学生、青森大学史学研究会学生、他	
調査補助員	常田紀子他9名	
調査作業員	秋元ヨツエ他19名	

#### 4. 調査地域

青森県南津軽郡浪岡町大字浪岡字五所地内（北館）

#### 5. 調査主体者

浪 岡 町 町長 平野良一

#### 6. 調査事務局

浪岡町教育委員会 社会教育課 TEL 017262 - 3 0 0 1（内線324）

教 育 長	村上 良民
社会教育課長	小笠原武芳
社会教育係長	木村 鉄雄
社会教育主事	木村 文男
主 事 補	工藤 清泰（現主事）
主 事 補	長谷川 理

#### 7. 調査項目

北館——昭和53年度の調査によって一部調査した区域（H・I・J-47区）からは、竪穴遺構・井戸跡などとともに舶載品である青磁・白磁・染付などが多数出土し、東館との相違がみられた。さらに、堀跡の調査によって、北館の周囲は中間土塁を巡らす2・3重堀の様相を呈することが予想され、主郭的な居館として注目されるようになった。本年度は、北館東側を平面発掘し、昭和52年度に検出された土居状遺構などの確認、さらには建築遺構の配置に留意しながら調査を進める。

堀跡——昭和53年度に北館と内館間で確認された中間土塁が、北館南側をどのように走るのか、北館東南部の一部を発掘調査して確認する。

※ 発掘予定面積 2,000 m<sup>2</sup>

#### 8. 調査の方法

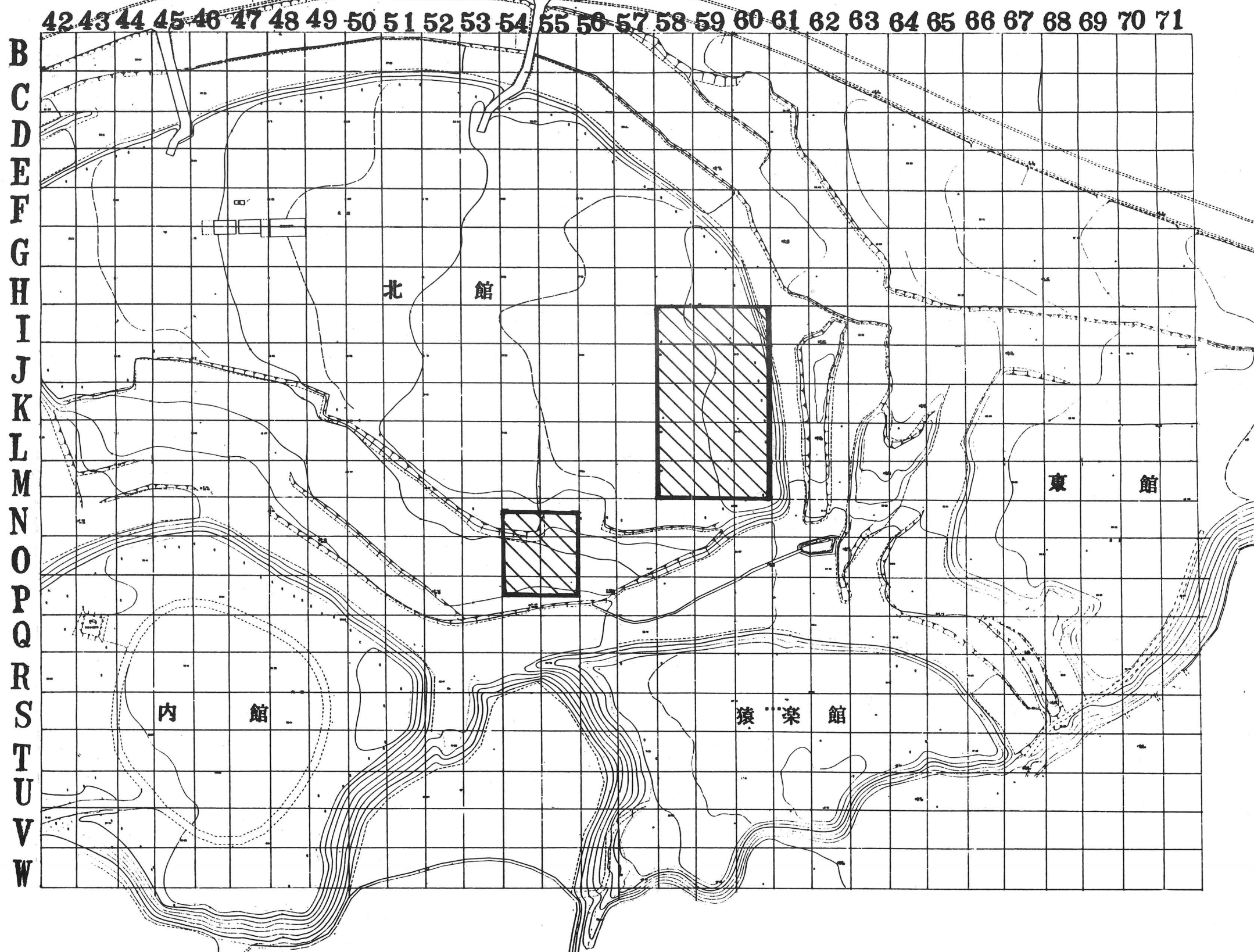
- a) 発掘調査はグリッド法による。グリッドは10×10mを1単位として（Fig.3参照）、細分の場合は4等分する。
- b) 各グリッドの表記は、城跡の短軸（南北）をアルファベット、長軸（東西）を算用数



0 400m

史跡指定地	-----	215,800㎡	1. 新館	15,480㎡	6. 西館	13,830㎡
公有地	.....	188,300㎡	2. 東館	5,400㎡	7. 検校館	8,550㎡
			3. 猿楽館	3,750㎡	8. 無名の館	
			4. 北館	15,450㎡	9. 浪岡八幡宮	
			5. 内館	7,890㎡	10. 加茂神社	
					11. 浪岡川	

Fig. 3 グリッド配置図と発掘区



字で表わす。但し、短軸（南北）線は磁北より西へ26°振っている。なお、グリッドは城跡全域を包含するよう配慮して設置した。

- c) 実測は、遣り方測量（平場発掘主体）と平板測量（堀跡発掘主体）を併用する。
- d) 実測の際の縮尺は、原則として $\frac{1}{20}$ で行うが、遺構によって $\frac{1}{100}$ 、 $\frac{1}{40}$ 、 $\frac{1}{10}$ 、も併用する。
- e) 遺物は、グリッド名、地点、層位、レベル、出土状態を明記し、重要な物に関しては写真撮影の後、取り上げる。

## II 調査経過の概略

- 6・2 調査補助員に対して作業・実測などの研修を行なう。
- 6・4 グリッドの設定。表土除去作業開始。各グリッドの一部を $2 \times 2 m$ で試掘する。
- 6・14 S T 09・S T 13などの竪穴遺構の掘り下げ開始。
- 6・23 平場の南半は遺構の確認が相次ぎ、表土除去作業が追いつかない状態。
- 7・2 遺構の重複関係を把握することが難しく、ある段階まで掘り下げる必要がでてきた。
- 7・4 J・K・L・M-60区を南北に走る土塁（土居）をほぼ確認する。
- 7・9 青森大学の学生参加。
- 7・17 各竪穴遺構・井戸跡の精査が本格化する。
- 7・23 弘前大学学生参加。
- 7・26 M・N・O-55区（堀跡）の掘り下げ開始。8月に入ると土塁が姿を現わす。
- 8・1 平場 S E 10の掘り下げ終了、フラスコ状の井戸か。竪穴遺構の実測本格化。
- 8・8 O-54区より井戸枠（S E 11）が発見される。調査に入って初めての木造遺構である。
- 8・23 S E 11の実測ほぼ終了。土塁との関連から興味ある井戸跡である。
- 9・1 平場の調査は、平面実測を継続。堀跡の調査を主体的に行う。
- 9・8 現地説明会開催。晴天もあって町内外から30名ほどの人達が見えられる。
- 9・10 秋田県小坂町老人クラブの方々が見学にみえられる。
- 9・18 堀跡の調査をほぼ終了して、平場で未整理の遺構を精査する。
- 9・25 平場の精査も終了近くなったが、掘り下げの足りない部分から時代の異なる遺物が出土する。（土師器など）
- 10・3 屋外作業終了。整理作業を開始する。

※なお、11月16日～11月18日まで、町中央公民館附属体育館で行なわれた町民展覧会と併行して本年度出土遺物展を開催し、町民の関心をひいた。

### Ⅲ 検出遺構

本年度検出された遺構の数は、竪穴遺構27基、井戸跡9基、土居・土塁跡3本、堀跡3本、小竪穴遺構（土坑）4基である。発掘区が平場（I・J・K・L・M-58・59・60区）と堀跡（N・O・P-54・55区）の2地区に分かれているため、各地区ごとに検出遺構を報告する。

#### A、平場の遺構（Fig. 4，PL. 2）

##### 1. 平場の層序（Fig. 5）

H-58・59・60区北壁のセクション図をみると、基本層位として第1層しまりの強い明褐色土、第2層黒色土を若干混入する暗褐色土、第3層黒色土、第4層褐色土、第26層黄褐色砂質土（地山）の5層があげられる。このうち、主に中世陶磁器等を出土するのは、第2層と第3層であり、遺構確認も第3層である黒色土を基準に実施された。しかしながら、図の中でも部分的に層位の逆転がみられ、平場内における地層が1～2度ではなかったことが推定される。H-59区とH-60区の境界上にみられる溝状の落ち込みは、土師器・須恵器を出土していたことから当城跡構築以前の遺構と考えられるもので、他にもJ-58区で検出したST39（実際は溝状の遺構）なども同一のものであった。本年度は時間的余裕がなく十分精査できなかった。

PL. 2



北館平場発掘区全景

Fig. 4 北館平場発掘区全体図

60

59

58





Fig. 5 H58・59・60区北壁セクション図

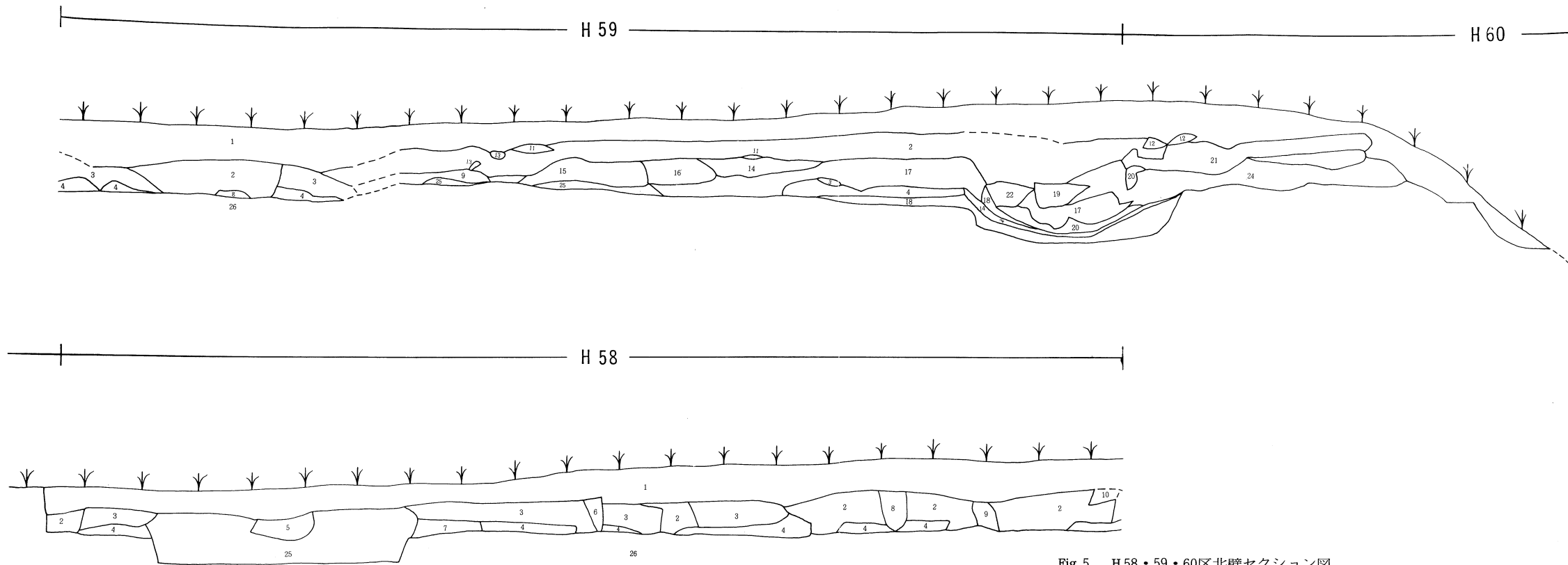


Fig. 5 H 58・59・60区北壁セクション図

- 第1層 明褐色でしまり強し。
- 第2層 暗褐色土に黒色土若干混入
- 第3層 黒色土
- 第4層 褐色土
- 第5層 暗褐色土に多量に灰を含む。
- 第6層 1層より暗く4層より明るい粘性少々有り。
- 第7層 暗褐色土に焼土混入
- 第8層 暗褐色土にブロック状の黄色砂質土が混入
- 第9層 黄色砂質土に褐色土、焼土混入。しまり有り。
- 第10層 黄色砂質土
- 第11層 明褐色土にしまりなし。
- 第12層 暗褐色土に黄色砂質土少々混入。
- 第13層 黄褐色砂質土に暗褐色土混入。
- 第14層 暗褐色土に粒子状の黄褐色砂質土が全体的に混入。
- 第15層 暗褐色土に粒子状の黄褐色砂質土と黒色土が少々混入。
- 第16層 1層より暗く4層より明るい。(全体的に粘子状の黄褐色砂質土が混入)
- 第17層 暗褐色土、しまりなし。
- 第18層 暗褐色土に褐色砂質土が多量に含まれる。
- 第19層 暗褐色土に褐色砂質土が多量に含まれる。粒性少々有り。
- 第20層 黄色砂質土に褐色土が少々含まれる。
- 第21層 暗褐色土にブロック状の黄色砂質土が少々混入。しまり有り。
- 第22層 黒色土に暗褐色土および砂質土が少々混入
- 第23層 黄色砂質土に暗褐色土が含まれ、暗褐色土の部分がしまりが強い。
- 第24層 暗褐色土に砂質土、粘土質が混入、部分的にしまりが強い。
- 第25層 黄色砂質土に褐色が部分的に含まれる。しまり有り。
- 第26層 地山(褐色土にブロック状の黄色砂質土が多量に含まれる。また少量の黒色土、小石も含む)。

## 2. 土居跡 (Fig. 5, PL. 2)

北館平場東辺、I・J・K・L・M-60区より南北に検出されたものである。昭和52年度の試掘調査によって検出されたもの〔浪岡城跡〕(昭和53年)P30・31〕と同一の遺構で、盛土整地した後人為的に突き固めた土居状の遺構である。Fig. 5のH60区にみられる第21層・第23層、第24層が本遺構の断面である。下層に粘性の強い暗褐色土を敷いた後、黒色土や砂質土を重ね、地山である黄褐色砂質土を混入した暗褐色土を突き固めて構築している。

最大幅5m、最小幅は2mで、平場内の遺構構築面からの比高は最高で60cmとさほど高いものではない。昭和52年度の調査では、本遺構の西側すなわち館の内部に柵列らしき柱穴が検出されている。しかし、本年度の調査では、柱穴のかわりに堅穴遺構が並列する形で検出された。すなわち、南側から、ST17・ST13・ST14・ST23がそれである。おそらく、本遺構とこれらの堅穴遺構は同時期に存在したと考えられることから、本遺構が土居としての防衛施設とすれば、堅穴遺構もそれに類似した機能を有すると思われる。

なお、本遺構はM-60区から南側では、耕作時の攪乱や壁面の崩壊によって明確に把握できない状態であった。今後、北側方向にどの程度まで走るのか調査する必要がある。

## 3. 堅穴遺構

本年度検出された堅穴遺構と概観すると、張り出しの有無と方向、柱穴の配列、規模、付属施設、出土遺物などから、多岐にわたるバリエーションがみられる。そして、いずれの堅穴遺構もかまどや炉跡を伴わない特徴を有していることは、古代の堅穴住居跡のように日常的な住居空間から逸脱した機能が存在したからに他ならないと推測される。

調査区の中で、特に堅穴遺構が密集・重複している地域はL・M-58区であるが、調査過程の中で、堅穴遺構どうしの覆土相違を明確にすることは極めて困難な状態であったため、後に遺構Noを付けたものもあった。また、ST34・ST36のような土壇的なものまで、堅穴遺構として一括した背景には堅穴遺構の概念がまだあいまいなための処理である。

さらに、I・J-59区でみられる変則的な遺構配置は、堅穴遺構の壁面が数度の建て替えによって消滅ないしは同一土層となってしまったためのもので、堅穴遺構の床面が同一レベルである場合は、主として柱穴の配列をたよりに遺構を確認していった。

当初、堅穴遺構として掘り下げたが、途中で井戸跡であったり、溝跡になった場合は、遺構Noを変更して対処したが、ST26・ST27・ST37・ST39は實際上欠番となっており、ST22に関しては次年度の調査で再調査することとした。では、各遺構ごとに述べよう。

**ST09** (Fig. 6, PL. 3, PL. 4)

規 模：長軸330cm, 短軸320cm, 深さ51cm。

張り出し：西辺中央から南に位置する。W-26°-S。幅70cmでスロープ状に入る。両側に幅10cm前後の細い溝状の掘り込みがある。

覆 土：暗褐色土の単一層で人為的埋め戻しと考えられる。下部には炭化物と灰が存在した。

重複関係：ST32 (新旧不明)、ST33 (新)、ST34 (旧)

柱穴配置：2×2間で壁面よりやや離れた所に位置する。P1, P2, P3, P4, P5, P6, P7が本遺構の支柱穴であるが、P8, P9, P10も副次的柱穴の可能性はある。

出土遺物：覆土から、染付皿1片、美濃灰釉皿4片、鉄釘3本、鉄鍋胴部3片、洪武通宝1枚、他の出土がある。

**ST31** (Fig. 6, PL. 3, PL. 4)

規 模：不明

重複関係：ST32・ST33 (新)

柱穴配置：P27, P29が想定される。

ST33に伴う張り出し部分とも考えられるが、北西隅のコーナーが明瞭であるため、竪穴遺構とした。床面、壁面ともST32・ST33によって破壊されている部分が多い。

**ST32** (Fig. 6, PL. 3, PL. 4)

規 模：長軸445cm, 短軸320cm, 深さ60cm

張り出し：なし

覆 土：暗褐色土の単一土層で人為的埋め戻しと考えられる。

重複関係：ST09 (新旧不明)、ST33 (新)、ST31 (旧)

柱穴配置：壁面に接する状態のもの (P17, P18, P19, P20, P21, P22, P23) と棟通りにあたる部分のもの (P24, P25) が想定される。長軸と短軸の長さに相違があるにもかかわらず2×2間の配置を呈する。

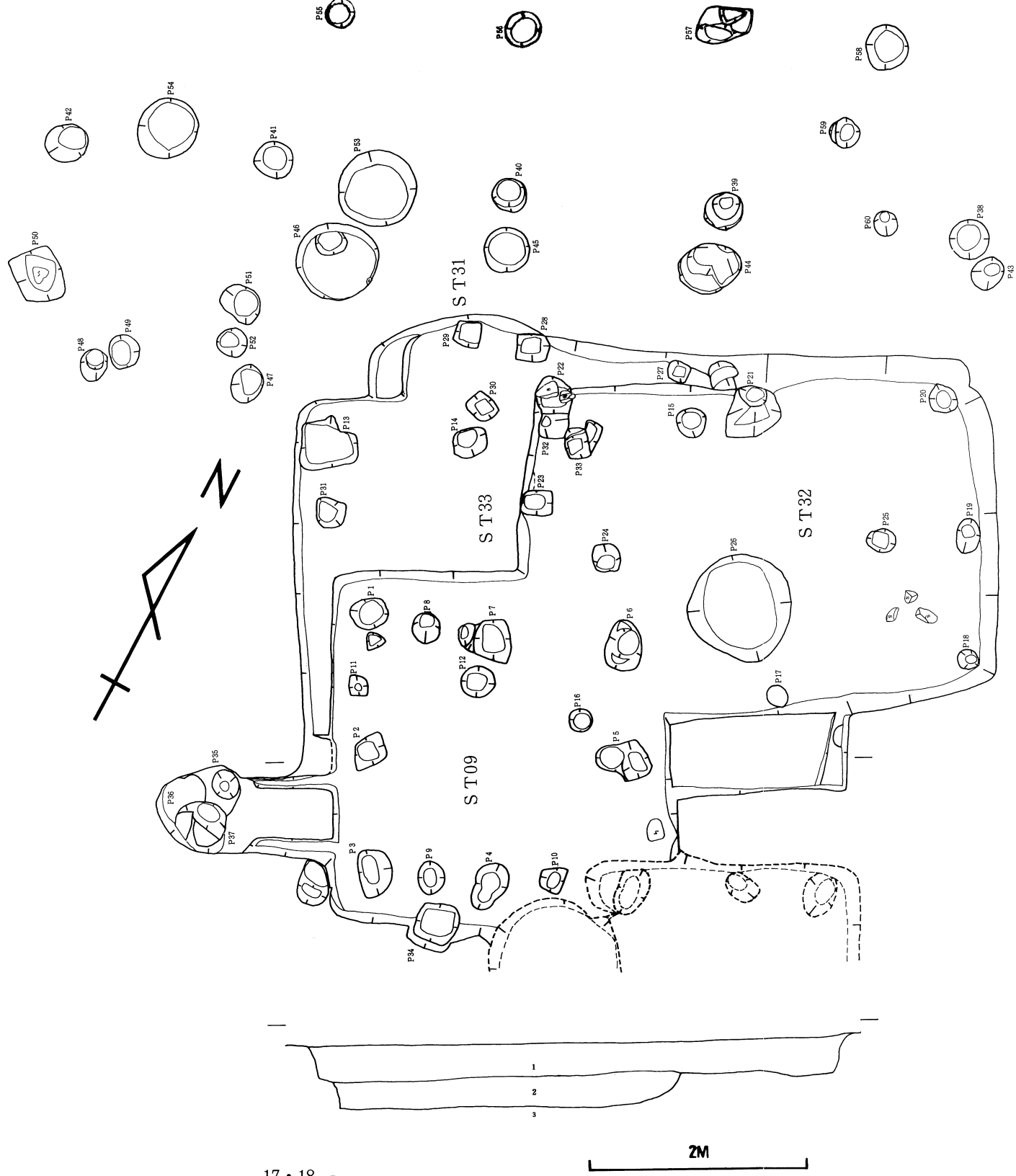
出土遺物：青磁4片、染付2片、天目1片、無釉播鉢1片、鉄釘8本、小札1枚、砥石1点などが、いずれも覆土から出土している。

本遺構床面の中央南側に、直径100cm、深さ145cmの円筒状ピットが存在する。出土遺物がないので詳細は不明であるが、貯蔵穴的機能を有するものであろうか。

**ST33** (Fig. 6, PL. 3, PL. 4)

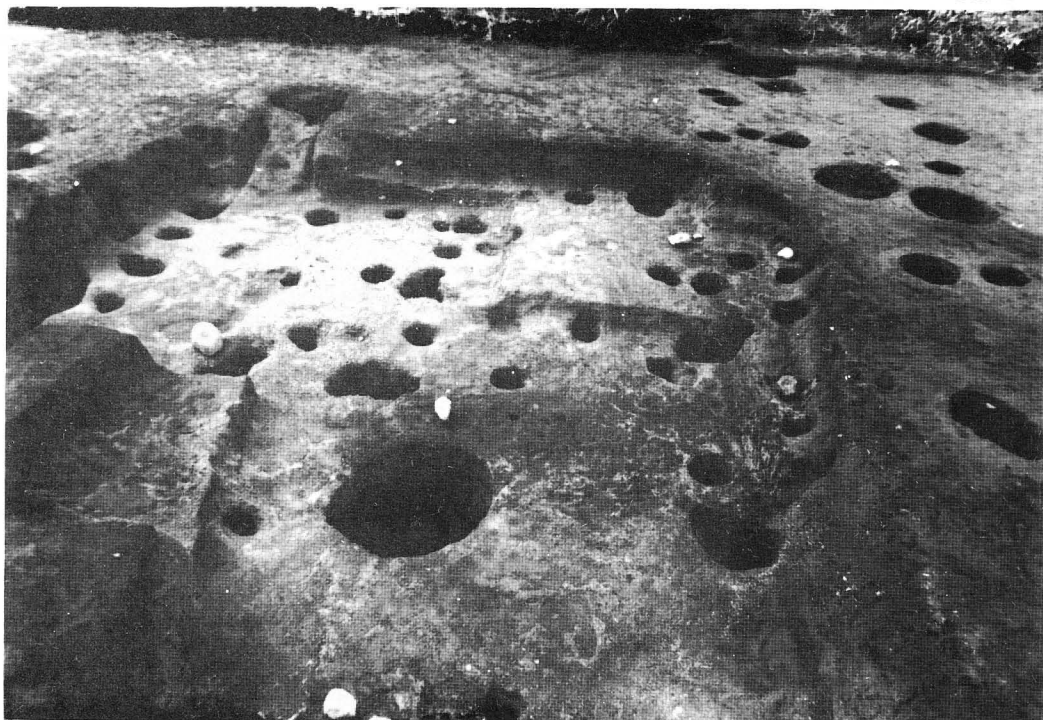
規 模：長軸480cm, 短軸310cm, 深さ35cm。

Fig. 6 ST09・ST31・ST32・ST33実測図



遺構名 S T 09		遺構名 S T 32		遺構名			
PitNo	長径×短径(cm)	深さ(cm)	備考	PitNo	長径×短径(cm)	深さ(cm)	備考
2	29 × 26			Pit41	35.5 × 33.5	45	
3	43 × 31	61.5		42	38 × 34	40	
4	46.5 × 31	45.2		43	29.5 × 29	27	
5	35 × 30	56.3		44	56 × 48	49	
6	45.5 × 32	59.5		45	45 × 33.5	30	
7	38 × 33.5	42.6		46	74.5 × 73	34	
8	24.5 × 28	28.9		47	35 × 31.5	56	
9	30.5 × 24.5	44.8		48	30 × 25	41.5	
10	24.5 × 23.5	32.7		49	30 × 29	43	
11	18.5 × 18.5			50	43 × 48	60	
12	32 × 29	41.2		51	38.5 × 29	56	
13	53 × 44	17.3		52	28 × 25.5	56	
14	31 × 26.5	50.6		53	72 × 68	27	
15	27 × 23	27.4		54	56.5 × 53	20	
16	21.5 × 21.5	45.2		55	26 × 24.5	22	
17	21.5 × 18.5			56	31 × 30	26	
18	19.5 × 18.5	39.0		57	57 × 32	55	
19	31 × 21.5	50		58	39.5 × 38	34	
20	27.5 × 25			59	27 × 26.5	37	
				60	23 × 21	55	

S T 09 ・ 33南壁セクシヨン  
 第1層 暗褐色土と黄褐色砂質土の混層  
 第2層 暗褐色土、下層に炭化物と灰が含まれる。  
 第3層 地山



S T09・S T31・S T32・S T33 (東より)



S T09・S T31・S T32・S T33 (北より)

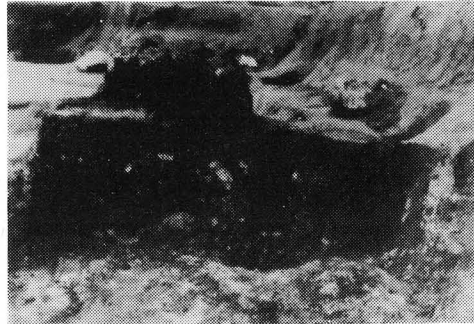
張り出し：確認できず。

PL. 21 S T 33

覆 土：暗褐色土と黄褐色砂質土の混層で、  
人為的埋め戻しと考えられる。

重複関係：S T 09・S T 32（旧）

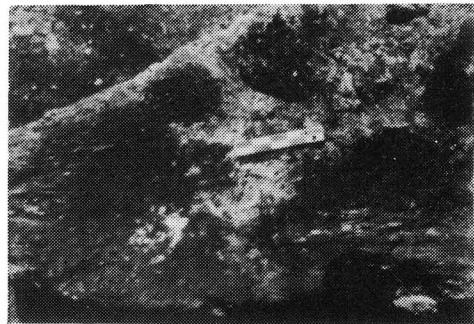
柱穴配置：壁面から若干離れた所に位置する  
ものとしてP 11, P 12, P 13, P  
14, P 15が想定される。なおP 13,  
P 14, P 15はいずれも柱穴の中に  
炭化材が残存していたもので、PL.  
21-(1)の炭化材はP 15に対応する  
ものである。柱間としては1間×  
2間が予想されるが確証的でない。



(1) 炭化材出土状態

出土遺物：なし

本遺構の床面は、一部地山上にあるもののそ  
のほとんどが竪穴遺構覆土として除去してしま  
った。掘り下げ過程でも、粘土貼りの形跡や突  
き固めたような部分がみられなかったため、把  
握できなかったものである。



(2) 炭化米出土状態

S T 10 (Fig. 7, PL. 5)

規 模：長軸 270cm、短軸 260cm、深さ 54cm

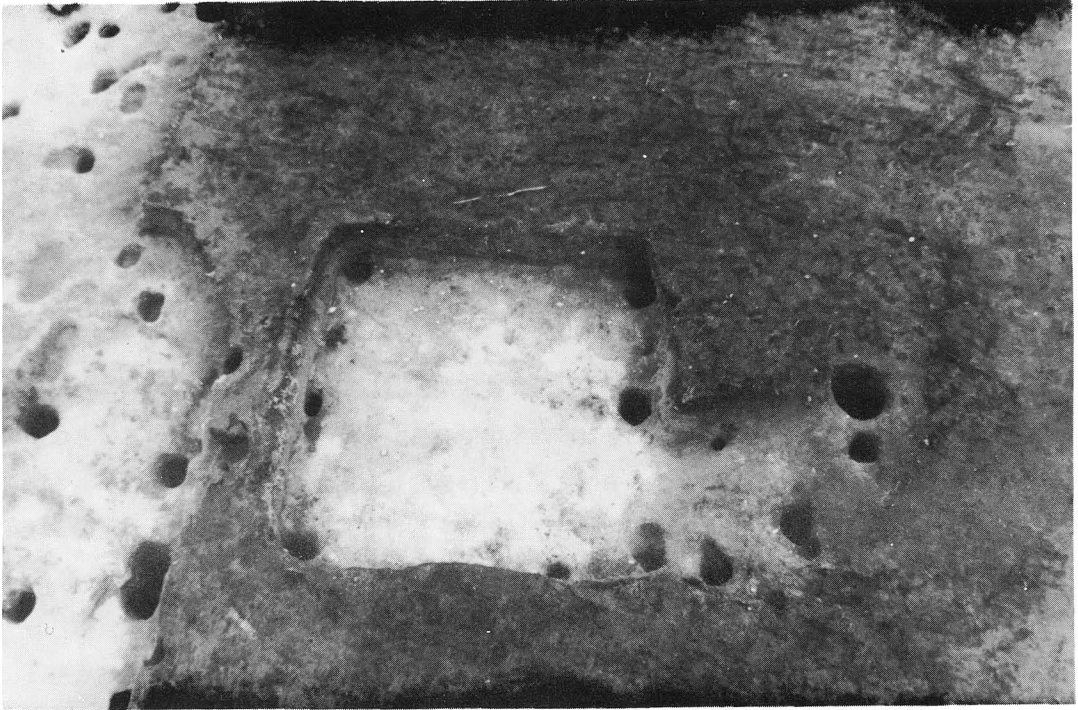
張り出し：西辺北側に位置し、幅 100cm でスロープ状を呈する。W-26°-S。

覆 土：黄褐色砂質土ブロックを多量に含む暗褐色土の埋め戻し土。

重複関係：なし。

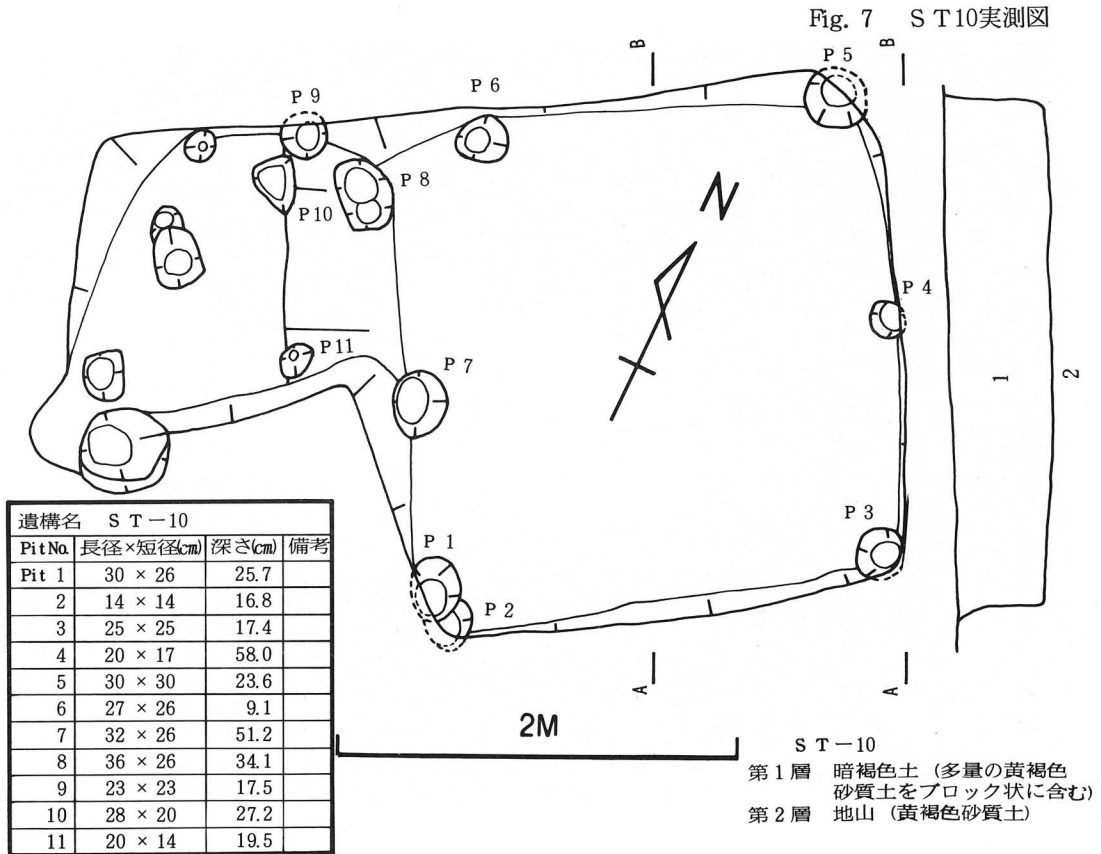
柱穴配置：壁面に接し、やや壁面にくいこむ状態で配置する。1間×2間。P 1 (P 2),  
P 3, P 4, P 5, P 8 が主柱穴と考えられ、P 9 と P 11 は張り出し施設に付属  
する柱穴の可能性が高い。

出土遺物：覆土から、青磁碗 1 片、同皿 1 片、鉄釘 9 本、小札 1 枚等の出土がある。



ST10 (北より)

Fig. 7 ST10実測図



**ST12** (Fig. 8, PL. 6)

規 模：長軸440cm、短軸435cm、深さ39cm。

〔方形ピット〕長軸250cm、短軸200cm、深さ82cm。

張り出し：北辺東隅に位置し、若干階段状を呈する。N-20°-W。

覆 土：ST12は、黄褐色砂質土を微細に混入する暗褐色土の単一層。人為的埋め戻しと考えられる。方形ピットは、自然堆積の状態を呈する。

重複関係：方形ピット（土坑と考えられる。）を切る形でST12が構築されている。ST12（新）方形ピット（旧）

柱穴配置：ST12は、四隅壁面に接する状態で柱穴が配置している。しかし、柱穴は掘り方も小さく深さも20cm以内と貧弱なものである。そのためか西南隅は確認できなかった。P1、P2、P3の他に、P4は棟通りをささえる柱穴の可能性がある。

出土遺物：染付皿1片、無釉播鉢1片がST12の覆土から出土し、方形ピット内からは、鉄釘5本、鉄鏃2点、小柄1点、天聖元宝他の古銭が4枚出土している。

方形ピットとしたものの中から、鉄・銅製品がまとまって出土しており、土坑的な性格と考えられるが、遺物を埋めたものかどうかは不明な点が多い。柱穴も不規則な配置で上部構造は推測できない。

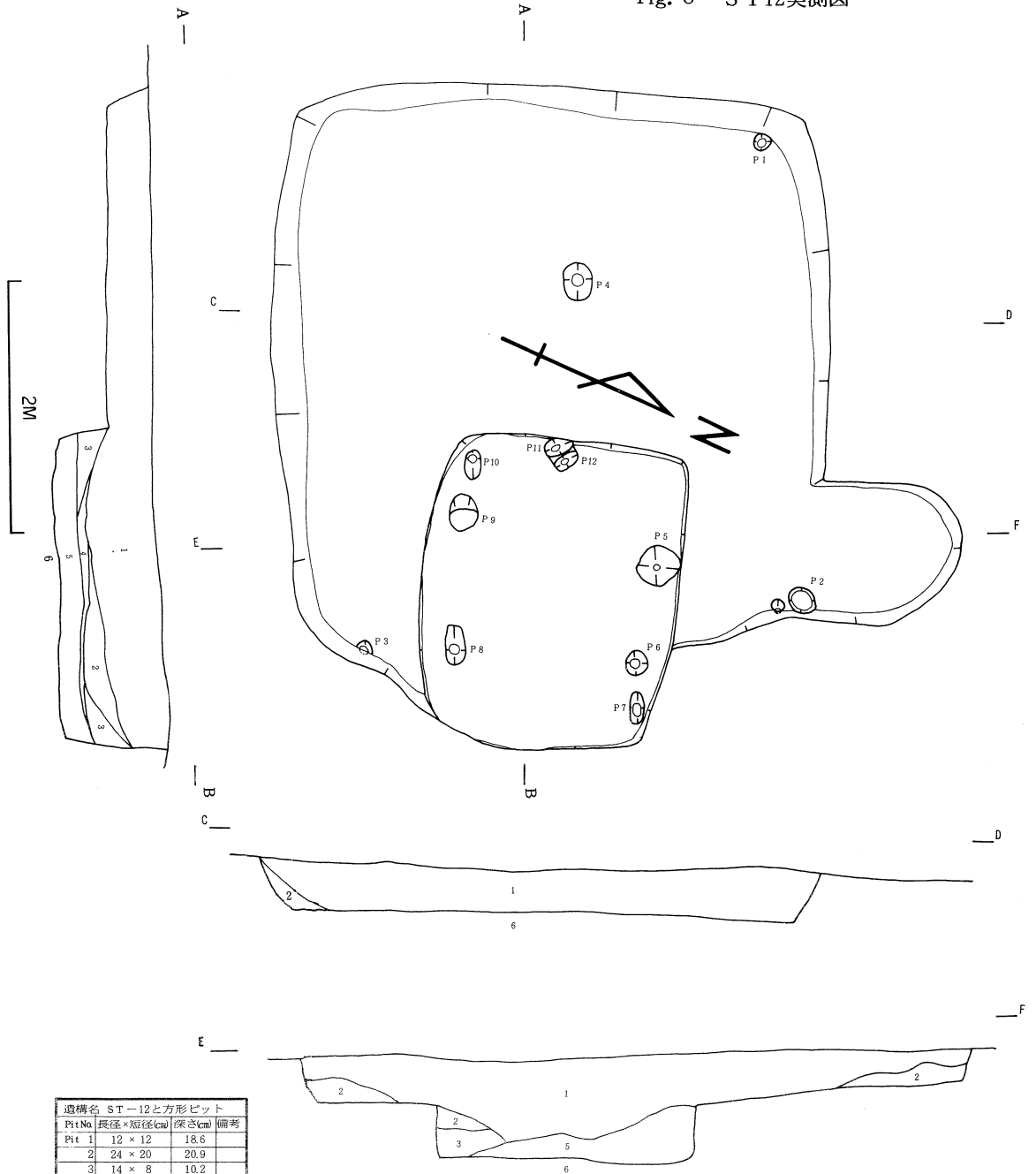
PL. 6



ST12 (南より)



Fig. 8 S T 12実測図



遺構名 S T-12と方形ピット			
Pit No	長径×短径cm	深さcm	備考
1	12 × 12	18.6	
2	24 × 20	20.9	
3	14 × 8	10.2	
4	30 × 23	15.2	
5	32 × 29	50.6	
6	20 × 17	17.5	
7	26 × 11	18.9	
8	32 × 16	17.9	
9	30 × 13	14.2	
10	23 × 13	15.9	
11	23 × 15	14.1	
12	21 × 10	12.2	

S T 12と方形ピット

- 第1層 暗褐色土 (黄褐色砂質土混入)
- 第2層 茶褐色土 (黄褐色砂質土を多量に混入しているため明るく見える)
- 第3層 暗茶褐色土 (黄褐色砂質土若干含む)
- 第4層 黒色土 (粘性が強い)
- 第5層 茶褐色土 (黄褐色砂質土若干含む)
- 第6層 地山 (黄褐色砂質土)

### ST13 (Fig. 9, PL. 7)

本遺構は、同一床面内に時期を異にする4軒の建物を確認している。覆土状態からは新旧関係を把握できなかったので、柱穴配置から4軒をみてみよう。

#### (1) ST13A

柱穴No. : P1, P2, P3, P4, P5, P6, P7, P8, P9, P10。

規模 : 梁間2間、桁行3間。

間尺 : 梁間・桁行とも1間180cm (6尺) の等間。

方向 : 桁行方向が $W-26^{\circ}-S$ 。

#### (2) ST13B

柱穴No. : P11, P12, P13, P14, P15, P16, P17, P18, P19, P20。

規模 : 梁間2間、桁行3間。

間尺 : 梁間1間136cm (4尺5寸) の等間。桁行1間140~145cm (4尺5寸+ $\alpha$ )

方向 : 桁行方向が $W-27^{\circ}-S$ 。

#### (3) ST13C

柱穴No. : P21, P22, P23, P24, P25, P26, P27, P28。

規模 : 梁間2間、桁行3間

間尺 : 梁間1間151cm (5尺) の等間。桁行1間136cm (4尺5寸) の等間。

方向 : 桁行方向が $W-30^{\circ}-S$ 。

#### (4) ST13D

柱穴No. : P30, P31, P32, P33, P34, P35, P36, P37。

規模 : 梁間2間、桁行3間。

間尺 : 梁間1間151cm (5尺) の等間。桁行1間167cm (5尺5寸) の等間。

方向 : 桁行方向が $N-30^{\circ}-W$ 。

以上のST13A~ST13Dは、すべて2間×3間の構築方法で、ST13Dが桁行方向を異にする他は、ほぼ西南西の方向を示す。間尺もそれぞれ若干ながら相違がみられ、基本として6尺、5尺5寸、5尺、4尺5寸の4規準が想定される。

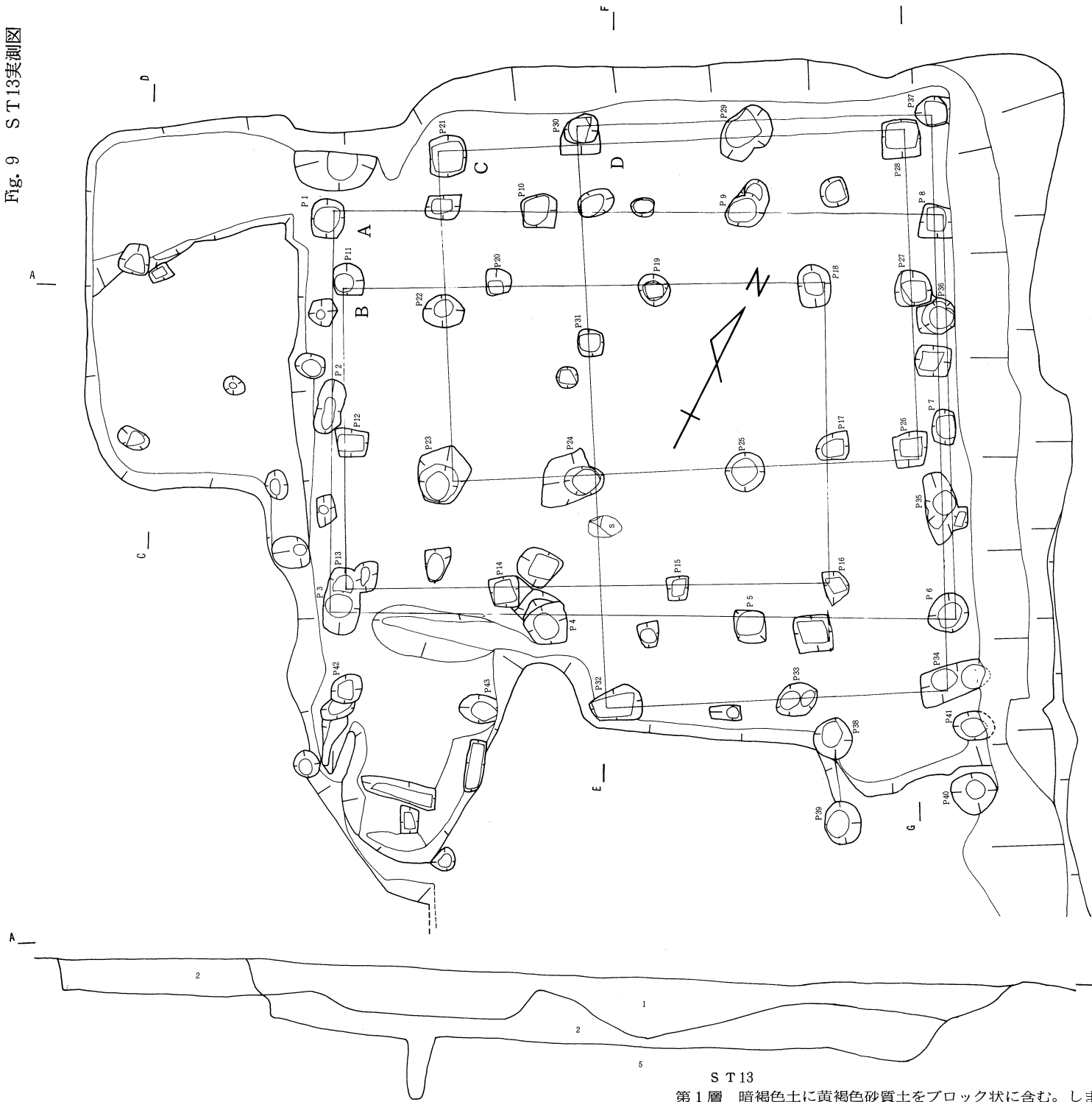
張り出し : 張り出しと考えられる部分は3箇所みられ、掘り方の南辺東隅、南辺西隅にあるスロープ状の部分、それと西辺にある幅の広いテラス状の部分それぞれである。

ST13A : 西辺にあるテラス状の張り出しを伴う。

ST13B : 南辺西隅にあるスロープ状の張り出しを伴い、P42、P43は付属する柱穴と考えられる。

ST13D : 南辺東隅にあるスロープ状の張り出しを伴い、P38、P39、P40、P41が付属

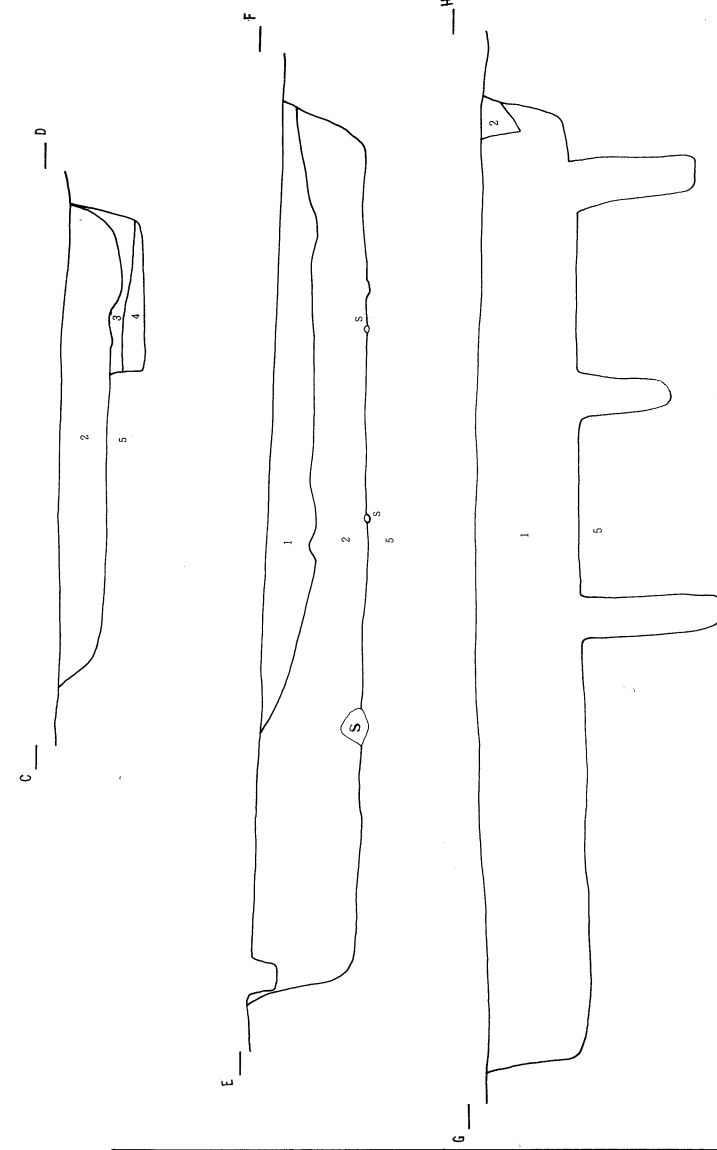
Fig. 9 S T 13実測図



S T 13

- 第1層 暗褐色土に黄褐色砂質土をブロック状に含む。しまりなし。部分的に灰の層が見られる。
- 第2層 明褐色土に黄褐色砂質土を多量に含む。しまりなし。若干湿性有り
- 第3層 黒色土、粘性。しまり有り。
- 第4層 暗褐色土。黄褐色砂質土をブロック状に含む。
- 第5層 地山 (黄褐色砂質土)

2M



遺構名: S T-13				遺構名: S T-13			
Pit No.	長径×短径(cm)	深さ(cm)	備考	Pit No.	長径×短径(cm)	深さ(cm)	備考
Pit 1	36 × 30	63.2		Pit 23	51 × 44	60.6	
2	50 × 22	43.2		24	55 × 47	64.1	
3	38 × 32	70.1		25	35 × 35	82.0	
4	37 × 35	53.0		26	31 × 28	72.8	
5	30 × 30	53.0		27	34 × 32	55.4	
6	36 × 36	69.5		28	36 × 36	75.8	
7	32 × 22	52.5		29	55 × 34	70.0	
8	30 × 28	57.3		30	37 × 36	73.1	
9	34 × 32	71.9		31	24 × 24	74.7	
10	30 × 30	71.3		32	42 × 28	64.2	
11	29 × 28	87.9		33	32 × 22	59.6	
12	29 × 25	29.9		34	36 × 32	63.5	
13	28 × 22	81.5		35	56 × 30	65.5	
14	28 × 26	58.2		36	34 × 33	83.5	
15	22 × 20	52.2		37	32 × 27	64.7	
16	28 × 22	53.0		38	36 × 35	60.0	
17	28 × 25			39	38 × 34	71.2	
18	38 × 30	73.7		40	40 × 38	69.5	
19	29 × 29	41.1		41	36 × 26	53.0	
20	24 × 22	59.3		42	27 × 26	53.0	
21	36 × 33	71.9		43	33 × 25	49.0	
22	37 × 30	60.5					

する柱穴であろう。

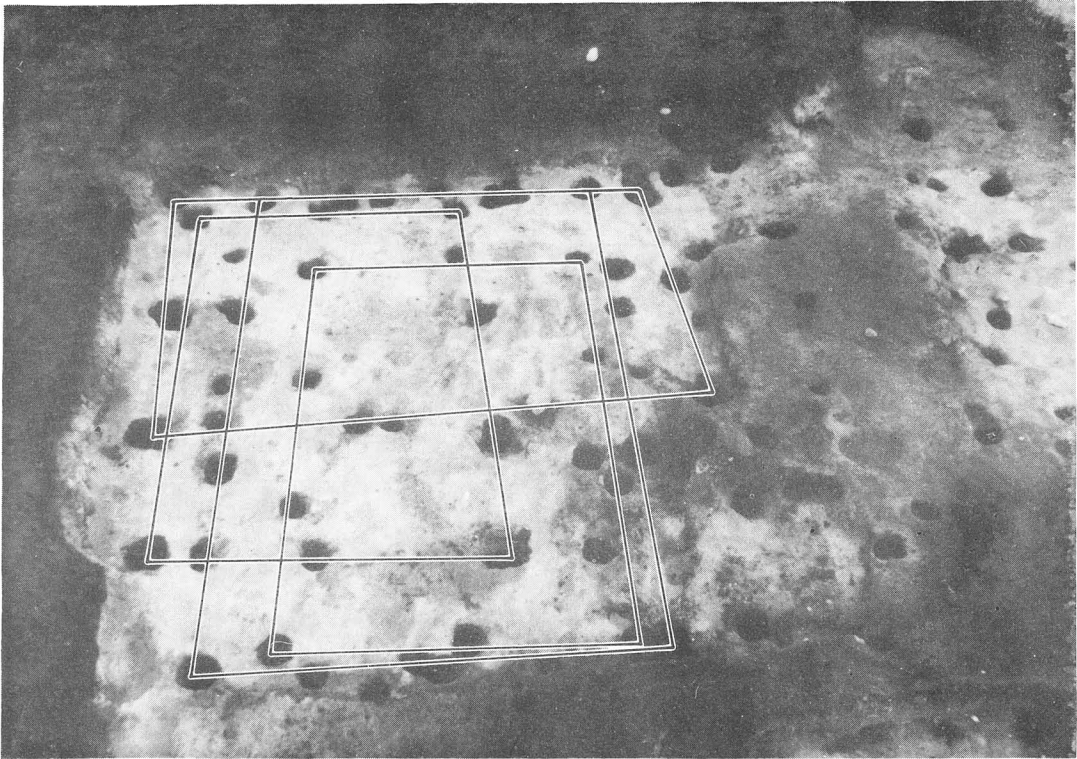
覆土：数度の建て替えがおこなわれているにもかかわらず、黄褐色砂質土をブロック状に含む明褐色土がほぼ全体を覆い、人為的埋め戻しと考えられた。東側と西側では黄褐色土の包含量に相違がみられるが、建物の新旧関係を把握するまでにはいさらなかった。

重複関係：柱穴等の切り合いからST13D→ST13C→ST13B→ST13Aの変遷が推測できるが確証はない。

出土遺物：覆土から、青磁2片、染付2片、美濃灰釉皿2片、無釉播鉢2片、鉄釘8本、火箸1本、小札6枚、古銭4枚などが出土し、床面から漆器の被膜が出土した。

本遺構は、竪穴遺構であると同時に掘立柱建物跡の両面を有しているもので、検出区域が北館の東南隅に位置すること、土居（SA01）の内側に隣接していることから、防禦的性格の強い施設と考えられる。

PL. 7



ST13（西より）

ST14 (Fig.10, PL. 8)

本遺構は、大・小2基の竪穴が重複しているものと考えられ、小さい方をST14A、大きい方をST14Bとして述べよう。

(1) ST14A (P10, P13, P14, P15, P16, P24, P23, P22)

規模：長軸340cm、短軸340cm、深さ30cm。

張り出し：なし。

覆土：茶褐色土の中に黄褐色砂質土の間層が入る。上層部欠損。

柱穴配置：2間×2間で壁面に接する状態。間尺は不規則である。

(2) ST14B (P1, P2, P3, P4, P5, P6, P7, P26, P8, P21)

規模：長軸470cm、短軸350cm、深さ20cm。

張り出し：なし。

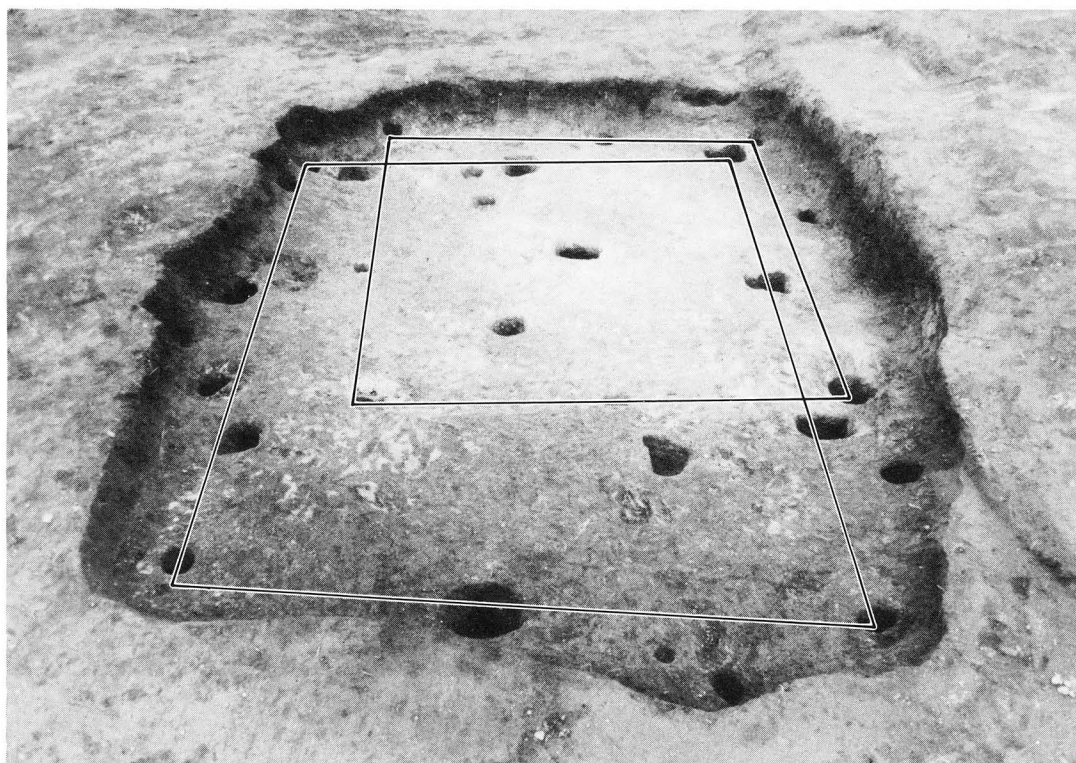
覆土：炭化物を混入する暗褐色土の単一層で人為的埋め戻しと考えられる。

柱穴配置：2間×3間で壁面に隣接する状態。間尺は梁間・桁行とも5尺5寸が標準のようであるが不規則な配置をするため詳細不明。

重複関係：ST14Aを切る状態でST14Bが構築されている。ST14BよりST14Aが古い。

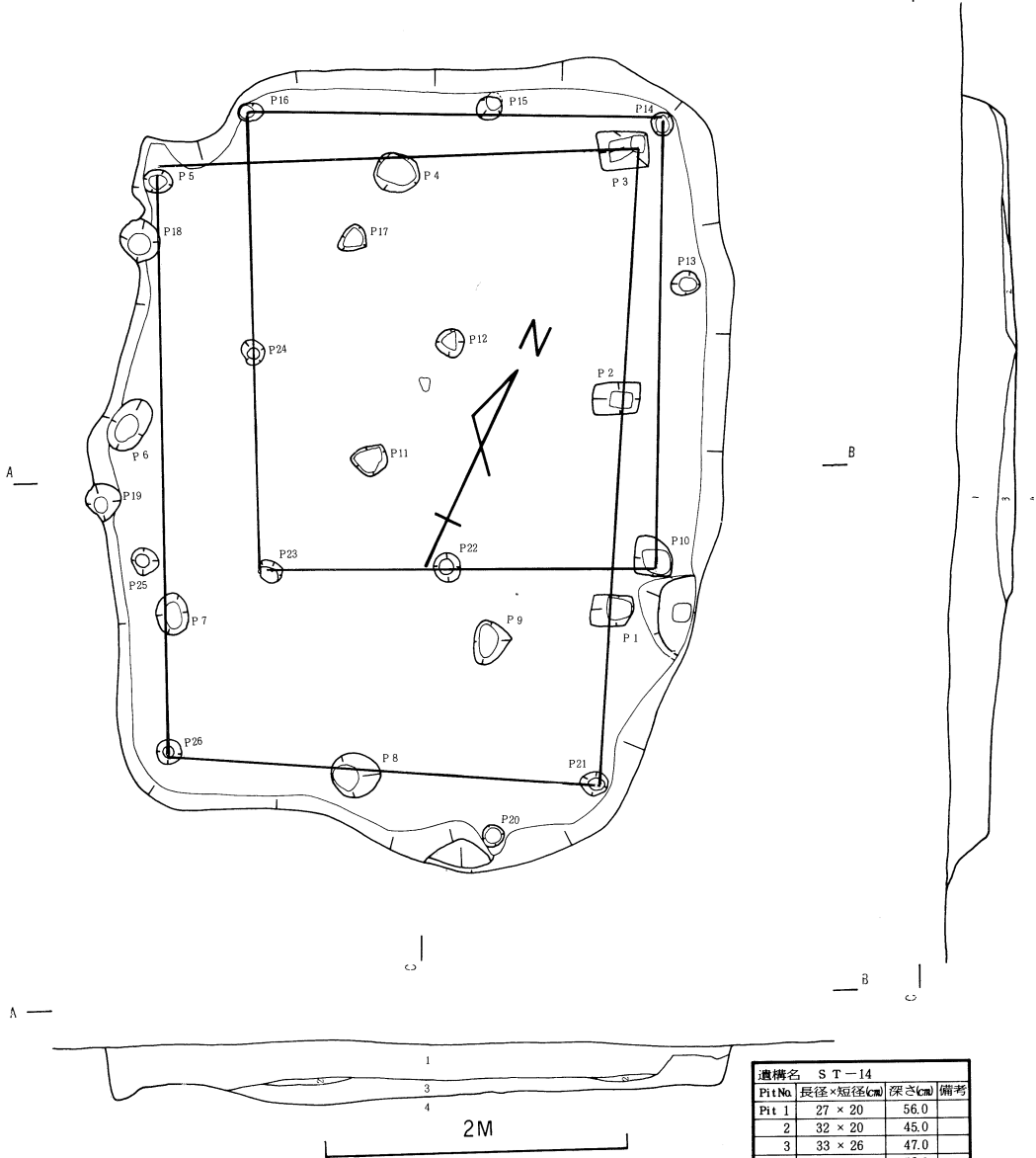
出土遺物：青磁2片、鉄釘1本、小札1枚、古銭5枚が覆土から出土している。

PL. 8



ST14 (南より)

Fig. 10 S T 14実測図



S T - 14

- 第1層 暗褐色土 (炭化物混入)
- 第2層 黄褐色砂質土
- 第3層 茶褐色土

遺構名 S T - 14			
Pit No	長径×短径(cm)	深さ(cm)	備考
Pit 1	27 × 20	56.0	
2	32 × 20	45.0	
3	33 × 26	47.0	
4	30 × 26	52.0	
5	20 × 16	49.0	
6	38 × 23	29.0	
7	28 × 20	25.0	
8	32 × 30	64.0	
9	28 × 21	22.0	
10	34 × 25	60.0	
11	22 × 20	20.0	
12	19 × 18	56.0	
13	18 × 16	24.0	
14	16 × 14	38.0	
15	18 × 16	31.0	
16	17 × 11	56.0	
17	20 × 14	12.0	
18	28 × 30	13.0	
19	25 × 25	12.0	
20	16 × 16	13.0	

**ST15** (Fig.11, PL. 9)

規 模：長軸535cm、短軸450cm、深さ70cm。

張り出し：なし。

覆 土：黄褐色砂質土の含有度によって4層に分けられるが、床面直上に若干粘性のある茶褐色土層が存在し、生活面の可能性がある。自然堆積か人為堆積であるか不明。

重複関係：SE08（新）

柱穴配置：壁面に隣接する状態で2間×2間の配置を示す。P1, P2, P3, P4, P5, P6, P7, が主柱穴で、P8とP9は棟通りをささえる柱穴であろうか。

出土遺物：青磁2片、美濃灰釉皿1片、瓦器1片、鉄釘5本、政和通宝、皇宋通宝などの古銭5枚が覆土より出土している。

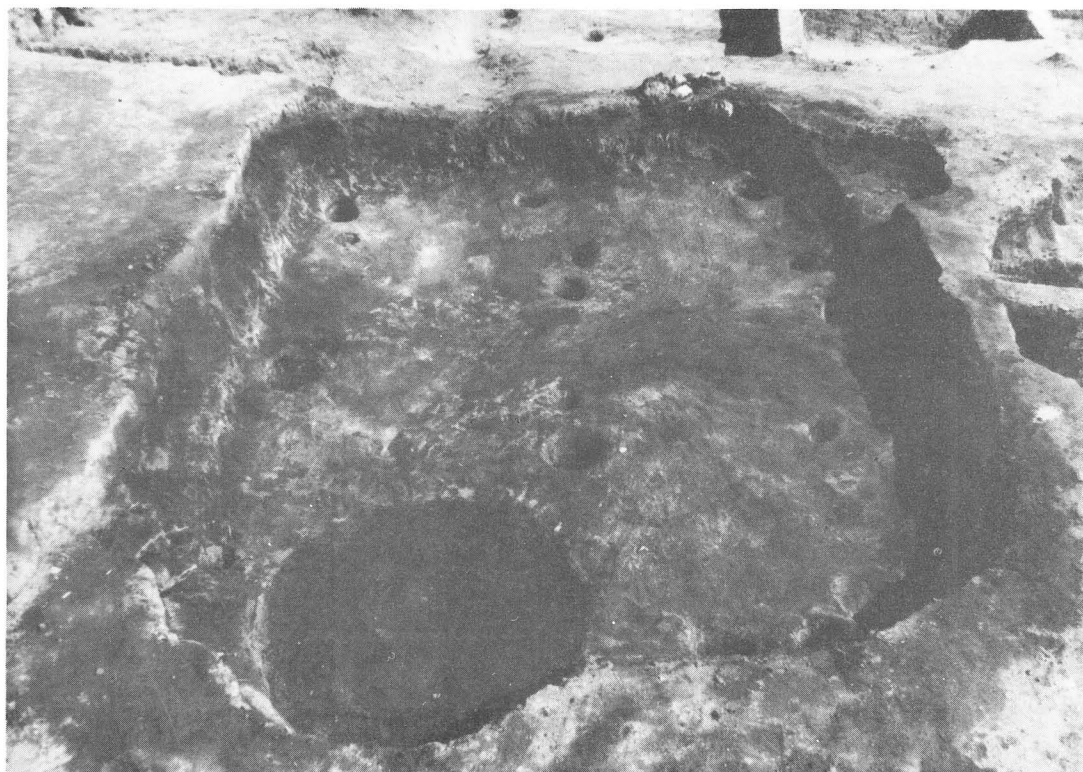
**SE08** (Fig.11, PL. 9)

規 模：長径190cm、短径185cmのほぼ円形で、深さは確認面から約100cmほどしか掘り下げなかったため不明。

覆 土：壁面に添って灰色の火山灰を検出したが、未鑑定のため詳細不明。

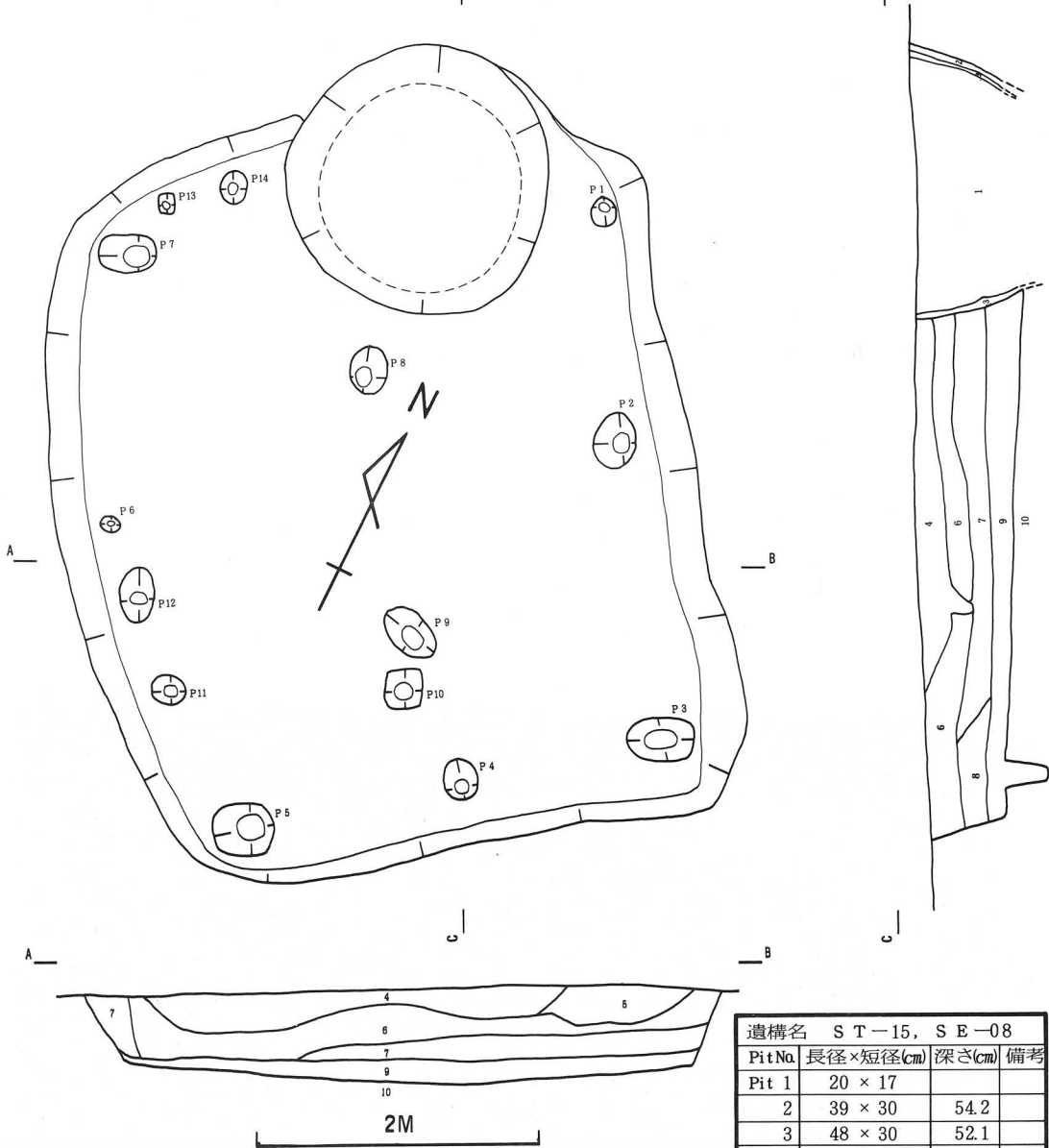
出土遺物：染付1片だけの出土があった。

PL. 9



ST15・SE08（北より）

Fig. 11 S T 15・S E 08実測図



S E 08とS T 15

- 第1層 暗褐色土 (黄褐色砂質土及び炭化物混入)
- 第2層 暗褐色土 (炭化物、火山灰混入)
- 第3層 火山灰
- 第4層 暗褐色土 (黄褐色砂質土多量に混入)
- 第5層 暗褐色土 (黄褐色砂質土を若干混入又、火山灰も若干見られる。)
- 第6層 暗褐色土 (黄褐色砂質土若干混入)
- 第7層 暗茶褐色土 (黄褐色砂質土多量に混入)
- 第8層 明茶褐色土 (直径10cm~20cmの黄褐色砂質土をブロック状に混入)
- 第9層 茶褐色土 (黄褐色砂質土を多量に混入。粘性有り。)
- 第10層 地山 (黄褐色砂質土)

遺構名 S T-15, S E-08			
Pit No.	長径×短径(cm)	深さ(cm)	備考
Pit 1	20 × 17		
2	39 × 30	54.2	
3	48 × 30	52.1	
4	27 × 25	41.0	
5	44 × 37	52.2	
6	13 × 11	42.3	
7	42 × 27	43.5	
8	34 × 25	56.7	
9	43 × 26	57.6	
10	29 × 26	28.1	
11	44 × 20	19.5	
12	38 × 25	16.4	
13	13 × 13	27.8	
14	24 × 19	22.7	



**ST16** (Fig.12, PL.10)

規 模 長軸360cm、短軸325cm、深さ25cm。

張り出し 西辺中央に階段状の部分がみられるが、SE09と重複している部分のため詳細は不明である。W-15°-S。

覆 土 部分的に炭化物が混入し、黄褐色砂質土ブロックがみられる暗褐色土の単一層。

重複関係 SE09 (新)、ST30 (旧)

柱穴配置 壁面からやや離れた所に位置し、2間×2間の配置と考えられる。P1, P2, P3, P4, P5, P6が本遺構に伴うもので、他は新しいものであろう。

出土遺物 青磁5片、染付3片、不明鉄製品4点が覆土から出土している。

**SE09** (Fig.12, PL.10)

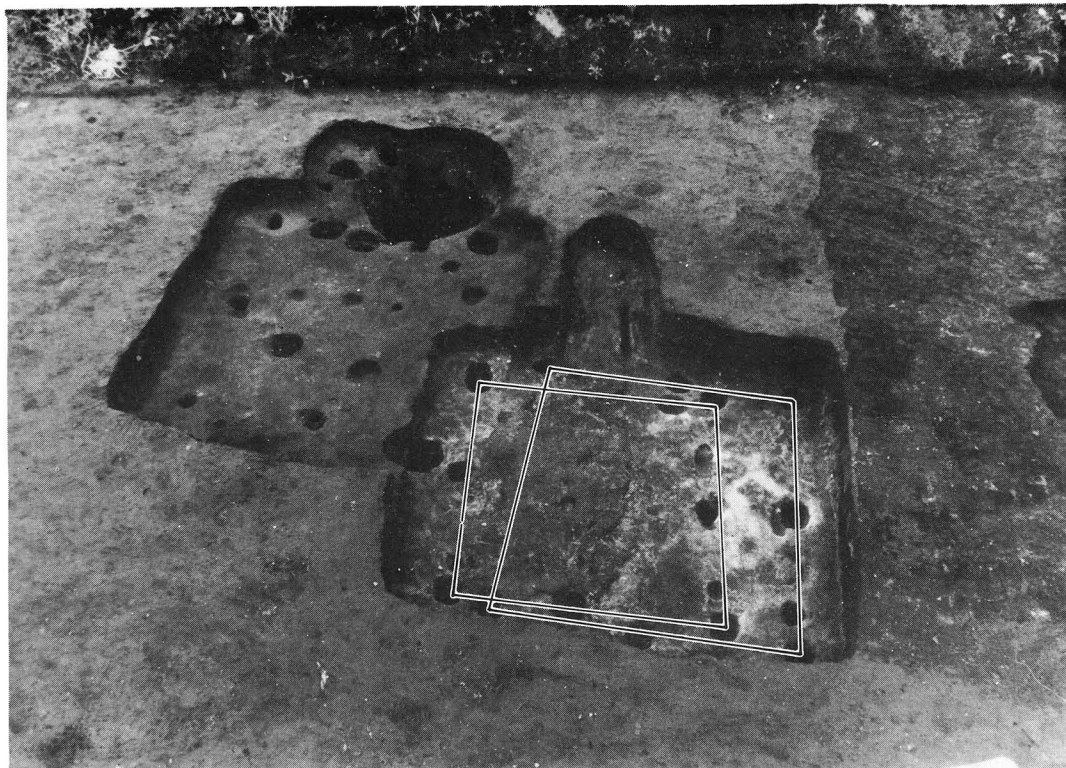
規 模 長径165cm、短径155cmの円形を呈し、深さは120cmまで掘り下げた。

覆 土 下層になりしだい湿性の強い黒色土で、灰の混入が顕著にみられた。

重複関係 ST16 (旧)

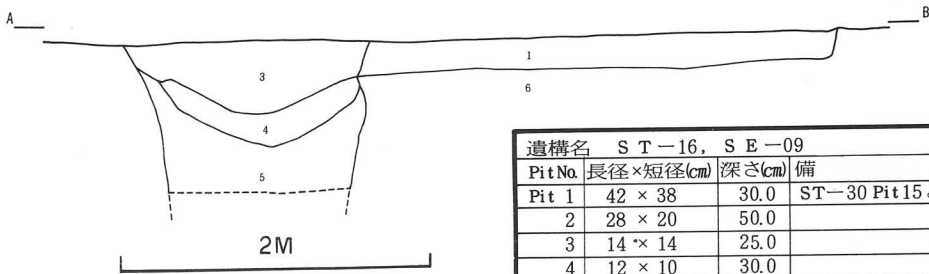
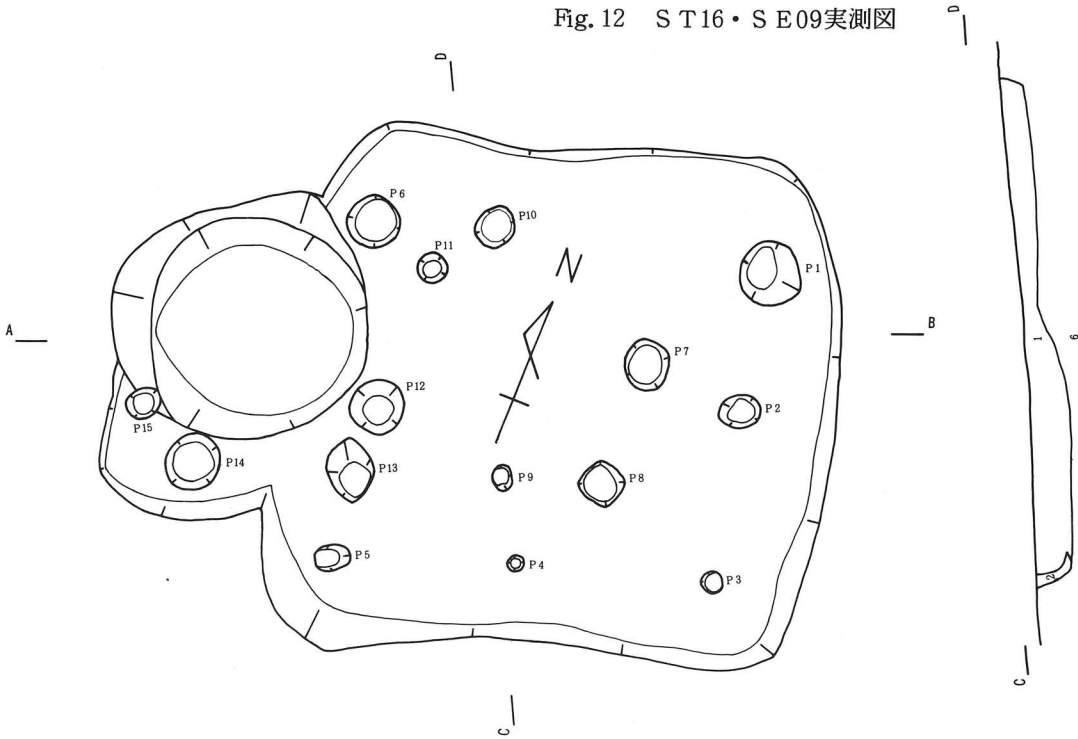
出土遺物 青磁皿底部片(27)、鉄釘1本の出土があった。

PL.10



ST16・ST30・SE09 (東より)

Fig. 12 ST16・SE09実測図



遺構名 ST-16, SE-09			
Pit No.	長径×短径(cm)	深さ(cm)	備考
Pit 1	42 × 38	30.0	ST-30 Pit 15と同一Pit
2	28 × 20	50.0	
3	14 × 14	25.0	
4	12 × 10	30.0	
5	23 × 16	17.0	
6	34 × 34	45.3	
7	34 × 28	9.7	
8	27 × 27	30.0	
9	16 × 12	5.0	
10	26 × 26	8.3	
11	20 × 20	22.7	
12	35 × 35	19.4	
13	42 × 30	36.4	
14	37 × 36	15.9	
15	22 × 20	21.7	

- 第1層 暗褐色土（赤褐色砂質土混入、部分的に炭化物を含む。）
- 第2層 黒色土。
- 第3層 暗褐色土（下端に黄色砂質土がレンズ状に混入、若干しまりあり）
- 第4層 黒色土（湿性強く部分的に灰がみられる。）
- 第5層 黒色土（第4層よりも湿性が強く黄褐色砂質土、多量の灰を混入）
- 第6層 地山（黄褐色砂質土）

S T 1 7 (Fig.13)

平場発掘区の中で最東南端に位置し、堀跡への傾斜面の崩壊を防ぐ意味から全形を調査するにいたらなかった。

規 模 590cm×(450cm)、深さ22cm。

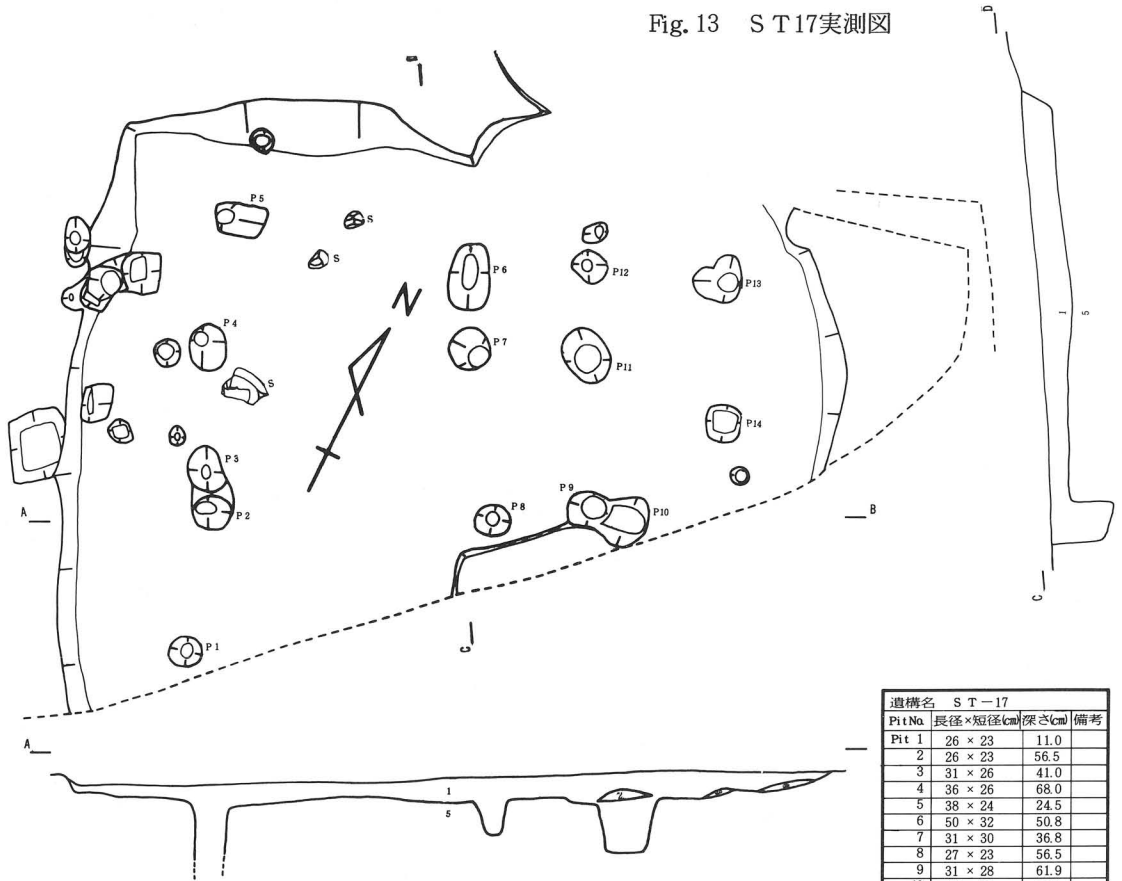
張り出し 本遺構の柱穴位置の中で、P 6, P 7, P 11, P 12の4個は前述したS T 13Dの張り出し部分の柱穴位置と対峙した所にある。S A 01との位置関係とも考え合わせるとS T 13Dと本遺構は一連のものと推測できる。つまり、本遺構においては、N-26°-Wの方向に入口が想定される。

覆 土 掘り方が浅い点もあるが、黄褐色砂質土が多量に混入する暗褐色土である。

柱穴配置 壁面から約100cmほど内側部分に位置し、南北方向は4尺、東西方向は6尺5寸の間尺が基準になっているようだ。

出土遺物 無釉掻鉢1片、他に覆土上層から土師器杯(164)が出土している。

Fig. 13 S T 17実測図



S T 17

- 第1層 暗褐色土に黄褐色砂質土混入
- 第2層 褐色土
- 第3層 黄褐色土
- 第4層 黄褐色に灰が混入
- 第5層 地山 (黄褐色砂質土)

遺構名 S T-17			
Pit No.	長径×短径(cm)	深さ(cm)	備考
Pit 1	26 × 23	11.0	
2	26 × 23	56.5	
3	31 × 26	41.0	
4	36 × 26	68.0	
5	38 × 24	24.5	
6	50 × 32	50.8	
7	31 × 30	36.8	
8	27 × 23	56.5	
9	31 × 28	61.9	
10	42 × 34	45.5	
11	63 × 31	55.5	
12	26 × 23	23.2	
13	38 × 28	60.3	
14	28 × 28	47.5	

ST18 (Fig.14, PL.11)

規 模：長軸430cm、短軸265cm、深さ25cm。ただし、長軸は西側が狭まって375cmと考えることもできる。

張り出し：西辺北側に張り出しと思われる部分が存在する。しかし確証はない。

覆 土：黄褐色砂質土を含む暗褐色土の単一層で、人為的埋め戻しと考えられる。西側に存する淡灰色粘性土は、本遺構に伴うものの考えられ、壁面の強化、入口施設に関係したものであろう。

重複関係：なし。

柱穴配置：壁面に接する状態で位置し、2間×2間あるいは2間×4間の配置が想定される。

(1)P1, P2, P3, P11, P12, P17, P24, の長軸方向5尺を基準とする2間×2間のもの。

(2)P1, P2, P3, P4, P5, P6, P7, P8の長軸方向6尺を基準とする2間×2間のもの。

(3)P1, P2, P3, P10, P4, (S), P5, P6, P7, P18, P8, P25の2間×4間のもの。

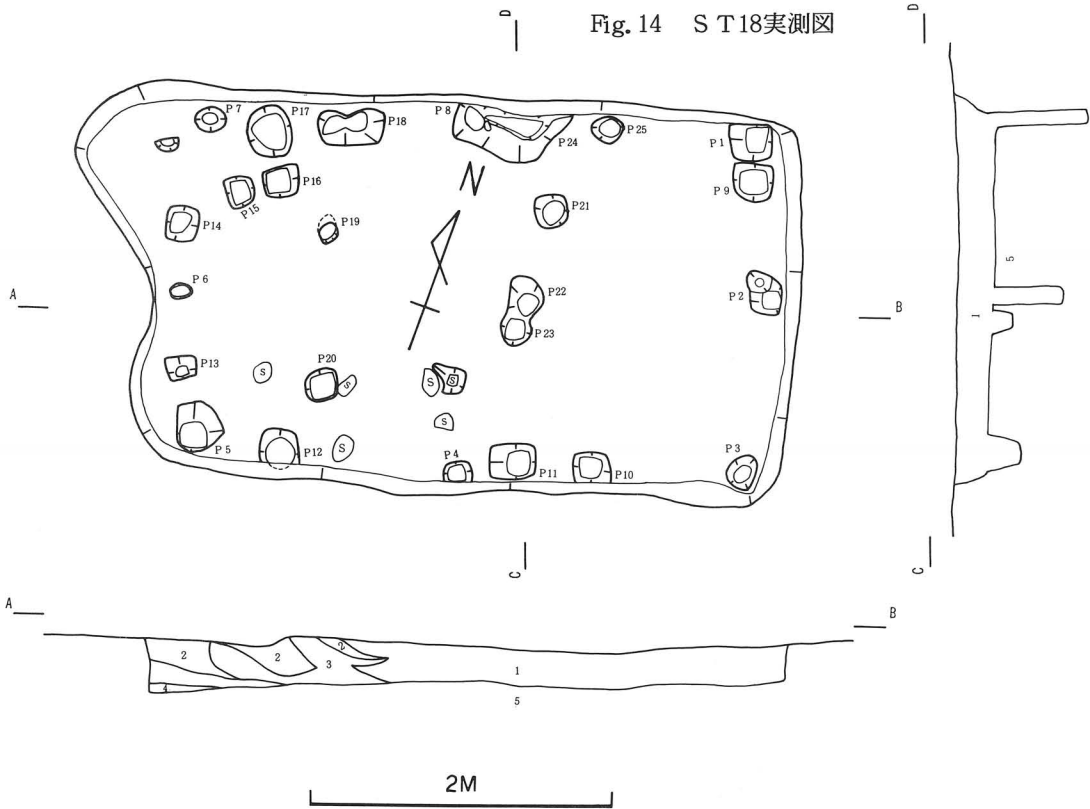
出土遺物：至道元宝、天聖元宝が出土している。

PL. 11



ST18

Fig. 14 S T18実測図



- 第1層 暗褐色土 (黄褐色砂質土少々混入)
- 第2層 暗褐色土 (淡灰色砂質土、黒色土多少混入)
- 第3層 淡灰色粒性土 (黄褐色土、黒色土多少混入)
- 第4層 黄褐色砂質土 (暗褐色土若干混入)
- 第5層 地山 (黄褐色砂質土)

遺構名: S T-18				遺構名: S T-18			
PitNo.	長径×短径(cm)	深さ(cm)	備考	PitNo.	長径×短径(cm)	深さ(cm)	備考
Pit 1	27 × 25	36.7		Pit 14	24 × 22	28.7	
2	23 × 20	25.5		15	21 × 18	17.5	
3	23 × 19	30.8		16	24 × 21	15.5	
4	19 × 14	27.2		17	36 × 28	27.3	
5	32 × 30	49.8		18	44 × 20	44.5	
6	14 × 11	35.0		19	14 × 14	25.6	
7	20 × 16	45.7		20	22 × 22	27.0	
8	29 × 21	31.6		21	22 × 22	7.3	
9	26 × 25	18.7		22	26 × 24	45.5	
10	25 × 20	44.0		23	22 × 22	12.7	
11	31 × 24	28.0		24	46 × 32	62.0	
12	26 × 22	18.0		25	21 × 17	31.8	
13	21 × 16	28.5					

ST19・ST24 (Fig.15, PL.12)

ST19

規 模：長軸270cm +  $\alpha$ 、短軸255cm、深さ50cm。

張り出し：南側に存在した可能性あり。

覆 土：覆土中間に厚さ5cm強の灰層が存在する。部分的に炭化物が包含されている。

重複関係：ST24 (旧)

柱穴配置：壁面からやや離れた状態で1間×2間の配置を呈する。柱間は一定しない。P1  
～P6

出土遺物：無釉播鉢2片、鉄釘4本、小札1枚が覆土から出土している。

ST24

規 模：長軸295cm、短軸280cm、深さ37cm。

張り出し：なし

覆 土：黄褐色砂質土ブロックを含む暗褐色土の単一層。人為的埋め戻しと考えられる。

重複関係：ST19 (新)

柱穴配置：壁面からやや離れた状態で配置しており、2間×2間の規模である。P7, P8,  
P9, P10, P11, P12, P13, P14が支柱穴と考えられる。

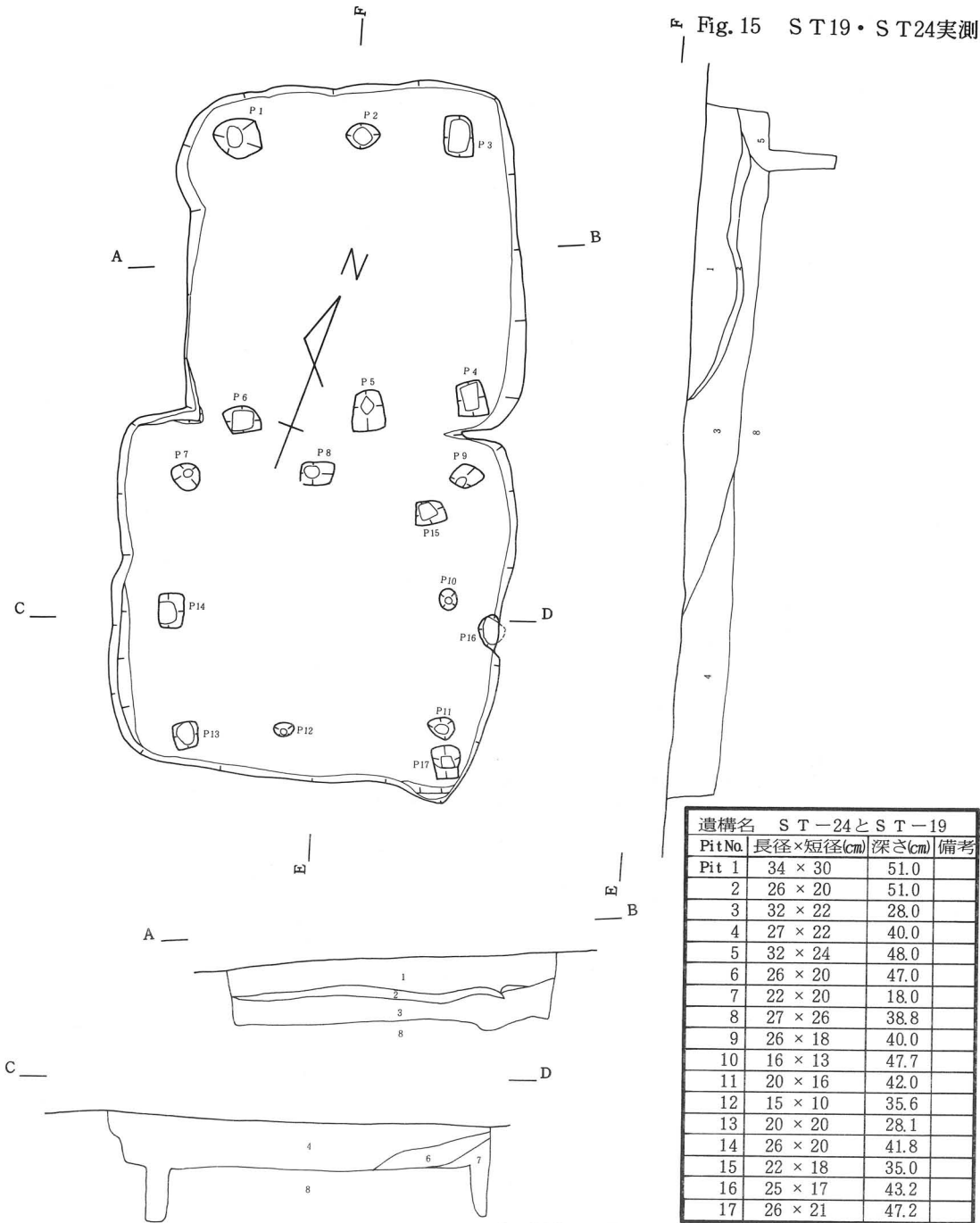
出土遺物：美濃灰釉皿1片、鉄製火箸が覆土から出土している。

PL.12



ST19・ST24

Fig. 15 S T 19・S T 24実測図



S T 24とS T 19

- 第1層 暗褐色土 (黄褐色砂質土粒子状に混入、炭化物あり)
- 第2層 黒色土 (灰を含む)
- 第3層 暗褐色土 (黄褐色砂質土粒子状に混入)
- 第4層 暗茶褐色土 (多量の黄褐色砂質土を粒子状と2cm大のブロック状に混入、若干炭化物あり)
- 第5層 褐色土 (黄褐色砂質土を粒子状に混入)
- 第6層 暗茶褐色土 (黄褐色砂質土粒子状に混入、粘土質、微量の炭化物混入)
- 第7層 暗褐色土 (黄褐色砂質土粒子状に混入、若干の炭化物混入)
- 第8層 地山 (黄褐色砂質土)

ST20 (Fig.16, PL.13)

規模：長軸310cm、短軸275cm、深さ74cm。

張り出し：西辺南側隅と、北辺東側隅の2箇所のみられる。いずれも階段状を呈し、方向は前者がW-20°-S、後者がN-15°-Wである。

覆土：下層ほど、黄褐色砂質土のブロック塊が大きくなり、自然堆積とみた場合には混層の割合が高く、人為的埋め戻しの状態とも考えられる。

重複関係：なし。

柱穴配置：柱穴は、壁面に接する状態で位置し、2間×3間と推定されるが西辺から北辺にかけては痕跡を発見できなかった。一般的に柱穴の掘り方は浅い。短軸は3尺5寸、長軸は3尺が基準のようである。

出土遺物：青磁1片、鉄釘3本、鉄鍋1片、火箸1片があった。

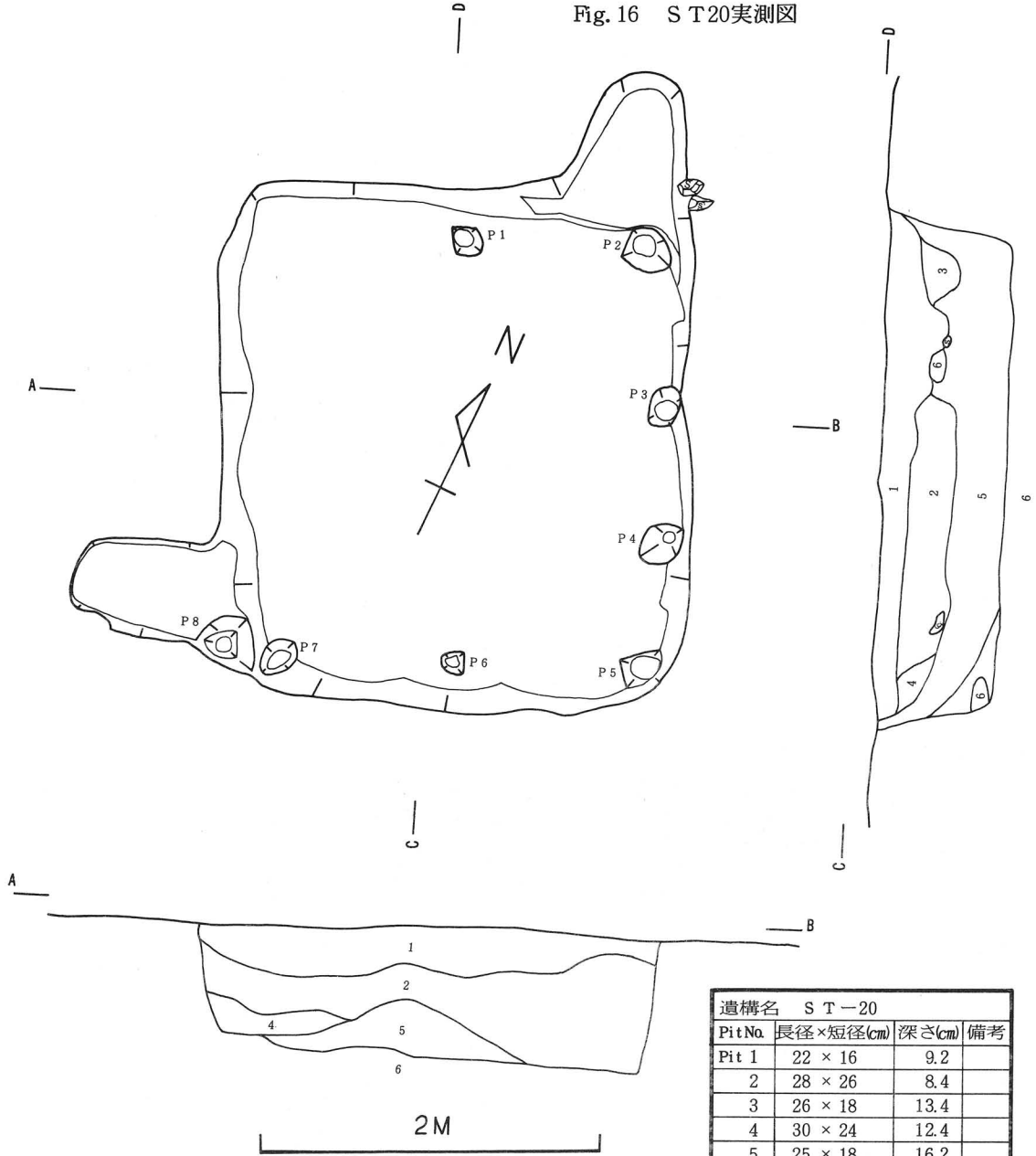
PL. 13



ST20 (北より)



Fig. 16 S T20実測図



遺構名 S T-20			
Pit No.	長径×短径(cm)	深さ(cm)	備考
Pit 1	22 × 16	9.2	
2	28 × 26	8.4	
3	26 × 18	13.4	
4	30 × 24	12.4	
5	25 × 18	16.2	
6	14 × 14	9.0	
7	26 × 18	17.4	
8	37 × 27	32.3	

- 第1層 暗褐色土 (弱干黄褐色砂質土混入)
- 第2層 暗褐色、黒色土、黄褐色土の混層
- 第3層 暗褐色土、黒褐色土の混層
- 第4層 黄褐色砂質土 (若干暗褐色土混入)
- 第5層 暗褐色土 (黄褐色砂質土混入)
- 第6層 地山 (黄褐色砂質土)

ST21 (Fig.17, PL.21)

規模 長軸340cm、短軸320cm、深さ32cm。

張り出し 西辺中央に幅60cmほどのスロープ状に存在し、両側に幅15cmほどの細い溝状のくぼみが見られる。W-10°-S。

覆土 床面直上に粘土を貼っている部分もみられ、炭化物と灰を含む層が下層に広がっている。

重複関係 ST25(新)、SX04(旧)

柱穴配置 壁面からやや離れた所に位置し、2間×2間の規模と考えられる。P1, P2, P3, P4, P5, P6, P7, が本遺構に伴うもので、P9, P10, P11は掘立柱建物跡に付属するものであろうか。他の柱穴は本遺構より新しいものである。

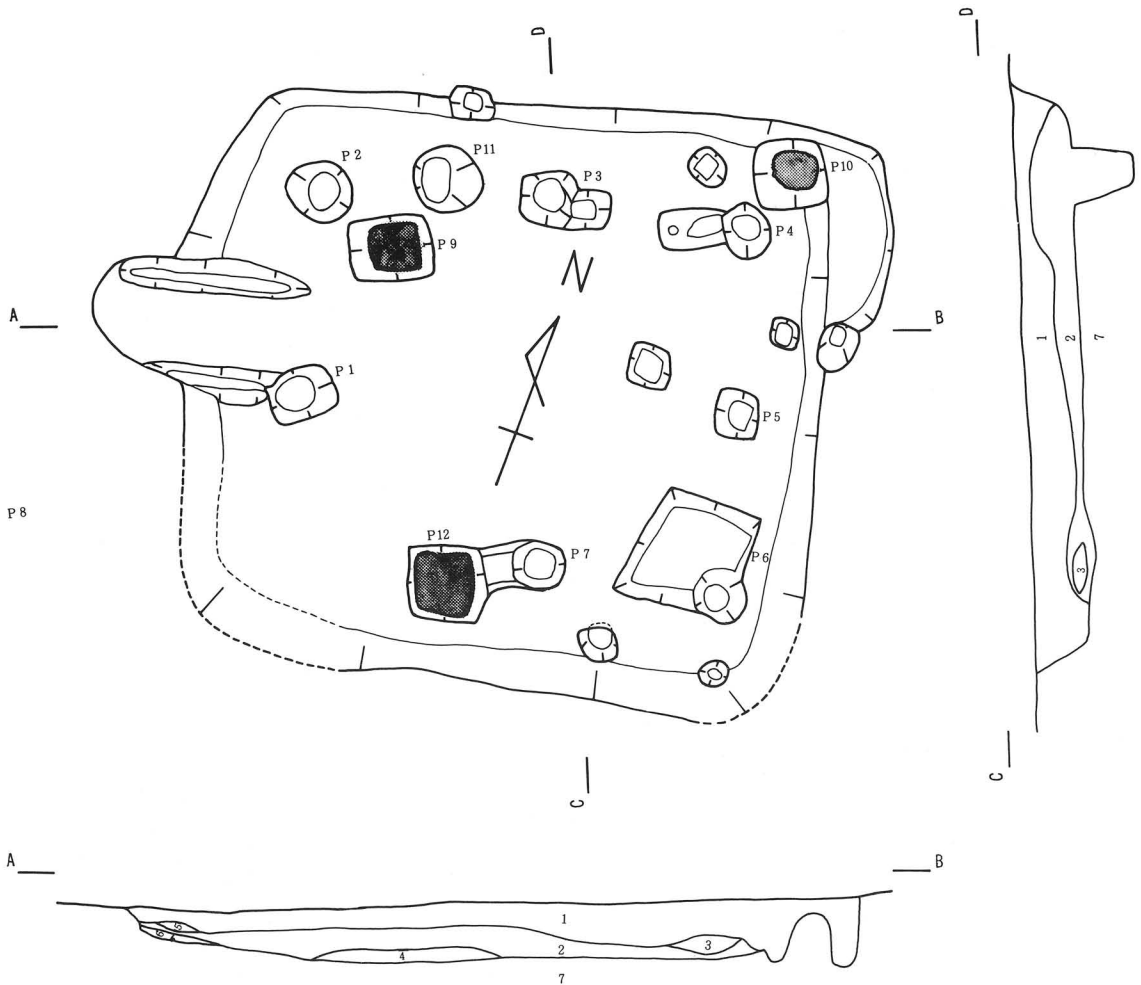
出土遺物 染付皿2片、美濃灰釉皿1片、溶解物付着土器1片、瓦器1片、鉄釘2本が覆土から出土している。

PL. 14



ST21 (東より)

Fig. 17 S T21実測図



遺構名: S T-21			
PitNo.	長径×短径(cm)	深さ(cm)	備考
Pit 1	36 × 29	56.2	
2	37 × 33	47.1	
3	32 × 29	33.6	
4	29 × 26	41.4	
5	26 × 26	53.1	
6	32 × 28	47.2	
7	28 × 27	28.2	
8	42 × 41	19.8	
9	42 × 37	14.2	
10	40 × 38	30.0	
11	37 × 34	21.5	
12	44 × 42	—	

- 第1層 暗褐色土 (ブロック状の黄色砂質土、炭化物混入、しまりあり)
- 第2層 暗褐色土 (ブロック状の黄色砂質土、炭化物、灰を混入、しまりなし)
- 第3層 暗褐色土 (灰を多量に含む)
- 第4層 灰褐色粘土
- 第5層 暗褐色土 (炭化物を多量に含む)
- 第6層 暗褐色土 (黄色砂質土を多量に含む)
- 第7層 地山 (黄褐色砂質土)

ST22 (PL. 15)

検出区がJ58区西壁面にかかったため完掘することができなかった。次年度の調査で、再調査する予定である。概略を説明すると、

規 模：長軸280cm +  $\alpha$ 、短軸300cm、深さ30cm。

張り出し：検出できず。

覆 土：黄褐色砂質土を粒子状に含む暗褐色土。

重複関係：なし。

柱穴配置：明確でない。

出土遺物：青磁1片、染付2片、美濃1片、瀬戸天目1片、瓦器4片、鉄釘2本、小札2枚が覆土から出土している。

PL. 15



S T 2 3 (Fig.18, PL. 16)

規 模：長軸450cm、短軸378cm、深さ18cm。

張り出し：なし。

覆 土：黄褐色砂質土を含む暗褐色土の単一層。

重複関係：セクション図などを取らなかったため確実ではないが、S A01とした土居が本遺構の東辺に重なっているようで、S A01が新しいものと考えられる。

柱穴配置：壁面に接する状態で位置し、2間×2間の規模であろうか。P 1, P 2, P 3, P 4, P 5, P 6, P 7, P 8, が壁面に接するもの、P 9, P 10は棟通りをささえるものと考えられる。P 11～P 26までは後世の攪乱によるものであろう。

出土遺物：産地不明の施釉陶器1片が覆土から出土している。

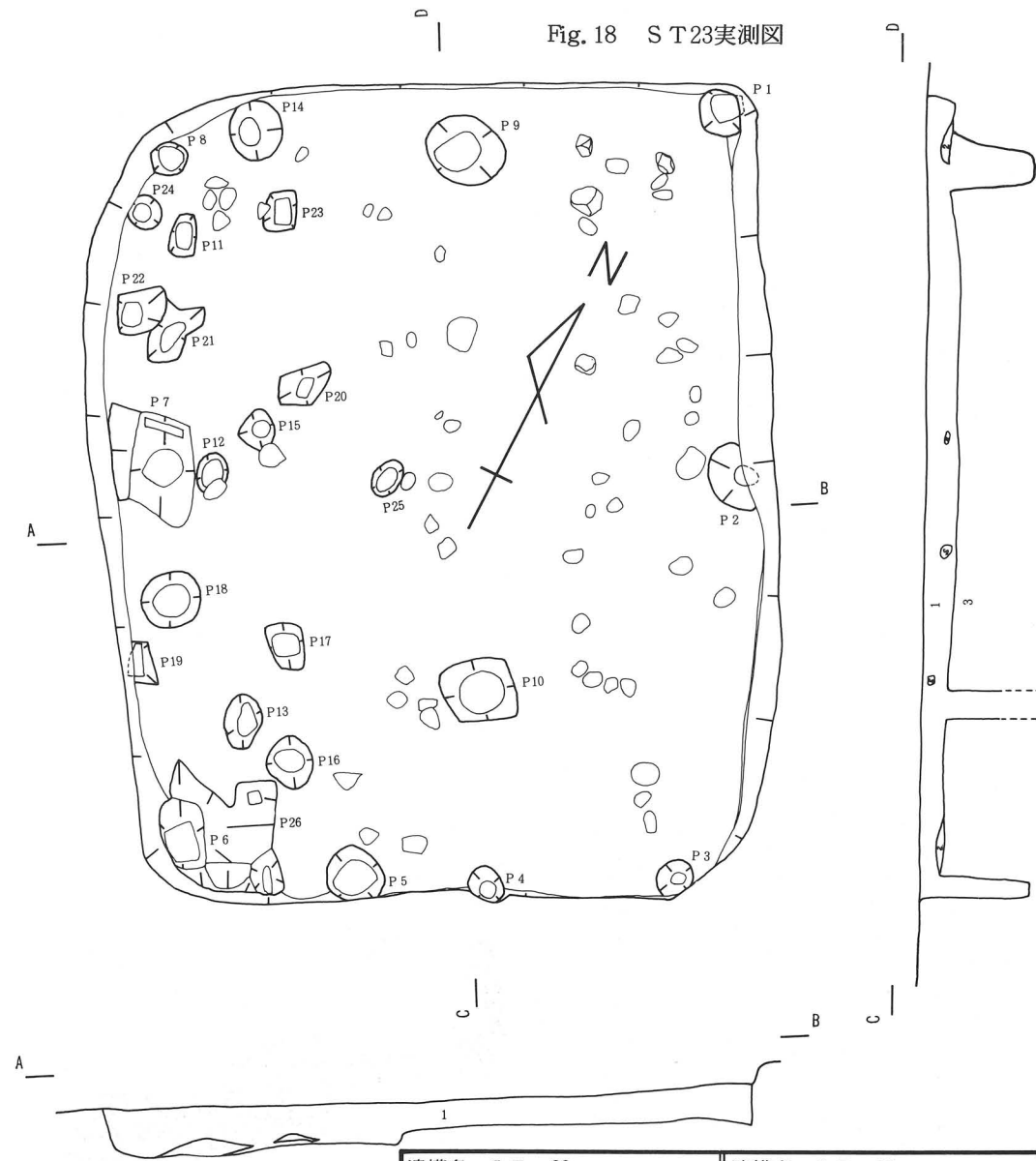
本遺構の床面直上から、幅10cm前後の川原石が多数検出された。主に中央から東側にかけて分布しており、隣接するS A01との関係から、単なる廃棄行為の所産とは考えられない面がある。他に類例がないので、今後の調査を待ちたい。

PL. 16



S T 23 (東より)

Fig. 18 S T 23実測図



S T - 23

- 第1層 暗褐色土・黄褐色砂質土少々含む。
- 第2層 黄褐色砂質土に暗褐色土少々混入
- 第3層 地山 (黄褐色土)

遺構名：S T - 23				遺構名：S T - 23			
PitNo	長径×短径(cm)	深さ(cm)	備考	PitNo	長径×短径(cm)	深さ(cm)	備考
Pit 1	26 × 22	56.0		Pit 14	33 × 31	40.7	
2	40 × 20	24.0		15	20 × 20	22.8	
3	22 × 18	19.6		16	28 × 24	13.0	
4	20 × 20	70.8		17	26 × 20	17.5	
5	34 × 28	22.0		18	32 × 32	16.0	
6	42 × 24	30.0		19	24 × 10	50.0	
7	52 × 36	28.3		20	30 × 20	17.3	
8	20 × 15	43.5		21	42 × 16		
9	44 × 38	83.5		22	29 × 25	21.8	
10	40 × 36	84.3		23	23 × 16	20.0	
11	24 × 14	12.5		24	17 × 17	12.7	
12	18 × 16	27.0		25	22 × 16	23.2	
13	32 × 20	14.0		26	26 × 22	25.5	

**S T 2 5** (Fig. 19, PL. 17)

規 模：長軸305cm、短軸295cm、深さ65cm。

張り出し：検出できず。

覆 土：暗褐色土と黒色土と黄褐色砂質土が混在しており、炭化物や粘質土の含まれる層もみられる。第11層としたものが本遺構の床面を構成していると考えられ、この上面が当時の生活面であろう。自然堆積の状態を呈する。

重複関係：S T 21 (旧)、S T 39 [S D] (旧)

柱穴配置：壁面からやや離れた所に位置し、1間×2間の配置を示す。P 1, P 2, P 3, P 4, P 5, P 6, が7尺5寸の柱間内に存在する。

出土遺物：青磁4片、染付4片、美濃灰釉皿3片、瓦器1片、鉄釘2本、小柄1片、銅製角細棒(332)1点、砥石1点、古銭4枚が前述した生活面直上から出土している。

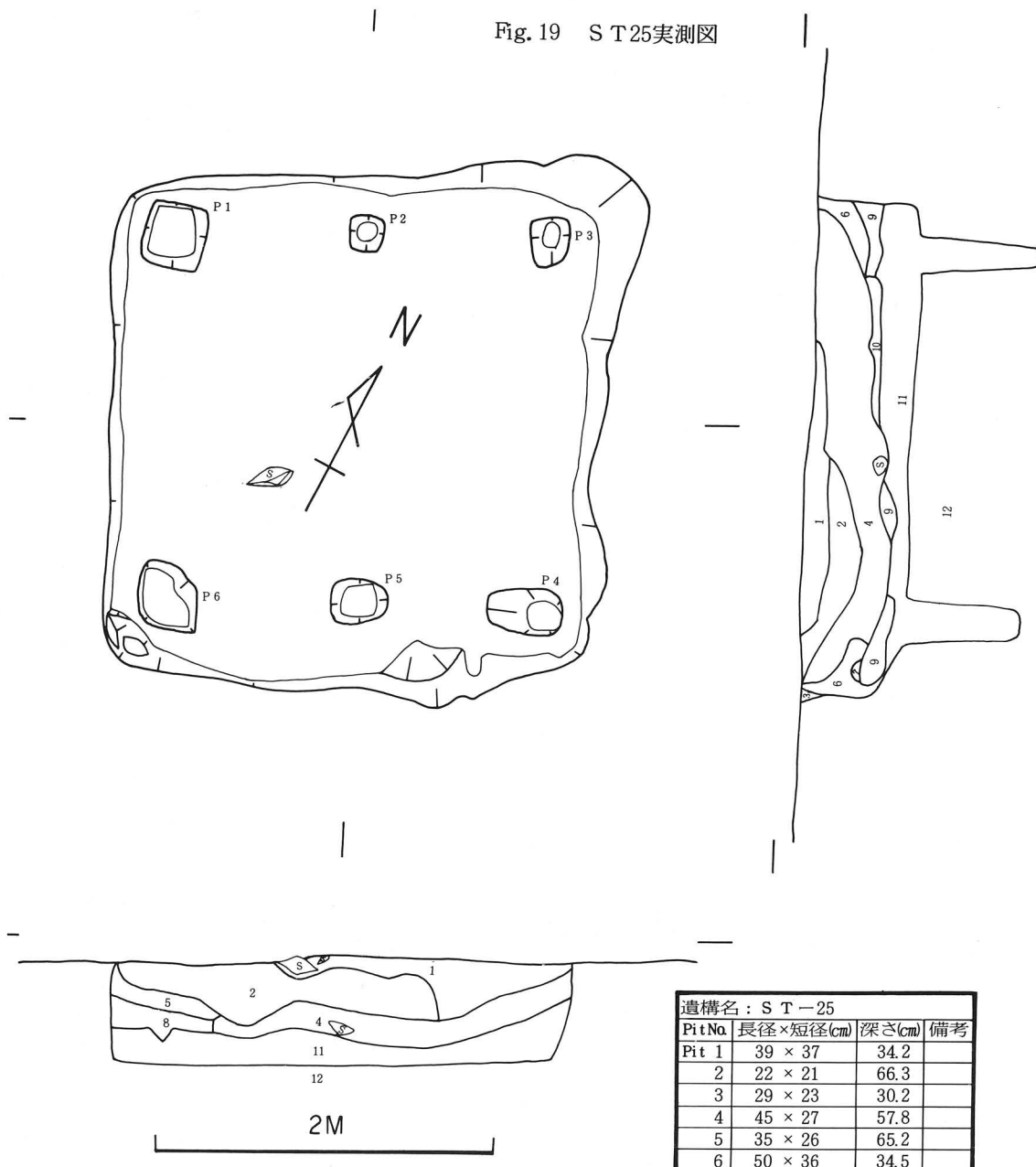
覆土あるいは床面から故意に破損したような川原石の破片が出土しており、自然堆積というよりも埋め戻しの状態とも考えられる。

PL. 17



S T 25 (南より)

Fig. 19 S T 25実測図



遺構名：S T - 25			
Pit No.	長径×短径(cm)	深さ(cm)	備考
Pit 1	39 × 37	34.2	
2	22 × 21	66.3	
3	29 × 23	30.2	
4	45 × 27	57.8	
5	35 × 26	65.2	
6	50 × 36	34.5	

- 第1層 暗褐色土 (若干黄褐色砂質土、黄色粘土混入、多少炭化物あり)
- 第2層 暗褐色土 (黄褐色砂質土、黒色土混入)
- 第3層 黒色土 (暗褐色土混入)
- 第4層 暗褐色土 (黒色土、黄褐色砂質土混入、多少炭化物あり、湿性多い)
- 第5層 暗褐色土 (第2層より黒色土が多い) 弱干黄褐色砂質土混入)
- 第6層 黄褐色砂質土 (暗褐色土混入)
- 第7層 黄色砂質土塊
- 第8層 (黒色土、黄褐色砂質土混入、多少炭化物あり、湿性多い)
- 第9層 暗褐色土 (炭化物、黄色粘土質ブロック状に混入)
- 第10層 暗褐色土 (黒色土混入、炭化物あり、粘性がある)
- 第11層 黄褐色砂質土 (暗褐色土、淡灰色粘土質混入)
- 第12層 地山 (黄褐色砂質土)



S T 2 6 (Fig.20, PL.18)

規 模：長軸395cm、短軸280cm、深さ40cm。

張り出し：西辺中央にスロープ状を呈して位置し、他の遺構との重複のため掘り過ぎてしまい、セクション図でしか確認できなかった。方向はW-20°-Sである。

覆 土：炭化物と粘性土を含む暗褐色土の単一層で人為的埋め戻しと考えられる。張り出し部分は粘質土で固めているようだ。

重複関係：S T 38 (旧)

柱穴配置：壁面から離れた状態で1間×2間の配置を示すもの(P 1, P 4, P 7, P 11, P 14, P 17)と、2間×3間のもの(P 9, P 12, P 13, P 15, P 16, P 18, 他)が推定される。P 19, P 20は棟通りに位置するものであろうか。2期以上の建て替えると、S T 38から連なる大きな竪穴遺構によってかなり攪乱を受けた後の構築と考えられる。

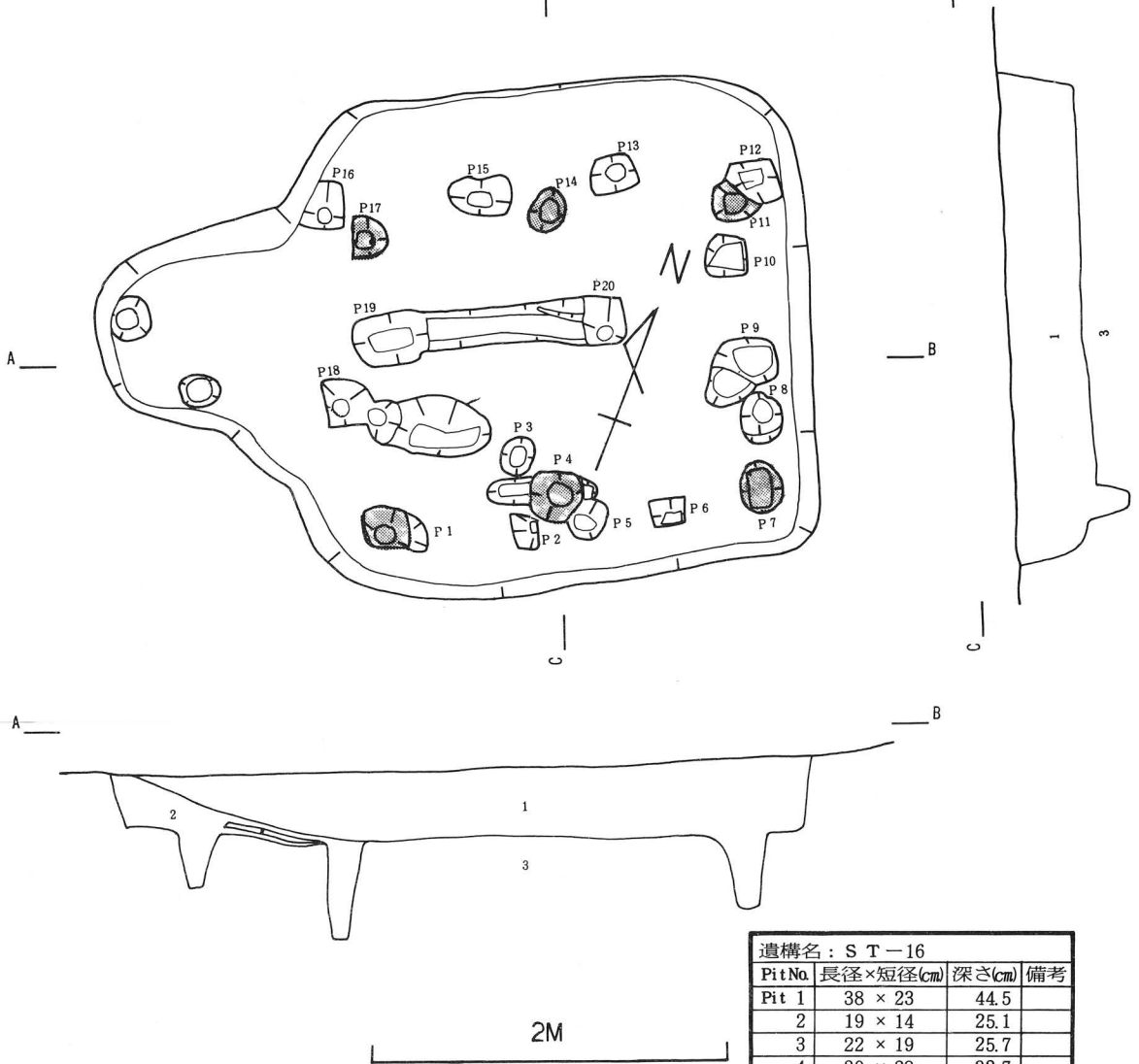
出土遺物：青磁1片、無釉播鉢1片、瓦器1片、鉄釘2本、罎(326)などが覆土から出土している。

PL.18



S T 26 (東より)

Fig. 20 S T 26実測図



第1層 暗褐色土 (炭化物及び粘土粒子混入)  
 第2層 暗褐色土 (粘土粒子混入)  
 第3層 黄褐色砂質土

遺構名: S T -16			
Pit No.	長径×短径(cm)	深さ(cm)	備考
Pit 1	38 × 23	44.5	
2	19 × 14	25.1	
3	22 × 19	25.7	
4	30 × 28	32.7	
5	23 × 19	24.0	
6	19 × 16	33.3	
7	29 × 24	48.8	
8	28 × 23	29.8	
9	36 × 25	58.9	
10	24 × 24	29.6	
11	25 × 20	30.7	
12	29 × 25	53.1	
13	26 × 21	28.7	
14	26 × 20	23.0	
15	35 × 20	36.1	
16	27 × 20	42.8	
17	25 × 18	27.0	
18	27 × 26	54.3	
19	42 × 30	32.8	
20	27 × 24	56.3	

S T 2 8 (Fig.21, PL.19)

規 模：長軸305cm、短軸240cm、深さ53cm。

張り出し：西辺北側に痕跡があったけれども明確に検出できず。

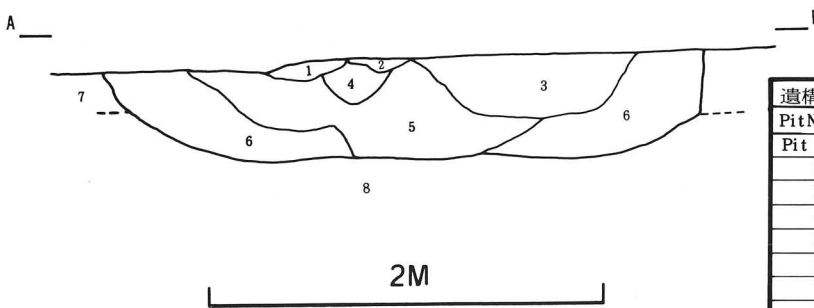
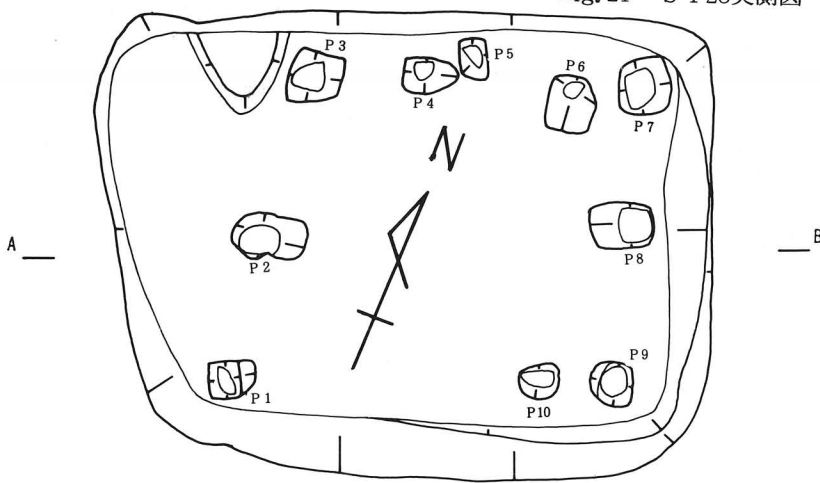
覆 土：黄褐色砂質土の小ブロックと灰を含む褐色土が全体を覆い、攪乱されながら埋め戻されたと考えられる。

重複関係：S T 29 (旧)、S T 39〔S D〕 (旧) なども攪乱が激しく明確でない。

柱穴配置：壁面に隣接する状態で、1間×2間の配置と考えられる。P 1, P 2, P 3, P 7, P 8, P 9 が本遺構に伴うもので、P 6, P 10も可能性がある。

出土遺物：鉄釘1本、鉄鍋2片、古銭1枚が覆土から出土している。

Fig. 21 S T 28実測図



遺構名：S T - 28			
Pit No.	長径×短径(cm)	深さ(cm)	備考
Pit 1	25 × 19	36.3	
2	39 × 20	63.6	
3	28 × 25	45.9	
4	28 × 18	19.4	
5	21 × 14	10.9	
6	30 × 26	18.9	
7	28 × 28	40.1	
8	33 × 24	36.4	
9	23 × 22	43.4	
10	20 × 18	16.6	

S T - 28

- 第1層 明褐色土。しまり有り。
- 第2層 白色パミス
- 第3層 褐色土。しまり弱い。
- 第4層 褐色土に灰と黄色砂質土少々含まれる。
- 第5層 褐色土に灰と小ブロック状の黄色砂質土が全体的に含まれる。
- 第6層 暗褐色土に灰、炭化物、ブロック状の黄色砂質土が混入。しまりなし。
- 第7層 6より黒い土で黄色粘土、ブロック状の黄色砂質土を含む。
- 第8層 黄色砂質土。しまり強い。



S T 28 (西より)

## S T 3 0 (Fig. 22, PL. 10)

規 模：長軸355cm、短軸350cm、深さ45cm。

張り出し：西辺中央に舌状のスロープを呈して存在し、両側に幅10cm前後のくぼみを有している。セクション図第4層としたものは、本施設の床面でかなり踏み固められた状態になっている。

覆 土：粘質土を含む第1層と、それを含まない第3層は、本遺構の中で建て替えがおこなわれた時点の相違を示すものようで、新旧の覆土関係が推定できる。

重複関係：S T 16 (新)

柱穴配置：2期の構築が想定される。

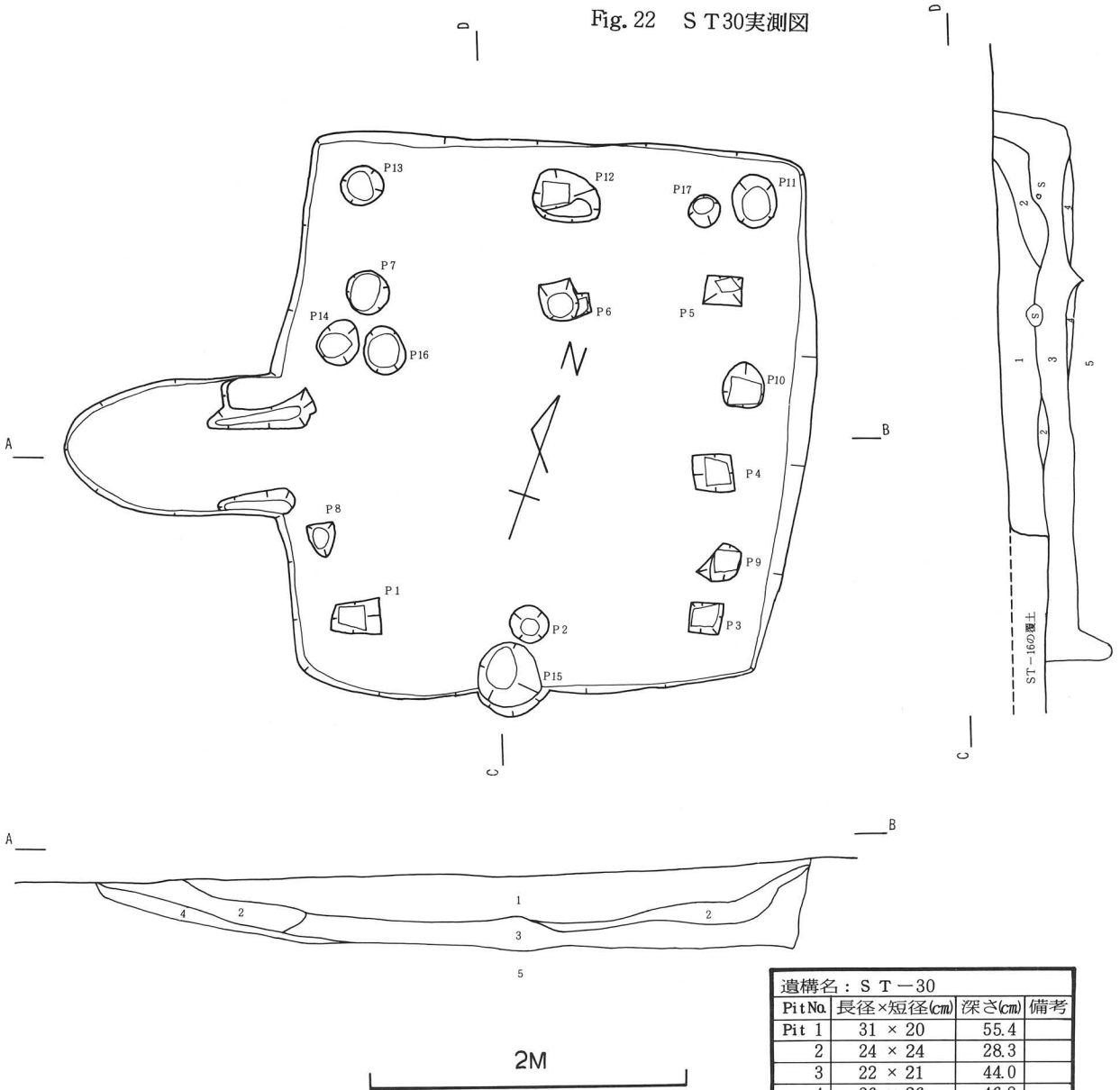
A期：P 1, P 2, P 3, P 4, P 5, P 6, P 7を支柱穴とする2間×2間の規模のもの。間尺は3尺5寸を基準としている。

B期：P 8, P 9, P 10, P 11, P 12, P 13, P 14を支柱穴とする2間×2間の規模のもの。間尺は4尺を基準としている

A期よりB期が古いと推定される。

出土遺物：青磁・染付・美濃が各1片、無釉摺鉢1片、瓦器1片、小柄(324)1点、古銭2枚が覆土から出土している。

Fig. 22 S T30実測図



S T 30

- 第1層 暗褐色土 (ブロック状の黄褐色砂質土と炭化物、乳白色粘土を含む混層)
- 第2層 暗褐色土 (灰が多量に混入)
- 第3層 暗褐色土 (黄褐色砂質土を粒子状に含む混層)
- 第4層 暗褐色土 (第5層の黄褐色砂質土が大ブロック状に含まれる混層、しまりあり)
- 第5層 地山 (黄褐色砂質土)

遺構名: S T-30			
Pit No.	長径×短径(cm)	深さ(cm)	備考
Pit 1	31 × 20	55.4	
2	24 × 24	28.3	
3	22 × 21	44.0	
4	26 × 26	46.8	
5	24 × 19	37.8	
6	31 × 26	26.5	
7	29 × 28	39.0	
8	22 × 17	37.3	
9	27 × 20	42.9	
10	30 × 27	49.2	
11	35 × 29	54.5	
12	44 × 33	44.2	
13	27 × 26	45.6	
14	30 × 28	47.6	
15	42 × 38	30.0	
16	31 × 26	12.7	
17	22 × 21	15.5	

**ST34** (Fig.23, PL.20)

規模：長軸235cm、短軸205cm、深さ90cm。

張り出し：なし。

覆土：上層は炭化物を含む暗褐色土と黄褐色砂質土の混層で、下層は炭化物を含まない混層と2分できる。人為堆積と考えられる。

重複関係：ST09（新）、ST35（新）

柱穴配置：壁面に接する状態で位置し、P1, P2, P3, P4, P5, P6, P24の2間×2間の規模と考えられる。また、P7, P8, P9も長軸方向の柱穴に並列していることから付属する柱穴であろう。

出土遺物：染付5片、美濃3片、溶解物付着土器1片、鉄釘4本、毛抜1点、鉄鍋3片、火箸1本、小札5枚、治平元宝・開元通宝・元豊通宝などの古銭が11枚出土している。いずれも覆土上層である。

**ST35** (Fig.23, PL.22)

規模：長軸(350cm)、短軸(350cm)、深さ40cm。

張り出し：西辺南側にスロープ状を呈して存在し、立ち上り部分の両側に幅15cmほどのくぼみを有する。新しい柱穴に切られているため明確でない。W-26°-S。

PL.20



ST34 (東より)

覆土：暗褐色土の中に黄褐色砂質土をブロック状に含む混層で、人為的埋め戻しの状態を呈する。

重複関係：S T 34（旧）、S T 36（旧）、S E 16（新）

柱穴配置：壁面よりやや離れた所に位置し、2間×2間の規模と考えられる。S T 36に東辺の柱穴が切られているため詳細は不明であるが、P 15, P 18, P 20, P 21の支柱穴に対して一回り小さいP 16, P 17, P 19が副次的柱穴とみなすことができる。S T 09に類似している。

出土遺物：青磁1片、染付2片、瀬戸天目碗1片、鉄釘7本、小札1枚、古銭2枚、砥石（358）などが覆土から出土している。

**S T 3 6** (Fig. 23, PL. 22)

規模：長軸240cm、短軸170cm、深さ88cm。

張り出し：なし。

覆土：全般にしまりのない暗褐色土と黄褐色砂質土の混層である。人為的埋め戻しと考えられる。

重複関係：S T 11（新）、S T 35（新）

柱穴配置：1間×2間で壁面に接する状態に位置する。P 10, P 11, P 12, P 13, P 14の5個を確認し、1個はS T 11に切られ消滅している。

出土遺物：美濃灰釉皿1片、瓦器1片、鉄釘5本、小札、古銭4枚の出土があった。

**S T 1 1** (Fig. 23, PL. 22)

規模 長軸265cm、短軸165cm、深さ140cm。

張り出し：なし。

覆土：全体に黄褐色砂質土を充填するしまりのない単一層である。

重複関係：S T 36（旧）

柱穴配置：なし

出土遺物：鉄釘1本だけの出土をみた。

**S E 1 6** (Fig. 23, PL. 22)

規模：長径220cm、短径210cm、深さは50cmほどの掘り下げで中止した。

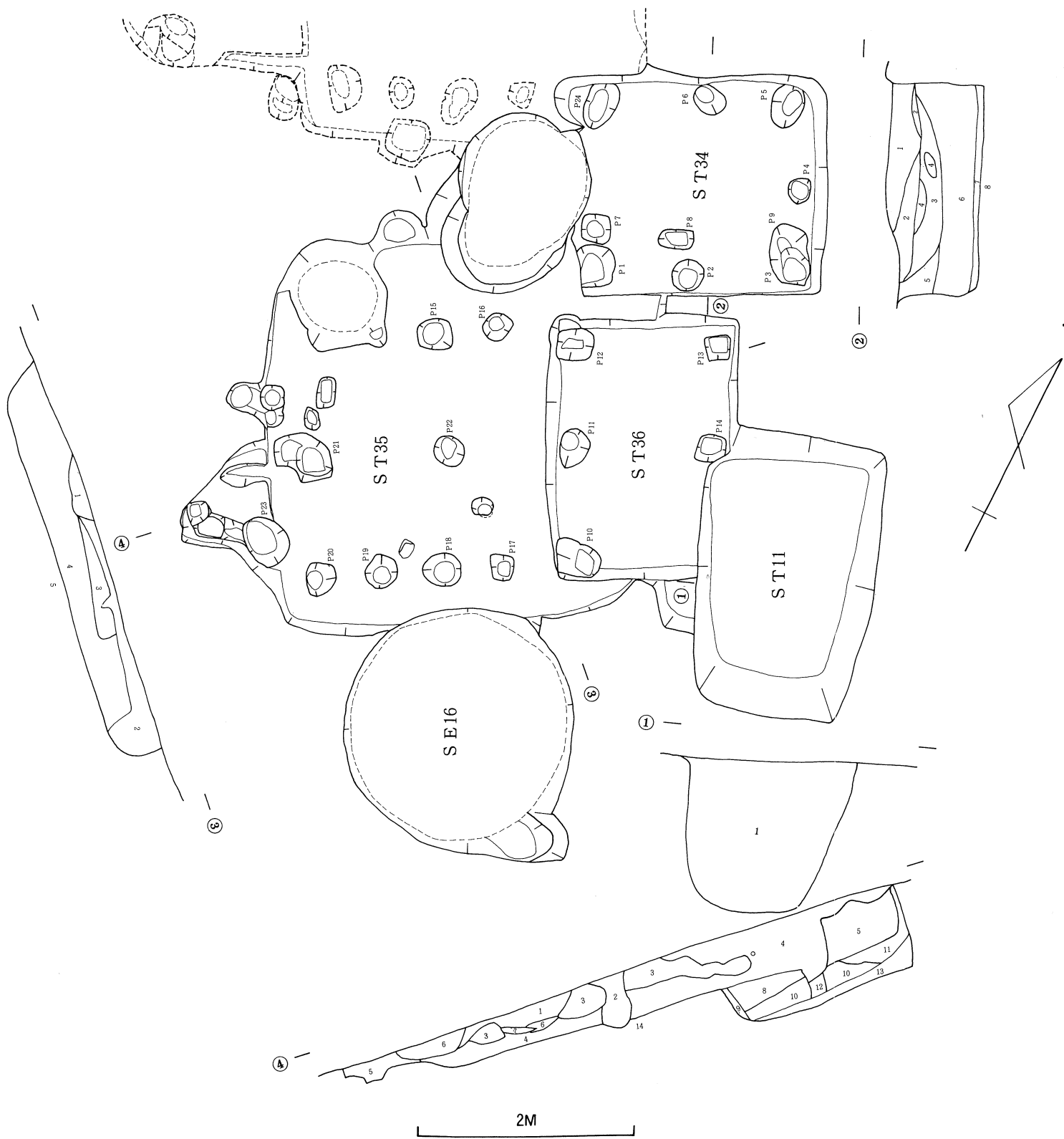
覆土：しまりのない暗褐色土の単一層で人為的埋め戻しと考えられた。

重複関係：S T 35（旧）

出土遺物：青磁5片、染付3片、美濃1片、鉄釘9本、鉄鏝（258・261）2本、小札2枚、かえし（331）、木葉状銅製品（333）などの出土があった。

なお、S T 35の北側に存在した貯蔵穴状の小ピットは、時間の関係で精査できなかった。

Fig. 23 ST11・ST34・ST35・ST36・SE16実測図



① ST11南壁セクション  
 第1層 下は粒子の細かい黄褐色砂質土。中から上段にかけて礫を多量に含む。  
 黄褐色砂質土及び明白砂質土及び暗褐色土の混層。(一時期に埋めもどされた形跡がある)  
 第2層 地山 (黄褐色砂質土)

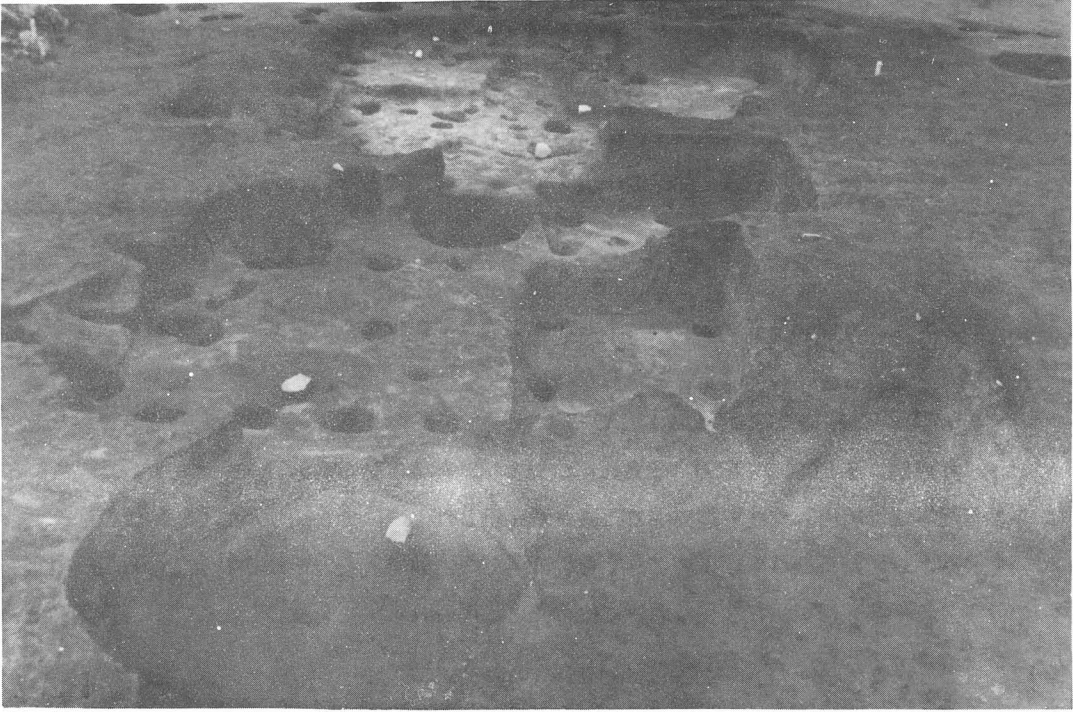
② ST34西壁セクション  
 第1層 暗褐色土。褐色砂質土を少々含む。湿性なし。炭化物を含む。  
 黄褐色砂質土。暗褐色土を少々含む。  
 第3層 明褐色土。褐色砂質土を全体的に含む。下層に炭化物を含む。湿性なし。湿性あり。  
 第4層 明褐色土。黄褐色砂質土の混層。炭化物を含む。  
 第5層 明褐色土。褐色砂質土を少々含む。炭化物あり。上層湿性なし。下層湿性あり。湿性なし。  
 第6層 明褐色土。黄褐色砂質土を2cm~5cmのプロック状に含む混層  
 第7層 左方に暗褐色土。右方に黄褐色砂質土。湿性あり。  
 第8層 地山 (黄褐色砂質土)

③ ST35東壁セクション  
 第1層 暗褐色土。湿性なし。  
 第2層 暗褐色土。湿性なし。黄褐色砂質土が全体的に含む。  
 第3層 暗褐色土。湿性あり。  
 第4層 暗褐色土の中に黄褐色土が小さいプロック状に混在。  
 第5層 地山 (黄褐色砂質土)

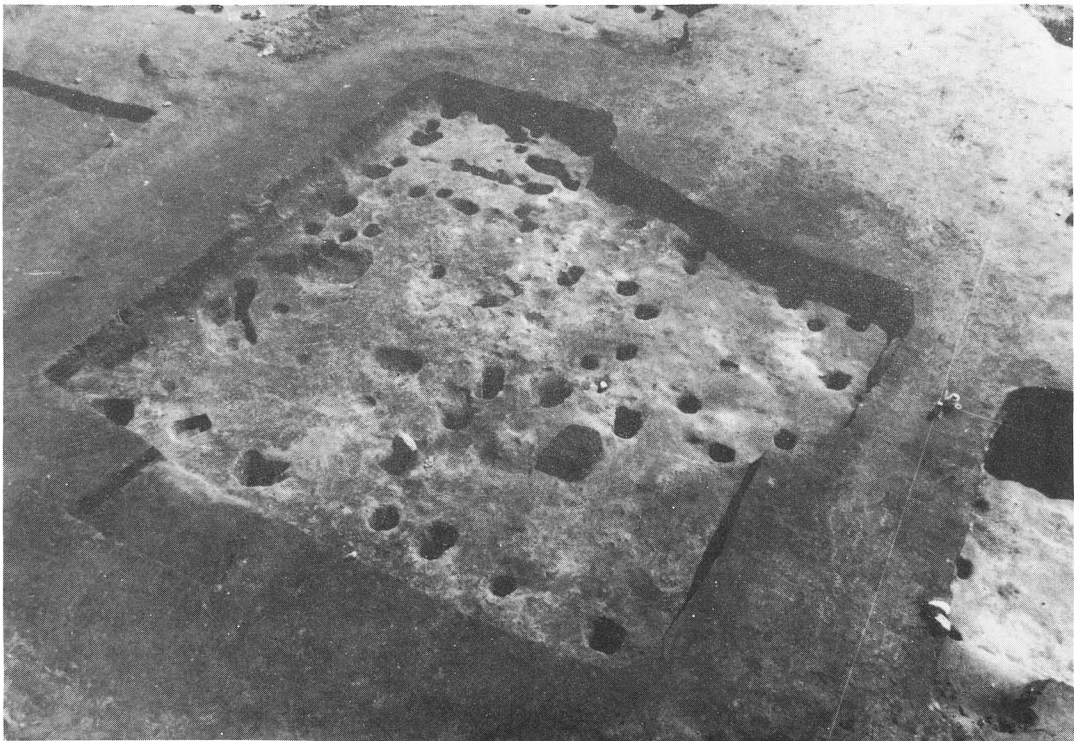
④ ST35・36南壁セクション  
 第1層 暗褐色土。湿性なし。  
 第2層 暗褐色土。湿性なし。黄褐色砂質土が全体的に含む。  
 第3層 暗褐色土。湿性あり。  
 第4層 暗褐色土の中に黄褐色土が小さいプロック状に混在。炭化物混入。  
 第5層 暗褐色土に粒子状の黄褐色土。炭化物が少々混じっている。  
 第6層 暗褐色土に灰・炭化物を含む。  
 第7層 暗褐色土に灰を多量に含む。  
 第8層 暗褐色土。湿性なし。  
 第9層 黄褐色土。湿性なし。  
 第10層 暗褐色土に黄褐色砂質土混入。湿性なし。  
 第11層 5層より黄褐色土が多い。  
 第12層 暗褐色土に粒子状の黄褐色砂質土混入。  
 第13層 暗褐色土。湿性なし。  
 第14層 地山 (黄褐色砂質土)

遺構名：ST-11・34・35・36			
PitNo	長さ×短径(cm)	深さ(cm)	備考
Pit 1	39 × 34	44.1	
2	30 × 30	46.5	
3	35 × 34	44.3	
4	24 × 20	11.1	
5	41 × 30	59.7	
6	30.5 × 23.5	49.4	
7	27 × 26		
8	34 × 19	11.4	
9	34 × 33	32.3	
10	40 × 29	10.5	
11	37 × 27	40.3	
12	35 × 30	30.0	
13	22 × 21.5	32.8	
14	27 × 24.5	13.6	
15	35 × 29	37.0	
16	26 × 23.5	30.3	
17	23 × 20.5	23.4	
18	30.5 × 29	25.5	
19	29.5 × 28.5	36.5	
20	31.5 × 27.5	47.4	
21	43 × 33	49.2	
22	28.5 × 27.5	12.0	
23	49 × 37.5	26.6	
24	44 × 29.5	54.0	





S T 35 ・ S T 36 ・ S E 16 ・ S T 11 (南より)



S T 38

### ST38 (PL. 23)

I 59区より検出した遺構で、明確に竪穴遺構とは言い切れないが、ST19・ST24・ST26は本遺構を破壊して構築したものらし、同一レベルの床面のため壁面が残存していないものである。柱穴の配置も確認が困難で、張り出しの有無、覆土堆積の状態など詳細に精査できなかった。出土遺物も、不明鉄製品が若干出土している程度である。

### ST39 (PL. 28) 後述

### ST40

I 58区北壁面で確認したもので、一部しか検出できなかったため再度の調査で精査することにした。

## 4. 井戸跡 (SE08, SE09, SE16については前述している。)

本年度平場で検出した井戸跡の中で、底まで完掘したものはSE10しかなく、他は壁面崩壊の危険があったため掘り下げを約1mぐらいの所で中止している。それらの中で、石組みのものはまったく存在せず、SE10においては木杵片と思われる木材を検出したことから、木杵あるいは素掘りの井戸が当時の主体を占めていたと考えられる。

### SE11 (Fig. 24, PL. 24, PL. 25)

規 模：円形フラスコ状の掘り方をしており、上端は長径290cm、短径260cm、中間の張り出し幅は最大360cm、最小320cm、深さは340cmを計る。

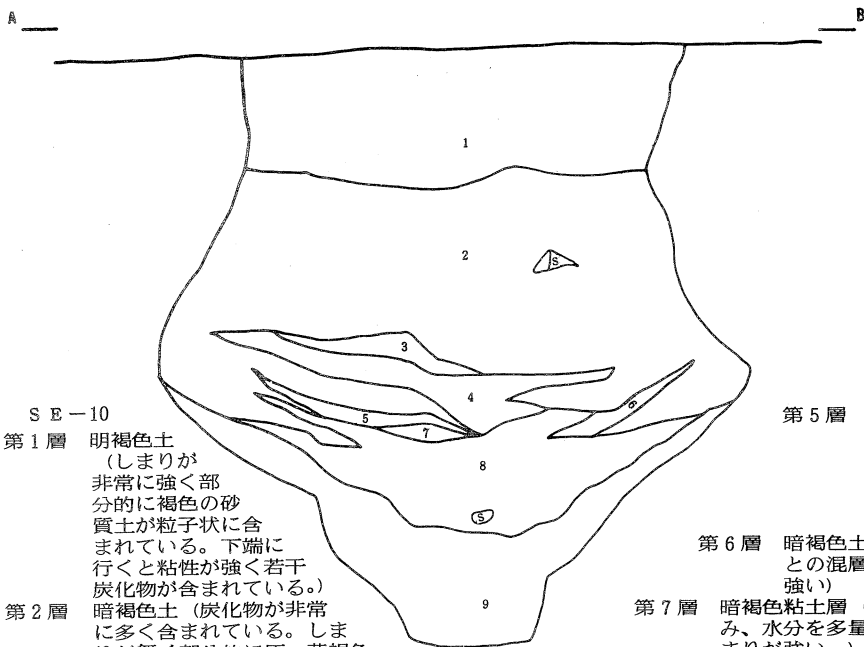
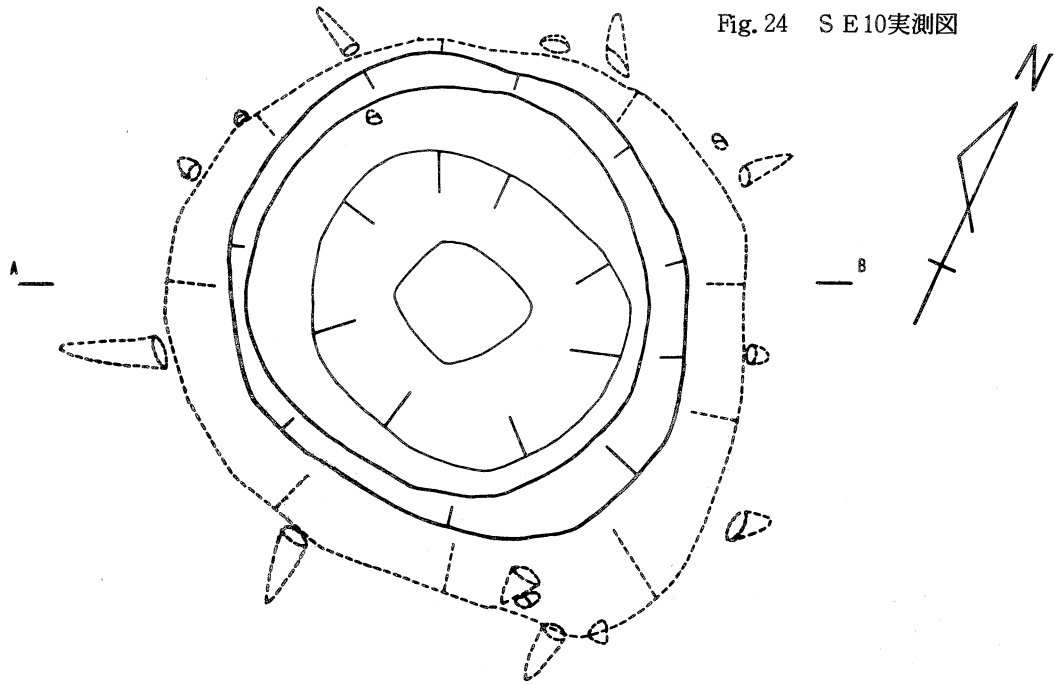
覆 土：最下層を除いて全般に炭化物や灰を多量に含んでいることから、使用機能を失って、人為的に埋め戻されたものと考えられる。

構築の特徴：中間張り出し部に径15cmほどの横穴が存在し、対応する部分もみられる。また、木杵は検出されなかったものの、加工した木材の破片が3～4個出土し(PL. 25-4)木杵が存在した可能性を推定できた。

出土遺物：本遺構からの出土遺物は非常に豊富で、覆土からの出土であることを考え合わせると、主に埋土と一緒に廃棄されたものと考えられる。

青磁碗6片、青磁皿6片(26・32)、染付皿4片、白磁皿2片(41・42)、美濃灰釉皿10片(82・86)、天目碗1片、無釉播鉢5片(150・158)、溶解物付着土器6片、鉄釘41本、鉄鏝3本(255・256・260)、刀3本(192)、毛抜き1個(310)、かすがい1本(195)、火打金1個(199)、小札2枚(224・225)古銭4枚などの出土をみている。

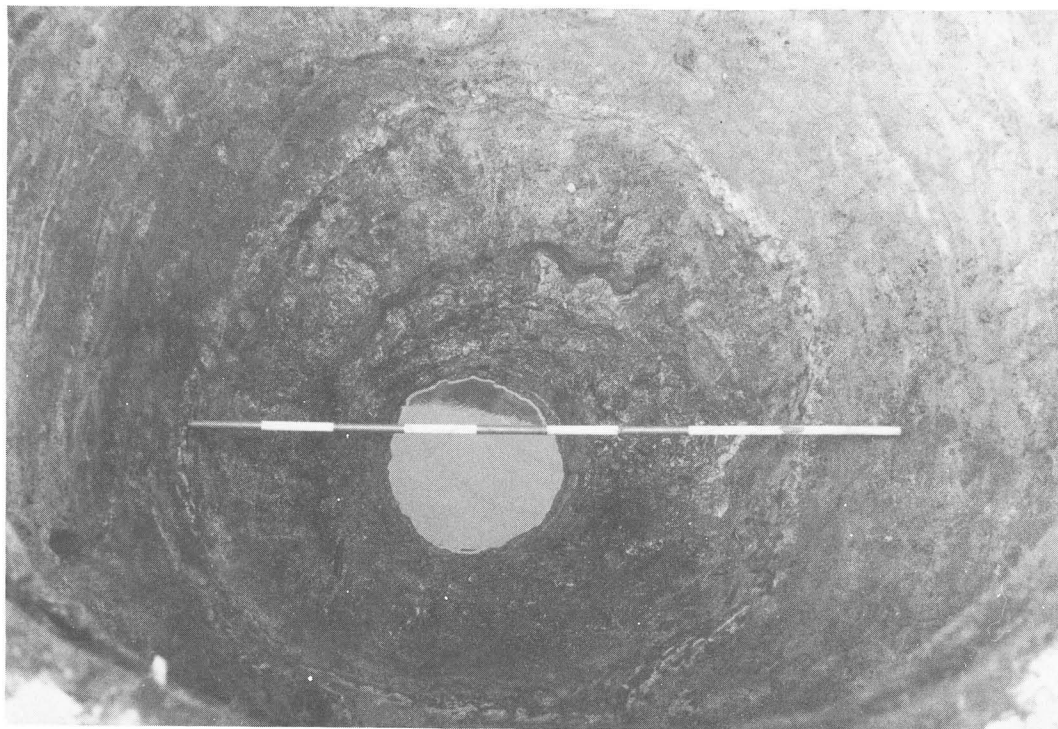
Fig. 24 S E 10実測図



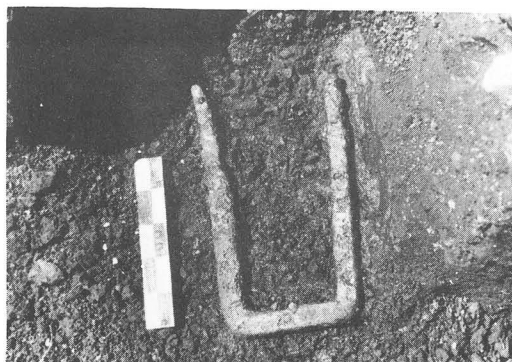
S E - 10

- 第1層 明褐色土 (しまりが非常に強く部分的に褐色の砂質土が粒子状に含まれている。下端に行くと粘性が強く若干炭化物が含まれている。)
- 第2層 暗褐色土 (炭化物が非常に多く含まれている。しまりが無く部分的に灰、黄褐色砂質土が粒子状に含まれている。)
- 第3層 赤褐色砂質土を多量に含む暗褐色土。
- 第4層 暗褐色土 (しまり無く、砂粒を多量に含み、炭化物と灰も含まれている。)

- 第5層 暗褐色土 (第2層とほぼ同じであるが炭化物が含まれている。)
- 第6層 暗褐色土と黄褐色土との混層 (しまりが強い)
- 第7層 暗褐色粘土層 (粘質性に富み、水分を多量に含み、しまりが強い。)
- 第8層 暗褐色粘質土層 (炭化物、灰が層状に分布し、粘土質で水分、砂粒を多量に含む。)
- 第9層 赤褐色砂質土層 (赤褐色砂質土を主体に黄褐色砂質土、黒色土が混入しており、また赤褐色砂質土のかたまりが散在している。)



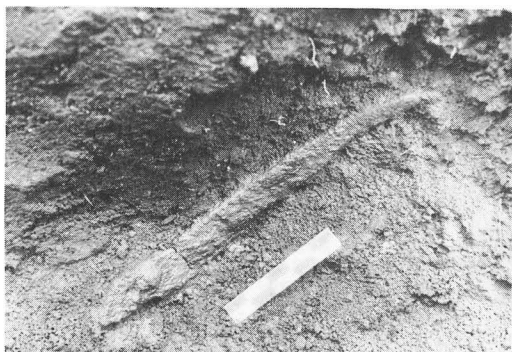
S E 10



(1) かすがい



(3) ねり鉢



(2) 刀

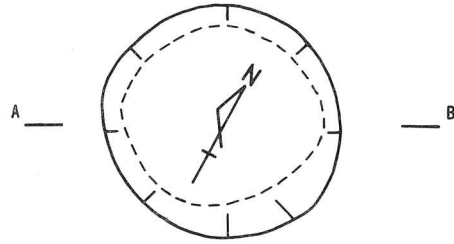


(4) 木材

Fig. 25 S E 12実測図

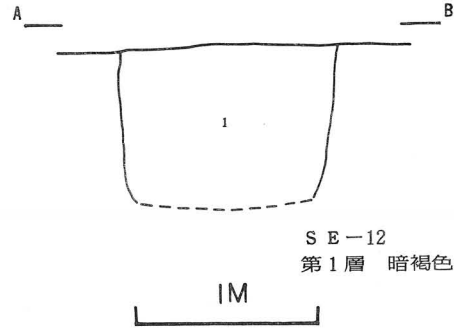
S E 1 2 (Fig.25)

長径130cm、短径128cm、深さは約100 cmまで掘り下げた。小型の素掘りの井戸と考えられる。鉄鍋の破片1点と、洪武通宝が1枚出土している。L59区検出。



S E 1 3

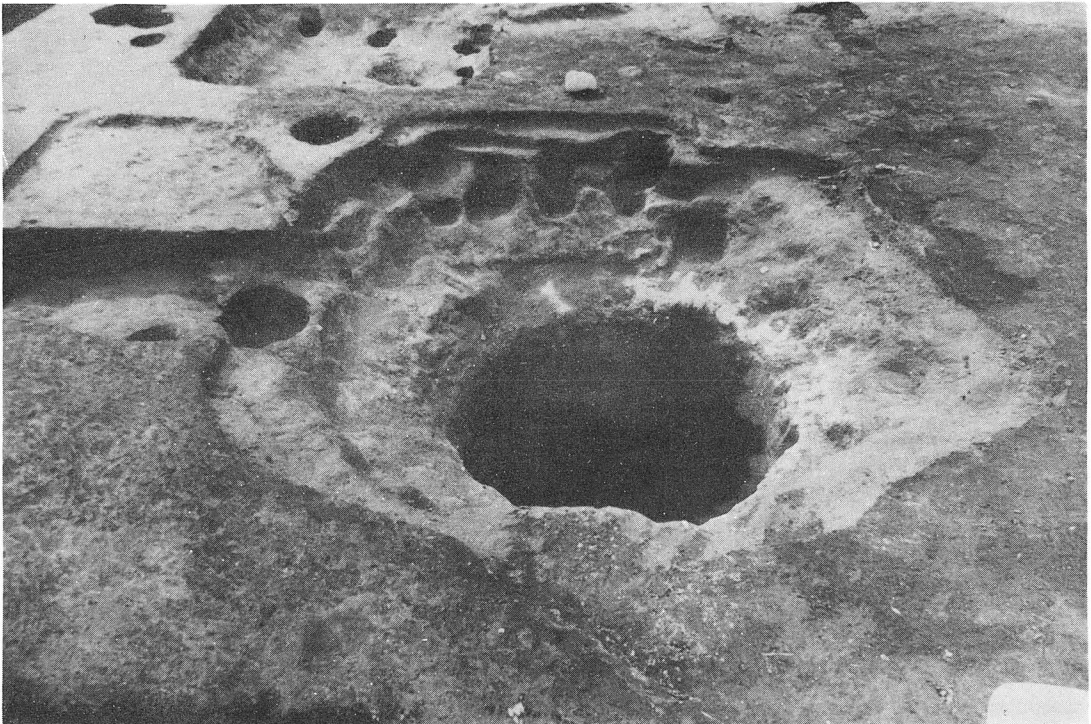
K58区より検出した素掘りの井戸で、長径140cm、短径135cm、深さは約50cmまで掘り下げた。出土遺物としては、染付1片、鉄釘2本がある。



S E 1 5 (PL. 26)

当初竪穴遺構と思い (S T 27) 掘り下げたら井戸跡になったものである。上面の掘り込みはかなり粗雑で、一段テラス状になっている。長径180cm、短径160cm、深さは約100 cmまで掘り下げた。出土遺物としては、青磁3片、染付2片、美濃灰釉皿3片 (77)、無釉播鉢3片、鉄釘1点、古銭1枚がある。

PL. 26



S E 1 5

Fig. 26 S X01実測図

5. 不明遺構

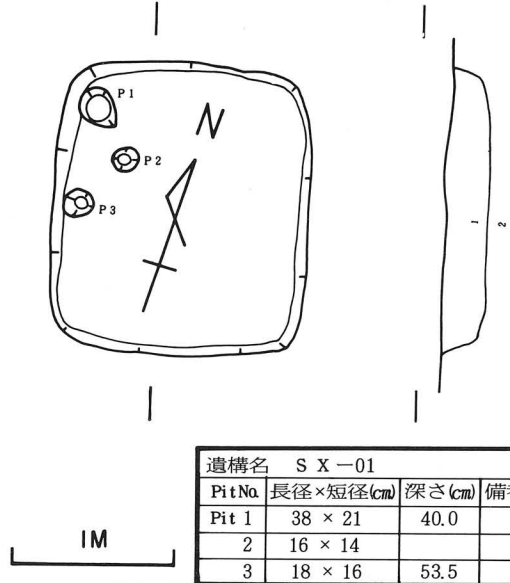
小竪穴の中で掘り方も不規則、形状も一定せず、明確に上屋構造を持たない遺構。

S X 0 1 (Fig. 26)

長軸175cm、短軸158cmの四角形の形状で、深さ25cm。柱穴は、3個存在するが本遺構に伴うものではない。覆土から、溶解物付着土器1片、鉄釘1本の出土がある。

S X 0 2 (Fig. 27, PL. 27)

長軸365cm、短軸170cm、深さ30cmを計り、北側と南側でレベル差がある。床面近くに火山灰状の灰が敷き詰められた状態で検出された。柱穴も規格的な配置がみられない。出土遺物としては、覆土から青磁3片、美濃灰釉1片、が出土している。



S X-01

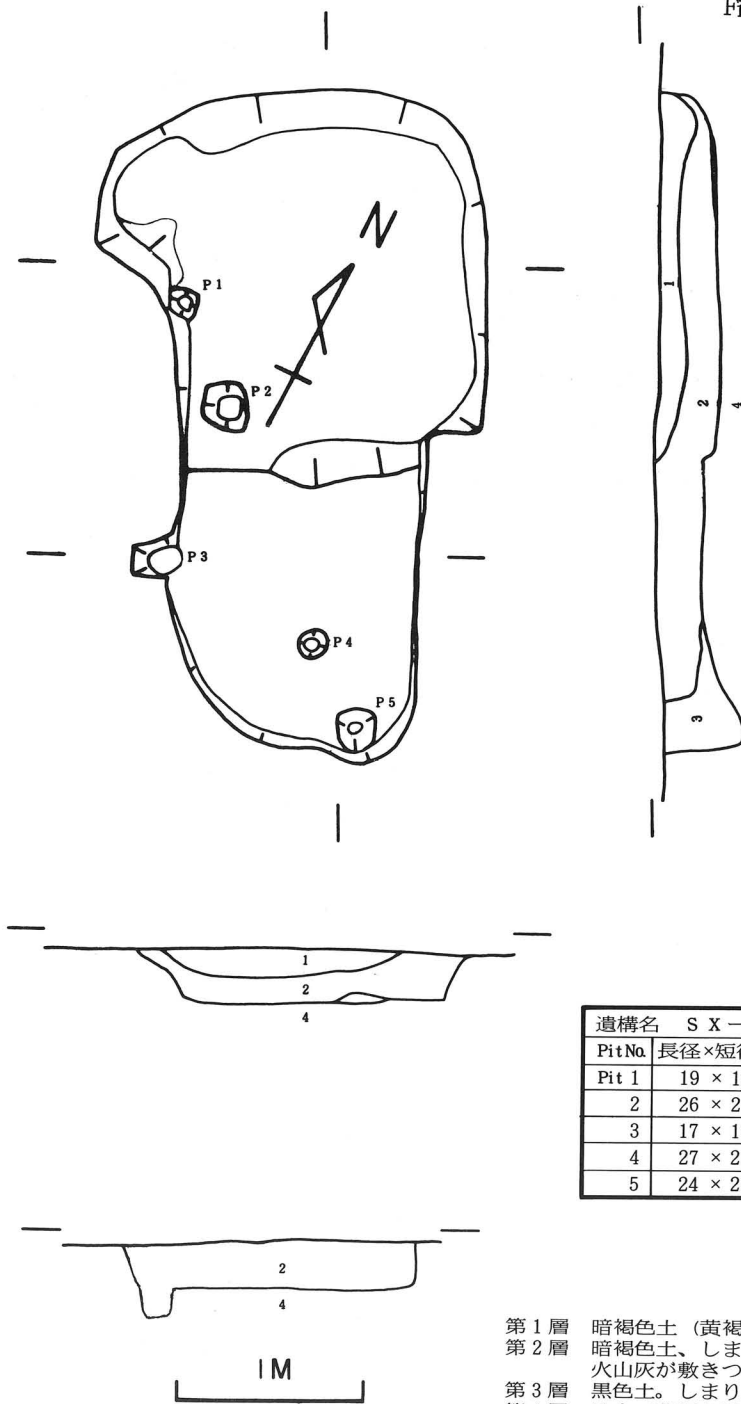
第1層 暗褐色と黒色土との混層  
(炭化物、褐色砂質土混入、しまりなし)  
第2層 地山 (黄褐色砂質土)

PL. 27



S X 02

Fig. 27 S X 02実測図



遺構名 S X -02			
PitNo.	長径×短径(cm)	深さ(cm)	備考
Pit 1	19 × 18	23.5	
2	26 × 24	22.5	
3	17 × 16	24.8	
4	27 × 20	15.0	
5	24 × 20	8.0	

- 第1層 暗褐色土 (黄褐色砂質土粒子状に混入)  
 第2層 暗褐色土、しまりなし、下端に白色の火山灰が敷きつめられている。  
 第3層 黒色土。しまりなし。  
 第4層 地山 (黄褐色砂質土)

**SX03 (Fig.28)**

長軸330cm、短軸160cm、深さ30cmの不整S字状の形状を呈し、床面から2個の川原石が出土している。覆土には炭化物や白色粘土粒子が包含されていた。出土遺物としては、無釉播鉢1片などがある。

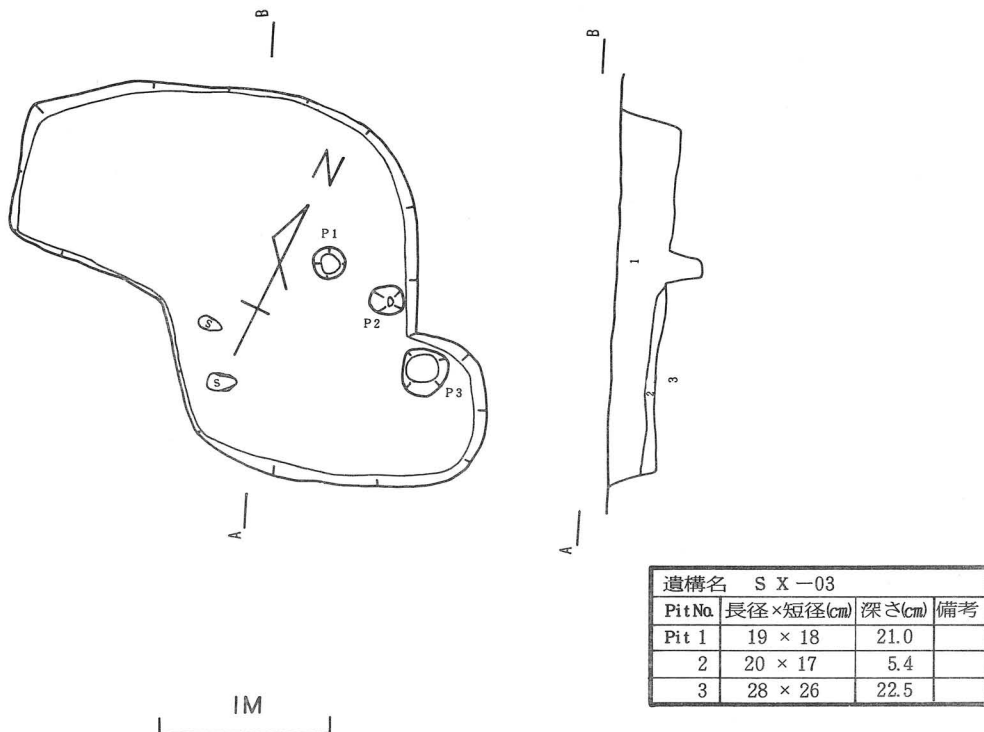
**SX04**

J58区検出の遺構で、ST21の南東隅に存在する。長軸160cm、短軸130cm、深さ35cmで、ほぼ四角形の形状を呈する。覆土から無釉播鉢1片、鉄釘1本、古銭1枚の出土があった。

**J-58区の遺構 (SX05)**

J58区で検出したST39は実際は溝状を呈する遺構で、南北方向に走るものである。時間の都合で十分に精査することはできなかったが、土師器類を主として出土することから、中世以前の遺構と考えられる。160、161、162、171などは本遺構から出土したものである。

Fig. 28 SX03実測図



**SX-03**

- 第1層 暗褐色土と黒色土との混層（炭化物、黄褐色砂質土若干粘性の白色土を粒子状に若干含む）
- 第2層 茶褐色砂質土
- 第3層 地山（黄褐色砂質土）





J-58区 (S X05)

## B、堀跡の遺構 (Fig. 29, PL. 29, PL. 30)

本年度は、北館と猿楽館間の堀跡を調査する予定で、N・O・P・Q-55区をトレンチ状にグリッド設定し、掘り下げを開始したが、途中O-55区西壁から木枠を有する井戸跡 (S E 11) が検出されたため予定を変更してN・O・P-54区へ拡張することとなった。そのため、中心的堀跡と考えられたP・Q区の堀跡については次年度の調査にゆずることとし、北館直下の堀跡および、中間土塁の精査が主体となった。

また、本発掘区内において、井戸跡が2基確認されたが、堀跡という立地にもかかわらず、なぜ井戸を構築したのかという疑問を投げかけ、堀跡構築という城郭の防禦機能と井戸跡構築という日常生活機能が混在している印象を受けた。

検出された遺構をみると、北館直下に幅250cmの堀 (S H 01) が辺縁を平行する形で走り、西側へゆくと幅も広がりU字状を呈するようになる。(Fig. 31) S H 01の南側は、規模の小さい土塁 (S A 02) が存在する区域 (O55区) とS E 11を境に消滅している区域 (O54区) が存在する。そして、S A 02と幅の広いS A 03の中間に溝状を呈するS H 02がS H 01と平行して走っている。本堀跡の中で最も規模の大きい中間土塁であるS A 03とS A 04は、本来連なっていたものであるが、S E 11構築などによって土塁を切る状態で南北に溝がつくられ、発掘区の中では分断されている。またS A 04の上面ではかなりの柱穴を検出し、建物跡の存在を予想させたが、確認するまでにはいたらなかった。あるいは橋架状の施設が存在したのかもしれない。

S E 11とS E 14は、S H 01の埋土状態の観察から、S E 14が使用を終了して廃棄された後にS E 11を構築したことがわかっている。

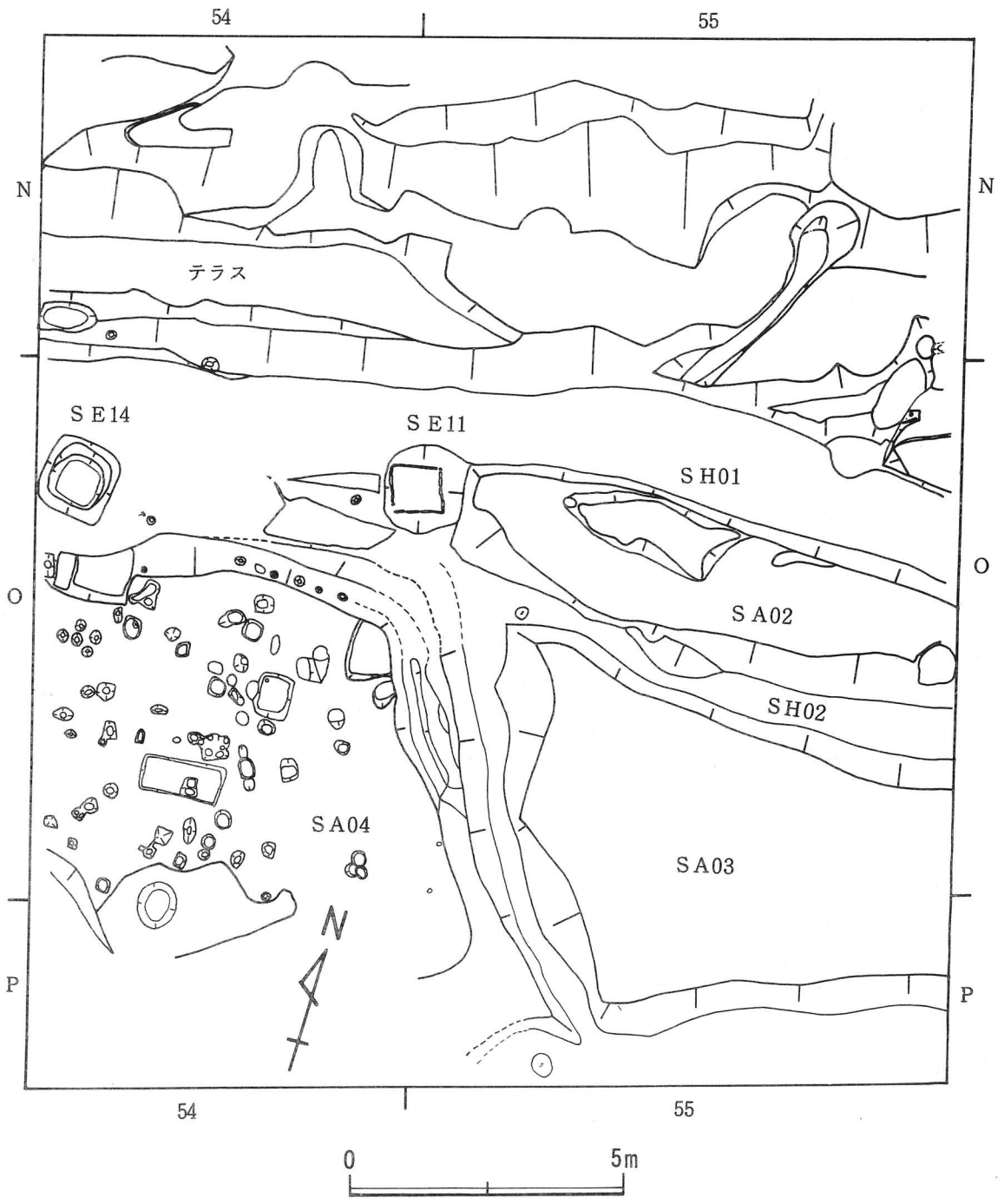
北館の落ち込み面には、一段テラス状の部分 (N54区) が存在し、西側に伸びていることを確認している。通路的な機能を有していたのだろうか。

### 1. 堀跡の層序 (Fig. 30, Fig. 31, PL. 31)

i) O55区北壁 堀跡に対する断面でないため、落ち込み面等は見られないが、西側の層位関係を見ると、粘質土と砂質土を相互に重ね合わせており、第2層とした暗灰色土と黄褐色砂質土の混層は、O55区西壁面でみられるS E 11の落ち込み面と連なるもので、いわば中世最終期の生活面と考えてよいものである。そして、第2層より下層に堆積している土層は、S H 01を埋め戻したのか、あるいはS E 11構築時の地業によって埋められたものと想定される。

ii) O55区西壁 S H 01とS A 04との関係とともに、S E 11の落ち込みが確認される層序である。S A 04は、凝灰質浮石層といわれる本遺跡のベースとなる土が露呈しているもので、鉄分のためか褐色を呈する部分もみられる。S E 11は、この凝灰質浮石層を掘り込んで構築し、その上に粘質土・砂質土・小石などを敷くような状態で固定している。第6層は、炭化物を含むことから、第8層S E 11覆土と同種のもので、当時の生活面と推定される。

Fig. 29 N・O・P-54・55区平面図



iii) N・O・P-54区西壁 北館と堀跡・中間土塁の関係を示す断面図である。北館から堀跡への落ち込み面の最大傾斜は、55度であり全体としてはほぼ35度の傾斜を示す。(O54区) この傾斜面に関しては、後世の削平や攪乱はないようで、平場上面から約200cm下方の所に幅70cmのテラス面がみえる。(PL. 31-(1))

S H01は、幅400cm、深さ120cm(旧規模)の大きさを有し、落ち込みの傾斜角度や底面幅から箱薬研堀の特徴を示す。北館の下端でみられたテラス状の部分から、さらに50cm下がった所に幅65cmのくぼみが存在し、橋架施設に伴うものと予想される。覆土状態をみると、北館寄りに炭化物・灰を含む薄い間層が落ち込み面と同傾斜を呈して存在し、SA04寄りには黄褐色砂質土や凝灰質浮石土をブロック状に含む混層が大部分を占めている。全体としては、自然堆積の状況を呈するが、隣接しているS E14構築時、廃棄時の攪乱もあったと考えられる。水量が豊かなため、水堀であったと考えられる。(PL31-(2))

SA04は、南端の落ち込み面を明確に把握できなかったが、幅600cm以上あったものと考えられ、昭和53年度調査時にL-47区で検出した幅800cmの土塁と連続していると思われる。土質は、凝灰質浮石土で青灰色を呈し水に対しては軟質な状況である。

S H03に関しては次年度に再調査を予定しているため、次回の報告書にゆずる。

PL. 29

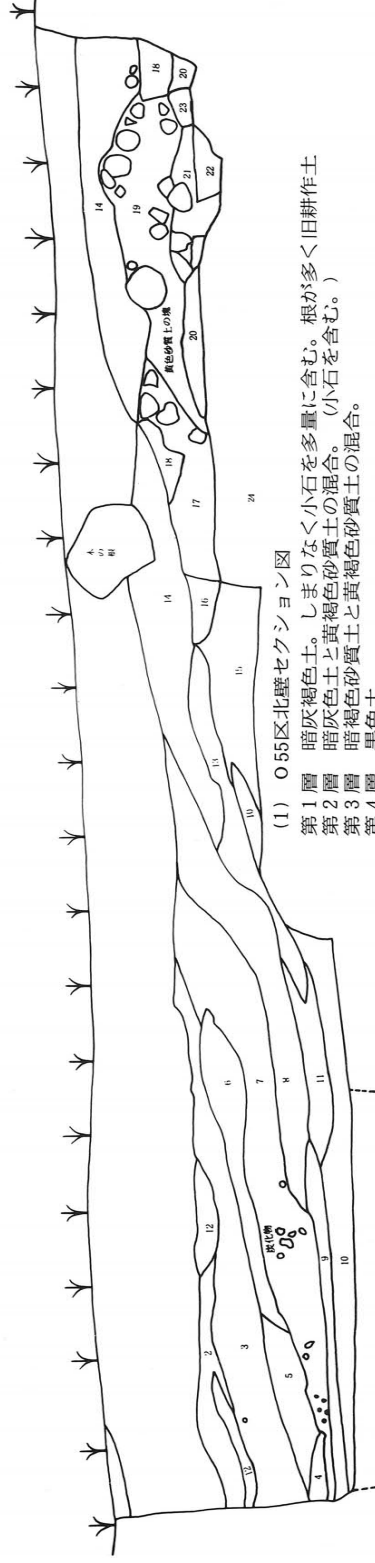


(1) O55区北壁

Fig. 30

標高  
35.024 m

O55



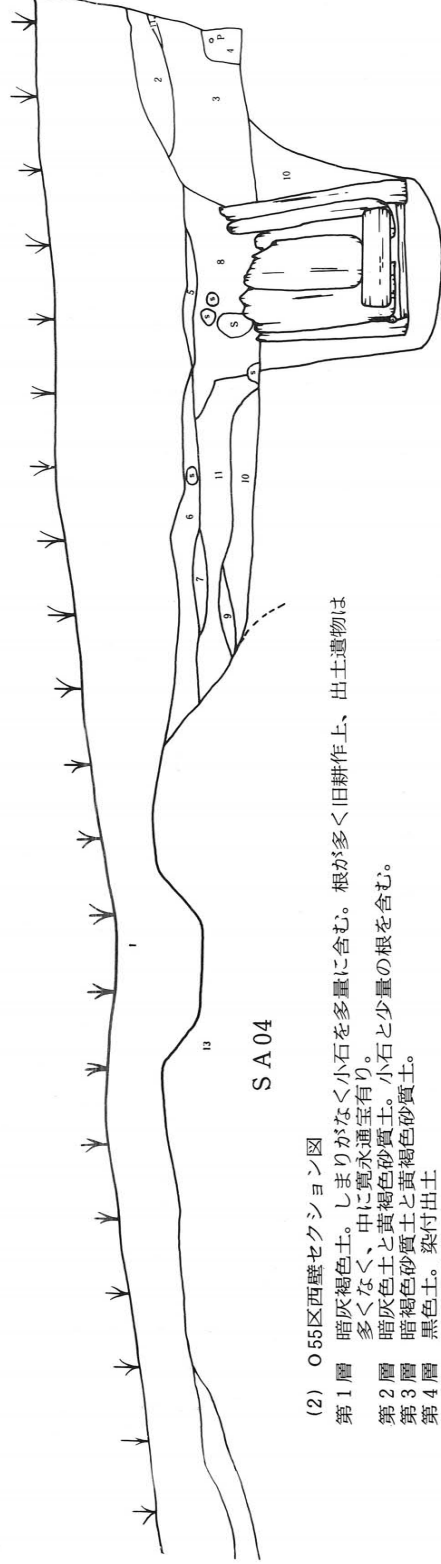
(1) O55区北壁セクション図

- 第1層 暗灰褐色土。しまりなく小石を多量に含む。根が多く旧耕作土
- 第2層 暗灰色土と黄褐色砂質土の混合。(小石を含む。)
- 第3層 暗褐色砂質土と黄褐色砂質土の混合。
- 第4層 黒色土
- 第5層 黒褐色土に黄褐色砂質土少々混入。しまりあり。
- 第6層 褐色土
- 第7層 黒褐色土に褐色砂層がブロック状に混入。炭化物有り。
- 第8層 暗褐色土。炭化物有り。白色パミスと黄色砂質土が少々含まれる。
- 第9層 砂質土と褐色土の混合に褐色砂層が少々含まれている。
- 第10層 砂質土に鉄分を含む。しまりなし。湿性強し。
- 第11層 黒色泥土。粘質、湿性有り。
- 第12層 砂質土に褐色土混入。
- 第13層 小石を含む砂質土に暗褐色少々混入。
- 第14層 暗褐色土に褐色砂層が少々混入
- 第15層 褐色砂質土に白い砂質混入。10層より粒が少々あらい。しまりなし。
- 第16層 暗褐色砂質土。しまり有り。
- 第17層 黄褐色砂質土。黄色砂質混入。しまりが非常に強い。
- 第18層 黒色土。湿性有り。土質は柔かい。
- 第19層 暗褐色土に黄褐色砂質土がブロック状に混入。土質は柔かい。
- 第20層 砂質土。湿性強し。しまり有り
- 第21層 砂質土に黄色砂層がブロック状に混入。湿性少々有り。
- 第22層 暗褐色砂質土に黄色砂質土混入。湿性有り。
- 第23層 黄色砂質層。しまり強い。
- 第24層 地山 (黄褐色砂質土)

(2) O55区西壁 (S E 11断面図)

標高  
35.224 m

O55



(2) O55区西壁セクション図

- 第1層 暗灰褐色土。しまりがなく小石を多量に含む。根が多く旧耕作上、出土遺物は多くなく、中に礫永通至有り。
- 第2層 暗灰色土と黄褐色砂質土。小石と少量の根を含む。
- 第3層 暗褐色砂質土と黄褐色砂質土。
- 第4層 黒色土。染付出土
- 第5層 灰褐色砂質土
- 第6層 暗褐色土。湿性が強く部分的に石、炭化物を含む。
- 第7層 黄灰褐色砂質土
- 第8層 黒色泥土。湿性が非常に強く、しまりは薄い。大きな石、炭化物を含む。
- 第9層 黄褐色砂質土。湿性が非常に強い。
- 第10層 暗褐色粘質土。白色パミス、砂質ロームを含む。
- 第11層 暗灰黄褐色土。黄色砂質土を含む。この層上面より白磁小坏(復可)が出土している。よって、S E 11の落ち込み面での時代は小坏の時期と一致する。
- 第12層 暗褐色土。炭化物、湿性が有る。
- 第13層 褐色砂層。凝灰質浮石白色パミス (土墨)

(3) S E 11井戸枠側面実測図

標高  
32.736 m

東面 ————— 南面 ————— 西面 ————— 北面

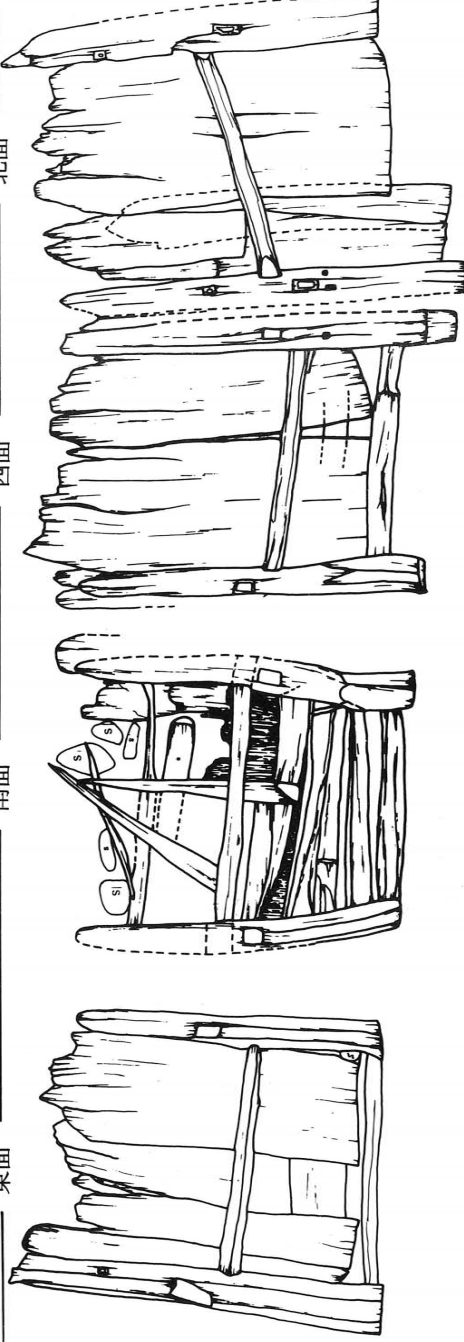
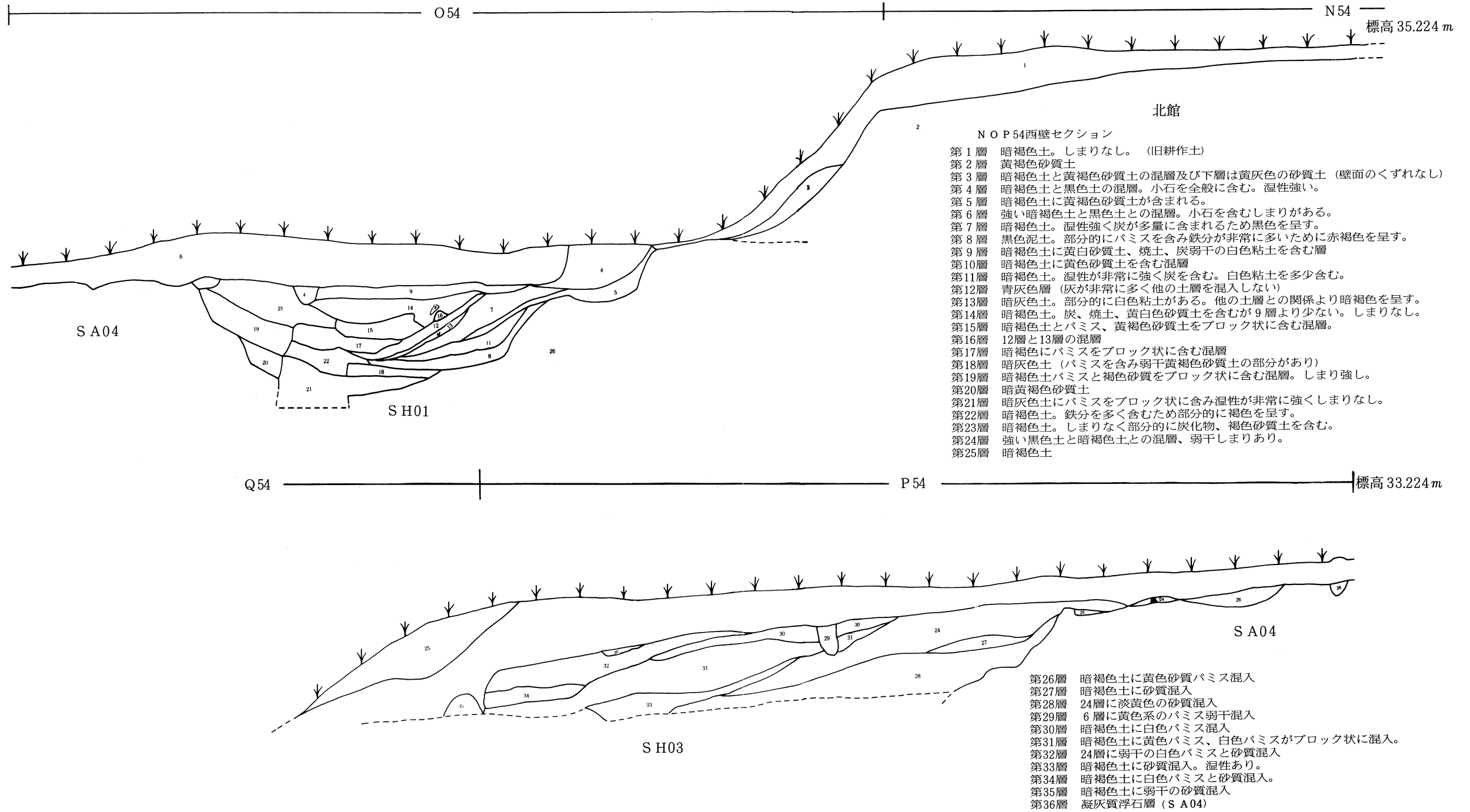


Fig. 31 N・O・P・Q-54区西壁断面図





(1) N・O・P-54・55区状況



(2) 同区土壘検出状況(西より)



(1) N·O-54区西壁断面



(2) O-54区西壁断面图(SH01)



## 2. 井戸跡 (Fig.29)

井戸跡は2基検出され、うち1基は明瞭に木枠が残存していたものである。

### SE11 (Fig.29, Fig.30, PL.32, PL.33)

形態：方形隅柱横棧型の木組井戸である。隅柱に枘穴を穿ち、横棧をある程度削って挿入し、井側に各辺2～3枚の縦板を土圧によって固定している。ただし、南側には縦板の代わりに板や廃材を横位に積み重ね、石などで固定している。

規模：隅柱間の幅は約90cm(3尺)で正方形を呈する。

掘り方は、上端175cm×170cm、下端120cm×95cmで隅丸方形を呈し、上端から最底部までのレベル差は120cmを有する。

木組特徴：隅柱と横棧の接合部の中で、北西隅柱には楔を入れて堅固にし(PL.33-(4))、他は木質の腐敗が激しいためか間空の状態になっている所が多い。縦板は、東面が4枚(他に1枚は横位に位置している)、南面はなく、西面が2枚、北面が3枚となっているが、北面の1枚は添板と思われる。(Fig.30-(3))また、東面と西面には、縦板の下に板状の材を置いて、縦板の落下を防いでいる。

材質：隅柱のうち北西隅は栗、北東隅は檜を使用しているが、他の2本は不明である。横棧と縦板は檜が大部分である。

製作方法：使用されている木材のうち、隅柱は六角に面取りしているものと丸太材の下部だけを面取りしているもの(南西隅柱)があり、他の箇所に残っている加工痕をみると、一度柱材などに使用したものを再利用している印象を受ける。表面の調整は手斧を使用しているようで、削り痕が明瞭に残っている。

縦板は、最大のもので長さ115cm、幅50cm、厚さ3cmを有し、表裏面とも手斧によって整形している。

出土遺物：覆土ではないが、本遺構確認面から白磁小坏(43)が出土している。覆土からは、青磁・染付・天目各1片、不明陶器(118)漆器碗1個、獣骨1片が出土している。本遺構が構築された時期を明確にする資料は少なく、白磁小坏(43)や不明陶器(118)の出土からみて、落城直前まで使用されていた可能性が大である。

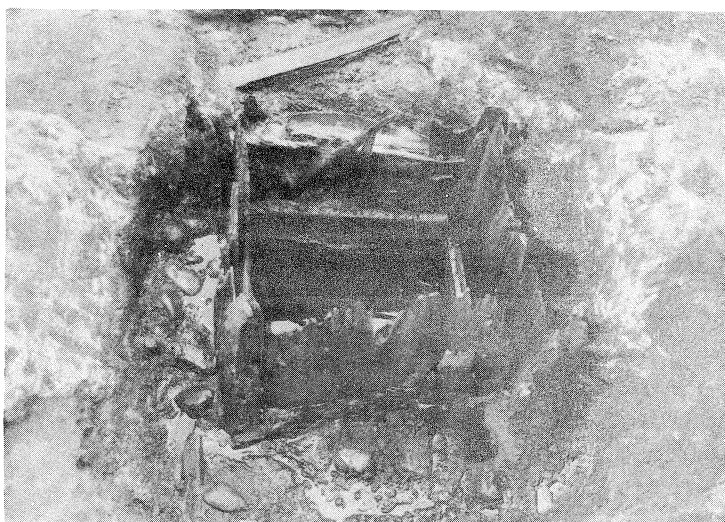
### SE14 (Fig.29, Fig.32, PL.34)

堀跡(SH01)の底面付近で、石の集積部分があったため(Fig.32-1, PL.34-1)、除去したところ、木枠と思われる木組が破壊された状態で検出され(Fig.32-2, PL.34-2)、さらに方形の掘り方で深さ140cmまで掘り下げた。廃棄された井戸跡と考えられ、石積みは人為的に埋められたものであろう。出土遺物としては、下駄(A)、箸(C)、桶底(D)朱塗り漆器(E)などがあった。SE11よりは古い時期のものである。

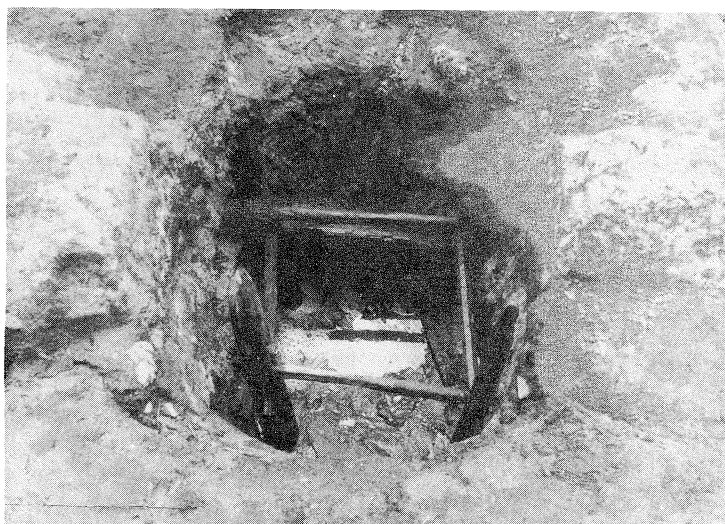
(1) 井戸枠検出状況



(2) 井戸枠全景  
(北より)

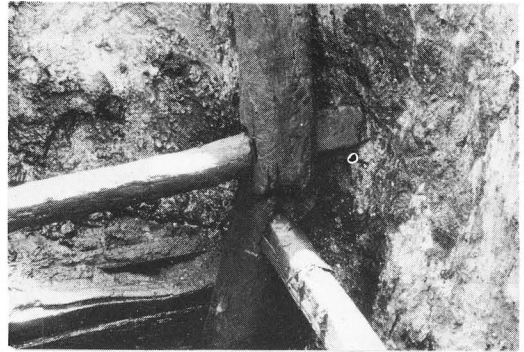


(3) 側板除去状態





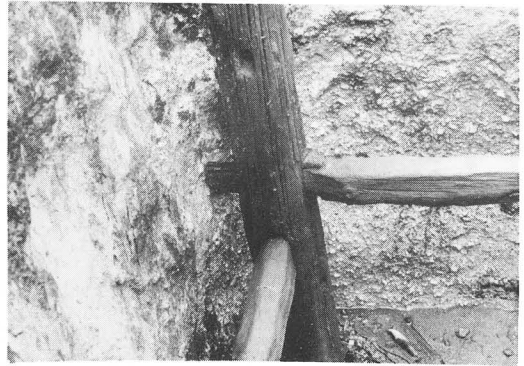
(1) 南東隅



(2) 南西隅



(3) 北東隅



4) 北西隅

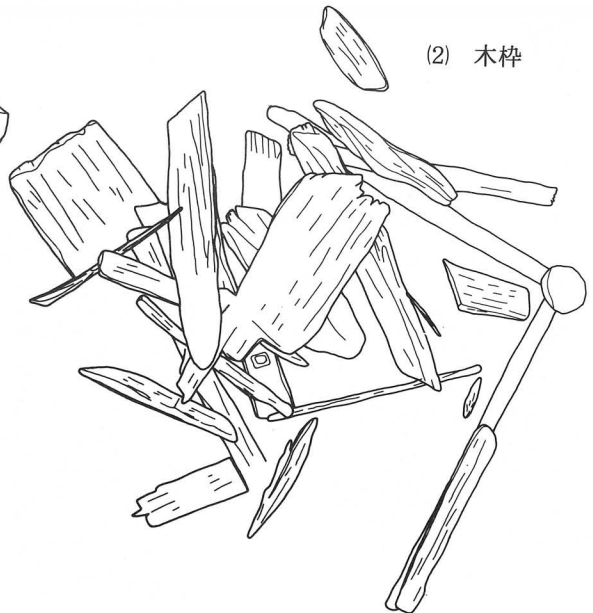
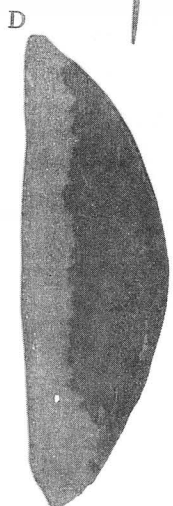
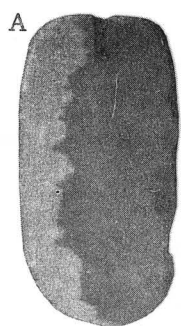
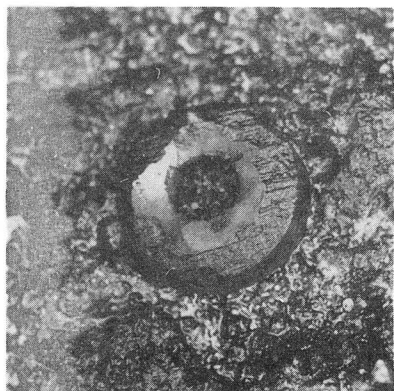


Fig. 32 S E 14 検出状況



E



(1) 石組出土状態



(2) 木棒出土状態



(3) 完掘状況



## IV 出土遺物

出土遺物を概観すると、陶磁器類・鉄製品・銅製品・石製品・古銭・木製品などがあり、以下個別的に紹介する。

### A、陶磁器類

いわゆる「やきもの」として総称されるものを陶磁器類として包括した。浪岡城跡から出土するものの中には、縄文土器や年代的にいまだ明確になっていない土師器・須恵器をはじめ、舶載・国産の各種中世陶磁器、さらに現代に使用された磁器まで、多数の出土をみている。本報告では、浪岡城跡が中世城郭であるという視点から、主に中世陶磁器に関して紹介してみたいと思う。

#### 1. 青磁 (Fig.33, PL. 35, PL. 36)

総数で190片の出土をみた。器形としては、碗・皿・鉢・香炉がみられる。中国からの舶載品で明代(15世紀～16世紀)の製品と考えられる。器形全体を知り得る良好な資料が少ないので、器体の文様構成によってその特徴を述べよう。

#### 【碗】

I類 雷文を有するもの。

I a類 口縁部の内面あるいは外面に雷文だけを有するもの。(1)

I b類 口縁部に雷文を有し、さらに内面見込に劃花文・人物画文を有するもの。(2・7)

碗I類の素地は、淡灰色(1・7)、暗灰色(2)のものがあり、釉調も前者は淡い緑色、後者は深い青緑色で相違がみられる。また後者の釉には多数の気泡が存在する。

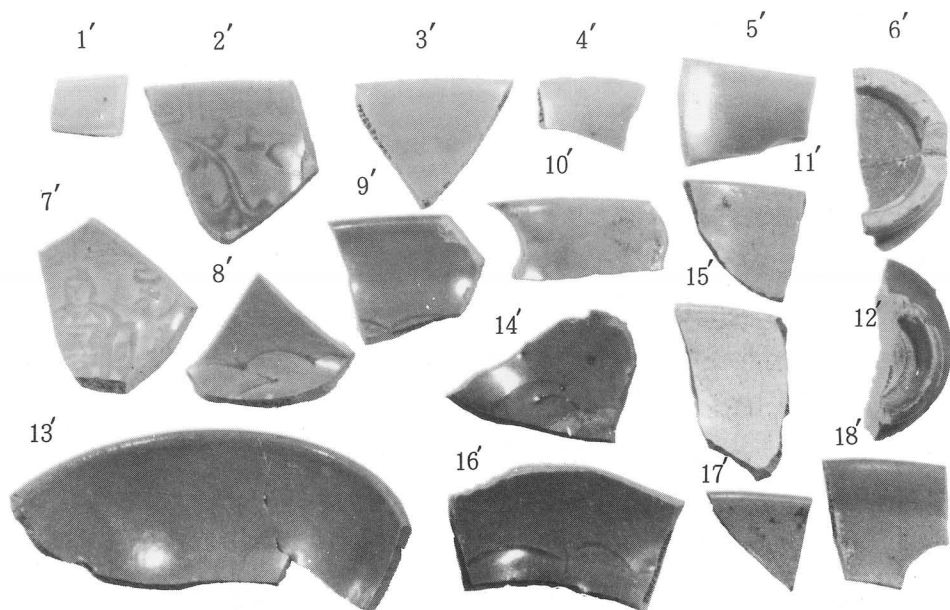
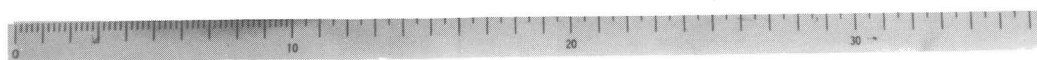
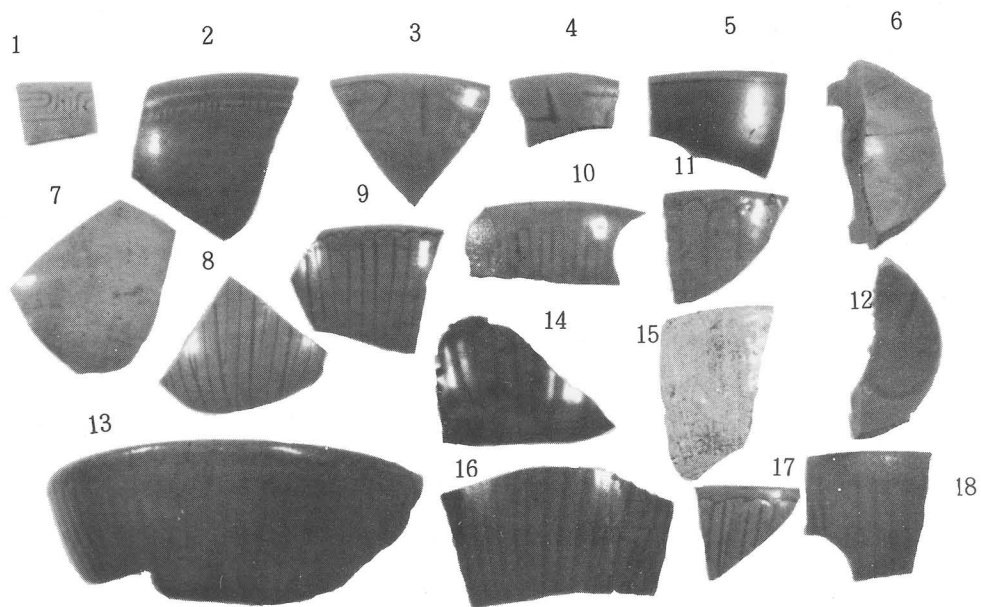
II類 外面にくずれた蓮弁文を有するもの。

II a類 外面にくずれた蓮弁文だけを有するもの。(10・11・13・15・17・18)

II b類 内面の見込立ち上り部分に波状の劃線文を有するもの。(8・9・14・16)

碗II類の素地の中には、硬質感のある灰白色(8・9・10・18)、暗灰色(11・13・14・16・17)、そして焼成不良のためか赤褐色を呈するもの(15)まで、バラエティーに富んでいる。釉調も明るい青緑色のもの(8・9・10)から深緑色(11・13・14・16・17・18)、灰白色(15)と、素地との関連がみられる。

III類 外面に劃線文を有するもの。(3・4) 口縁直下に施された劃線は雷文などを便化したものとも考えられる。素地は、硬質感のある灰白色を呈し、釉調はガラス質の淡青緑色、4は内面に気泡が存在する。



青磁

Ⅳ類 口縁直下外面に一条の劃線をめぐらす他は、特に文様を施さないもの。(5・19)

5は、内面に細い劃線の痕跡もみられるが、断面観察では明瞭な削り痕として確認できないものである。素地は、硬質感のある灰白色、釉調も青緑色を呈するが、19は釉の中に不純物が混入したためか灰白色を呈する部分の方が多い。

Ⅴ類 文様、および劃線などを確認できないもの。(20・21)

胎土の精選、成形、施釉が粗雑で、特に高台部は下まで釉がとどかず、底の削り痕も荒く残っている。21は、Ⅱa類の15に近似した特徴を有する。

Ⅵ類 高台部だけ残存しているため、全形はわからないが、内面見込中央に劃線文がみられるもの。(6・12)

素地・釉調・文様の特徴からⅡb類に近似すると考えられる。

### 【皿】

Ⅰ類 口縁が波状を呈するもの。

Ⅰa類 口縁が波状を呈するだけのもの。(28・29)

Ⅰb類 内面口縁部に櫛目状流水文を劃するもの。(26・30・31・32)

Ⅰc類 内面に櫛目状流水文と劃花文を有するもの。(25・33)

Ⅱ類 口縁が波状を呈さず、直行するもの。

Ⅱa類 内・外面とも文様を有しないもの。(23)

Ⅱb類 内面に劃花文を有するもの。(24)

Ⅰ類・Ⅱ類とも器形をみた場合、高台からの立ち上がりはやや斜めか水平ぎみで、口縁までの途中に一条の段を有し、その段の部分から口縁にかけて、朝顔状に外反するという同様の特徴をもつ。

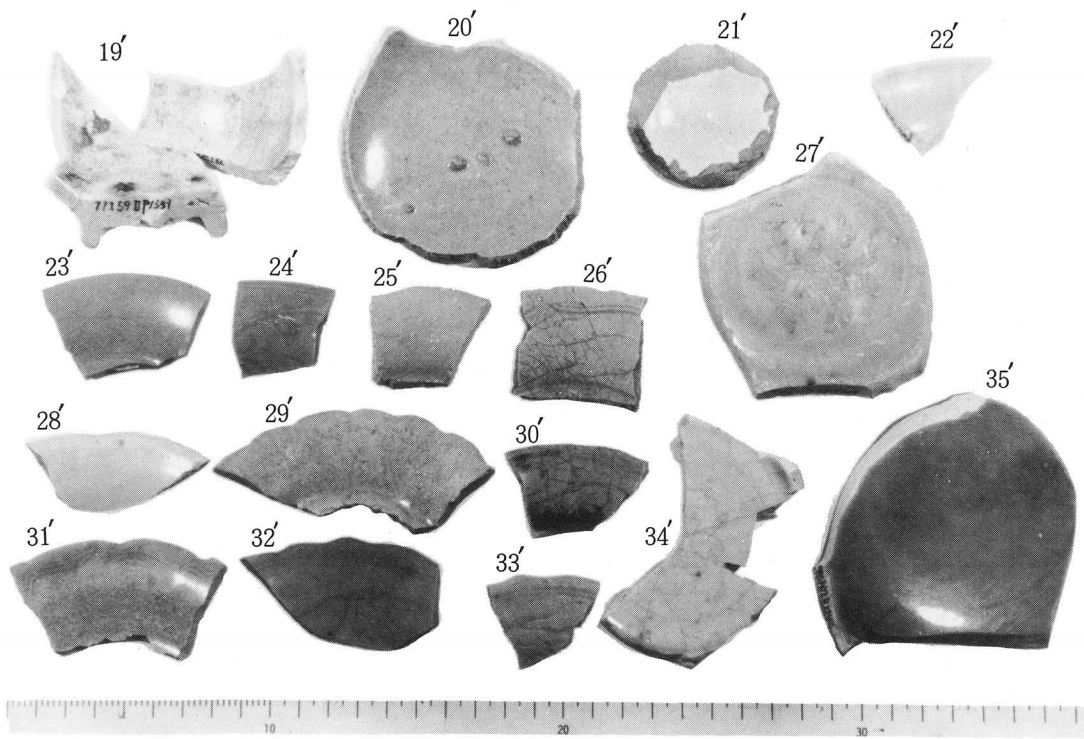
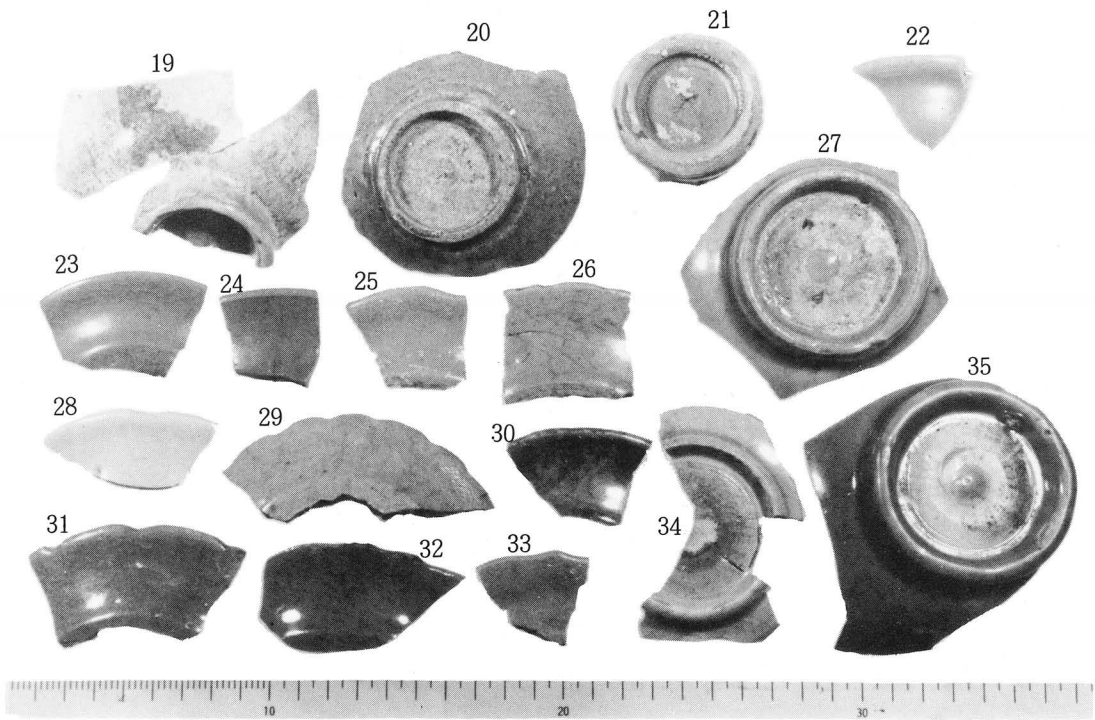
Ⅲ類 Ⅰ類・Ⅱ類のいずれかに属すると思われるが、底部だけのため詳細が不明で、見込中央部に印花文を有するもの。(27・34)

皿における素地は、暗灰色のもの(25・26・28・29・30・32・33)が多く、Ⅲ類としたものは硬質感のある灰白色(27・34)、Ⅱ類の23・24と31は焼成不良のため褐色を呈する。色調は、淡青色(34)、青白色(28)、赤味のある薄い緑色(23・24・31)以外、深緑色を呈するものが大部分である。

### 【鉢】

22は、口縁が外反する小鉢あるいは皿の破片で、灰白色の素地に気泡の少ないきれいな青緑色の釉が施されている。

35は、ほぼ白色の素地に深緑色の釉を施した中型鉢の底部である。見込中央には使用痕と思われる多数の擦痕が存在し、高台部の成形・施釉も良好な製品である。



青磁



Ch. 1 遺物挿図・図版対比表（青磁）

No.	遺物No.	Fig.	PL	名称	出土区	釉 調	文 様	胎 土	備 考
1	P 46	33	35	青磁	北館表採	淡緑色	雷文	淡灰色	
2	P 370	"	"		K58Ⅱ	深青緑色	雷文・劃花文	暗灰色	
3	P 1,483	"	"	"	I 58Ⅱ	淡青緑色	劃線文	灰白色	
4	P 5,432	"	"	"	ST27フク土	"	"	"	
5	P 4,609	"	"	"	P54Ⅱ	青緑色	劃線	"	
6	P 2,648	"	"	"	J 58Ⅱ	淡青緑色	なし	暗灰色	
7	P 5,550	"	"	"	M58 ST34フク土	淡緑色	雷文・人物画文	淡灰色	
8	P 1,627	"	"	"	J 58Ⅱ	青緑色	蓮弁文・劃線文	灰白色	
9	P 2,934	"	"	"	SH03フク土	青緑色	" "	"	
10	P 4,562	—	"	"	ST39フク土	淡青緑色	蓮弁文	"	二次焼成痕有
11	P 4,587	—	"	"	M58Ⅱ	深緑色	"	暗灰色	
12	P 2,939	33	"	"	O54Ⅱ	黄緑色	なし	灰白色	
13	P 6,074	"	"	"	SH02フク土	深緑色	蓮弁文	暗灰色	
14	P 5,610	—	"	"	I 58Ⅱ	深緑色	蓮弁文・劃線文	"	
15	P 421	—	"	"	K60Ⅱ	灰白色	"	赤褐色	
16	P 599	—	"	"	L60Ⅱ	深緑色	蓮弁文・劃線文	暗灰色	
17	P 6,075	—	"	"	SH02フク土	"	蓮弁文	"	
18	P 1,427	—	"	"	L47Ⅰ	"	"	灰白色	二次焼成痕有
19	P 1,639	33	36	"	I 59Ⅱ	青緑色	劃 線	"	
20	P 635	"	"	"	K60Ⅱ	深緑色	なし	暗灰色	高台部は黄灰色
21	P 2,923	—	"	"	O54土罎上面	青灰色	なし	赤褐色	
22	P 3,954	33	"	"	I 55Ⅱ	青緑色	なし	灰白色	
23	P 5,394	"	"	"	I58 SE10フク土	緑褐色	なし	暗灰色	
24	P 379	"	"	"	M59Ⅱ	緑褐色	劃花文	赤褐色	
25	P 1,243	—	"	"	I 47Ⅰ	深緑色	劃線文	暗灰色	
26	P 3,873	—	"	青磁	SE10フク土	"	"	"	
27	P 2,647	33	"	"	SE09フク土	青緑色	印花文	灰白色	
28	P 4,638	—	"	"	ST27フク土	青白色	なし	暗灰色	
29	P 2,927	33	"	"	ST20フク土	深緑色	なし	"	二次焼成痕有
30	P 2,883	—	"	"	ST31フク土	"	劃 線	"	墨付着
31	P 4,680	—	"	"	I 55Ⅱ	緑褐色	"	赤褐色	
32	P 4,038	33	"	"	SE10フク土	深緑色	"	暗灰色	
33	P 2,604	—	"	"	J 58Ⅱ	"	"	"	
34	P 694 P 2,649	33	"	"	K 58Ⅱ J 58Ⅱ	淡青色	印花文	灰白色	
35	P 6,111	"	"	"	SA02直上	深青緑色	なし	白 色	
500	P 491	"	—	"	北館表採	深緑色	なし	暗灰色	蛇の目

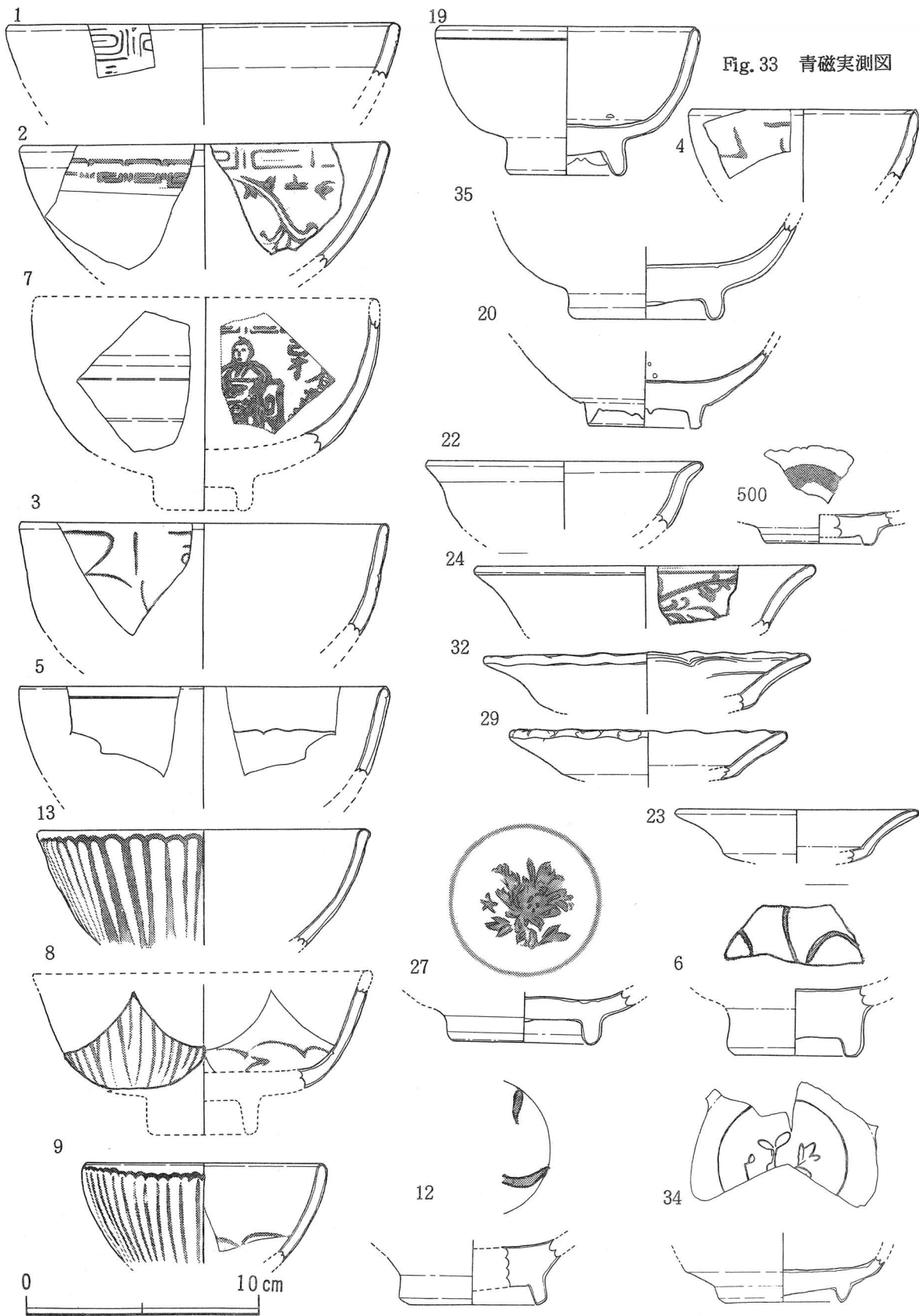


Fig. 33 青磁実測図

## 2. 白磁 (Fig. 34, PL. 37)

総数で17片の出土があった。器形としては、皿・碗・小杯がみられる。中国からの舶載品で15世紀～16世紀の製品と考えられる。皿と小杯を除いて器形全体を知り得る資料が少ない。

### 【皿】

白磁の皿には、大別して二種類がある。

I 類 一般に器厚が薄手で、口縁が端反りし、素地は硬質感があり、釉調はガラス質のもの。

I a 類 素地が白色で、高台底には砂などが付着するものの平高台であるもの。(37・38・39・40・41・501)

I b 類 素地が青味のある灰色で、全体の色調がまだらな暗灰色を呈するもの。(36・42)

I c 類 素地は白色であるが、高台部が割高台を呈するもの。(48)

II 類 I 類と比較して、素地が軟質で釉調も乳白色の柔味のあるもの。(口縁部の破片がないため確実でないが、尻八館出土の白磁では口縁は端反りせず、内湾ぎみに立ち上がるものが多いようである。))

II a 類 釉が高台まで施されず、高台部は素地が露呈する。また高台が割高台であるもの。(45・46・502)

II b 類 施釉はII a 類と同じであるが、割高台を呈せず中央を削っただけの平高台のもの。(47)

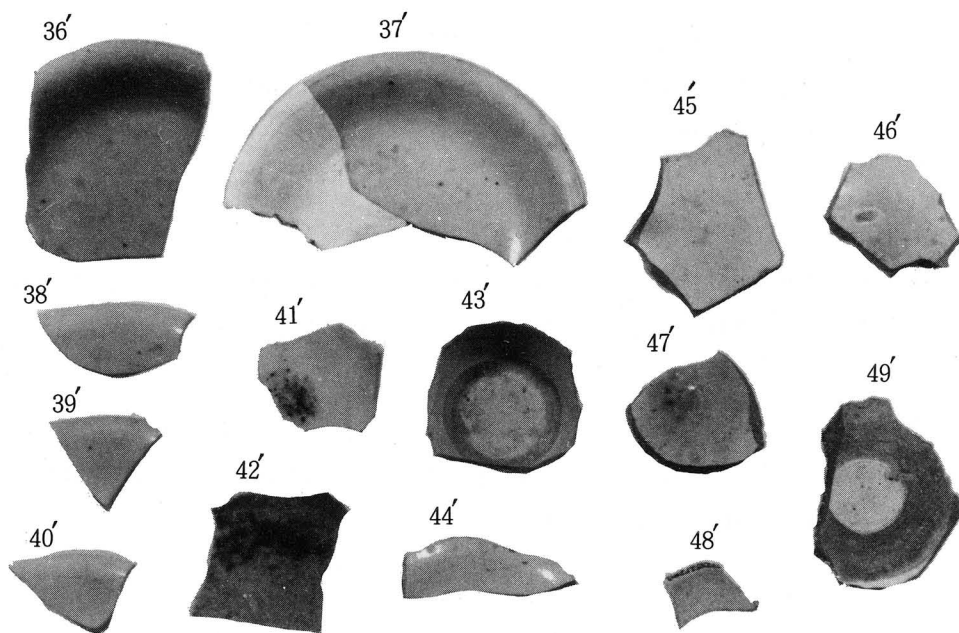
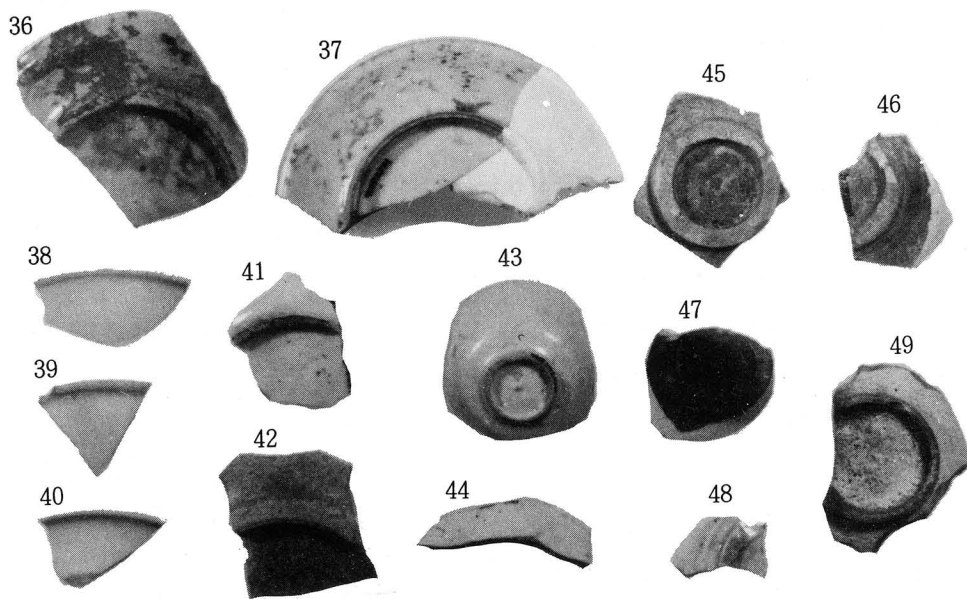
II c 類 舶載品であるか確証はないが、内面が蛇の目を呈し、釉調も油絵具状の白色を呈する。高台部は2次焼成を受けているようで、釉が禿落ちたり凸凹のみられるところもある。(49)

### 【小杯】 (43)

素地は硬質感のある白色、釉調はやや青味をおびた白色を呈する。内面見込からの立ち上がり部分は施釉がなされず蛇の目状を呈し、高台部から底にかけても釉がまばらである。口縁直下から内面にかけて、一部釉の垂れ下がりがみられる。S E 11の落ち込み面からの出土である。

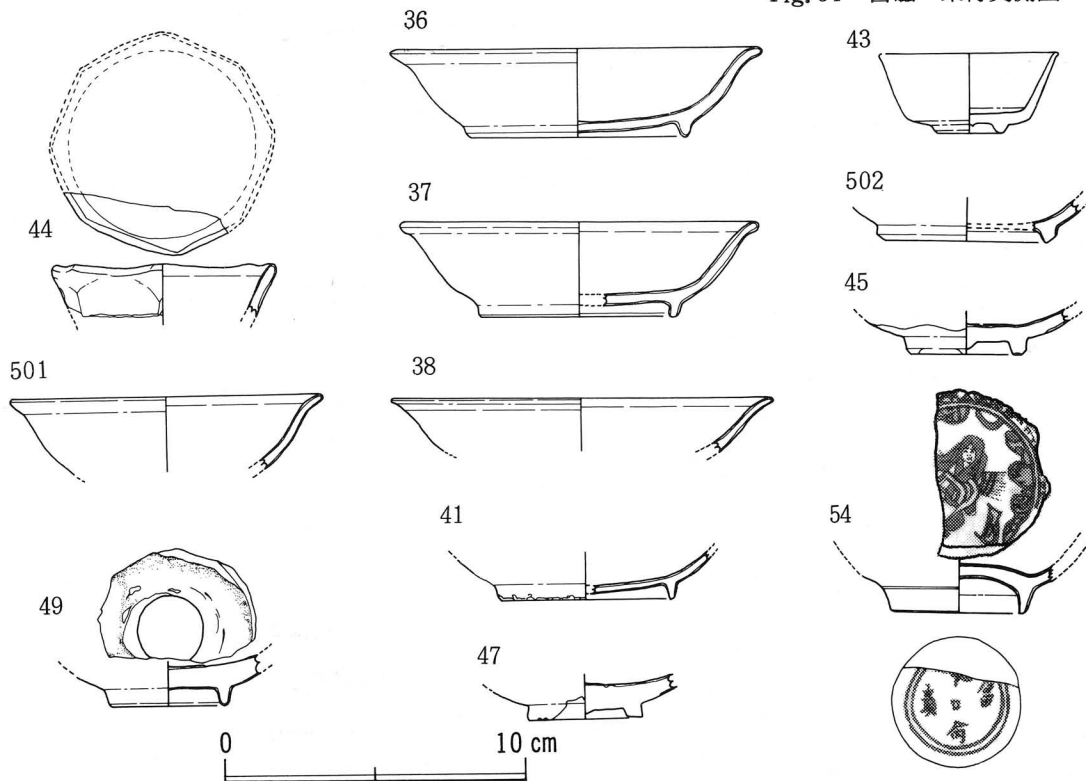
### 【碗】 (44)

八角碗の口縁部片と考えられる。素地は、皿I a 類より若干軟質の灰白色、釉調は柔味のある乳白色のもの、外面の面取りの痕跡が明瞭に残っている。



白磁

Fig. 34 白磁・染付実測図



Ch. 2 遺物挿図・図版対比表（白磁）

No.	遺物No.	Fig	PL	名 称	出 土 区	釉 調	焼 成	胎 土	備 考
36	P 2,824	34	37	白磁（皿）	I 59 II	灰白色	硬質	青灰色	
37	P 741	"	"	"（"）	K 59 II	"	"	白 色	
38	P 4,240	"	"	"（"）	P 54表土	白 色	"	"	
39	P 5,267	—	"	"（"）	ST 22フク土	"	"	"	
40	P 4,622	—	"	"（"）	P 54 II	"	"	"	
41	P 3,224	34	"	"（"）	SE 10フク土	"	"	"	高台に砂附着
42	P 3,120	—	"	"（"）	SE 10フク土	暗灰色	"	青白色	
43	P 2,979	34	"	"（小坏）	SE 11確認面	白 色	"	白 色	
44	P 538	"	"	"（碗）	ST 13フク土	乳白色	"	"	
45	P 115	"	"	"（皿）	M 59 II	"	軟質	黄白色	割高台
46	P 2,567	—	"	"（"）	J 59 II	"	"	"	"
47	P 6,119	34	"	"（"）	SH 03フク土	青白色	"	暗灰色	
48	P 3,003	—	"	"（"）	I 55 II	白 色	硬質	白 色	割高台
49	P 3,034	34	"	"（"）	O 55 II	白 色	軟質	黄灰色	二次焼成
501	P 2,608	"	—	"（"）	J 58 II	白 色	硬質	白 色	
502	P 5,577	"	—	"（"）	ST 34フク土	乳白色	軟質	黄白色	

### 3. 染付 (Fig. 35, Fig. 34, PL. 38)

総数で152片の出土をみた。器形としては、碗と皿が大部分で小杯が1片みられた。中国からの舶載品で、15世紀～16世紀の製品と考えられる。

#### 【碗】

口縁から底部までの形状を知り得る資料がないので、他の類例を参考にして分類してみた。(なお、「浪岡城跡Ⅱ」Fig. 21染付実測図P 65も参照していただきたい。)

I類 口縁が端反りするもの。(Fig. 21-9)類例が少ないため詳細は不明。

II類 口縁は直行かやや内湾する。底部はゆるやかなカーブで浅いU字状の落ち込みを呈するもの。

II a類 外面口縁直下に波濤文帯を有するもの。(Fig. 21-7)

II b類 II a類と同一のものかもしれないが、外面体部に蕉葉文を有するもの。(53)

II c類 外面体部に蓮華文、内面見込に花卉状の文様を有するもの。(55)

III類 口縁は直行あるいは内湾するが、底部内面見込が盛り上がった感じのする、いわゆる饅頭心型のもの。底に銘を持つものが多い。

III a類 内面見込に人物画文を有し、底に「長命富貴」銘を持つもの。(54) また、「大明年造」銘を持つもの(Fig. 21-4)もある。

III b類 内面口縁部は2条の圏線のみで、外面は口縁部に2条の圏線をめぐらし、その下体部に風景文(50)、人物文(51)を描いたもの。

II類は、素地が灰白色を呈し、釉調も青味の強い透明釉を使用しているのに対して、III類は、白色の素地にガラス質の光沢の強い釉を用いている相違がみられる。

#### 【皿】

I類 いわゆる碁笥底の皿。

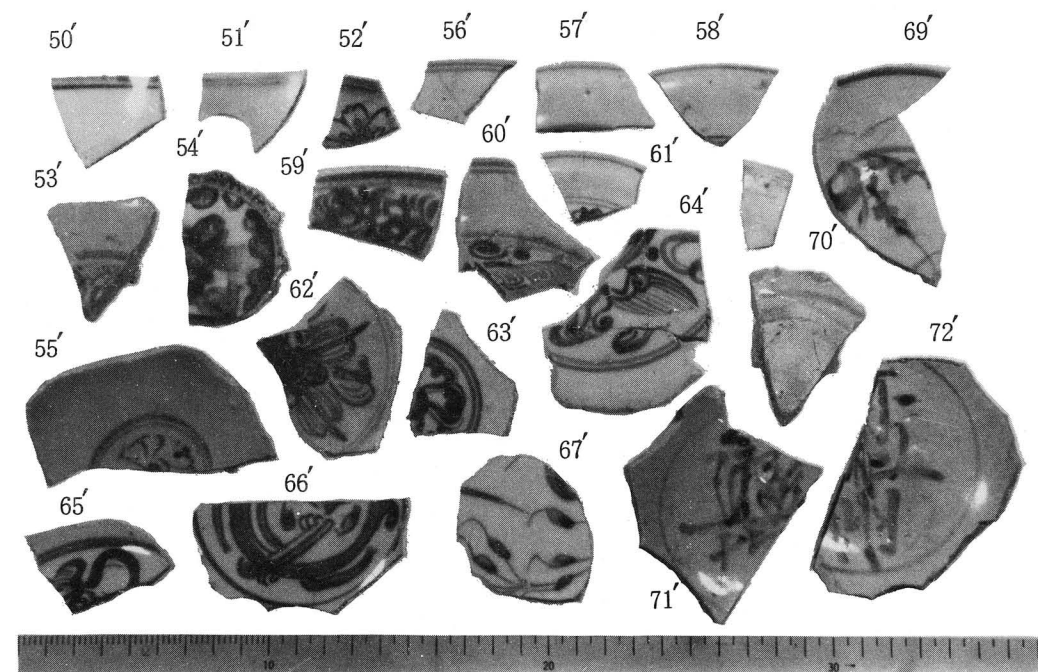
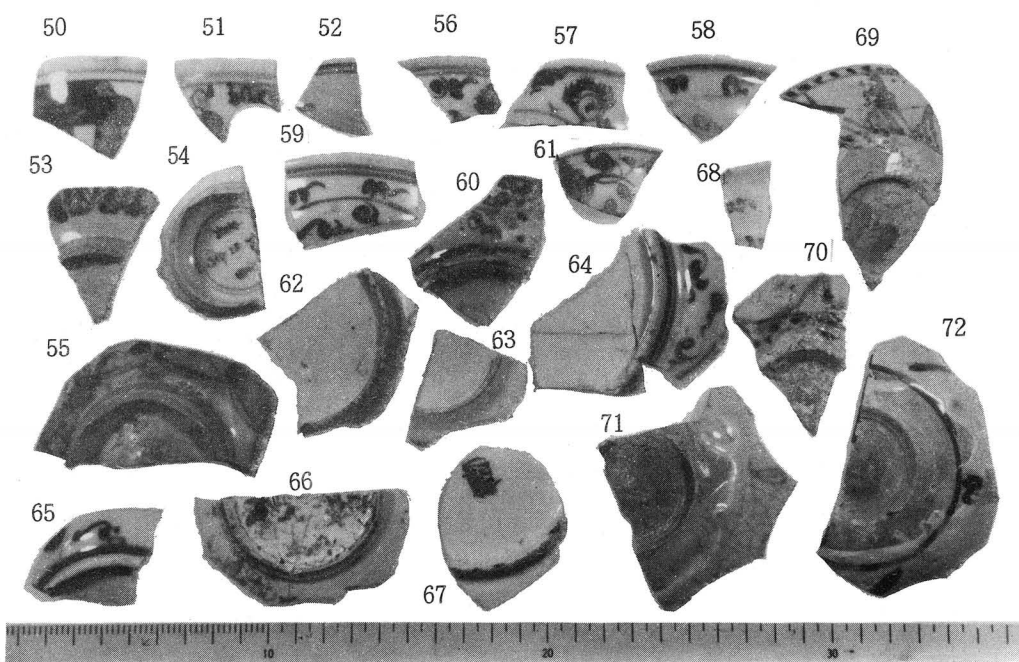
I a類 外面口縁部に波濤文を便化した列点文状の文様、体部に蕉葉文を配する。内面見込に草花文を描くもの(69)、施釉が雑で一条の圏線だけのもの(70)がある。

I b類 外面は簡便な草花文、内面見込に吉祥文を描くもの。(71・72)

II類 口縁が端反りの皿。高台は真直ぐ立ち上がるか、やや内側に入るものがある。

II a類 外面体部には唐草草花文ないし牡丹草花文を有し、内面口縁から見込立ち上がり部分までは、数条の圏線以外無文のもの。(56・57・58・61)この中には、内面見込の文様にバラエティーがみられ、羯磨文(62・63)、玉取獅子文(60・64・65・66)、草花文(67)などが存在する。67は底に福(かくふく)銘がある。

II b類 外面体部には唐草草花文、内面体部にも入り組んだ草花文のみられるもの。(59)



染付

Ⅲ類 口縁が内湾ぎみに立ち上がる皿である。本年度は出土例がなく、53年出土のものがある。外面体部は唐草草花文、内面口縁部に四方禪文、内面見込に樹木文を描くものである。(Fig.21-11)

ⅢⅠ類の素地は概して黄白色の軟質土であり、釉も透明度が低い黄白色の色調を呈する。体部下半から底部にかけては施釉も粗雑で、72などは釉溜りとともに下絵部分が露呈している。また、72は断面に接着したと思われる漆痕が残存している。

素地・釉調はⅢⅠ類に類似するものの、碁笥底でないため分類できなかったものに97がある。内面見込が蛇の目を呈し、その外側に一条の圏線が存在する。高台部の成形および削り出し技法は碁笥底皿の削り出しに近似している。

ⅢⅡ類およびⅢ類の素地は、若干黒っぽい部分があるもののほぼ白色で、釉も透明度の高いガラス質のものである。全体の色調は、青味の強い発色で、呉須は濃い藍色のものが多い。

#### 【小坏】(52)

口縁はやや内湾ぎみのもので、外面口縁部に2条の圏線、体部に何らかの文様が見られるが詳細は不明である。内面は、体部に桜花状の文様が描かれている。素地は暗灰色、呉須は深緑色、全体の色調も暗い緑色を呈している。

#### ※【赤絵】(68)

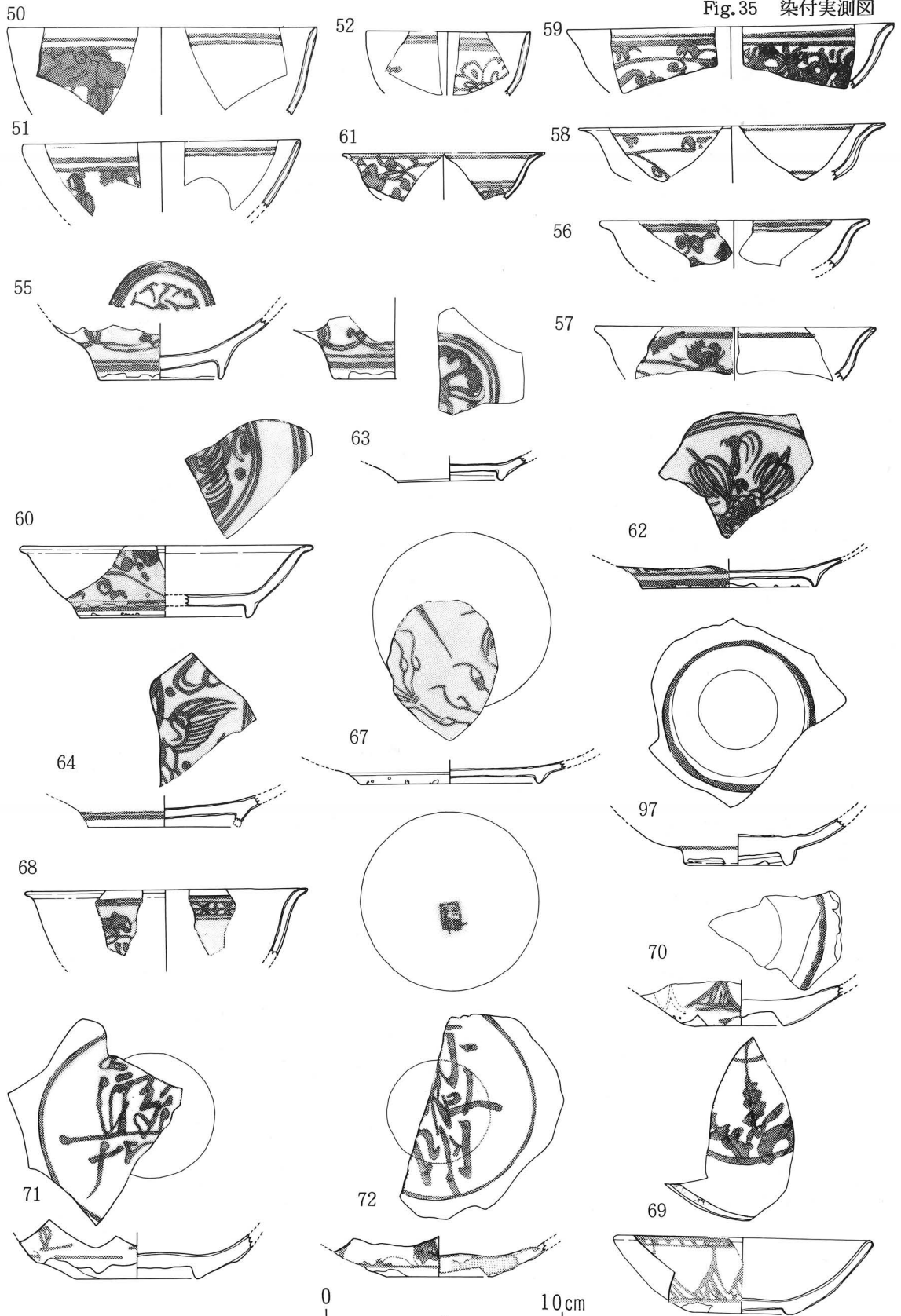
碗の口縁部片で赤色の色彩は落剥しかかっている。内面口縁部に四方禪文、外面体部に草花文が見られる。

### Ch. 3 遺物挿図・図版対比表(染付)

No.	遺物No.	Fig.No.	PLNo.	名称	出土区	釉調	文様	胎土	備考
50	P 3,321	35	38	染付(碗)	ST16フク土	青白色	風景文	白色 硬質	
51	P 5,434	"	"	"(〃)	O54 I	"	人物文	" "	
52	P 3,931	"	"	"(小坏)	K58 II	暗緑色	桜花文	暗灰色 "	
53	P 6,045	—	"	"(碗)	北館表採	暗青白色	蕉葉文	" "	
54	P 479	34	"	"(〃)	K58 II	青白色	人物文	白色 "	「長命富貴」銘
55	P 2,925	35	"	"(〃)	J55 II	暗青白色	蓮華文・他	暗灰色 "	
56	P 6,080	"	"	"(皿)	SH02フク土	青白色	牡丹唐草文	白色 "	
57	P 5,265	"	"	"(〃)	ST22フク土	"	"	" "	
58	P 5,266	"	"	"(〃)	ST22フク土	"	唐草草花文	" "	
59	P 6,079	"	"	"(〃)	SH02フク土	"	"	" "	
60	P 2,878	"	"	"(〃)	ST31フク土	"	玉取獅子文	" "	
61	P 4,613	"	"	"(〃)	P54 II	"	唐草草花文	" "	
62	P 114	"	"	"(〃)	L59 II	"	羯磨文	" "	
63	P 1,336	"	"	"(〃)	K47流土	青緑色	"	" "	
64	P 303	"	"	"(〃)	J58 II	青白色	玉取獅子文	" "	
65	P 4,617	—	"	"(〃)	P54 II	暗緑色	"	" "	
66	P 1,331	—	"	"(〃)	J58 II	青白色	"	" "	
67	P 1,537	35	"	"(〃)	I59 II	"	草花文	" "	銘
69	P 1,901	"	"	染付(皿)	J59 II	黄白色	草花文・蕉葉文	黄白色 軟質	
70	P 128	"	"	"(〃)	M58 II	"	蕉葉文	" "	
71	P 2,987	"	"	"(〃)	SH02フク土	"	吉祥文	" "	
72	P 5,556	"	"	"(〃)	K58SE15フク土	"	"	" "	
97	P 6,131	"	40	"(〃)	SH02フク土	"	なし	" "	
68	P 372	"	38	赤絵(碗)	ST13フク土	白色	四方禪文・他	" "	



Fig. 35 染付実測図



#### 4. 美濃・瀬戸 (Fig. 36, PL. 39, PL. 40, PL. 41)

美濃・瀬戸の製品を施釉の面から大別すれば、灰釉と鉄釉、褐釉の三者となり、出土数をみると灰釉陶器（ほとんどが美濃と思われる。）111点、鉄釉陶器（主に天目碗）29点、褐釉陶器6点となる。15世紀から16世紀にかけてのものがみられ、美濃大窯期の製品が主体を占められる。

##### i) 灰釉陶器

灰釉陶器の器形としては、小皿、中皿、大皿、壺、小鉢などがみられ、中皿の類が9割以上の出土数を示す。

##### 【小皿】

口径が10cm以下のものを便宜的に小皿とする。

出土量は少ないが、全形を知り得るものに80がある。口縁部はゆるく外反し、高台立ち上がりからのふくらみ（内湾）は少ない。内面見込の印花文は、菖蒲状のもの（80・81）、6～7花状のもの（83・86）など、中皿に多い菊花がみられないようである。

##### 【中皿】

口径が10cm以上20cm以下のもの。この類は、器形の形態によって数タイプに分類できる。

I類 口縁が外反せずまっすぐ立ち上がるもの。内面見込部の釉をふきとったためか、素地の表面が赤褐色を呈している。

I a類 釉調が薄緑色でガラス質のもの。貫入が多い。（84・85）

I b類 釉調が淡黄色で光沢が鈍いもの。（昭和53年出土。「浪岡城跡Ⅱ」P68、Fig.24-2）

II類 口縁が端反りするもの。

II a類 内面見込に印花文がないもの。（74・78）

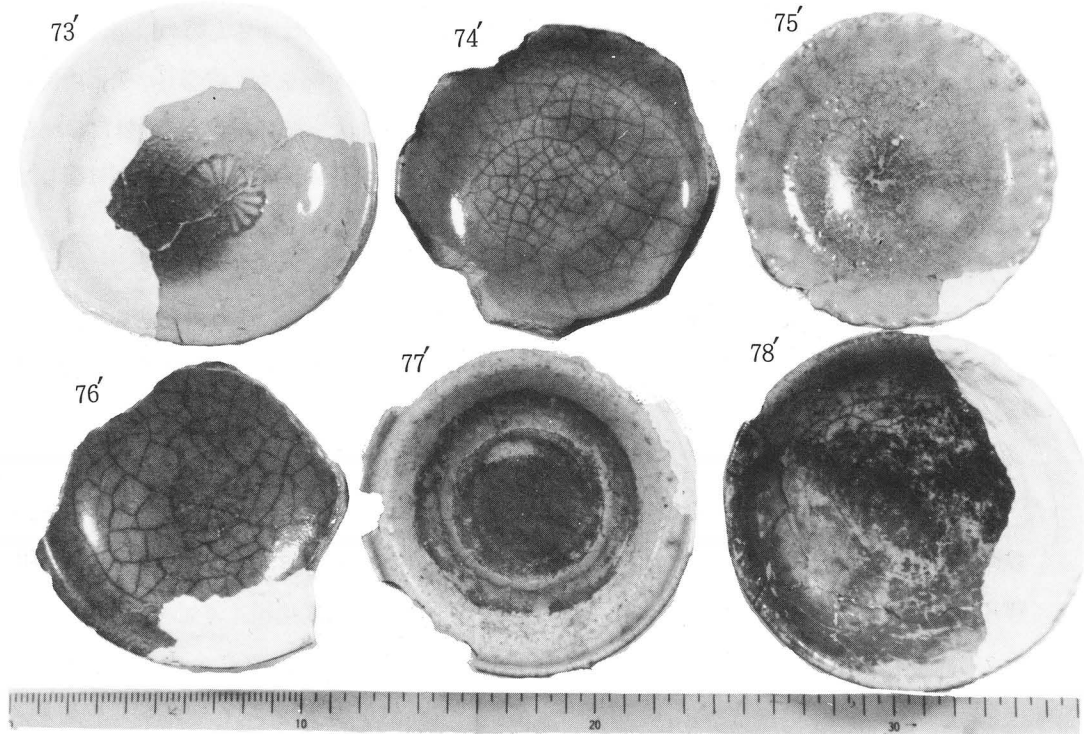
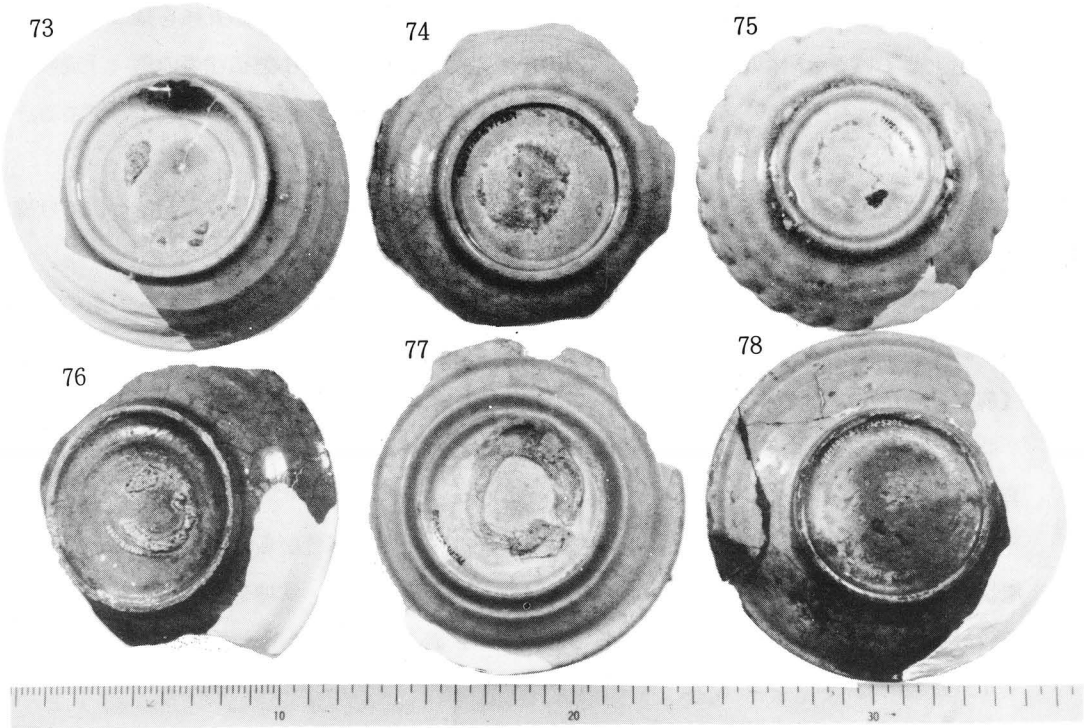
II b類 内面見込に菊花・六花弁状の印花文を有するもの。この中には、釉調が深緑色のもの（76・83）と、淡緑色のもの（73・79）の2種類がある。

III類 口縁が波状を呈する皿。（75）

IV類 口縁部内面に一条の段を有するもの。（77・90）この類は、一般的に釉の透明度は低く、ガラス質のものはみあたらない。

##### 【大皿】

口径20cm以上のものである。口縁部内面に一条の段を有するもので、器形・釉調は中皿IV類に近似して、ひと回り大きくしたような印象を受ける。底部の成形は、明瞭な高台を持たず内部を削り取っただけのものである。（94・95・96）なお、96の底部と119の褐釉陶器は同一層・同一地点からの伴出品で、成形技法に類似点が認められる。



美濃

### 【壺】

壺は小型のものが多く、口縁が内湾するもの（91）、体部の張り出しが丸味を持つもの（92）が出土している。昭和53年度には、肩部に4条の沈線を巡らした小型仏花壺の例（「浪岡城跡Ⅱ」P66 Fig.23-2）も知られており、施釉が全体にゆきとどかない例が多いようである。

### 【小鉢】

89は、口縁部が外反しながらも内面に一条の段を有するもので、外面は口縁部付近にだけ施釉されており、体部は素地が露呈している。小皿かもしれない。

88は、小鉢あるいは小皿の底部で、外面底は無釉で糸切痕が残り、内面にだけ淡緑色の釉が施されているものである。

### 【碗】

93は、口縁が内湾する碗あるいは浅鉢の破片で、素地は暗灰色の硬質土で、淡黄緑色の釉が施されている。

87は、淡青色の釉調を呈するもので、内面は見込立ち上がり部分からヒダ状にえぐられ、菊皿状の形態を呈すると思われる。高台内部には釉がゆきとどかず、素地を露出している。高台の成形が、皿の類と違い、若干高くなっているため、碗と考えた。

#### ii) 鉄釉陶器

### 【天目茶碗】

天目茶碗は、口縁がS字状に外反するもの（108・109）と、外反はするものの口縁部外面のくびれが顕著でないもの（111・112）が存在する。底部は、高台部を丸く成形した後に内側をレンズ状に削り取る。（108・110）内面の施釉は全体にゆきわたっているが、外面は口縁から4 cm前後下の所で釉止りがみられ、底部から体部立ち上がり部分にかけては、鉄分が付着したように淡い赤褐色を呈するものが多い。

### 【天目台】（113）

受け口の上端が欠損しているため、立ち上がりの状態が明確でない。張り出し部分上面まで鉄釉を施しているが、下面から底部にかけては素地が露呈している。底の高台部は削り痕が残って、粗い成形である。

### 【壺】

114は、大型の壺の肩部付近の破片である。外面には、四本の細沈線が幅8 mmの中にみられ、鉄釉が全体に施されている。内面は、一部に釉の垂れ下がりがある他、素地面にロクロ痕が明瞭にみられる。

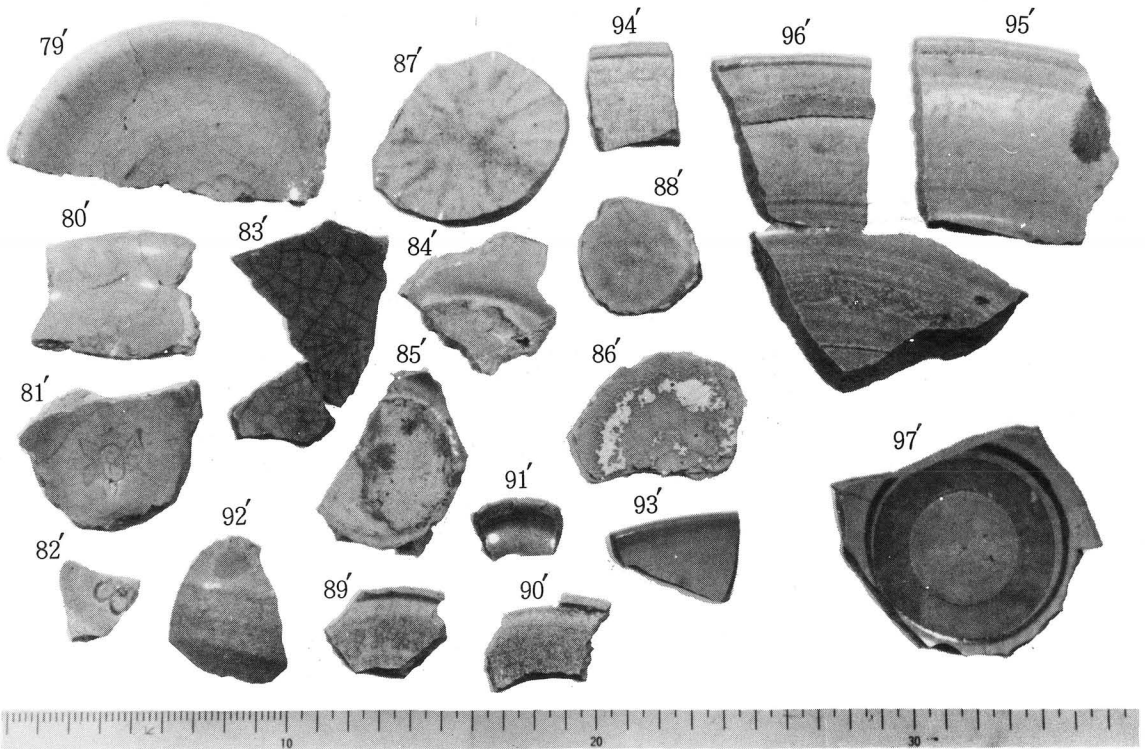
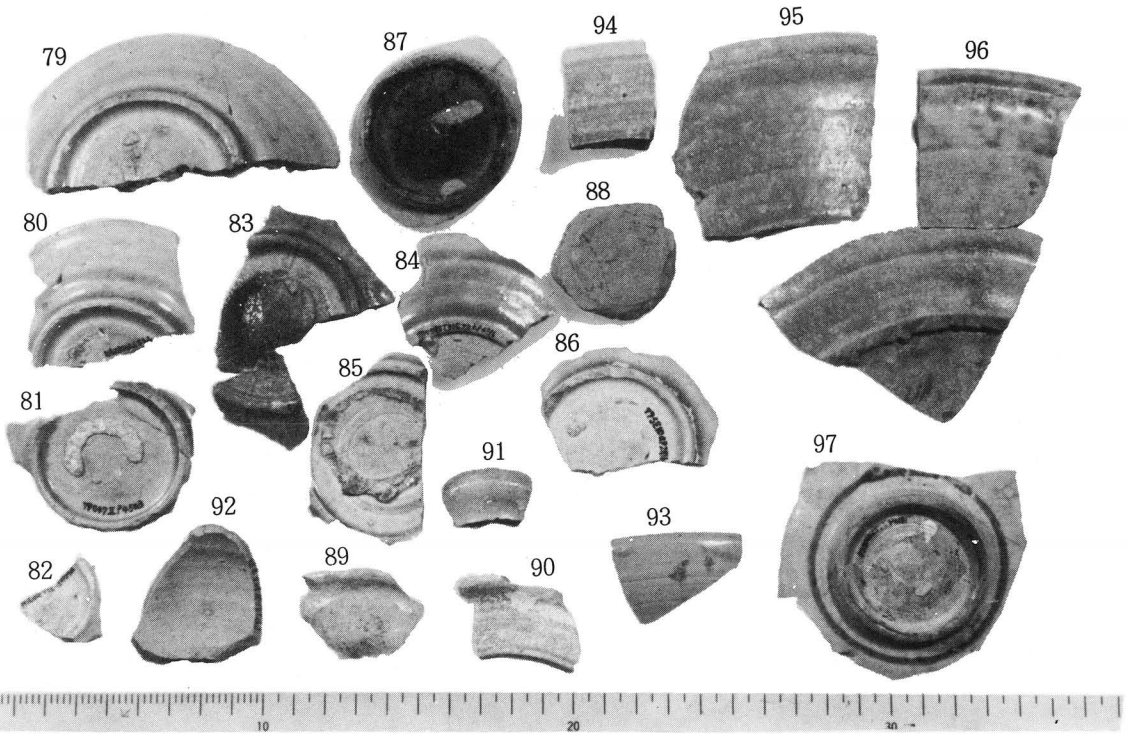
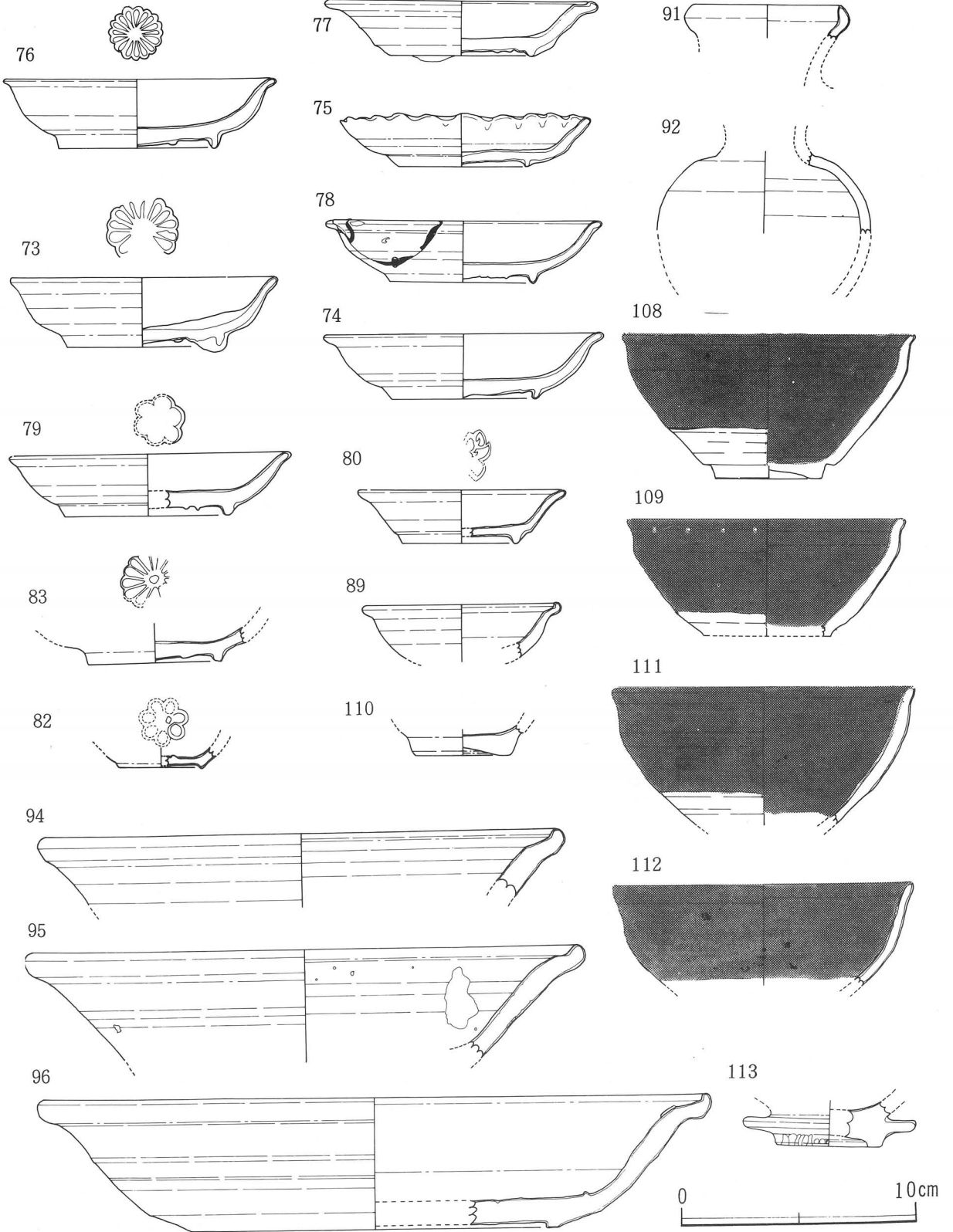
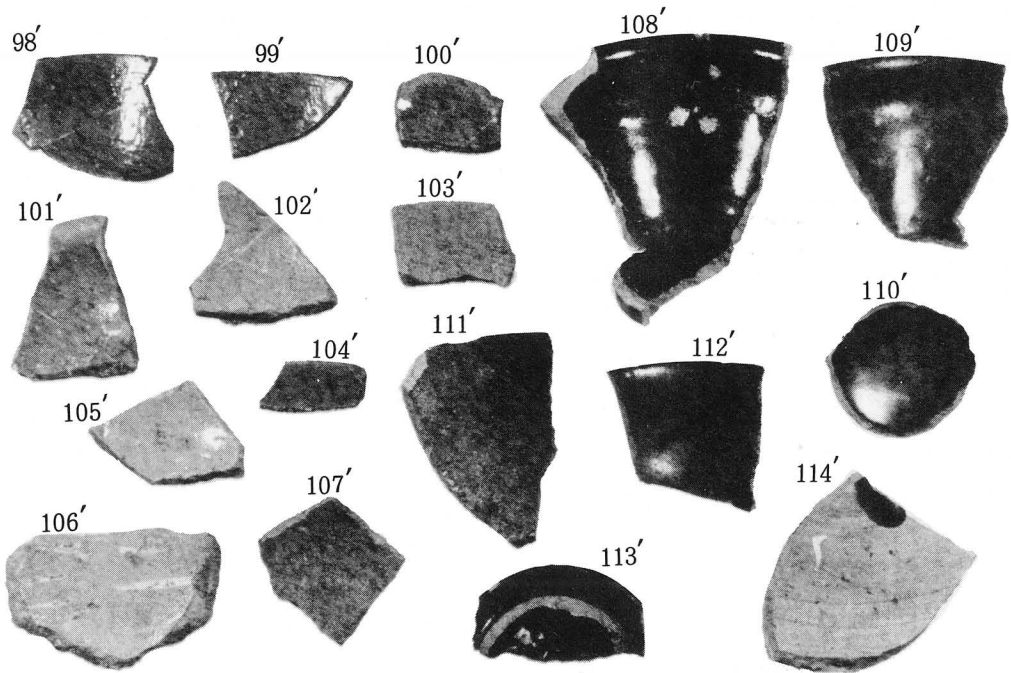
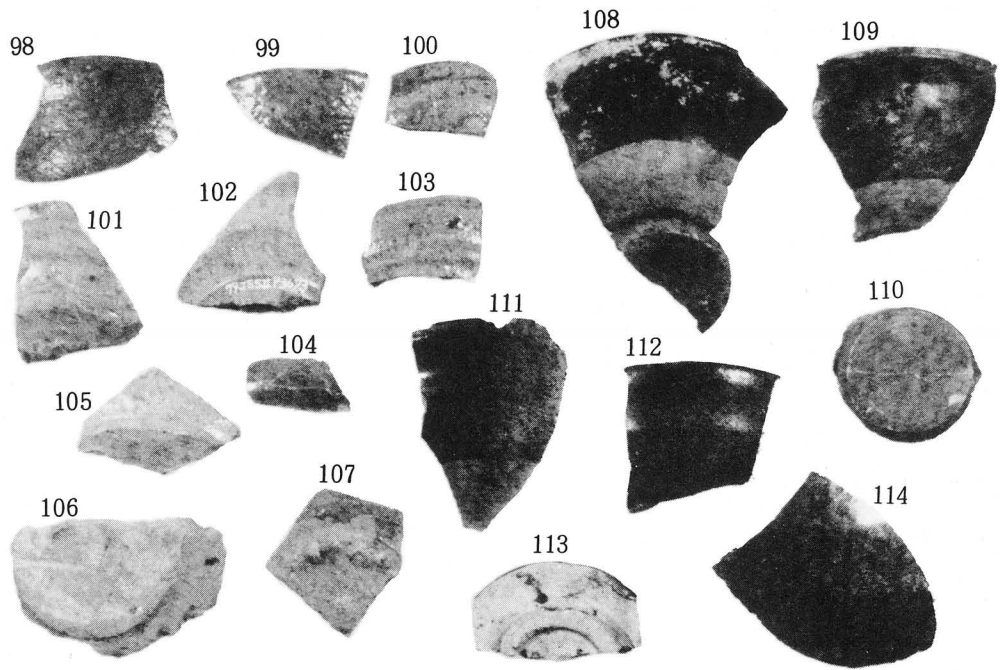


Fig.36 瀬戸・美濃実測図



Ch. 4 遺物挿図・図版対比表（美濃・瀬戸）

No.	遺物No.	Fig.	PL.	名 称	出 土 区	釉 調	文 様	胎 土	備 考
73	P 4,281	36	39	美濃（皿）	I 55 II	淡緑色	菊花文	淡黄白色	
74	P 3,057	"	"	"（"）	S H03フク土	"	なし	黄白色	
75	P 2,917	"	"	"（"）	P 54 II	"	なし	"	
76	P 2,984	"	"	"（"）	K 55 II	濃緑色	菊花文	暗灰色	輪ドチ
77	P 4,738	"	"	"（"）	S E15フク土	淡青色	なし	黄白色	輪ドチ
78	P 5,275	"	"	"（"）	M58ST34フク土	淡緑色	なし	"	漆接合
79	P 4,820	"	40	"	S T34フク土	"	印花文	"	
80	P 2,931	"	"	"	S T09フク土	"	印花文	白色	
81	P 4,503	—	"	"	O47 II	"	"	"	輪ドチ
82	P 2,903	36	"	"	S E10フク土	"	"	"	
83	P 483	"	"	"	K 58 II	濃緑色	菊花文	暗灰色	輪ドチ
84	P 4,916	—	"	"	K 58ST30フク土	淡緑色	なし	黄白色	
85	P 5,538	—	"	"	S T27フク土	"	"	"	輪ドチ
86	P 2,916	—	"	"	S E10フク土	"	印花文	"	
87	P 4,816	—	"	"	I 55 II	淡青色	なし	黄白色	
88	P 242	—	"	"	M58 II	淡緑色	"	灰白色	糸切底
89	P 5,880	36	"	"	I 59ST38フク土	黄灰色	"	黄白色	
90	P 5,440	—	"	"	O54 II	淡緑色	"	灰白色	
91	P 1,491	36	"	"	I 58 II	緑色	"	黄灰色	
92	P 598	"	"	"	L 60 II	"	"	暗灰色	二次焼成
93	P 557	—	"	"	K 59 II	淡緑色	"	"	
94	P 352	36	"	"	I 58 II	黄灰色	"	"	二次焼成
95	P 4,705	"	"	"	S T27フク土	"	"	"	
96	P 1,626 P 5,549	"	"	"	J 58 II S T27フク土	"	"	"	
108	P 4,522	"	41	天目	O47 III	黒色	"	黄灰色	
109	P 5,466	"	"	"	I 58ST22フク土	"	"	"	
110	P 1	"	"	"	J 58 II	"	"	"	
111	P 4,588	"	"	"	O47 II	"	"	"	二次焼成
112	P 6,184	"	"	"	表採	"	"	"	
113	P 5,533	"	"	天目台	J 58 II	黒褐色	"	"	
114	P 4,464	—	"	鉄釉壺	J 55フク土	"	"	"	



朝鮮・唐津・天目・他



## 5. 朝鮮・唐津 (Fig.37, PL. 41)

### i) 朝鮮 (98・99)

朝鮮からの舶載品と思われる碗が1点出土している。98と99は同一個体の口縁部片で、素地は白っぽい小砂が混じる暗灰色土、釉調は光沢のある青灰色を呈し、所々に白砂・黒砂の斑文がみられる。口縁部付近は鉄分が付着したようで茶褐色を呈する部分も認められる。図上復元では、口径11.9 cm、口縁から体部中間まではふくらみがなく、底部にかけては腰部の張りが推定される。

### ii) 唐津

総数29片の出土があり、大部分が皿であった。器形・釉調によって数種類に分類できる。

I類 口縁が外反するもの。(101) 釉調は灰色ぎみの緑色を呈し、1点だけの出土である。

II類 口縁が内湾ぎみに立ち上がるもの。

II a類 素地が赤褐色を呈し、釉調は光沢のあまりない鈍い灰色を呈するもの。(102・106)

II b類 素地が黄灰色から暗灰色にいたる色調で、釉はガラス質の淡緑色を呈する。(100・103・104・105・107)

唐津の皿の全体にわたる特徴として、(1)施釉は高台部までいらず、外面体部下半で止まる。(2)高台部の成形は、肉厚で内部を1回転で削り、再調整を施さない、の2点が言える。

## 6. その他の陶器

産地が明確でない一群の施釉陶磁器である。

115: 甕の口縁部片で、口縁直下外面に一条の沈線をめぐらし、口縁部内面と、肩部付近に篋書記号がみられる。越前の可能性がある。

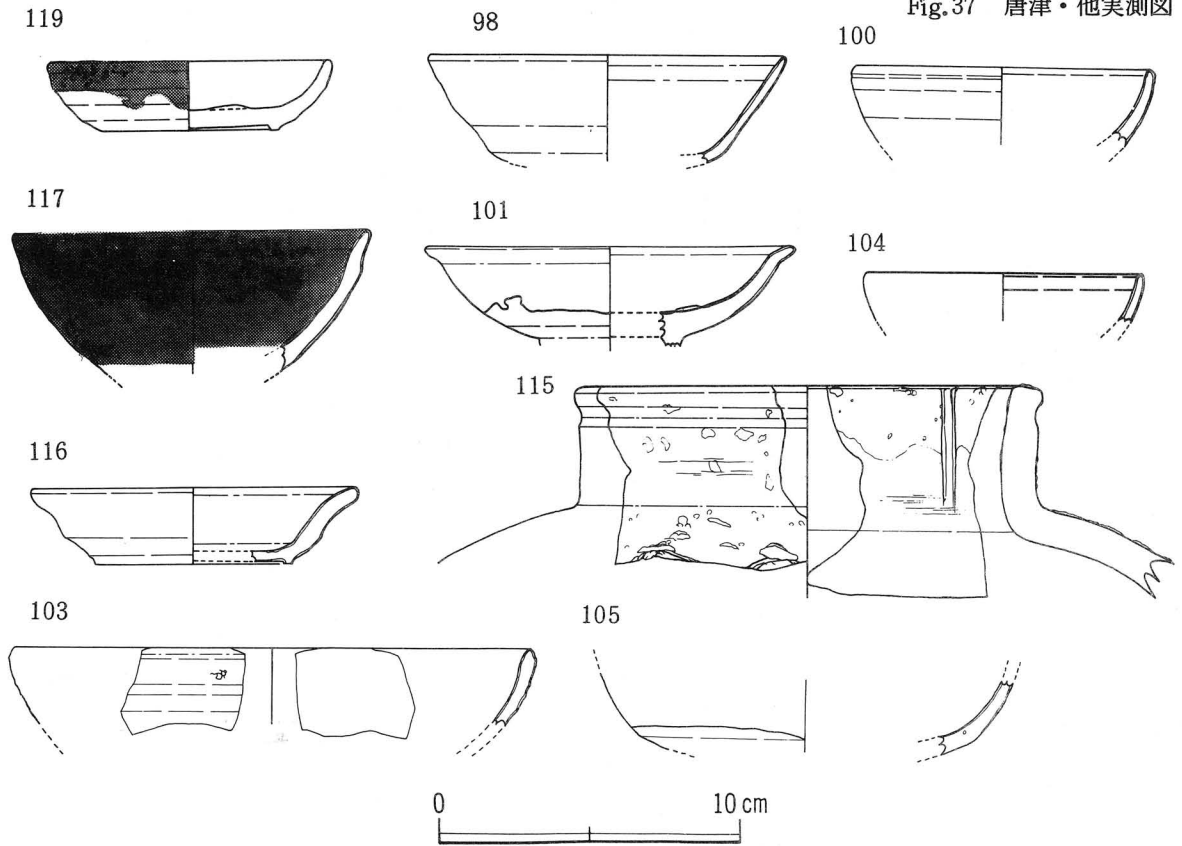
116: 褐釉皿の破片である。口縁は外反し、底部は浅く削っただけで、外面の釉は部分的に黒色を呈する斑状である。美濃・瀬戸系のものか。

117: 天目碗の器形であるが、胎土は黄味の強い白色で釉調も茶色と黒色の混在した斑文状を呈し、かなり光沢度が強いものである。美濃の可能性が高い。

118: 暗褐色の素地に、飴釉のみられる壺あるいは小甕の胴部片である。内面には、爪形の叩き目が横位に認められ、外面には釉の垂れ下がりとともにひび割れが存在する。唐津の可能性はある。

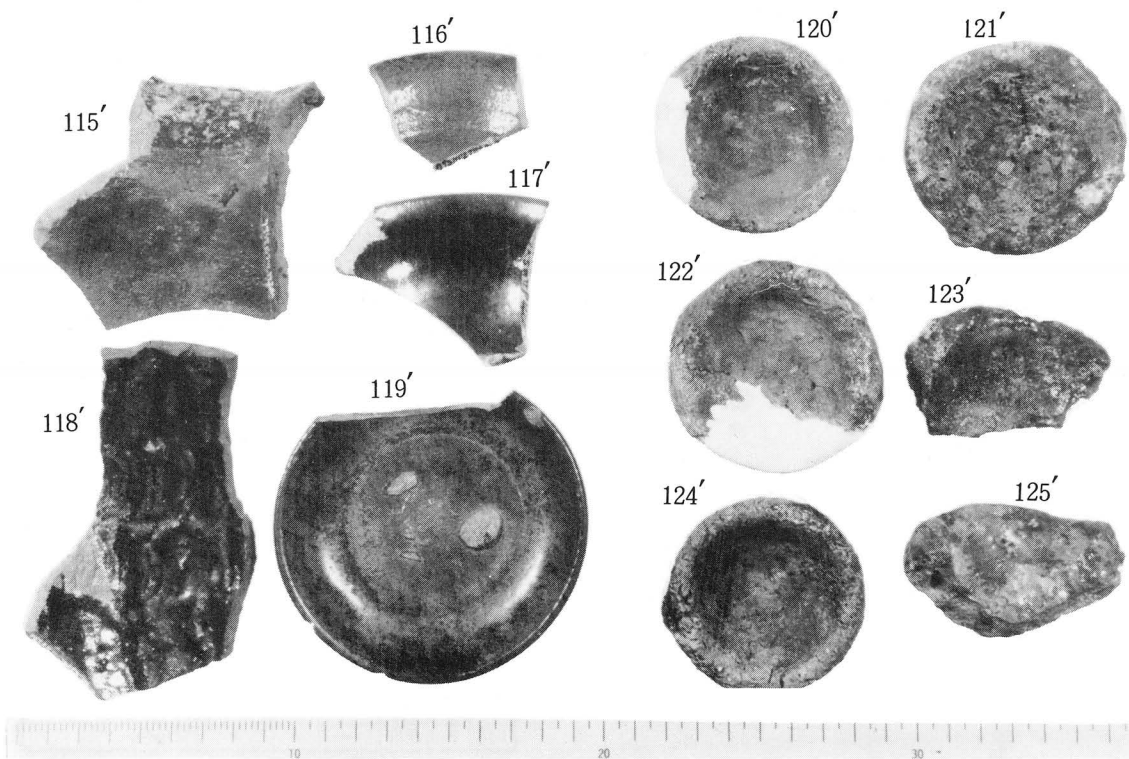
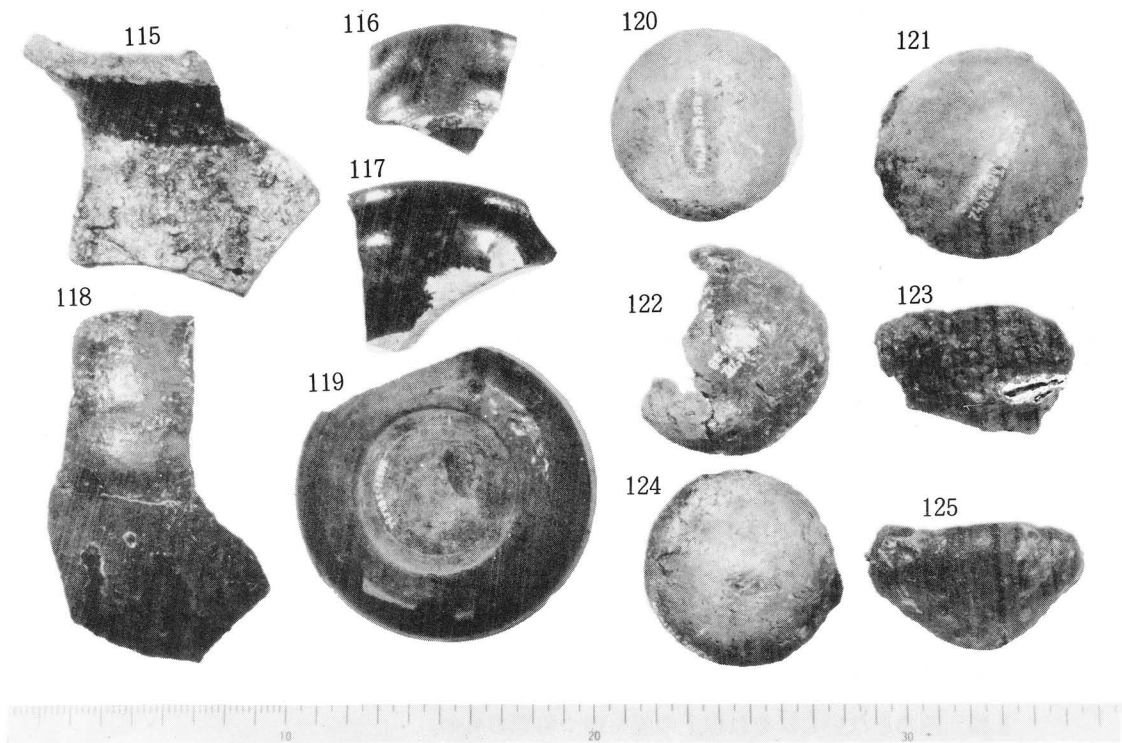
119: 褐釉の小皿で、口縁は内湾ぎみの立ち上がりを呈し、底は2 mmほど削り込んだだけのものである。釉は体部中間で止まり、底部には施釉されない。内面見込は、若干肉厚になっており、ドチ痕が存在する。

Fig.37 唐津・他実測図



Ch. 5 遺物挿図・図版対比表 (朝鮮・唐津・不明陶器)

No.	遺物No.	Fig.	PL.	名称	出土区	釉調	胎土	備考
98	P 4,631	37	41	朝鮮 (碗)	L 58 II	青灰色	暗灰色	
99	P 4,630	—	"	" (")	L 58 II	"	"	
100	P 2,972	37	"	唐津 (皿)	S A 02 II	淡緑色	暗灰色	
101	P 1,538	"	"	" (")	I 59 II	灰緑色	"	
102	P 3,673	—	"	" (")	J 55 II	灰色	赤褐色	
103	P 6,185	37	"	" (")	表採	淡緑色	黄灰色	
104	P 4,763	"	"	" (")	P 54 II	"	"	
105	P 1,341	"	"	" (")	J 58 II	"	"	
106	P 5,659	—	"	" (")	I 55 II	灰色	赤褐色	
107	P 3,008	—	"	" (")	I 55 II	淡緑色	暗灰色	
115	P 2,880	37	42	不明陶器	S E 10フク土	灰褐色	暗灰色	越前?
116	P 2,921	37	"	"	S H 02フク土	茶褐色	黄灰色	美濃?
117	P 420	"	"	"	K 58 II	茶・黒色	黄白色	"
118	P 2,918	—	"	"	S E 11フク土	暗緑褐色	暗褐色	唐津?
119	P 2,874	37	"	"	J 58 II	暗褐色	暗灰色	瀬戸?



不明陶器・溶解物付着土器

## 7. 瓦器 (Fig.38, PL.43)

瓦器は、総数で59片の出土があった。細片が多いため、全形を知り得る資料は少なく、手焙り、行火、壺形などの器形が推定され、図面復元のために実際と相違するものもみられると思う。器形、色調、文様などによって数種類に分類できる。

### 【手焙り】

I 類 器形が円形を呈するもの。

I 類 a 円形で外面を黒色研磨し、外面口縁部や胴部に文様を施すもの。

笹りんどう状の文様を削り込んで施しているもの(126)や、八菱状の文様をスタンプしているもの(139)がみられる。130は文様が明らかでない。

I 類 b 円形で外面を黒色研磨し、文様もみられるが胴部中間に算木状の帯が周るもの。

(134・135) 六角の半分を呈するスタンプ文様のみられるもの(138)がある。

I 類 c I 類 a と同様の文様を有するが、黒色研磨されていないもの。(136)

I 類 d I 類 b と同様の特徴を有するが、黒色研磨されていないもの。(134・135)

I 類 e 黒色研磨していても、文様がみられないもの。(127)

I 類 f 黒色研磨されず、無文のもの。(132)

II 類 四角形ないしはそれ以上の面を持つ器形のもの。

II 類 a 黒色研磨処理がなされず、無文のもの。(128・129)

II 類 b 黒色研磨され、丸の中に十字状の文様や松葉状の文様をスタンプするもの。(140)

III 類 須恵器質の胎土を有するもの。(137) 器形は盤状のものと思われるがよくわからない。

### 【行火】(131)

外面は、入念に黒色研磨処理を施しているため光沢を發し、舌状の窓が1個あいている。上部に穿孔の痕跡を認めることができるけれども、何個穿っていたのかは不明である。底部と胴部中間に各一条の隆帯をめぐらし、その間に

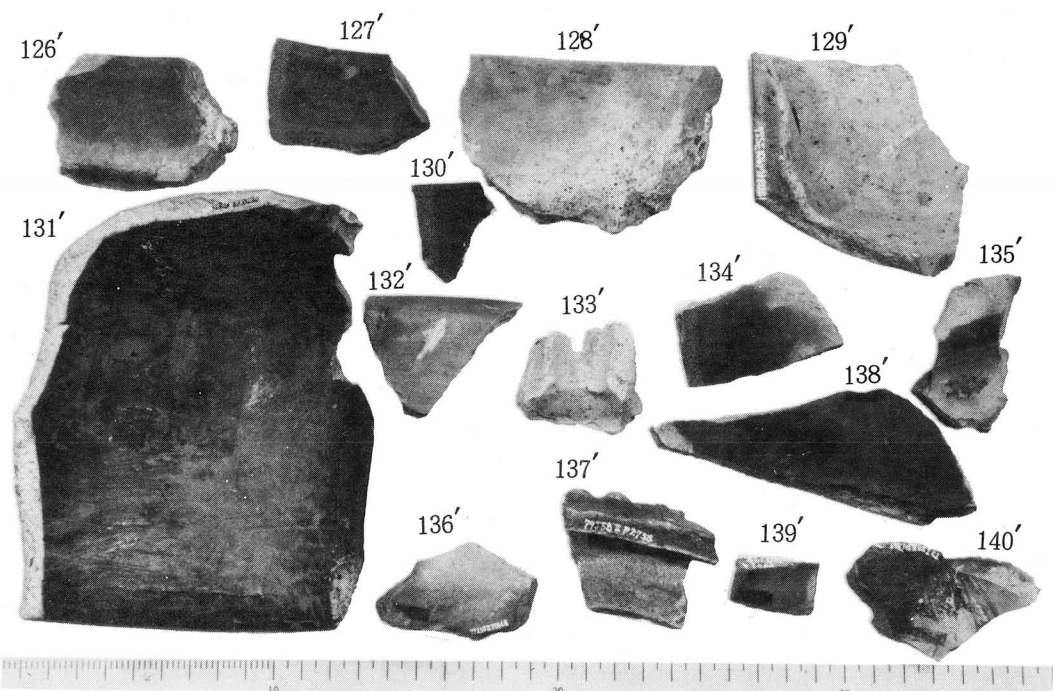
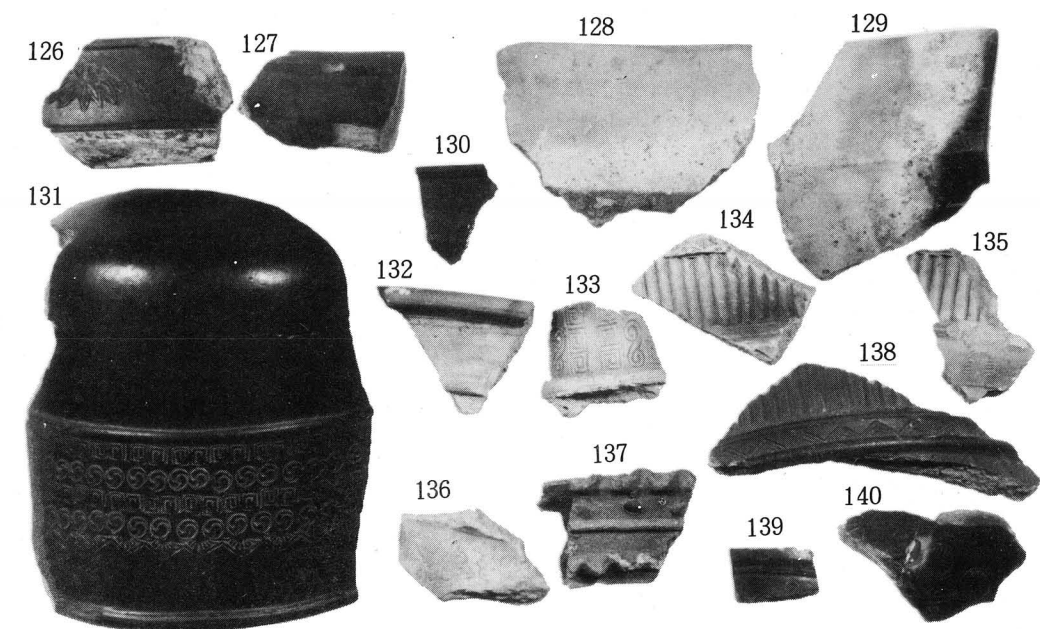
3種類のスタンプ文を交互に配置している。上から順に、雷文、巴文、雷文、巴文、松葉文の構成である。

### 【壺形】(133)

機能・用途は不明で、外面は雷文と逆S字状の巴文を施し研磨されているが、内面は輪積み痕および指ナデ痕がみられ調整不良である。

Ch. 6 遺物挿図・図版対比表 (瓦器)

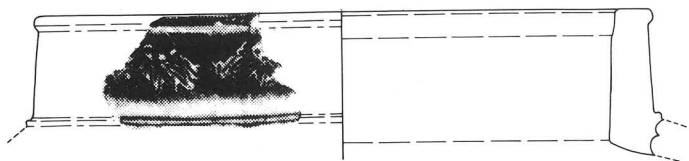
No.	遺物No.	Fig.	PL	名称	出土区
126	—	38	43	瓦器	内館表採
127	P 3,051	—	—	—	N 55 II
128	P 1,379	38	—	—	L59ST13フク土
129	P 2,281	—	—	—	I 58 II
130	P 4,634	—	—	—	I 60 III
131	P 2,875	—	—	—	J 58 II
132	P 2,994	—	—	—	SE 10フク土
133	P 6,112	38	—	—	SH 03フク土
134	P 5,710	—	—	—	I 60 II
135	P 3,875	38	—	—	SE 10フク土
136	P 5,668	—	—	—	I 55 II
137	P 2,756	—	—	—	J 58 II
138	P 4,740	—	—	—	I 60 III
139	P 4,343	—	—	—	J58ST40フク土
140	P 1,869	—	—	—	I 58 II



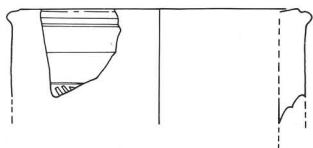
瓦器

Fig. 38 瓦器

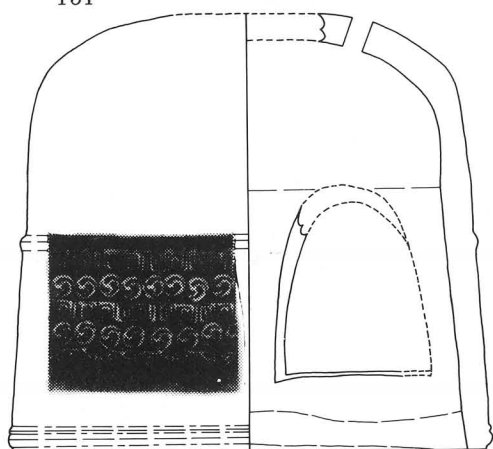
126



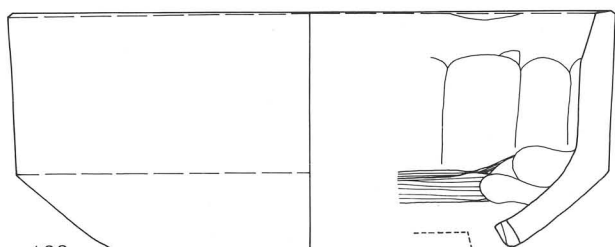
130



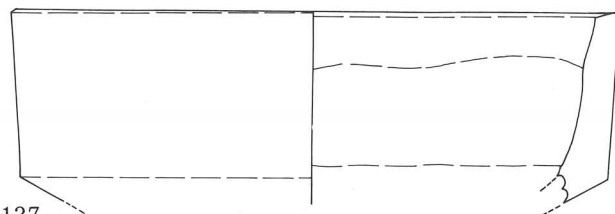
131



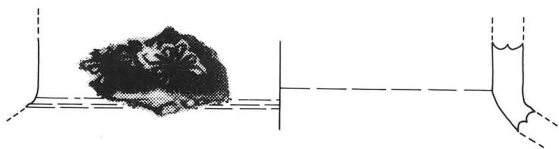
129



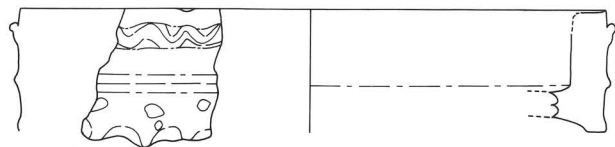
128



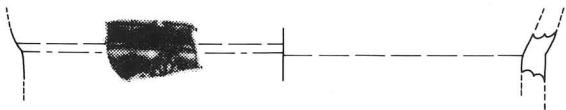
136



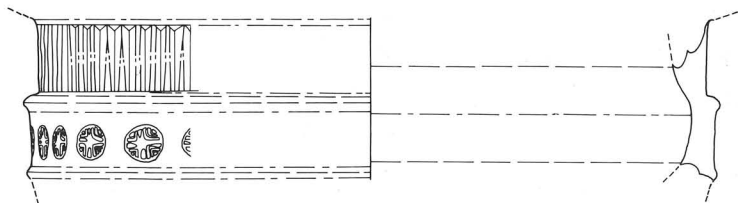
137



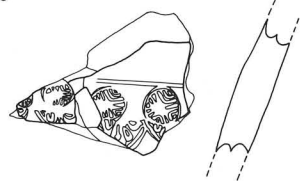
139



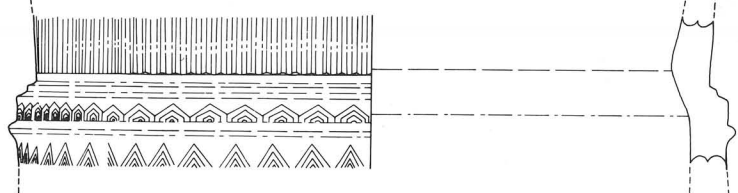
135



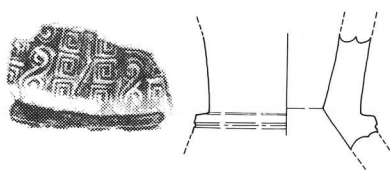
140



138



133



## 8. 播鉢 (Fig. 39, PL. 44)

総数で58片の出土があった。すべて無釉のもので、色調、口縁形態がバラエティーに富み、同一窯からの搬入とは考えにくい。産地・年代については不明な点が多い。

製作技法上から、4類に分類できる。

I類 口縁部内面に波状文を施すもの。いわゆる珠洲系陶器と言われるもので、胎土・色調とも暗灰色を呈し、片口部のもの(141)、十条の櫛目で右回り波状文を施すもの(143)、前二者よりも櫛目幅が広く7条の波状文を施すもの(142)がみられる。

II類 口縁部内面に1条のくぼみが回るもの。内面の櫛目は一般に幅が狭く細い。

II a類 色調が赤褐色を呈し、胎土が黄白色のもの。(149・152) なお本類の底部と推定されるものに(156・157)がある。

II b類 色調が暗灰色を呈し、胎土は焼成ムラのためか赤味をおびた灰色のもの。(145・151) なお、本類の底部と推定されるものは(154)がある。

III類 口縁部がやや外反ぎみにまっすぐ立ち上がるもの。

III a類 色調が黄灰色を呈し(部分的に黒色を呈するものもある。)、胎土は内が黒色、表裏部が黄灰色あるいは褐色のサンドイッチ状になっているもの。(146・148・155) (櫛目は底に向かってゆるいカーブを描くことが多い)

III b類 III a類と逆で、色調が黒味の強い灰色を呈し、胎土は灰色ないしは黄灰色を呈するもの。(144・150) なお、本類の底部として(153)が推定される。

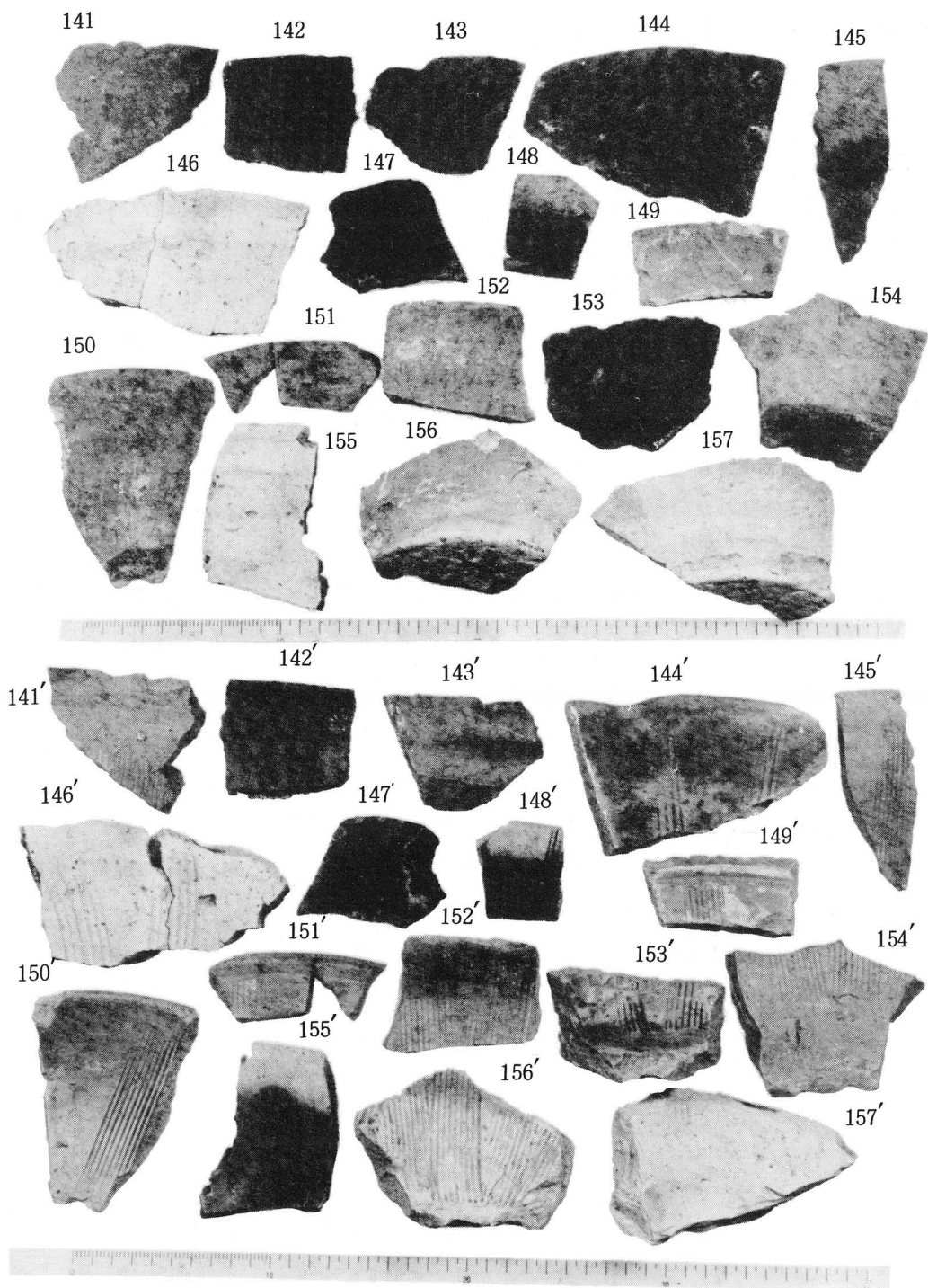
IV類 口縁部はやや内湾ぎみで、色調・胎土ともに黒色を呈する。断面をみると表裏に薄く灰色の土がはさまれているもの。(147)

以上の播鉢の推定口径をみると、25cm～30cmのものが最も多く、分類による差異はないようである。また底径は10cm～15cmの間に入り、立ち上がり部分を調整しないものが多い。

播鉢と製作技法が類似しているにもかかわらず、卸し目がないところから練鉢と推測されるものが2点出土している。

158は、上記IV類の範疇に入るもので、底が抜け落ちて詳細にはわからないが、内面に卸し目がまったくなく、部分的に表面がえぐられてはげ落ちているところがある。

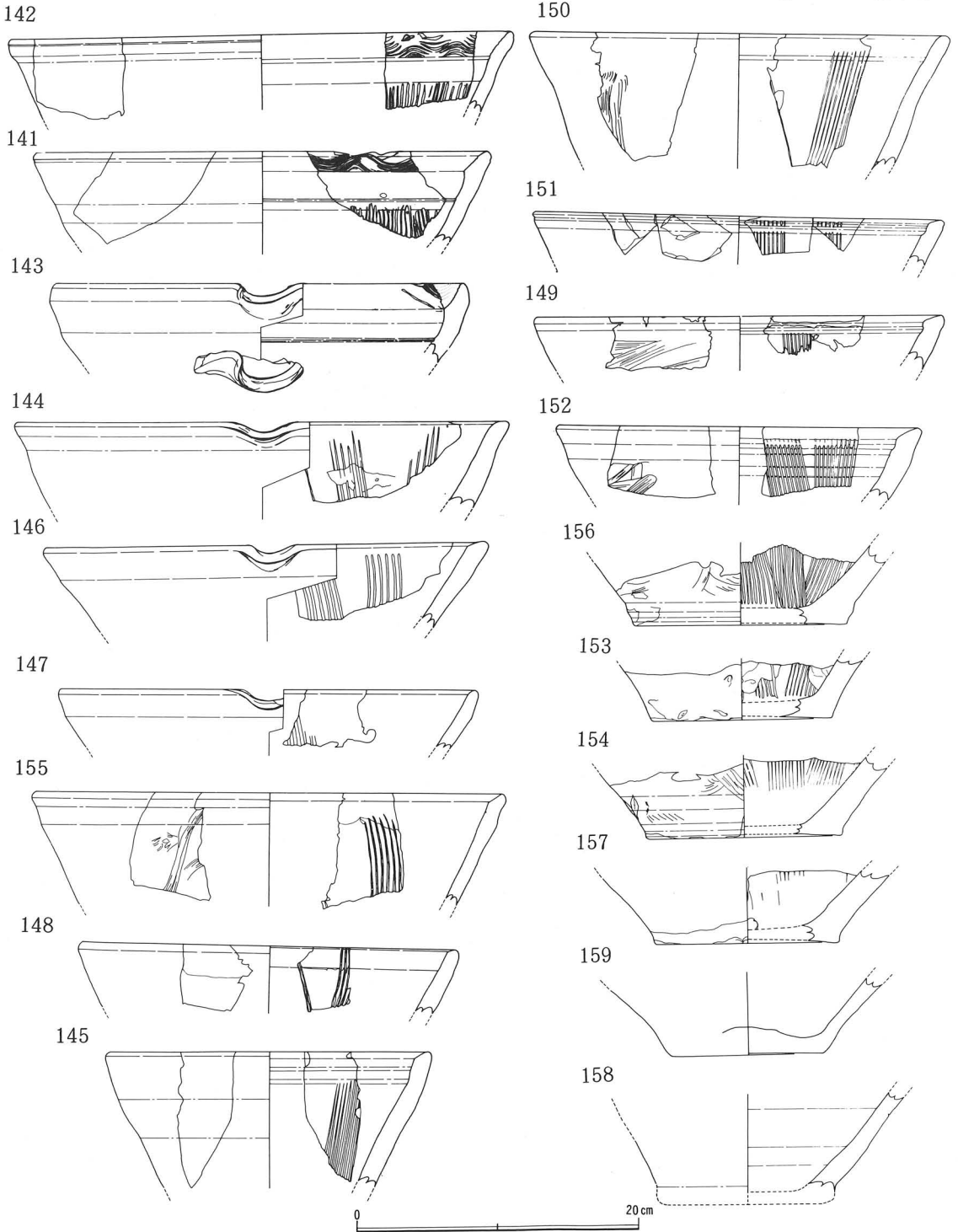
159は、上記III b類の範疇に入るもので、内面が使用しすぎたため摩耗している。卸し目が消滅したのかもしれない。

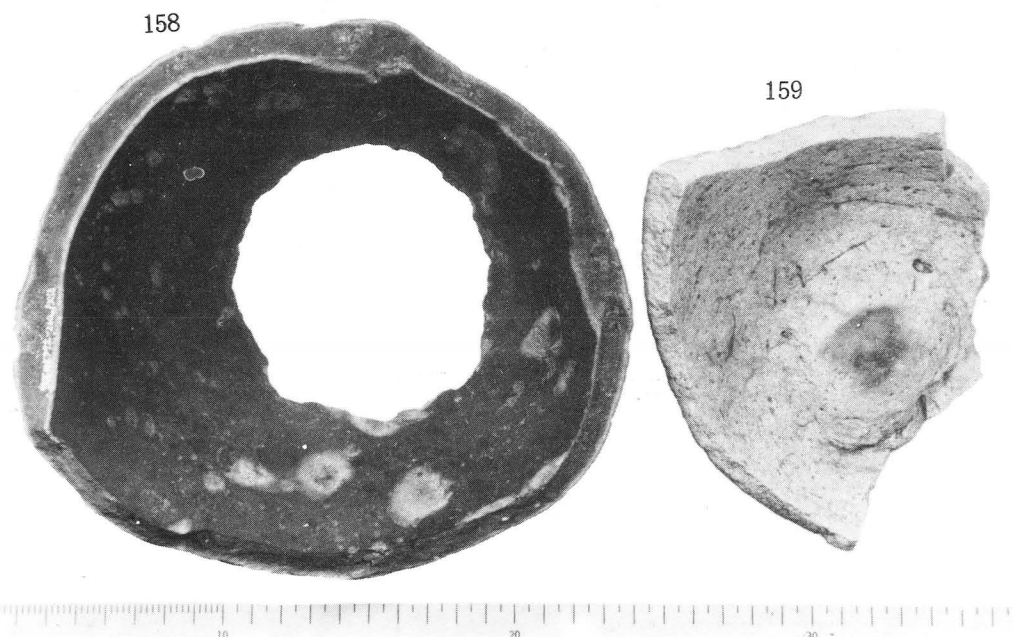


播鉢



Fig. 39 播鉢実測図





ねり鉢

## Ch. 7 遺物挿図・図版対比表 (播鉢)

No.	遺物No.	Fig	PL	名称	出土区	色調	胎土	特徴	備考
141	P 2.262	39	44	播鉢	K 60 II	暗灰色	暗灰色	波状櫛目文	珠洲系
142	P 4.473	"	"	"	I 60 II	"	"	"	"
143	P 4.759	"	"	"	S T 31フク土	"	"	"	"
144	P 344	"	"	"	L 60 II	黒色	灰色	片口	
145	P 3.393	"	"	"	S T 26フク土	暗灰色	灰色		
146	P 1.895	"	"	"	J 59 II	黄灰色	黒色	片口	
147	P 4.848	"	"	"	I 59フク土	黒色	黒色	"	
148	P 5.476	"	"	"	S T 13フク土	黄灰色	"		
149	P 4.135	"	"	"	K 55 II	赤褐色	黄白色		
150	P 3.896	"	"	"	S E 10フク土	灰色	黄灰色		
151	P 2.291	"	"	"	K 58 II, J 58 II	暗灰色	灰色		接合
152	P 4.564	"	"	表採		赤褐色	黄白色		
153	P 1.055	"	"	"	J 60 II	"	"		
154	P 5.253	"	"	"	K 58 S T 29フク土	暗灰色	灰色		
155	P 2.434	"	"	"	K 60 II	黄灰色	黒色		
156	P 4.154	"	"	"	P 55 I	赤褐色	黄白色		
157	P 2.937	"	"	"	O 54 II	"	"		
158	P 3.058	"	45	練鉢	S E 10フク土	黒色	黒色		
159	P 4.558	"	"	"	S H 03フク土	黒色	黄灰色		

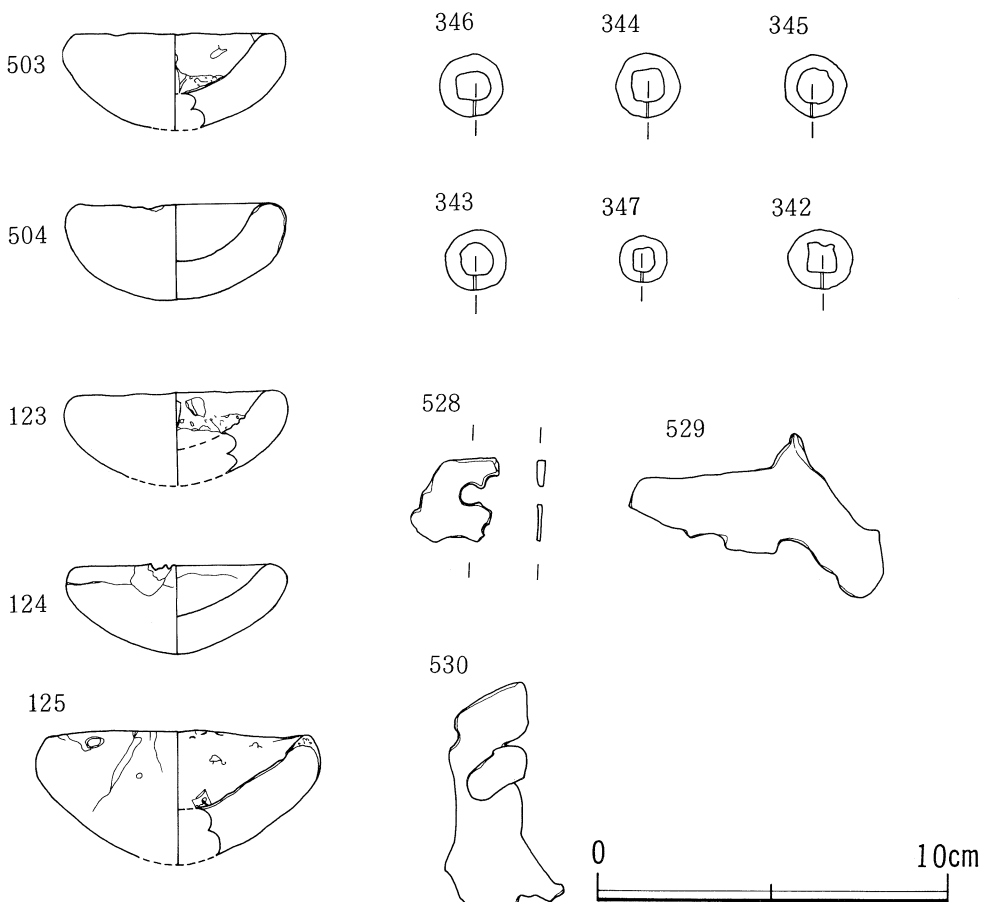
### 9. 溶解物付着土器 (Fig. 40, PL. 42)

溶解物付着土器は、銅などを溶かした坩堝と考えられる素焼きの土器で、一律に手びねり成形、饅頭を逆さにした形状を呈する。破片も含めて、50点の出土があった。器体の厚さは、1.0 cm～1.5 cm内外、口径も6.0 cm～8.0 cm内外のものが多く、あまり大型のものはみられない。内面から口縁部にかけて緑色あるいは赤色がかかった溶解物が付着し、内外面に高温のため生じたと思われる亀裂が数多く存在する。(120～125・503) 一部には、内面などに溶解物が付着せず坩堝としての機能をはたす前の段階、未使用のものもみられる。(504)

Ch. 8 遺物挿図・図版対比表 (溶解物付着土器)

※本資料が平場上面でかなりの数を出土するにもかかわらず、遺構に伴うことが少ないことは、機能を単に坩堝としてよいのか疑問な点が多い。Fig. 40-342 などの座金・私鑄銭的遺物との成分分析を対比してみることも必要であろう。

No	遺物No	Fig	PL	名 称	出土区
120	P 1,281	—	42	溶解物付着土器	北館表探
121	P 1,942	—	〃	〃	I 59 II
122	P 1,428	—	〃	〃	N 47 III
123	P 4,670	40	〃	〃	O 54 II
124	P 4,704	〃	〃	〃	S E10フク土
125	P 6,183	〃	〃	〃	北館表探
503	P 3,012	〃	—	〃	I 55 II
504	P 5,534	〃	—	〃	ST12フク土



## 10. 土師器 (Fig.41, PL. 46)

出土した土師器は量的には多いが、そのほとんどが小破片である。坏の8点を除いては、復元はもとより器形すら分類することのできない摩滅したものであるから一括して記す。

器形を分類すると、坏と甕に分ける事ができる。坏を細分すると底部が小さく器全体に深みがあり、腹部が丸みをもちながら、口縁部がうすく外反するもの(160)と外反しないもの(161)、又底部が広く底辺の部分が外側に多少張り出して立ち上がりかゆるくて直線的のびてるもの(162・163)など器形にかなりの年代的新旧があるように思われる。色調は、甕は明褐色を呈するものと灰褐色を呈するものがある。坏では、赤褐色に近い明るい色調のものと灰褐色の全体的に白っぽい感じのものがある。胎土は、甕は石英質の砂を相当量混入させて焼き上がりも良好で器全体に安定感のあるものと、砂の他に粗い礫や他の不純物を混入した粗雑なものがあり、そのためか器全体がザラザラし亀甲状のヒビができて表面より剥離しやすい雑な器がある。坏も類似するが、土こしが充分で胎土に混入している石英質の微砂も均一性をもち、焼きしめをしたような器がみられる。調整としては、ハケメ、ヘラミガキ、湿性布類によると思われる横ナデがみられる。

## 11. 須恵器 (Fig.41, Fig.42, PL. 46, PL. 47)

土師器同様に出土状況も層的にも一定せず、全体に散らばっている状態で出土している。

器形は、坏・甕・壺(長頸・短頸)・皿等であるが、いずれも破片で完形品はない。

坏・皿をみると、すべてがロクロ水挽きであり、底部は糸切りの切り離し技法を用いて調整は行われていない。胎土はきめこまかく微砂の混入がみられる。色調は青灰色と灰色を呈するものと赤褐色を呈するものがある。又重ね焼きしたとみられる火だすきがあるもの(165・166)、不均質に白っぽい自然釉のかかっているもの、全体に光沢のあるものなど、焼成時の強弱位置からくるものであろう。特に赤褐色の器(171)については分類上別にすべきか今後の問題である。

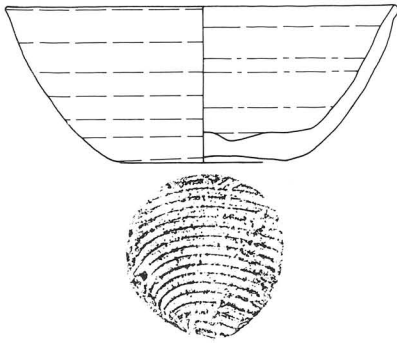
甕については、外面に叩き目のある大型のものと小型でロクロ使用痕のあるものがみられる。焼成は良好であるが、土こねが不十分なためか大型の甕に腹部に肉離れのように中空になっているものがある。

壺は中型短頸が多く小型の甕に類似する。篋書記号のある破片が8点ほど出土し、この記号については諸説があるが、一般的には須恵器そのものは協同生産体制で作られている為、その中での工人の目印と言われている。

は、M(178)、V(179)、X(177)、∩(176)、大型甕は、Λ(172)、中型壺は、小(175)、又(173)、川(174)などである。書かれている箇所は壺・甕は頸部と肩部、坏は胴部下位に認められた。県内での報告例は、昭和50年五所川原市前田野目砂田窯があり、その中で27例ほど表わされている。今回の8点の中の4点(川、川、Λ、X)が27例の中にみられる。

Fig.41 土師器・須恵器実測図

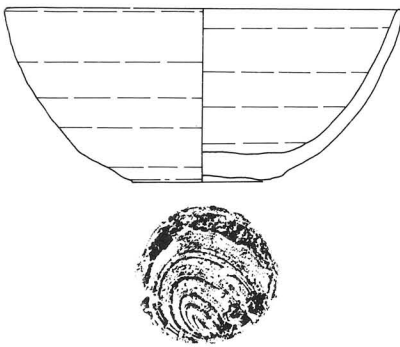
160



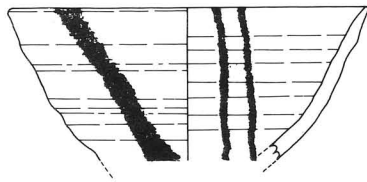
164



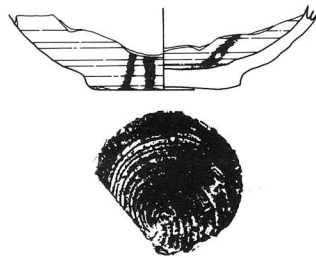
161



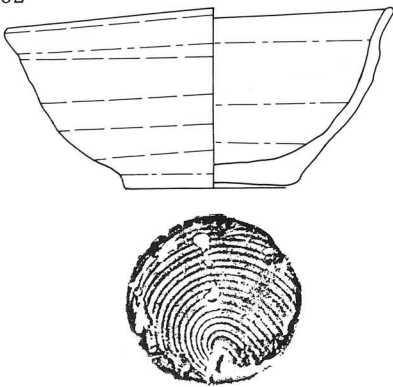
165



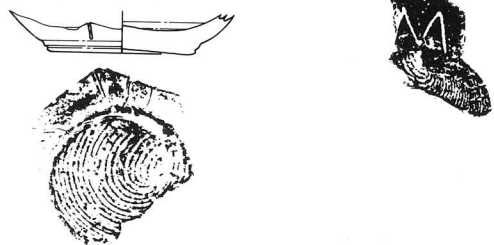
166



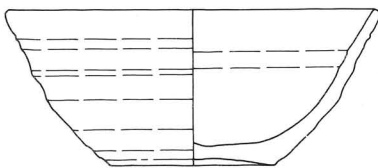
162



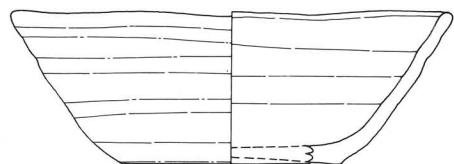
169

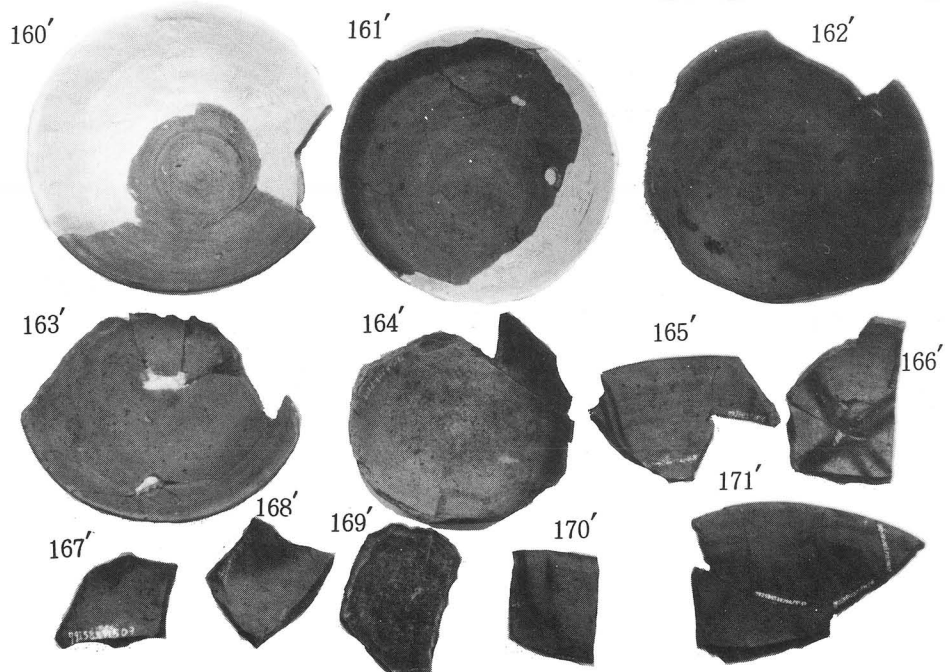
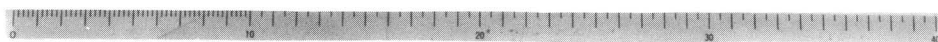
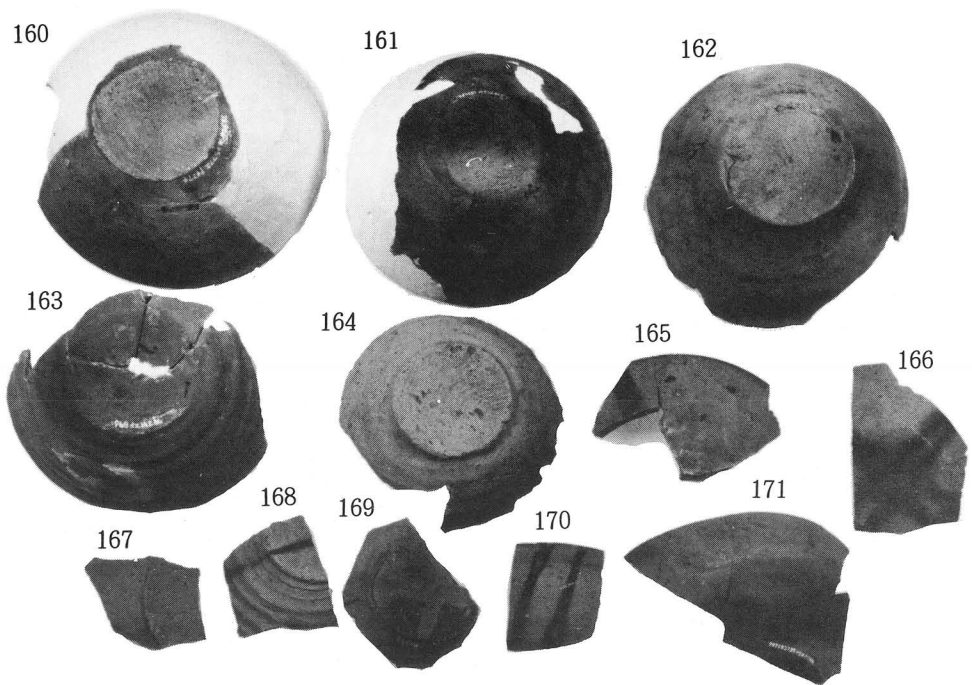


163



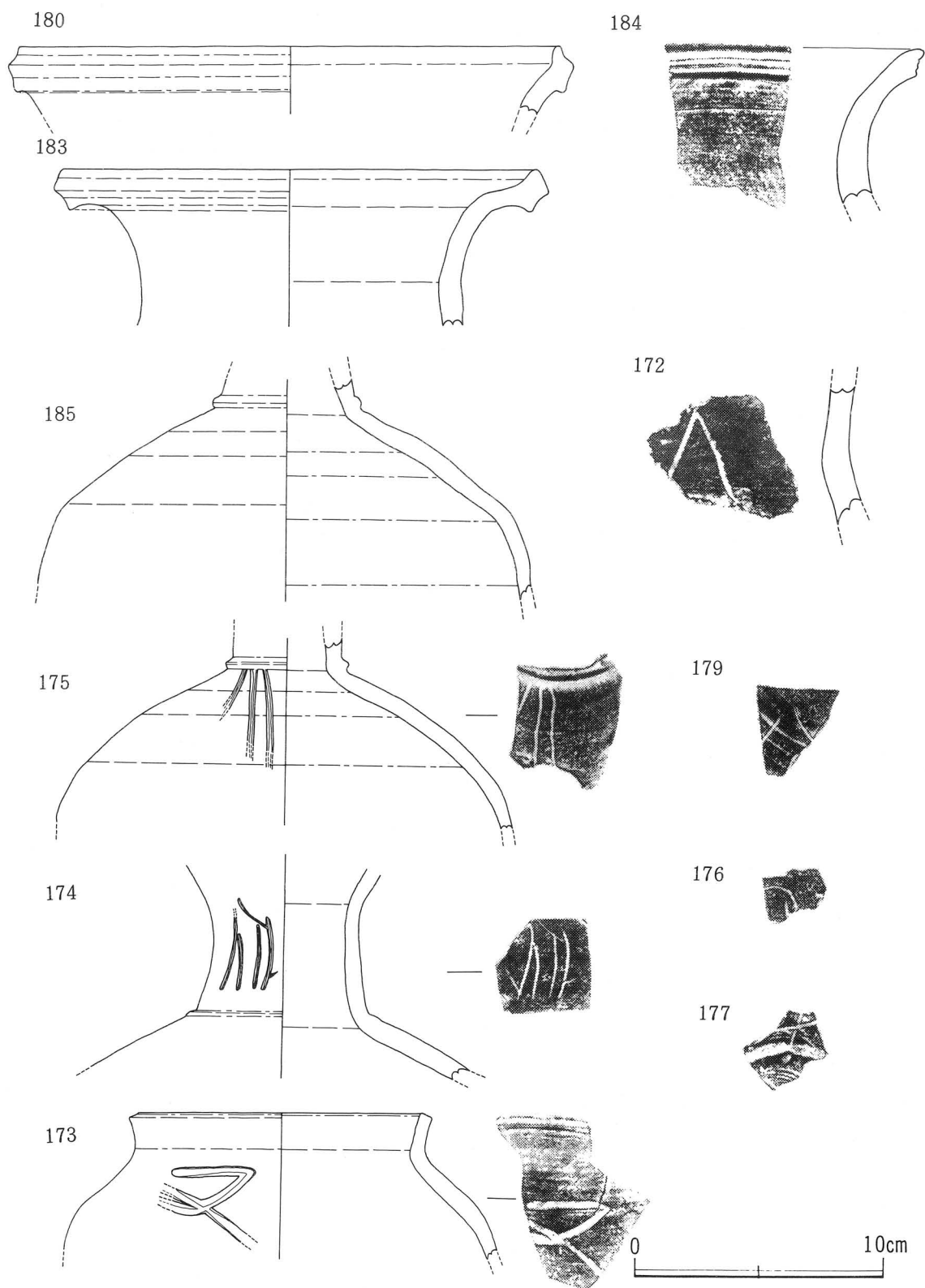
171

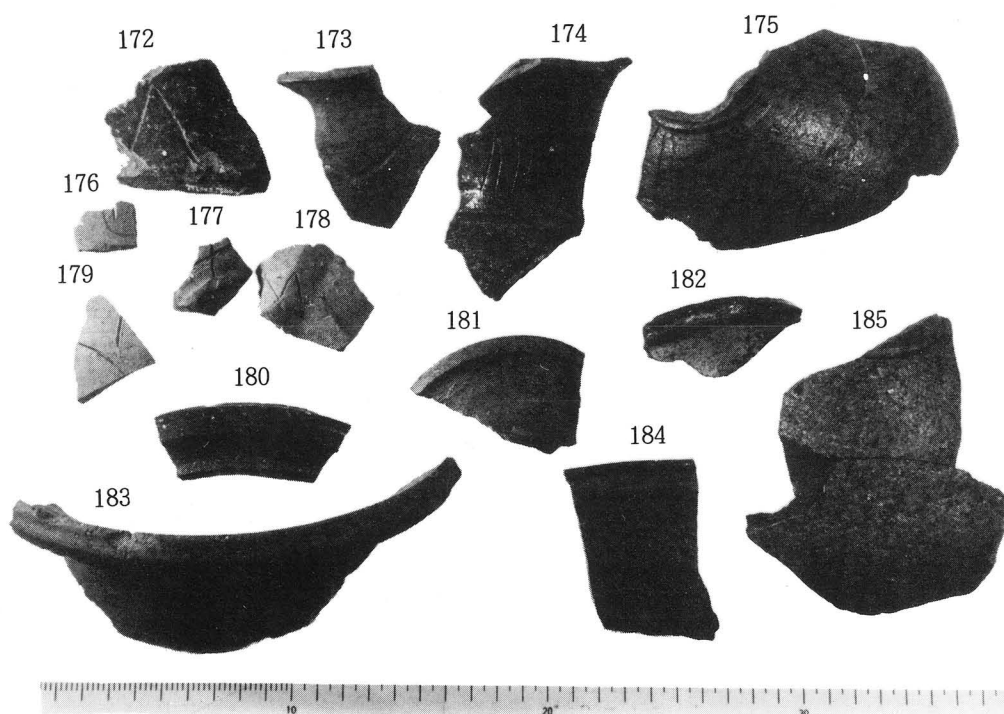




土師器・須恵器

Fig.42 須恵器実測図





須恵器

## Ch. 9 遺物挿図・図版対比表（土師器・須恵器）

No.	遺物No.	Fig.	PL.	名 称	出 土 区	特 徴
160	P 4,274	41	46	土師器（坏）	J 58 S X 05 フク土	糸彻底
161	P 4,275	"	"	"（"）	J 58 S T 39 フク土	"
162	P 4,280	"	"	"（"）	J 58 S X 05 フク土	"
163	P 896	"	"	"（"）	J 59 II	"
164	P 179	"	"	"（"）	M 60 フク土	"
165	P 2,576	"	"	須恵器（"）	J 58 II	火だすきあり
166	P 4,881	"	"	"（"）	S T 28 フク土	"
167	P 1,503	—	"	土師器（"）	I 58 II	"
168	P 25	—	"	須恵器（"）	G 57 II	火だすきあり
169	P 4,354	41	"	"（"）	K 60 フク土	"
170	P 2,838	—	"	"（"）	J 58 II	"
171	P 5,036	41	"	"（"）	J 58 フク土	"
172	P 5,606	42	47	"（甕）	I 55 II	篋書記号あり
173	P 1,496	"	"	"（壺）	I 58 II	"
174	P 3,851	"	"	"（"）	S E 10 フク土	"
175	P 2,877	"	"	"（"）	ST 31 フク土	"
176	P 141	"	"	"（坏）	L 59 II	"
177	P 589	"	"	"（"）	L 59 II	"
178	P 5,238	41	"	"（"）	S X 01 フク土	"
179	P 5,708	42	"	"（"）	K 60 S T 14 フク土	"
180	P 2,135	"	"	"（甕）	K 59 II	"
181	P 1,495	—	"	"（壺）	I 58 II	"
182	P 2,225	—	"	"（"）	J 60 II	自然釉あり
183	P 3,849	42	"	"（甕）	S E 10 フク土	"
184	P 3,170	42	"	"（"）	北館表採	"
185	P 2,828	"	"	"（壺）	M 58 II	自然釉あり



## B、鉄製品

鉄製品を機能面から大別すれば、武具、建築工具、調理具、灯火具、化粧具などが存在し、錆化が進んだり、破損しているため明確に名称をあげられるものは少ない。台帳に記載した総数は620、そのうち釘が224本と全体の34%を占め、その他用途不明なものが174個と多数存在するため、今回は特徴ある遺物を主として述べようと思う。

### 1. 刀 (Fig. 43, PL. 48)

刀あるいは刀子と思われるものは4点の出土があった。

186 : 茎の部分だけで刃部が欠損している。基部から4.9 cmの所に径0.3 cmほどの目釘穴がみられ茎の大きさから、刀渡り30 cm以上の刀と推定される。

190 : 刃部と茎の両端が欠損している。刃幅が2.8 cmもあり、大きい刀と思われるが錆化が激しいため詳細は不明。

191 : 刀渡り17.5 cm、茎4.5 cmを計る。反りはなく背は直線的である。

192 : 刀渡り21.4 cm、茎7.5 cmと推定される。刃部先端の刃幅が2.9 cmと基部の2.2 cmより0.7 cmほど広がり、反りも約0.7 cmほどみられる。茎には、径0.3 cmほどの目釘穴が存在する。腰刀の類と考えられる。

### 2. 鉄鎌 (Fig. 43, PL. 49)

鉄鎌は、根の形状から数種類に分けられる。

I類 根が扁平な三角形を呈するもの。(255・260・261)

255 : 茎が4.0 cmと他の二者に比較して小型である。

260 : 茎が5.0 cm、筥被は円形を呈している。

261 : 茎が5.9 cm、根から筥被までの長さが、他の二者より長くスマートな形である。

II類 根が扁平な剣先状を呈するもの。(258・259・262)

I類よりも根の長さが顕著なため、両刃の剣状を呈するものである。本来はI類の中に含まれるものと考えられる。

258 : 茎が4.1 cm、根から筥被にかけて細長くなっている。

259 : 茎が4.4 cm、両刃先が摩滅している。

262 : 茎が9.0 cmと最も長く、根も先が狭まった形状を呈している。

III類 根が鑿状を呈するもの。(257・507・508)

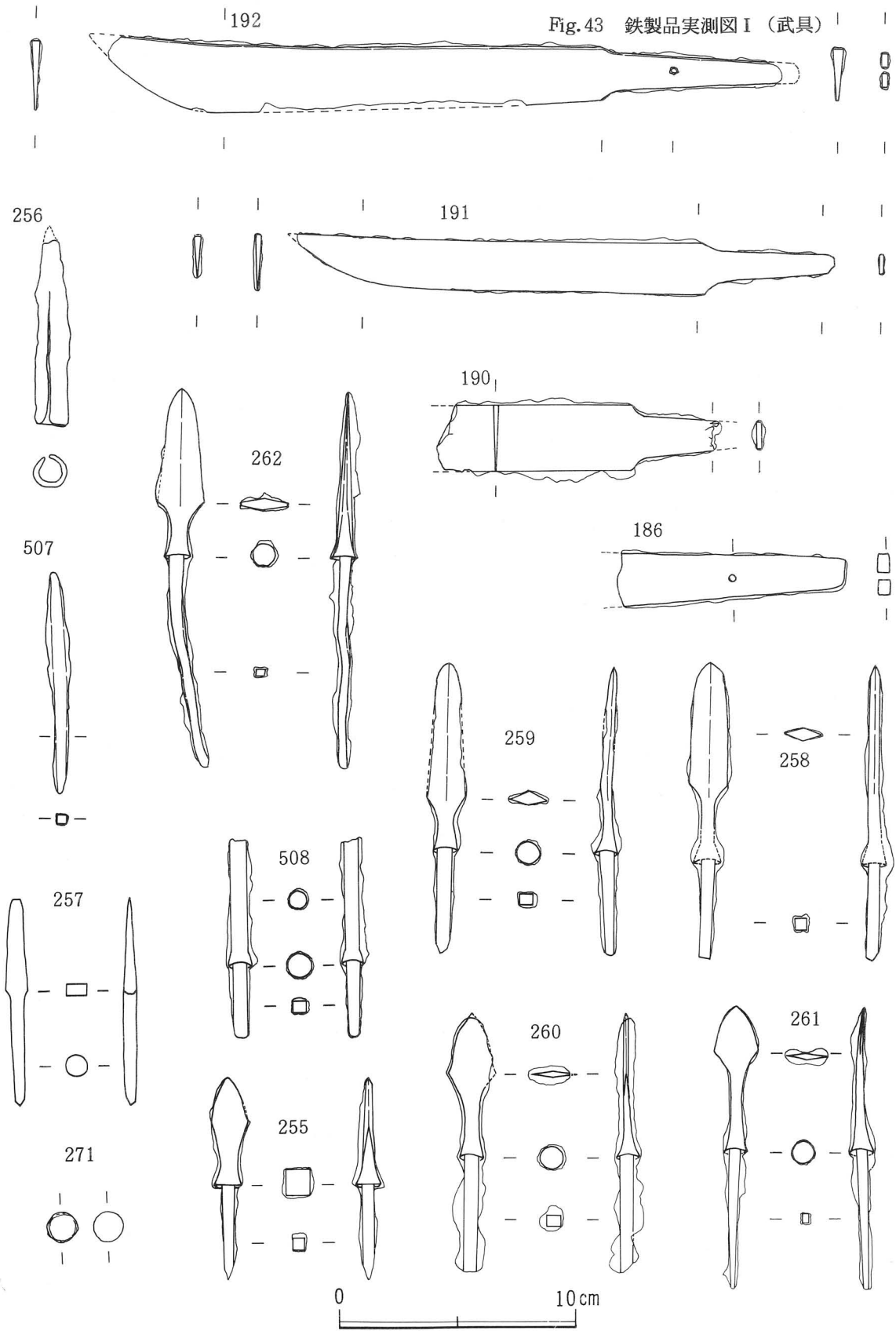
257 : 茎の断面は円形を呈し、根の部分が角状の形態を有する。

508 : 根先が欠損しているため詳細は不明であるが、根が円形の断面、茎が角を呈する。

507 : 根と茎が明確でなく、根先に関しては257と同じ形状を呈する。

IV類 鎌というよりも槍に近いもので、先端を尖らせた鉞状のもの。(256)

Fig. 43 鉄製品実測図 I (武具)



### 3. 小札 (Fig.44, Fig.45, PL. 49)

小札は、総数で46個出土し、中には両面に黒漆が付着しているもの(218)、部分的に痕跡のみられるもの(215, 236, 225, 224)がある。また、小札を縦方向に円筒状に加工したものが存在する。当初、小札であることが理解できず、小川貴司氏に遺物をごらんにいれた時に教示されたものである。類例があったらお知らせ願いたい。

さて、出土した小札をその形態から4タイプに分けて説明する。

Aタイプ — 上部が斜めに角度を持ち、2例に穿たれた穴のうち長辺に7個、短辺に6個の穴が穿たれているもの。穴数13個。

Bタイプ — 上部中央にえぐりを持つ山型のもので、いわゆる基石頭の小札。穴数14個。

Cタイプ — Aタイプよりやや小型で、上部の形は同じだが2列各7個の穴数があるもの。穴数14個。

Dタイプ — ほぼ長方形に近く、3列各6個の穴が穿たれたもの。いわゆる三目札。

以上のA～Dまでの4タイプが基本形態であり、明確に形態を判別できないものはEタイプとして一括した。また、前述の円筒状に加工した小札をFタイプとすると、基本形態に則した場合Bタイプ8個、Cタイプ2個、不明が1個となり、Bタイプに集中する傾向がある。

これらの小札を、出土区・遺構別にみると下記の通りとなる。

Ch.10 小札出土区別一覧表

発掘区	遺構名	層位	A	B	C	D	E	FB	FC	FE	G	計
I 58	S E 10	フク土		1	1							2
〃	—	II						1				1
K 58	—	II				1						1
L 58	—	II	1				1				1	3
〃	S T 32	フク土	1									1
M 58	—	II							1			1
〃	S T 34	フク土		1			1	2	1			5
〃	S T 35	フク土	1	1								2
〃	S T 36	フク土	3	1			2					6
〃	S E 16	フク土		2								2
I 59	S T 19	フク土		1								1
L 59	S T 12	フク土	2	1								3
〃	S T 13	フク土	1					4		1		6
〃	S T 10	フク土	1									1
〃	—	II			1	1					1	3
M 59	—	II						1				1
I 58	S T 22	フク土			1		1					2
I 60	—	II・III			2							2
K 60	S T 14	フク土	1									1
L 60	—	I					1					1
O 55	—	II					1					1
		計	11	8	5	2	7	8	2	1	2	46

Fig. 44 鉄製品実測図Ⅱ (小札)

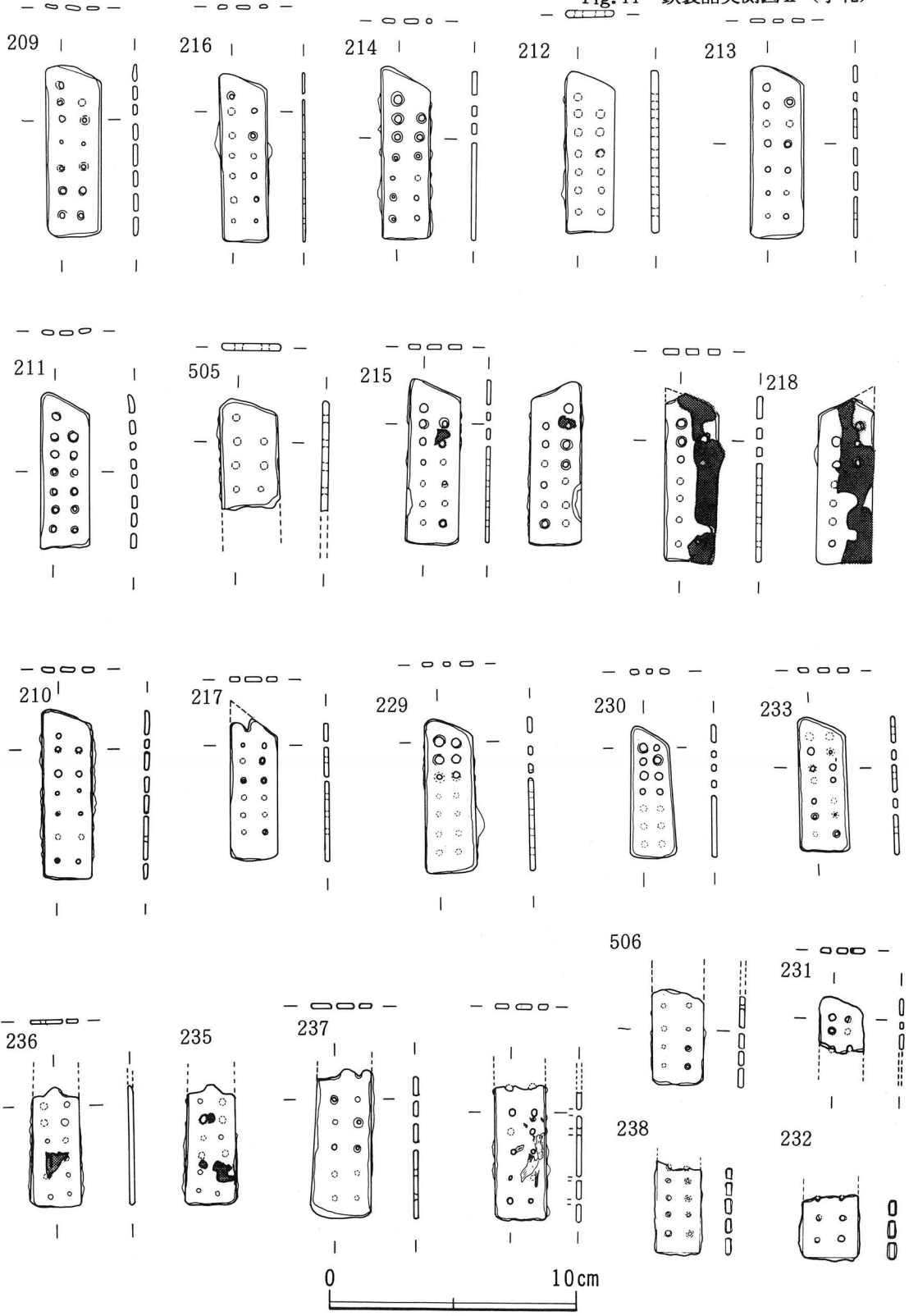
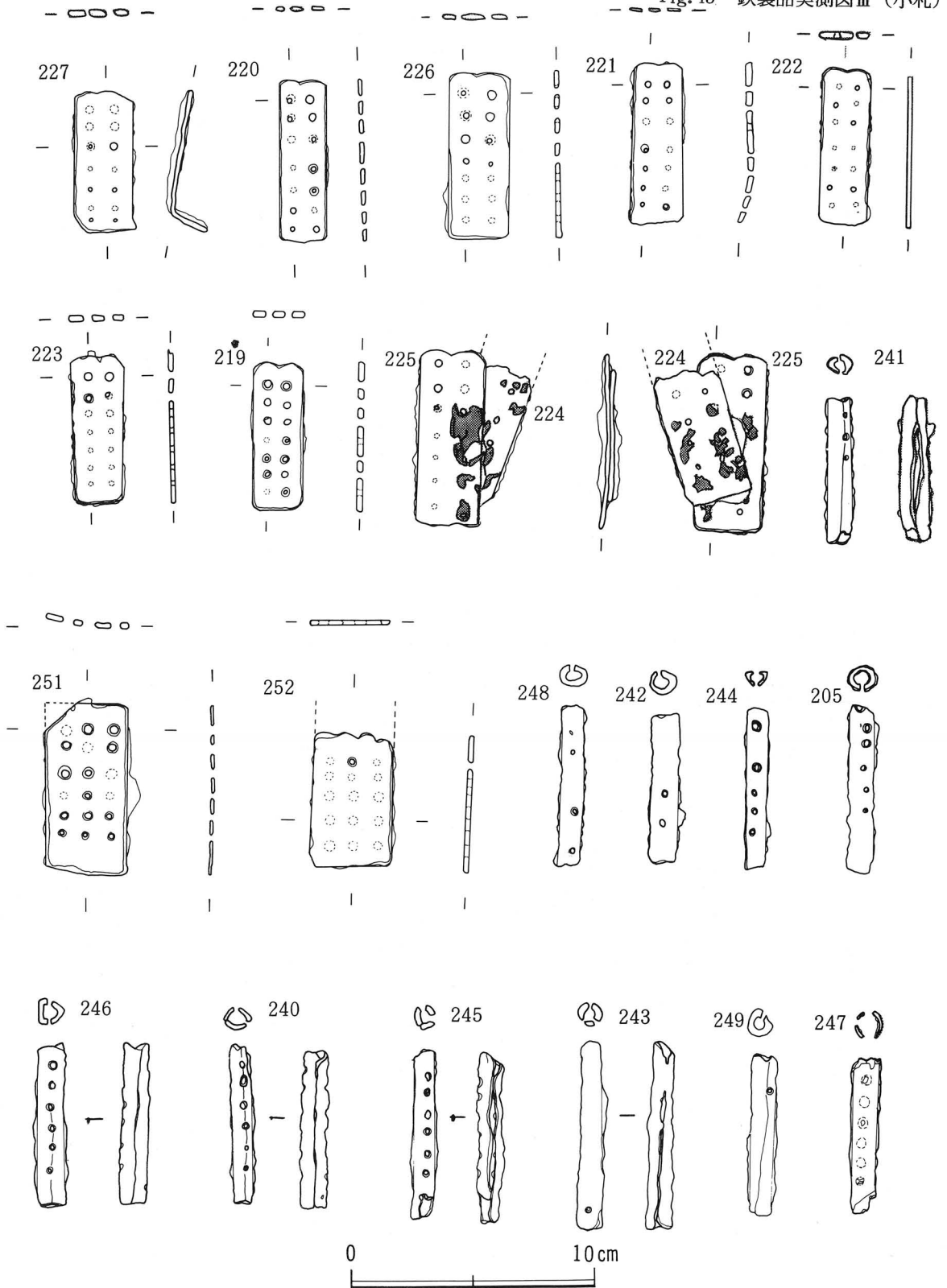


Fig.45 鉄製品実測図Ⅲ (小札)



Ch.11 小 札 計 測 表

No	タイプ	遺物No	Fig.	PL.	出土区	長さ (cm)		幅 (cm)	厚さ (cm)	穴 数	備 考	
						長	短					
218	A	F-387	44	49	S T 12フク土	7.1	5.9	2.1	0.25	6 [13]	漆付着	
213	"	509	"	"	M58ST35フク土	7.0	5.9	2.2	0.25	9 [〃]		
214	"	233	"	"	S T 12フク土	7.0	5.9	2.0	0.2	12 [〃]		
209	"	363	"	"	M58ST36フク土	7.0	5.0	2.2	0.2	11 [〃]		
216	"	316	"	"	M58ST36フク土	6.8	6.0	1.9	0.1	7 [〃]		
210	"	365	"	"	M58ST36フク土	6.8	6.1	2.0	0.2	11 [〃]		
215	"	1	"	"	L60ST13フク土	6.7	5.7	2.1	0.2	8 [〃]	漆付着	
212	"	510	"	"	S T 32フク土	6.6	5.5	2.0	0.3	0 [〃]		
211	"	360	"	"	S T 10フク土	6.4	5.4	2.0	0.25	13		
217	"	551	"	"	K60ST14フク土	5.3	4.8	1.9	0.2	6 [13]		
505	"	39	"	"	L 58 II	4.5	3.4	2.4	0.3	0		
224	E	F-188	—	—	S E 10フク土	5.5		2.3	0.15	?	漆付着	
225	B	F-187	—	—	S E 10フク土	7.3		2.8	0.2	6 [14]	漆付着	
226	"	369	45	49	M58S T35フク土	6.8		2.4	0.2	8 [〃]		
221	"	364	"	"	M58S T36フク土	6.7		2.1	0.25	9 [〃]		
227	"	273	"	"	M58S T34フク土	6.7		2.4	0.2	6 [〃]		
220	"	262	"	"	M58S E16フク土	6.6		1.9	0.15	9 [〃]		
222	"	263	"	"	M58S E16フク土	6.4		2.0	0.2	5 [〃]		
223	"	232	"	"	S T 12フク土	6.1		2.1	0.2	4 [〃]		
219	"	343	"	"	S T 19フク土	6.1		2.0	0.25	12 [〃]		
229	C	F-371	44	49	S E 10フク土	6.3	5.2	2.0	0.2	6 [14]		
233	"	261	"	"	I 60 III	5.4	4.5	1.9	0.2	7 [〃]		
230	"	11	"	"	L 59 II	5.3	4.3	1.9	0.2	8 [14]		
231	"	141	"	"	L 60 II	2.0	1.7	1.7	0.15	3		
—	"	458	—	—	S T 22フク土	1.2		2.1	0.1	2		
251	D	173	45	49	L 59 II	7.0		3.4	0.1	13 [18]		
252	"	89	"	"	K 58 II	5.5		3.3	0.2	1 [〃]		
235	E	393	44	49	O 55 II	6.0		2.3	0.2	6		
237	"	348	"	"	M58S T36フク土	5.4		2.1	0.2	8	木付着	
236	"	603	"	"	S T 34フク土	4.8		1.9	0.2	6	漆付着	
506	"	366	"	—	M58S T36フク土	3.8		2.1	0.2	3		
238	"	148	"	49	L 60 I	3.7		1.8	0.15	8		
239	"	457	—	"	S T 22フク土	3.3		2.5	0.1	6		
232	"	38	44	"	L 58 II	2.6		2.2	0.2	4		
254	G	403	46	49	L 58 II	8.4		4.7	0.3	20		
253	"	155	"	"	L 59 II	5.6		4.1	0.2	4, 6		
No	タイプ	遺物No	Fig.	PL.	出土区	長さ (cm)		内径 (cm)	外径 (cm)	円周 (cm)	穴数	備 考
						長	短					
205	F B	611	45	49	S T 34フク土	6.9		0.6	1.2	3.8	6	
246	"	614	"	"	S T 13フク土	6.8		0.6	1.1	4.2	9	
248	"	608	"	"	S T 13フク土	6.7		0.6	1.1	3.9	8	
249	"	609	"	"	S T 13フク土	6.6		0.5	1.1	3.9	2	
244	"	615	"	"	S T 13フク土	6.5		0.5	0.8	3.4	8	
240	"	392	"	"	M 59 II	6.4		0.6	1.1	3.5	13	
242	"	607	"	"	S T 34フク土	6.2		0.5	1.1	4.1	4	
241	"	294	"	"	I 58 II	6.1		0.4	1.0	3.8	4	
245	F C	391	45	49	M 58 II	8.0	6.4	0.5	1.0	3.6	12	
243	"	268	"	"	M58S T34フク土	7.7	6.9	0.5	1.0	3.5	3	
247	F E	610	45	49	S T 13フク土	6.3	0.9	0.7	1.1	4.3	6	

Gタイプとして表にあらわしたものは、厳密には小札でなく単なる加工品とも考えられるが、穿孔の方法や形状などから小札の未成品あるいは武具的な機能を有するものと思われるので併記した。(253, 254)

小札を、出土状態の面からみると、平場遺構確認面(一般的に第三層上面)と竪穴遺構の覆土から検出される事が多く、S T34、S T36、S T13は特に集中して出土している。しかし、先に分類した各タイプの偏差としては、S T13がF B、S T36がAタイプを多く出土する他は、かなりのばらつきがありいかなる廃棄行為がなされたのか判断に苦しむ所である。

小札とともに革札が1点出土している。(272) 銹を除去した段階で黒漆を塗った部分だけ検出され、革本体は残存していない。

#### 4. 鍋 (Fig.46, PL.48, PL.50)

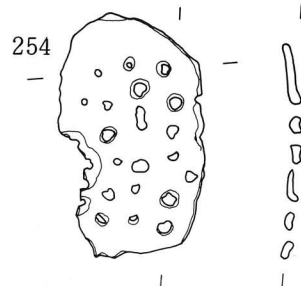
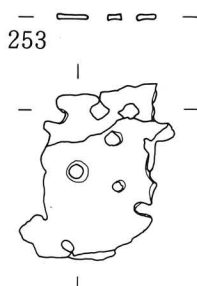
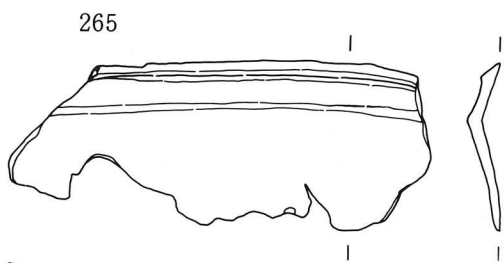
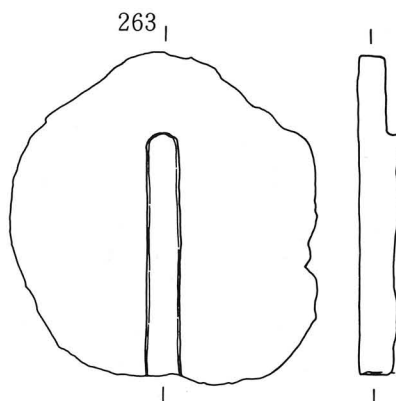
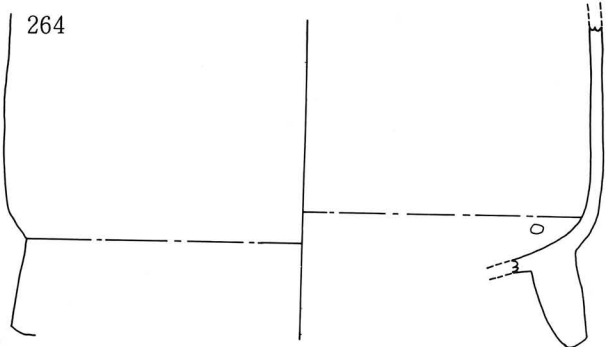
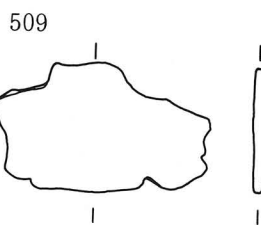
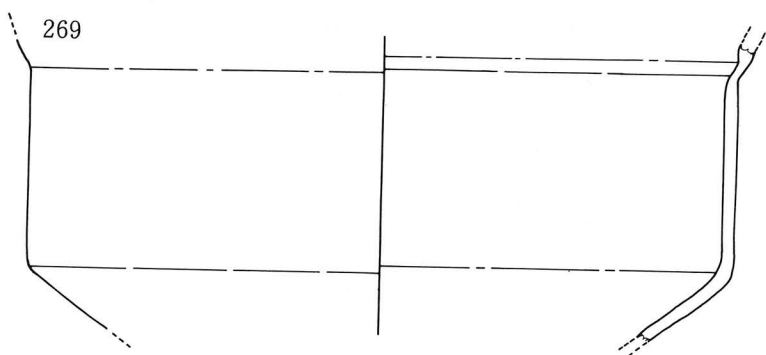
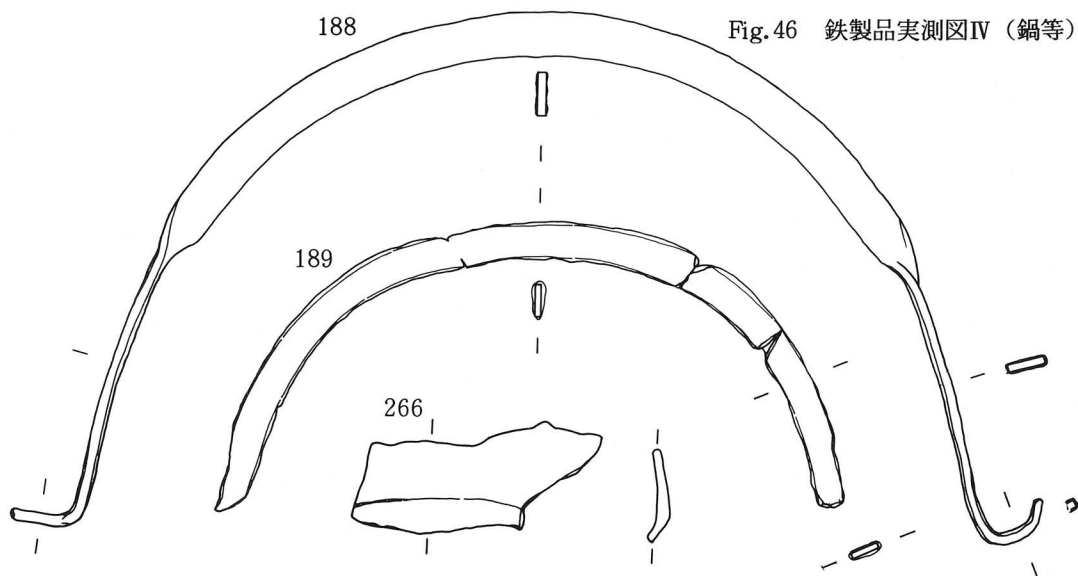
鍋は小片としての出土が大部分を占め、全体の器形を知り得る資料は少ない。一般的に、口縁部がくの字状に外反し、底には3足を持つものが多いようである。鍋の鉷と思われる資料も出土しているので一緒に紹介する。

- 188： 鍋の鉷で、厚さ0.4cmの板を両側右方向にねじりを入れ、接合部は丸状の断面に成形している。片方の接合部は上方に折り曲げたような形状になっている。鍋からの高さ約17cmを計る。
- 189： 同じく鍋の鉷であるが、接合部が残存しておらず、188でみられたねじりを入れないようである。
- 269： 推定幅23.5cmを計り、胴部から底部にかけてくの字状に折れ曲がる。
- 264： 足を有する鍋の破片で、足の位置は底部から胴部にかけての立ち上がり部分にある。推定幅19.5cmを計る。
- 265： 鍋の口縁部で、くの字状に外反し、内面に一条の隆起がみられる。
- 263： 中央に幅1cm、高さ0.5cmの隆起物を有するもので、釜などの部分品と考えられる。
- 266 , 509 はともに鍋腰部片である。

現在のところ、内耳の鍋はみあたらず、口縁上部に耳を有する鍋だけである。

188

Fig.46 鉄製品実測図Ⅳ(鍋等)



0 10cm



## 5. 火打金 (Fig.47, PL.48)

火打金は、形態から2タイプに分類できる。

I類 いわゆる燧鎌と呼ばれる携帯用のもので、二等辺三角形を呈し上部中央に1孔を有し、底辺両側を折り返えしぎみに反り上げる形態のもの。

198：三角形の高さが低く、底辺の折り返しが上部中央に向う鋭角を呈する。

199：前者より三角形の高さは高いが、折り返しが鋭角になっている。

203：錆化が激しく、中央部の孔は確認できなかった。底辺の幅が狭く折り返しも鈍角を呈するようである。

II類 木部にかすがい状の鉄を打ち込み、手に持って火打石に打ちつけるもので、出土品の中には、本部が残存しているものもみられる。

200：かすがい状の二突起が明瞭に残り、出土品の中では最も大きい。

201：S T31床面から出土している。木部が残存しており、木部から露出している部分は1.8cmで、打ちつける箇所に使用痕らしい凹凸がみられる。

202：部分的に木部が残存しているが、突起部は欠損している。

208：片側の突起が欠損し、薄手の製作品である。

火打金の厚さは、0.3cm～0.5cmのものが多く、大きさも10cm以下に集中している。

※ 本稿を脱稿した後、八戸教育委員会から火打金II類と紹介したもの(200, 201, 202, 208)が麻の繊維を取るための芋引金であるという教示を受けた。現存する火打金の形態との相違もみられ、芋引金の可能性が高いことを付記しておく。

## 6. 火箸 (Fig.47, PL.48)

火箸には、丸の断面を有するものと、角の断面を有するもの、あるいは併用するものなどがみられる。良質な製品にはねじりを入れるものが多い。

193：長さ39.7cmで出土品の中では最長のものである。上端には長さ12.5cmに渡ってねじりが入れられ、下方は角の断面を呈する。

194：長さ20.2cm、中央にねじれを持つ。断面は角。

この他、火箸と推定されるものに520～525があり520・521は角の断面、他は丸の断面を呈している。

## 7. かすがい (Fig.48, PL.48)

3点の出土があった。

195：長さ15.2cmを計る大型のもので、両先端部がやや広きぎみになっている。SE10の覆土から出土している。長持などの取手の可能性もある。

196：頭部の中央がへこんで、やや変形している。

197：片方の打ち込み部が長く、内側に曲っている。

Fig.47 鉄製品実測図V (火箸・火打金・他)

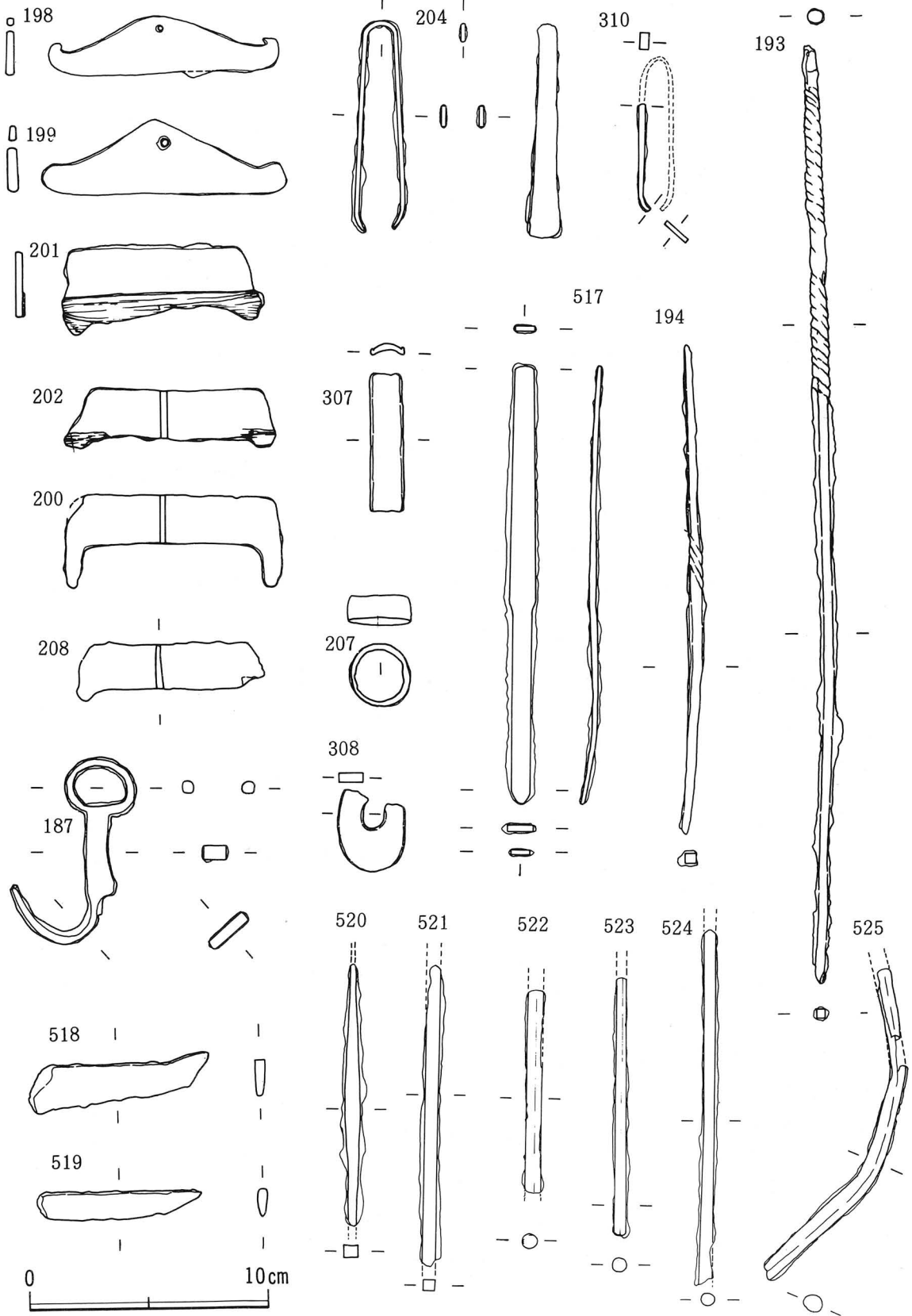
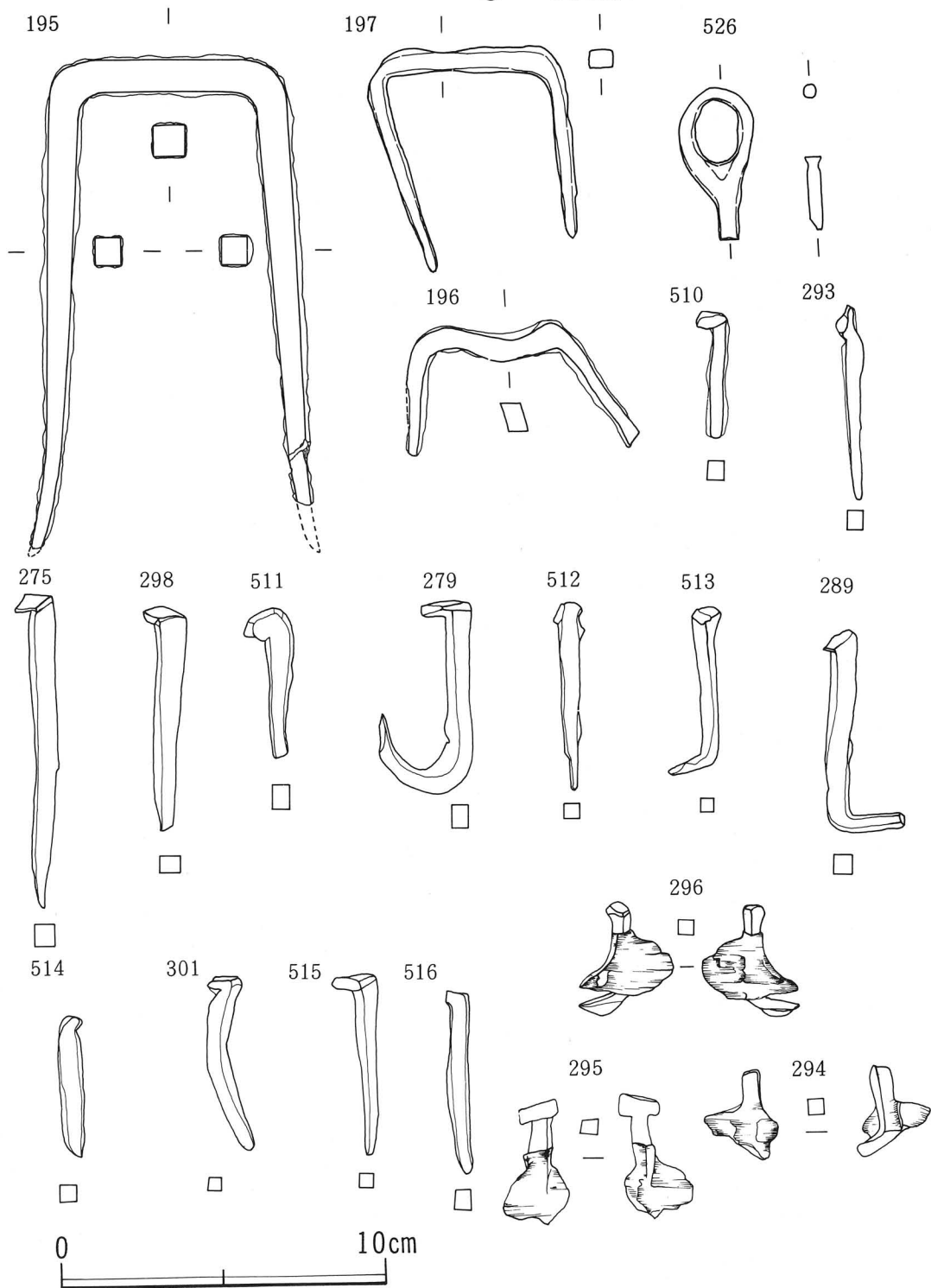


Fig.48 鉄製品実測図VI (釘・かすがい・他)



## 8. 釘 (Fig.48, PL. 50)

釘は総数224点の出土があった。そのうち、長さによって分類すると、

- (1) 0 ~ 3.3 cm 42本 (2) 3.3 cm ~ 4.95 cm 77本 (3) 4.95 cm ~ 6.6 cm 65本  
 (4) 6.6 cm ~ 8.25 cm 25本 (5) 8.25 cm ~ 13.2 cm 14本 (6) 13.2 cm 以上 0本  
 となり、2寸ないし1寸5分の釘が多用されていたことが知られる。

釘の頭部は、叩かれたためにL字状につぶされたものが多い。(274~283, 285, 287~304, 510, 511, 513~516) しかし、銀杏葉のように扁平に広がるもの(286・293)もあり未使用のものであろう。また、打ち込んだ木質部が付着している資料(294・295・296)もみられ、いずれもS T36の覆土から一括出土したものである。

## 9. その他

204 : (Fig.47, PL.48)毛抜きである。先端部は、やや広がった形状で現在のものと変わらない。

310 : ( " , PL.51)同じく毛抜きであるが、片方しか残存していない。

187 : ( " , PL.48)自在鉤の鍋などをつるす部分であろうか。

これ以外のものには、蹄鉄(313・321)、鎌(316)があり、出土層位から明確に中世の遺物と言いきれない面があり、他は用途が不明なため是非ご教示いただきたい遺物である。

Ch.12 鉄製品計測表(刀・火箸・火打金など)

No.	遺物No.	Fig.	PL.	名 称	出 土 区	計測値(長さ×巾×厚さ)	備 考
186	F 307	43	48	刀	L 55 II	9.8 × 2.5 × 0.6 cm	
187	F 265	47	"	鉤金具	I 59 S T 38 フク土	7.8 × 4.5 × 0.7	
188	F 402	46	"	鉷	O 55 II	34.5 × 1.3 × 0.4	
189	F 27	46	"	"	J 59 II	18.2 × 1.2 × 0.6	
190	F 514	43	"	刀	S T 27 フク土	12.1 × 3.1 × 0.5	
191	F 300	43	"	"	S T 27 フク土	22.6 × 2.3 × 0.3	
192	F 213	43	"	"	S E 10 フク土	28.1 × 2.9 × 0.6	
193	F 297	47	"	火 箸	M 58 S T 34 フク土	39.7 × 0.8 × 0.6	
194	F 536	47	"	"	S T 13 フク土	20.2 × 0.7 × 0.6	
195	F 239	48	"	かすかい	S E 10 フク土	15.2 × 1.2 × 1.1	
196	F 186	48	"	"	S T 12 フク土	7.1 × 1.0 × 0.7	
197	F 355	48	"	"	M 59 S T 10 フク土	5.9 × 0.8 × 0.5	
198	F 28	47	"	火 打 金	I 58 II	9.6 × 2.4 × 0.4	
199	F 203	47	"	"	S E 10 フク土	10.3 × 3.1 × 0.4	
200	F 276	47	"	葶 引 金	O 47 表土	8.9 × 4.0 × 0.4	
201	F 223	47	"	"	S T 31 床面	7.7 × 3.6 × 0.5	木部残存
202	F 400	47	"	"	S T 12 フク土	8.7 × 2.4 × 0.3	木部残存
203	F 44	—	"	"	I 58 II	5.9 × 3.1 × 0.4	
204	F 287	47	"	毛 抜	S T 34 フク土	8.9 × 0.9 × 0.3	
205	F 602	—	"	不明製品	S E 16 フク土	14.8 × 3.4 × 0.9	
206	F 4	—	"	止 具	L 60 II	4.1 × 3.0 × 0.5	
207	F 350	47	"	"	M 58 S T 34 フク土	4.6 × 2.4 × 1.1	
208	F 595	47	"	葶 引 金	I 55 II	7.7 × 1.9 × 0.3	

Ch.13 鉄 鍬 計 測 表

No.	遺物No.	Fig.	PL.	名 称	出 土 区	計測値(長さ×巾×厚さ)	備 考
255	F 412	43	49	鉄 鍬	I 58 S E 10フク土	8.6 × 1.7 × 0.5 cm	
256	F 230	"	"	"	S E 10フク土	7.8 × 1.5 × 1.4	
257	F 318	"	"	"	S T 27フク土	8.9 × 0.9 × 0.5	
258	F 341	"	"	"	M 58 S E 16フク土	12.6 × 1.8 × 0.7	
259	F 167	"	"	"	J 60 II	12.2 × 1.6 × 1.3	
260	F 254	"	"	"	S E 10フク土	10.7 × 0.9 × 0.6	
261	F 264	"	"	"	M 58 S E 16フク土	12.0 × 1.8 × 0.8	
262	F 234	"	"	"	S T 12フク土	16.0 × 1.9 × 1.2	方形ビット内
507	F 271	"	—	"	J 59 S X 01フク土	9.3 × 0.9 × 0.8	
508	F 449	"	—	"	S T 12フク土	9.5 × 0.9 × 0.8	方形ビット内

Ch.14 鉄製品計測表(鍋・他)

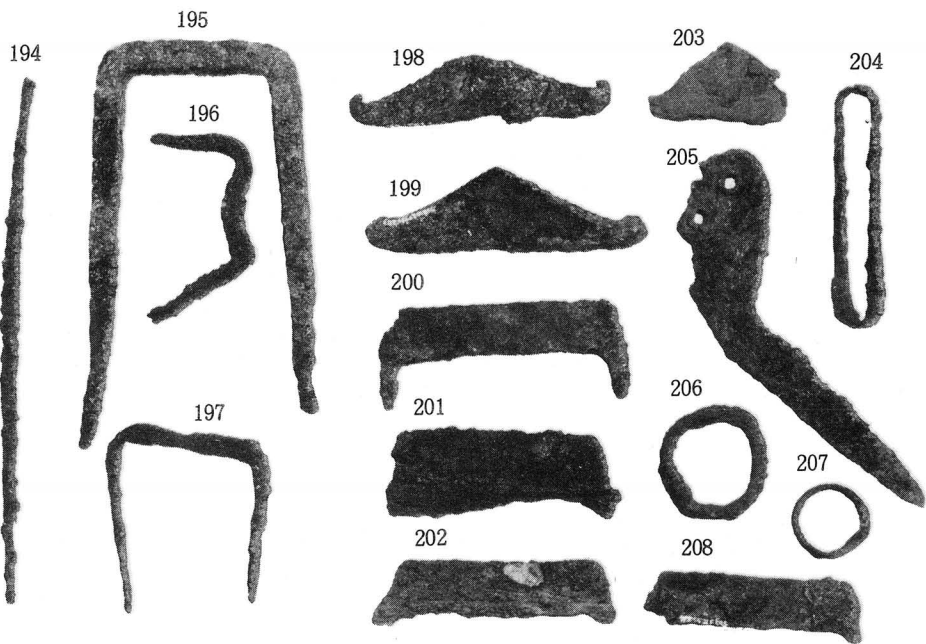
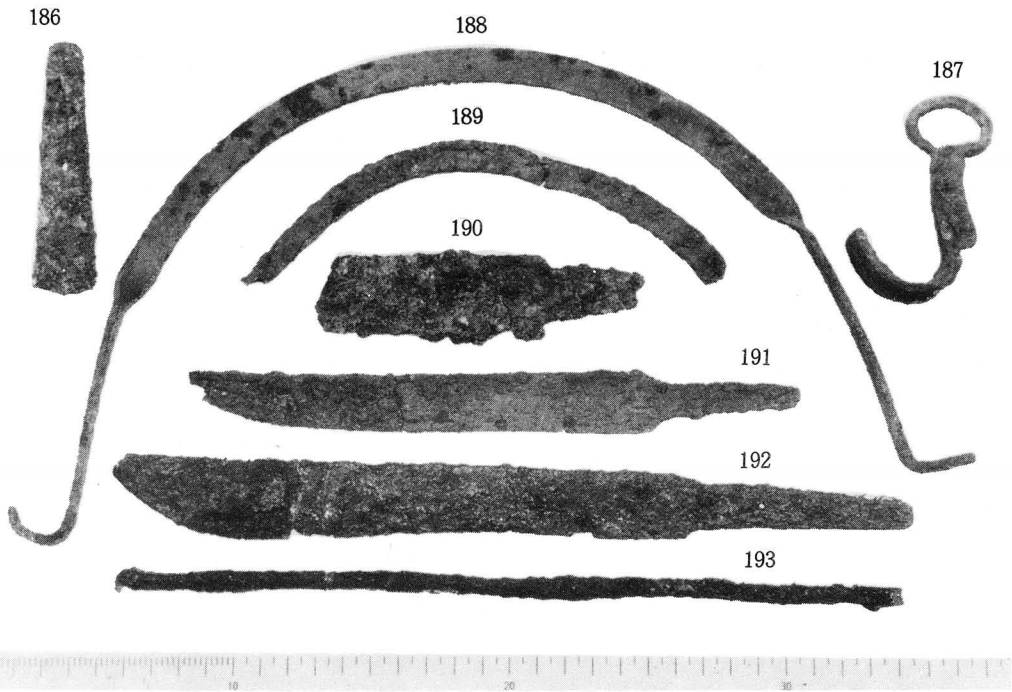
No.	遺物No.	Fig.	PL.	名 称	出 土 区	計測値(長さ×巾×厚さ)	備 考
263	F 215	46	50	鍋 ?	K 58 II	10.7 × 10.0 × 1.4 cm	
264	F 231	46	"	" (底足付)	S E 10フク土	10.7 × 8.9 × 0.4	
265	F 451	46	"	" (口縁)	S H 02フク土	14.0 × 5.4 × 0.4	
266	F 266	46	"	"	N 54 II	8.0 × 3.2 × 0.4	
267	F 606	—	"	"	S T 34フク土	7.7 × 4.1 × 0.7	
268	F 37	—	"	"	J 58 II	3.8 × 4.2 × 0.8	
269	F 225	46	"	"	J 58 II	9.5 × 8.9 × 0.6	
270	F 253	—	"	"	P 54 II	5.5 × 5.5 × 0.3	
271	F 313	43	"	鉛玉	表採	直径 1.9	
272	F 467	—	"	革札	I 58 S E 10フク土	5.9 × 2.3 × 0.6	
509	F 588	46	—	鍋	S T 27フク土	5.5 × 4.1 × 0.3	

Ch.15 その他の鉄製品計測表

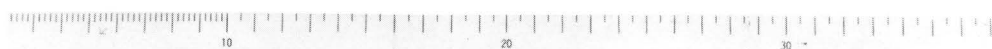
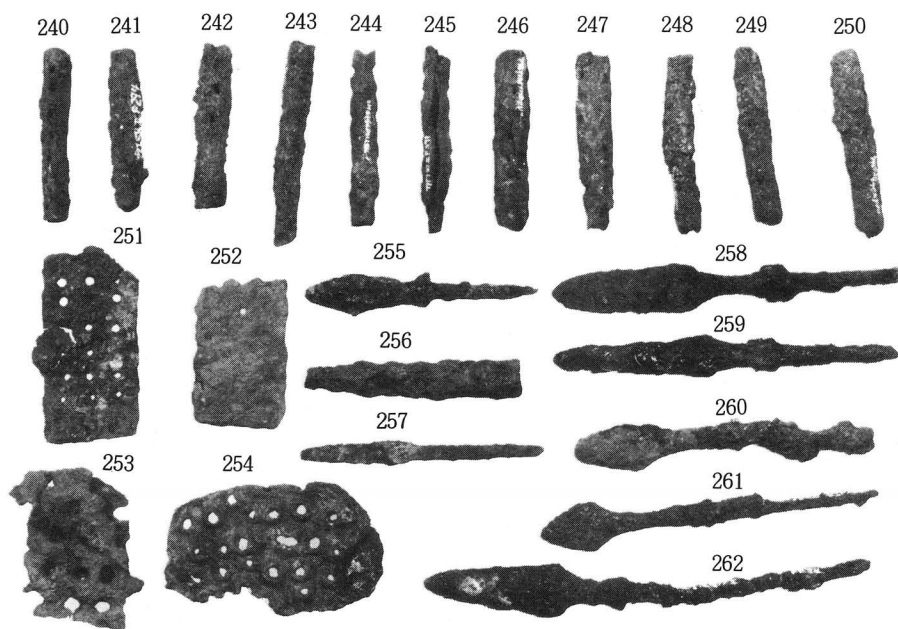
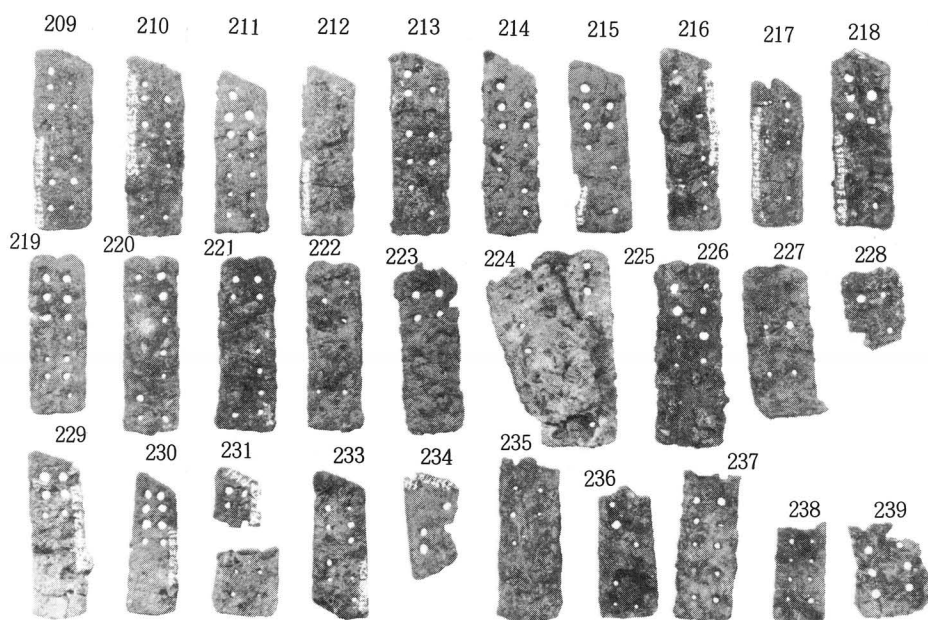
No.	遺物No.	Fig.	PL.	名 称	出 土 区	計測値(長さ×巾×厚さ)	備 考
305	F-240	—	51	不 明	S T 25フク土	10.3 × 1.2 × 0.4 cm	
306	573	—	"	"	S T 25フク土	9.4 × 1.3 × 0.5	
307	349	—	"	"	M 58 S T 36フク土	5.4 × 1.4 × 0.3	
308	7	—	"	"	M 60 II	3.5 × 2.8 × 0.5	
309	17	—	"	"	K 58 II	7.2 × 0.9 × 0.7	
310	301	—	"	毛抜き	I 58 S E 10フク土	4.2 × 1.2 × 0.3	
311	153	—	"	不 明	L 59 II	3.2 × 2.1 × 0.2	
312	125	—	"	"			
313	502	—	"	蹄 鉄	O 55 II	11.0 × 1.7 × 0.9	
314	433	—	"	不 明	J 55 II	11.6 × 1.8 × 1.0	
315	110	—	"	"	北館表採	8.2 × 1.5 × 1.7	
316	228	—	"	鎌	S T 15フク土	3.8 × 3.5 × 0.7	
317	427	—	"	不 明	K 55 II	8.7 × 2.1 × 3.4	
318	481	—	"	"	I 58 S E 10フク土	9.3 × 1.8 × 1.5	
319	475	—	"	"	J 55 II	3.8 × 0.5 × 0.5	
320	408	—	"	"	L 55 II	3.9 × 0.5 × 0.4	
321	434	—	"	蹄 鉄	I 55 II	11.8 × 1.9 × 1.1	
517	211	47	—	不 明	P 54 II	18.5 × 1.4 × 0.4	
518	63	"	—	刀 ?	K 58 II	7.7 × 1.4 × 0.4	
519	146	"	—	刀 ?	I 59 II	6.8 × 1.2 × 0.4	
520	382	"	—	鉄棒 (火箸)	I 58 S E 10フク土	10.9 × 0.8 × 0.6	
521	256	"	—	" ( " )	S T 20フク土	12.6 × 0.7 × 0.6	
522	543	"	—	" ( " )	I 55 II	8.4 × 0.7 × 0.7	
523	14	"	—	" ( " )	L 59 II	10.9 × 0.7 × 0.4	
524	461	"	—	" ( " )	S T 24フク土	14.8 × 0.6 × 0.5	
525	501	"	—	" ( " )	O 55 II	13.9 × 0.7 × 0.7	
526	539	48	—	はさみ	O 54土壘上面	4.8 × 2.2 × 0.5	

Ch.16 鉄釘計測表

No.	遺物No.	Fig.	PL.	名 称	出 土 区	計測値(長さ×巾×厚さ)	備 考
274	F 158	—	50	釘	ST15フク土	11.3 × 0.9 × 0.8 <sup>cm</sup>	
275	F 61	48	"	"	ST13フク土	9.9 × 0.8 × 0.7	
276	F 285	—	"	"	SE13フク土	8.2 × 0.9 × 0.7	
277	F 620	—	"	"	I55Ⅱ	8.3 × 1.6 × 0.8	
278	F 181	—	"	"	ST15フク土	6.7 × 0.7 × 0.8	
279	F 351	48	"	"	J59Ⅲ	5.8 × 1.0 × 0.6	
280	F 274	—	"	"	M58ST34フク土	5.0 × 0.9 × 0.8	
281	F 368	—	"	"	M58ST35フク土	5.7 × 1.5 × 0.5	
282	F 134	—	"	"	ST10フク土	6.2 × 0.6 × 0.6	
283	F 437	—	"	"	I55Ⅱ	6.2 × 1.1 × 1.0	
284	F 436	—	"	"	I55Ⅱ	10.1 × 0.7 × 0.6	
285	F 396	—	"	"	I55Ⅱ	4.8 × 1.5 × 0.6	
286	F 12	—	"	"	L59Ⅱ	7.3 × 1.3 × 0.2	
287	F 352	—	"	"	M59ST10フク土	5.9 × 0.8 × 0.5	
288	F 64	—	"	"	ST13フク土	7.9 × 0.8 × 0.7	
289	F 357	48	"	"	M59ST10フク土	6.1 × 1.0 × 0.7	
290	F 468	—	"	"	ST31フク土	8.2 × 0.9 × 0.8	
291	F 541	—	"	"	I55Ⅱ	6.6 × 1.2 × 0.6	
292	F 473	—	"	"	L58Ⅱ	4.8 × 1.1 × 0.5	
293	F 150	48	"	"	ST14フク土	6.0 × 0.6 × 0.6	
294	F 524	48	"	"	M58ST36フク土	2.6 × 0.6 × 0.6	木部付着
295	F 526	48	"	"	M58ST36フク土	3.7 × 1.3 × 0.5	"
296	F 525	48	"	"	M48ST36フク土	3.2 × 0.6 × 0.5	"
297	F 235	—	"	"	ST12フク土	9.1 × 0.8 × 0.8	
298	F 323	48	50	"	O47Ⅱ	6.9 × 1.0 × 0.8	
299	F 8	—	"	"	M59Ⅱ	4.9 × 1.3 × 0.3	
300	F 511	—	"	"	SE15フク土	5.9 × 1.1 × 0.6	
301	F 397	48	"	"	ST20フク土	5.4 × 1.1 × 0.6	
302	F 148	—	"	"	ST12フク土	4.4 × 0.5 × 0.5	
303	F 503	—	"	"	SE13フク土	4.2 × 0.8 × 0.6	
304	F 201	—	"	"	SE10フク土	5.1 × 0.7 × 0.8	
510	F 340	48	—	"	SE16フク土	3.9 × 0.9 × 0.6	
511	F 77	48	—	"	L59Ⅲ	4.0 × 2.3 × 0.2	
512	F 390	48	—	"	北館表採	5.6 × 0.8 × 0.6	
513	F 377	48	—	"	I58SE10フク土	5.0 × 1.1 × 0.5	
514	F 336	48	—	"	M58SE16フク土	4.4 × 1.3 × 0.8	
515	F 6	48	—	"	M60Ⅱ	5.8 × 1.4 × 0.1	
516	F 440	48	—	"	I58SE10フク土	5.6 × 0.8 × 0.6	

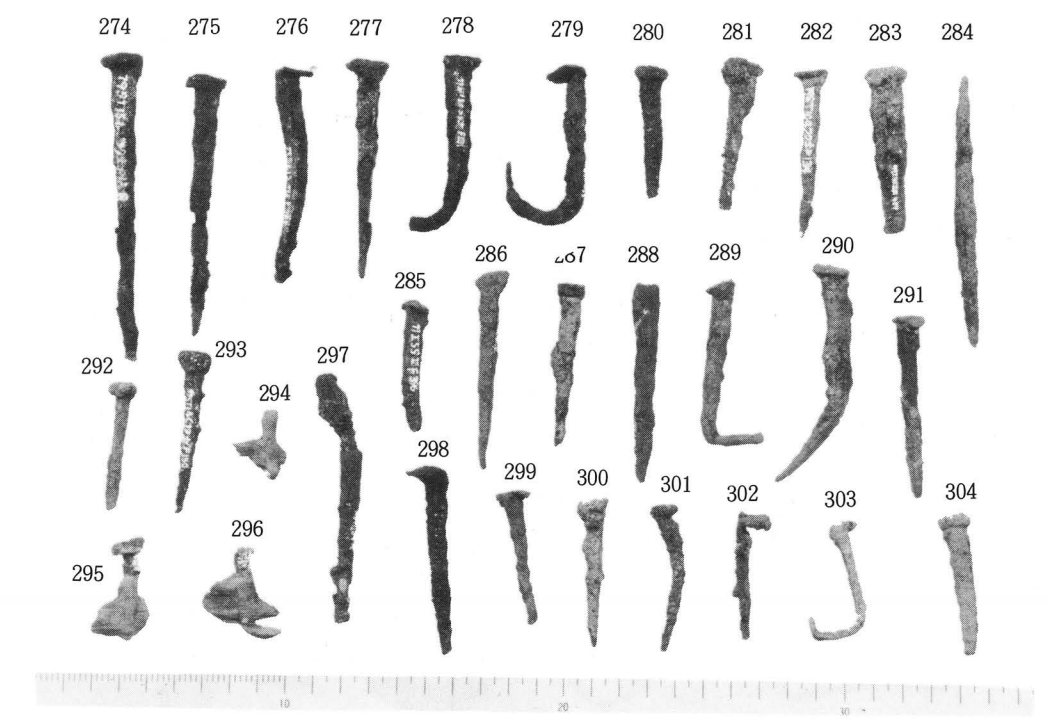
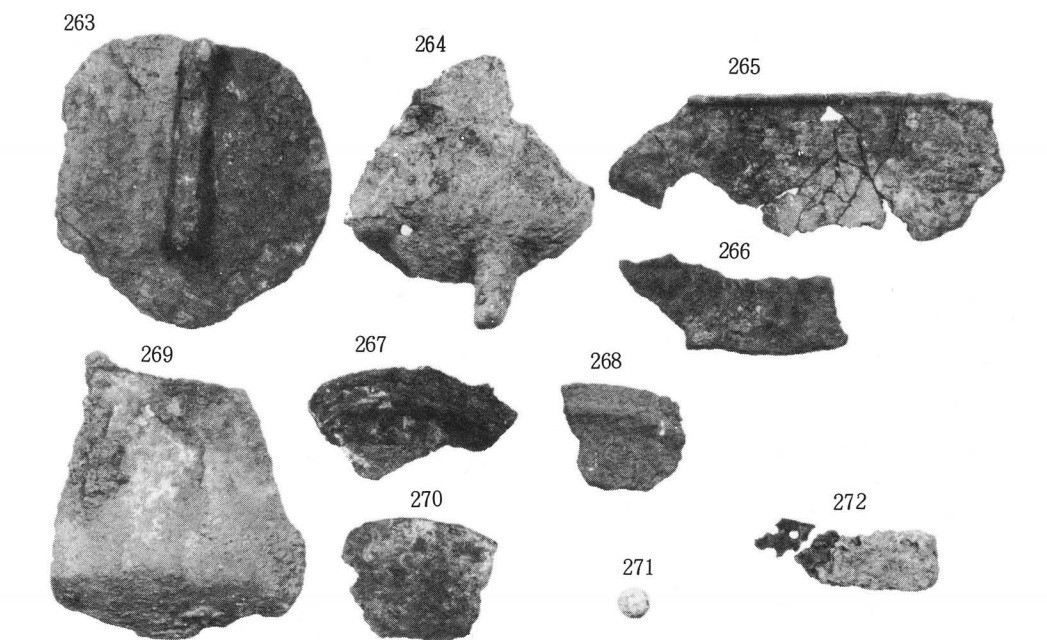


鉄製品 I (刀・かすがい・火打金・他)

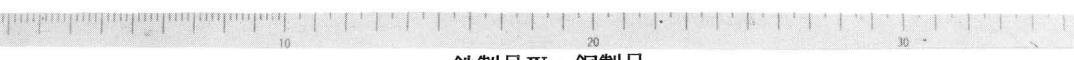
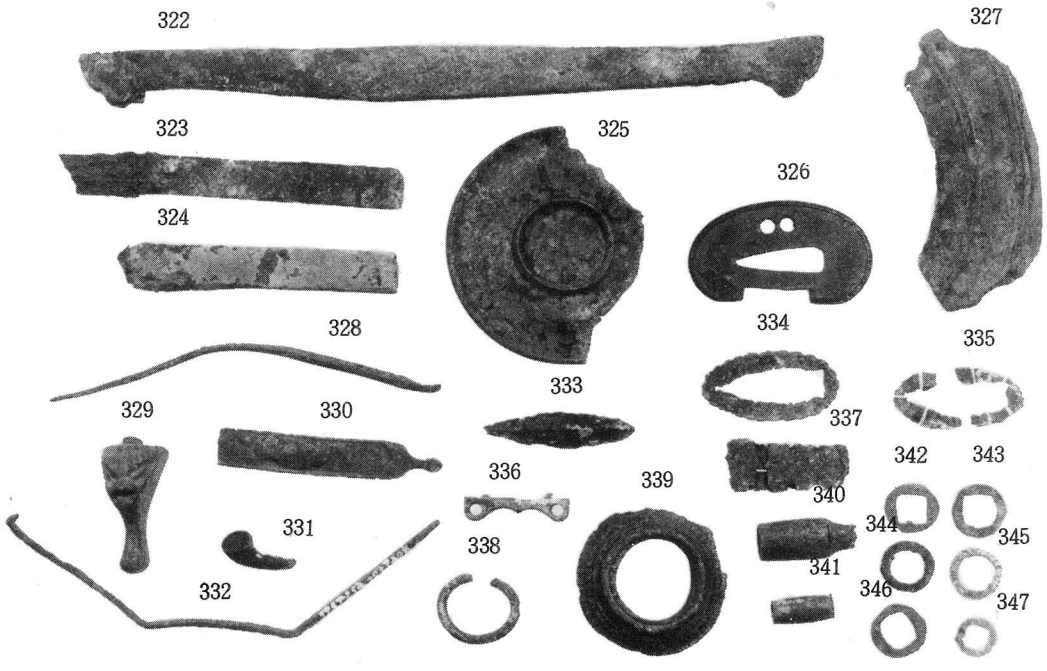
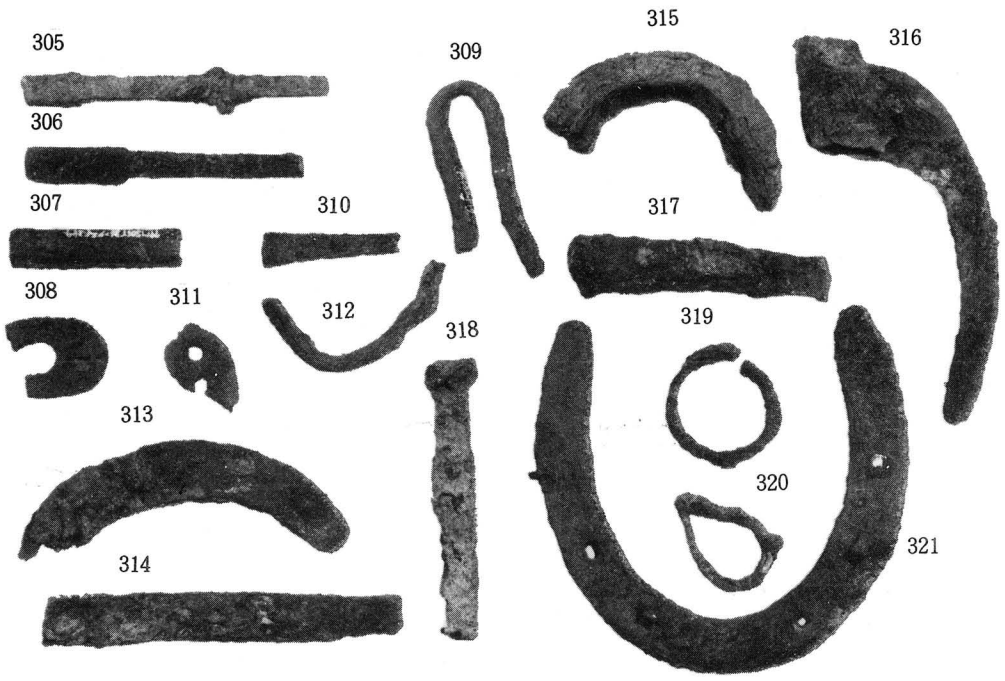


鉄製品Ⅱ (小札・鉄鏃・他)





鉄製品Ⅲ (鍋・釘・他)



鉄製品IV・銅製品

## C、銅製品 (Fig.49, Fig.50, PL.51)

### 1. 鐺 (326)

小振りの鐺で楕円形を呈し、側面に2個の孔と切り出しがある。縁はやや盛り上っており、薄い板状のものを貼り付けている。表裏で刀の着装孔に相違がみられ、片側だけV字状に削った痕跡が存在する。

### 2. 切羽 (334・335)

334は、完形で外側が波状に成形され、内側の穴は弾頭状で先端が尖った形を呈する。335は、腐蝕で欠損が激しく、全形は明確でないが、外側は波状でなく、内側の穴にも尖った先端部をもたないようである。

### 3. 小柄 (323・324)

323は、刃部(鉄)が若干残存している。両方背幅が広がるV字状の断面を呈し、内部に入っている茎部の錆のためふくらんだり、亀裂を生じている部分がある。肉眼では文様等をみいだすことはできなかった。

### 4. 筭 (328・330)

2点とも耳搔きの部分が付き表面に若干彫り込んだ装飾部分が存在する。330は装飾部の上に二又に分かれたわらび状の沈線が彫り込まれているが、328は、その部分の錆が除去できないため存在するのか明らかでない。

330の装飾部は、波濤状の彫り込みをベースに中央に松葉状の象嵌をはめこんでいる。象嵌の部分は金色に輝くが成分は未調査である。

### 5. 足 (329)

火舎あるいは盤の足とみられるもので、天狗・鬼獣の顔を具象したものと考えられ、頭部には取付部と思われる円形の突起が付いている。密教法具の火舎・金剛盤、仏供台などの足に使用されているものと類似するものが多い。

### 6. 高台 (325)

台部は変形しているが、直径7.6cmを有し高さは2.6cmと推定される。密教法具の中の六器鉢の高台、あるいは灑水器・塗香器などの高台と思われる。

### 7. その他

327：香炉の上端部と考えられ、内径は約12cm、外径約18cmを推定できる。

339：内径約2.5cmで兜の頂辺孔<sup>てっぺんあな</sup>と考えられる。4枚の銅板を重ね合わせる特徴を持っている。

331：鞆に付着するかえしであろうか。

340：キセルの雁首であろう。

341：キセルの付属品と考えられるが明らかでない。

Fig. 49 銅製品実測図I (鐺・切羽・笄・足・他)

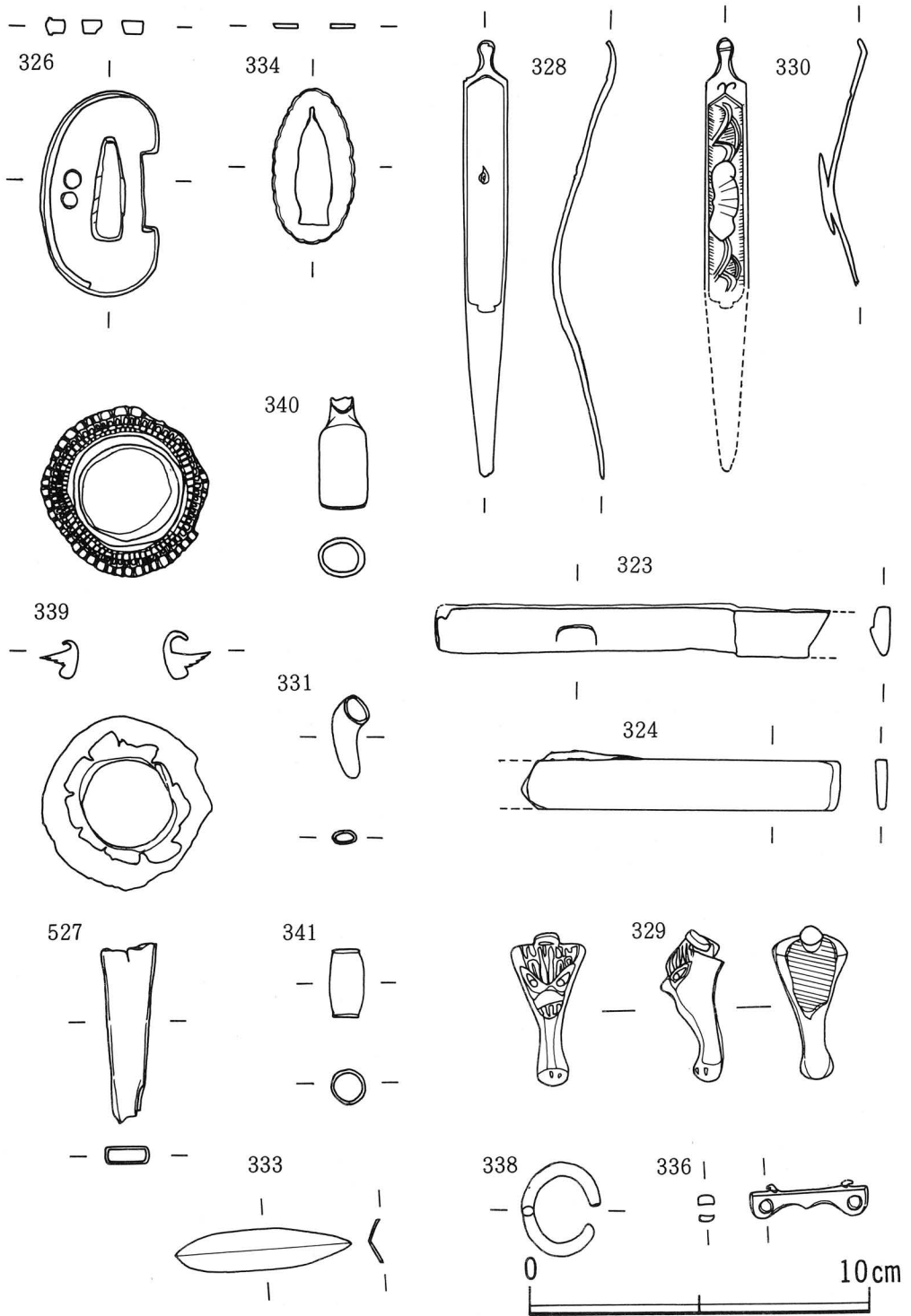
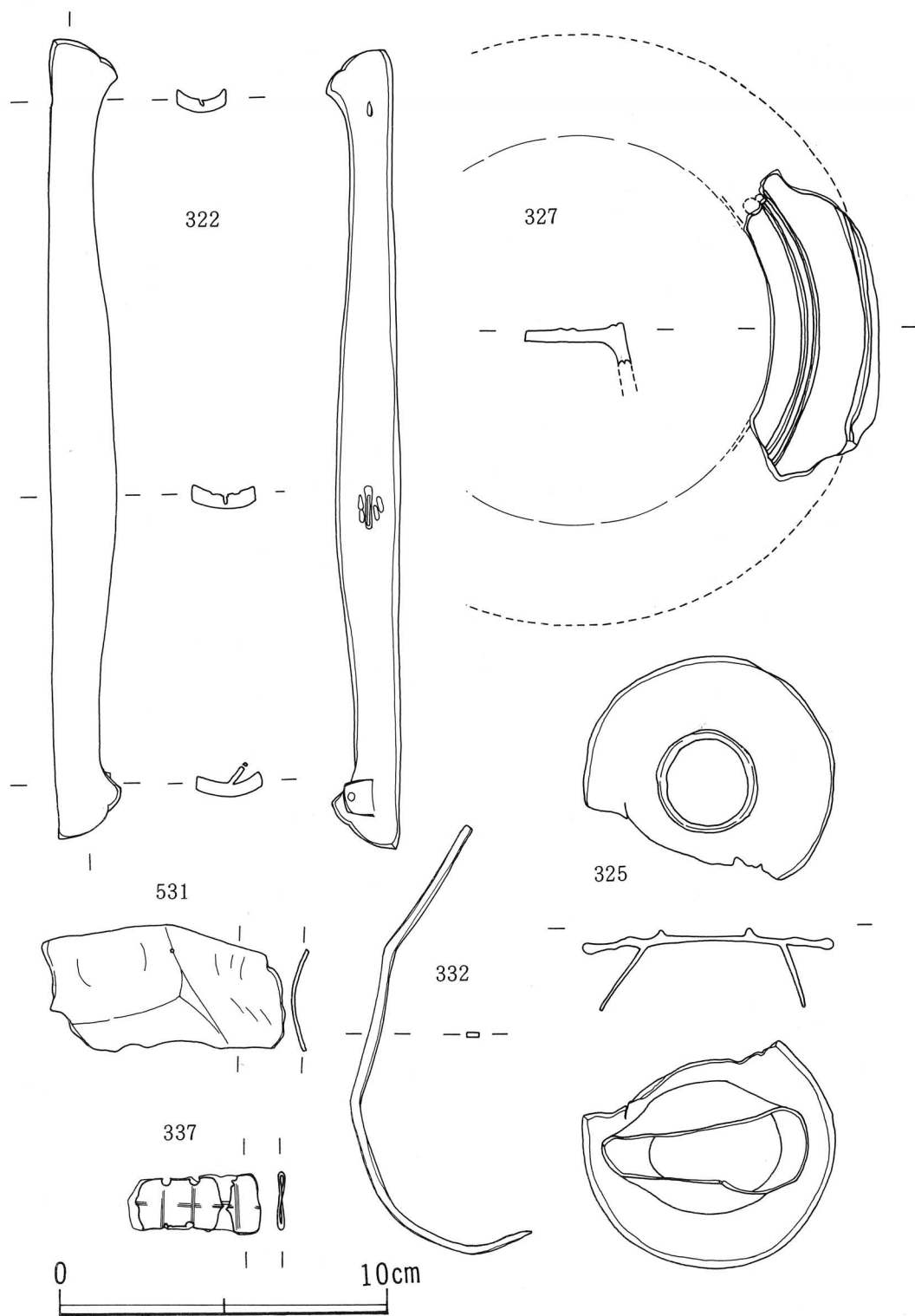


Fig. 50 銅製品実測図Ⅱ (香炉・高台・他)



338：厚さ0.1cmの薄い木葉状を呈するものである。装飾品であろうか。

338：調度具に付属するつまみのようなものであろう。

336：2個の穴を有し、一面は鉤状に取り付ける部分があることから、穴に紐を通して引っぱるつまみのようなものであろう。

332：断面が角を呈する細い棒である。用途不明。

333：銅板を2枚重ね合わせ、両側に孔を数箇所穿っている。用途不明。527も類似した製品。

322：表面は、丸味のあるカーブを有し、裏面はえぐられたように中央がへこんでいる、また裏面両側に取り付ける突起と孔がみられ（片側だけ残存）、武具の一部と推定したが、類似するものを発見できなかった。

531：銅板。未製品のものであろう。

Ch.17 銅製品計測表

No	遺物No.	Fig.	PL.	名 称	出 土 区	計測値(長さ×巾×厚さ)	備 考
322	F 169	50	51	不明製品	J 58 II	25.0 × 2.0 × 0.4 <sup>cm</sup>	
323	F 214	49	"	小 柄	S T 12フク土	11.7 × 1.4 × 0.6	
324	F 317	49	"	"	K 58 S T 30フク土	9.4 × 1.6 × 0.5	
325	F 450	50	"	高 台	M 58 S T 35フク土	7.6 × 2.6 × 0.2	
326	F 222	49	"	罈	S T 26フク土	6.0 × 3.4 × 0.5	
327	F 584	50	"	香 炉	O 54 III	9.5 × 3.4 × 0.4	
328	F 168	49	"	筭	J 58 II	13.0 × 1.2 × 0.3	
329	F 172	49	"	足	I 55 II	4.5 × 2.1 × 1.4	
330	F 170	49	"	筭	K 59 II	7.0 × 1.3 × 0.4	
331	F 455	49	"	か え し	M 58 S E 16フク土	2.5 × 0.8	
332	F 208	50	"	角 細 棒	S T 25フク土	13.3 × 0.3 × 0.2	
333	F 454	49	"	木葉状製品	M 58 S E 16フク土	5.2 × 1.2 × 0.1	
334	F 350	49	"	切 羽	M 58 S T 34フク土	4.6 × 2.4 × 0.2	
335	F 619	—	"	"	I 59 S T 38フク土	× 0.2	
336	F 562	49	"	留 具	M 55 II	3.5× <sup>外0.9</sup> <sub>巾0.5</sub> 厚さ <sup>0.5</sup> <sub>0.3</sub>	
337	F 315	50	"	不明製品	M 58 S T 36フク土	4.0 × 1.8 × 0.2	
338	F 572	49	"	つまみ?	S T 25フク土	2.7 × 2.4 × 0.3	
339	F 129	49	"	兜	J 60 II	4.9 × 2.5 × 1.2	外径×内径×厚さ
340	F 71	49	"	キセル	L 58 II	3.2 × 1.2 × 1.1	
341	F 552	49	"	円筒状製品	K 60 S T 14フク土	2.0 × <sup>②内0.6</sup> <sub>①外0.9</sub>	
342	F 162	40	"	座 金	S T 25フク土	1.8 × 1.0 × 0.1	外径×内径×厚さ
343	F 164	40	"	"	S T 25フク土	1.7 × 1.1 × 0.1	"
344	F 1166	40	"	"	O 54表土	1.8 × 1.2 × 0.1	"
345	F 165	40	"	"	I 55 II	1.7 × 1.2 × 0.1	"
346	F 248	40	51	"	S T 15フク土	1.8 × 1.1	"
347	F 161	40	"	"	I 55 I	1.3 × 0.8 × 0.1	"
527	F 561	49	—	不明製品	J 58 S T 25フク土	5.2 × 1.5 × 0.9	
528	F 19	40	—	銅 滓	L 60 II	2.1 × 0.6 × 0.1	未製品?
529	F 79	40	—	"	K 58 II	7.5 × 3.7 × 0.4	
530	F 40	40	—	"	S T 16床面	6.5 × 3.2 × 1.2	
531	F 224	50	—	銅 板	S E 10フク土	6.9 × 3.7 × 0.2	

## D、石製品 (Fig. 51, PL. 52)

### 1. 硯 (348・354)

硯の中で完形は348だけであり、他に4片ほど出土しているが薄片のため図化できなかった。

348：黒い粘板岩系の石質で小振りの製品である。器形は、楕円状を呈するが自然に割れた部分を上手に打ちかいて成形しており味わいがある。表面海の部分に墨の痕跡が残っている。

354：赤褐色から青灰色の色調を呈し、陸の中央部にかけて摩耗がみられる。裏面も削り込んであるため台状に成形をおこなっている。器形は長方形であろう。

### 2. 砥石

砥石の形状・大きさはバラエティーに富んでいるため、使用道具によって使い分けていたことが推測される。

#### I類 (349・350)

断面形が三角形を呈し、一面ないしは2面が砥面となっており、中央部が強くえぐれたような形となっているもの。石質は目の粗い砂岩系の石で、349・350とも黄灰色を呈する。

#### II類 (352・357)

砥面が一面で、扁平な板状を呈するもの。352は黄白色の砂岩系、357は暗青灰色の粘板岩系の石質である。

#### III類 (356・358)

砥面が上下二面で、扁平な板状を呈するもの。II類よりも小型になる。356は、表裏面ともにU字状にえぐられている部分が2箇所ずつ存在する。356は、青灰色、358は淡褐色の砂岩系の石質である。

#### IV類 (351・353)

砥面を3面持ち、角状の断面を有するもの。351は焼けたためか黒色を呈する部分があり、351・353ともに灰白色の砂岩系石質である。

#### V類 (360)

大型のもので、砥面は3面、一面には細長いU字状のくぼみがある。黄灰色の砂岩である。

### 3. 石臼 (PL. 52)

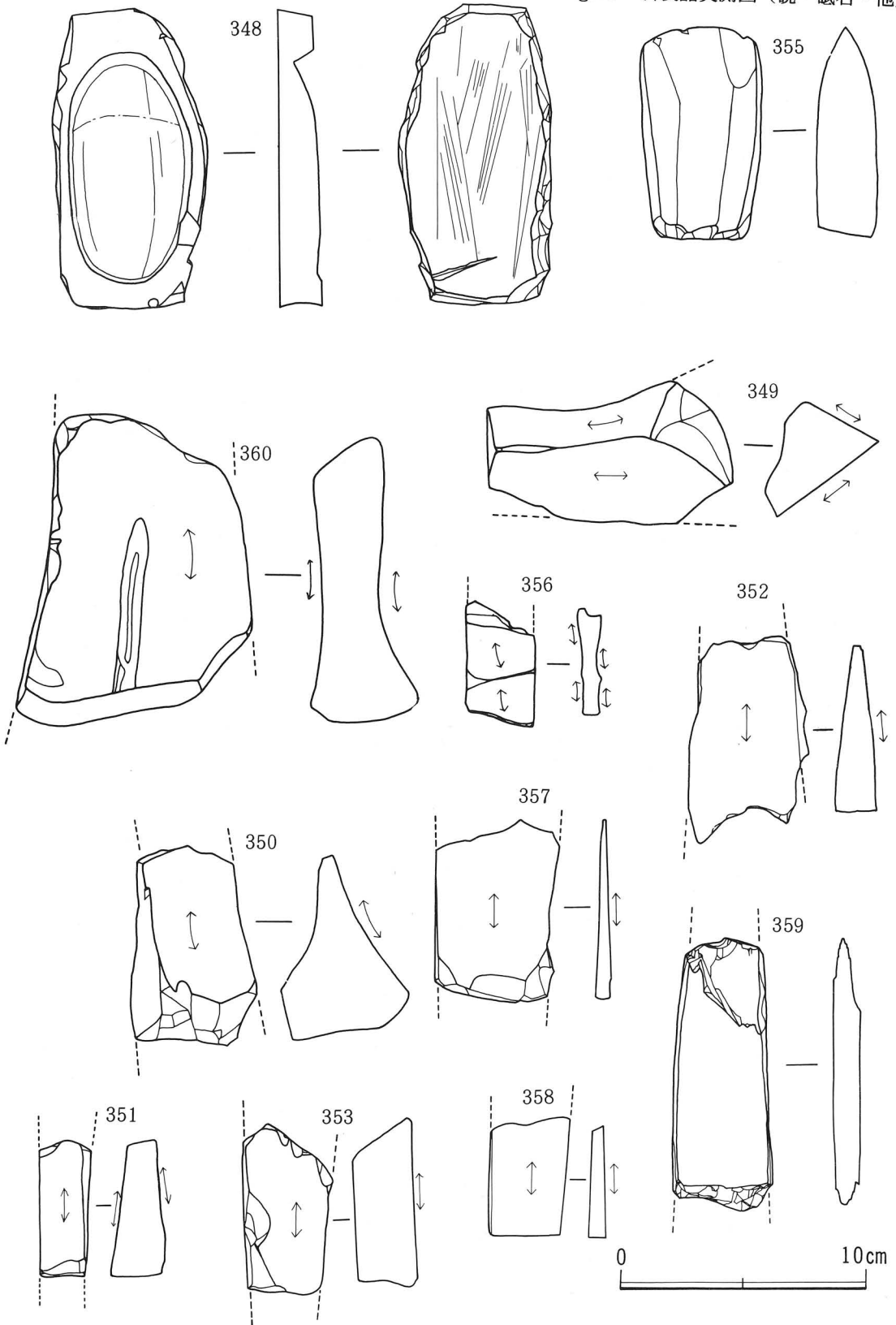
石臼の中には、茶臼と穀物用の臼が存在する。

361：穀物用の臼で、上部挿入孔を持つものである。

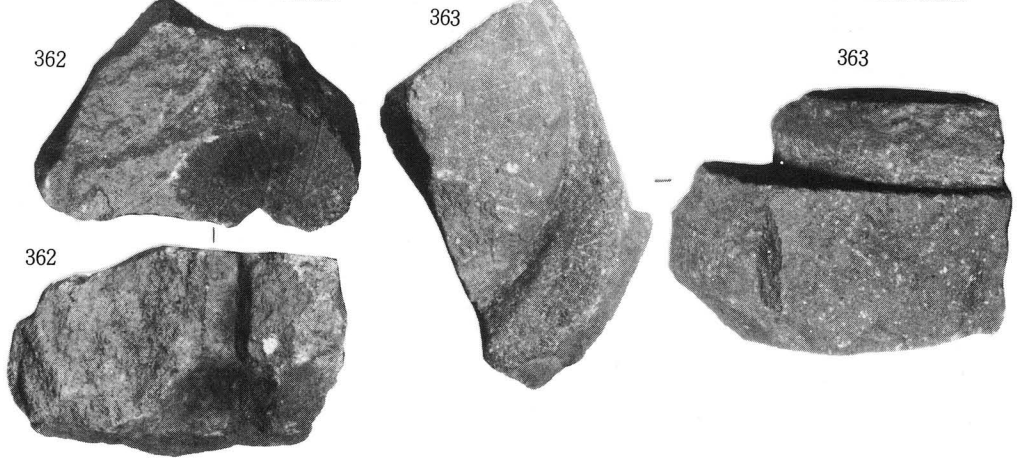
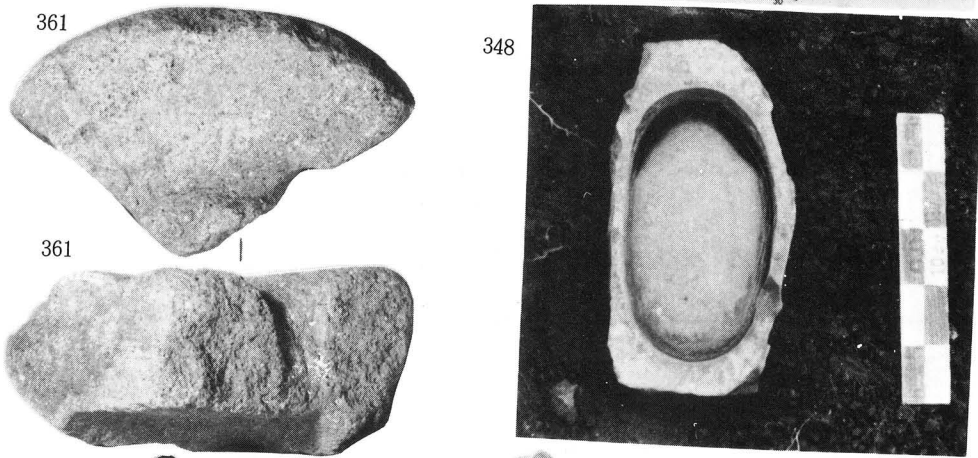
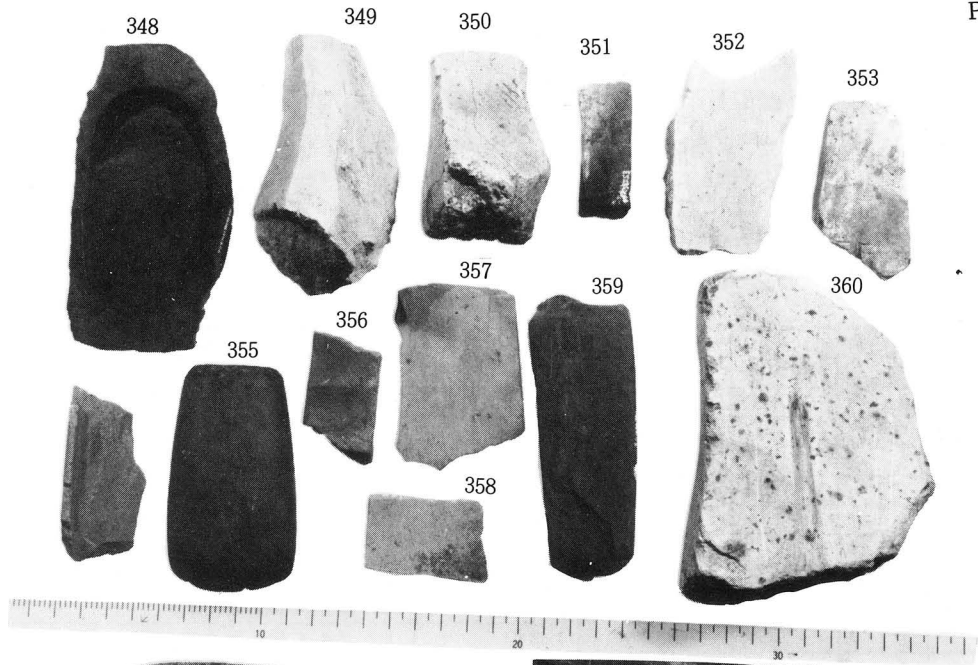
362：茶臼で、擦り面の沈線が放射状にみられる。また中央の孔は四角形を呈している。

363：362と対になる下部のもので、受け皿の部分が上方に反る形がみられる。擦り面の沈線は摩耗して見えかかっている。

Fig.51 石製品実測図 (硯・砥石・他)







#### 4. その他

355: 縄文時代の磨製石斧で、着装部から先端部にかけてアスファルト状の黒い付着物がみられる。また、両面ともに無数の擦痕が縦位にみられる。石質は緑色泥岩である。

359: 表裏面を磨いているところから磨製石斧と考えたが、厚さがいないため砥石かもしれない。黒い粘板岩で、両側面に敲いたような擦痕がみられる。

Ch.18 石製品計測表

No.	遺物No.	Fig.	PL.	名 称	出 土 区	計 測 値 cm	備 考
348	S 14	51	52	硯	I 60 III	12.3 × 6.2 × 1.8	
349	S 11	"	"	砥石	S T 12フク土	10.0 × 5.5 × 5.5	
350	S 15	"	"	"	I 55 II	8.3 × 4.2 × 5.0	
351	S 3	"	"	"	K 58 II	5.5 × 2.1 × 2.2	
352	S 2	51	"	"	J 58 II	8.3 × 4.8 × 1.9	
353	S 17	"	"	"	I 60 III	6.9 × 4.0 × 2.5	
354	S 59	—	"	硯	J 59 II	6.8 × 3.1 × 1.7	
355	S 23	51	"	石斧	I 58 S T 22フク土	8.7 × 5.0 × 2.5	
356	S 21	"	"	砥石	O 54 I	4.5 × 2.8 × 1.1	
357	S 5	"	"	"	I 58 II	7.4 × 5.1 × 0.7	
358	S 26	"	"	"	M 58 S T 35フク土	4.8 × 3.1 × 0.7	
359	S 1	51	"	"	L 59 III	11.2 × 4.0 × 1.1	
360	S 6	51	"	"	I 57 II	12.9 × 8.7 × 4.8	
361	S 39	—	"	石臼	I 58 II	21.2 × 13.0 × 9.5	
362	S 60	—	"	"	北館表採	16.8 × 10.1 × 10.5	
363	S 61	—	"	"	"	20.4 × 15.9 × 13.1	

#### E、古 銭

古銭は総数で126枚の出土をみた。個別的出土数は以下の通りである。

Ch.19 古銭名称別出土表

名 称	枚 数	名 称	枚 数	名 称	枚 数
開元通宝	9	太平通宝	3	至道元宝	2
咸平元宝	2	景德元宝	1	天禧通宝	1
天聖元宝	3	皇宋通宝	7	嘉祐通宝	2
治平元宝	2	熙寧元宝	3	元豊通宝	4
元祐通宝	2	紹聖元宝	5	天符通宝	2
大観通宝	2	政和通宝	6	洪武通宝	8
永樂通宝	4	寛永通宝	6	十 銭	2
判読不能	15	無文銭・?	35	合 計	126

昨年度の調査では出土しなかった寛永通宝が6枚出土していることから、北館内において近世以降にも生活空間が存在したことが推定されるにいたった。また、古銭の出土状態をみると、平場においては遺構確認面と堅穴遺構・井戸跡の覆土から散発的に出土する傾向を示し、集中して出土することは少ない。ただし、密着あるいは隣接して出土する場合は3枚1セットで伴出し、中に無文銭を狭むことが多いようである。

Fig. 52 古錢拓影圖(1)

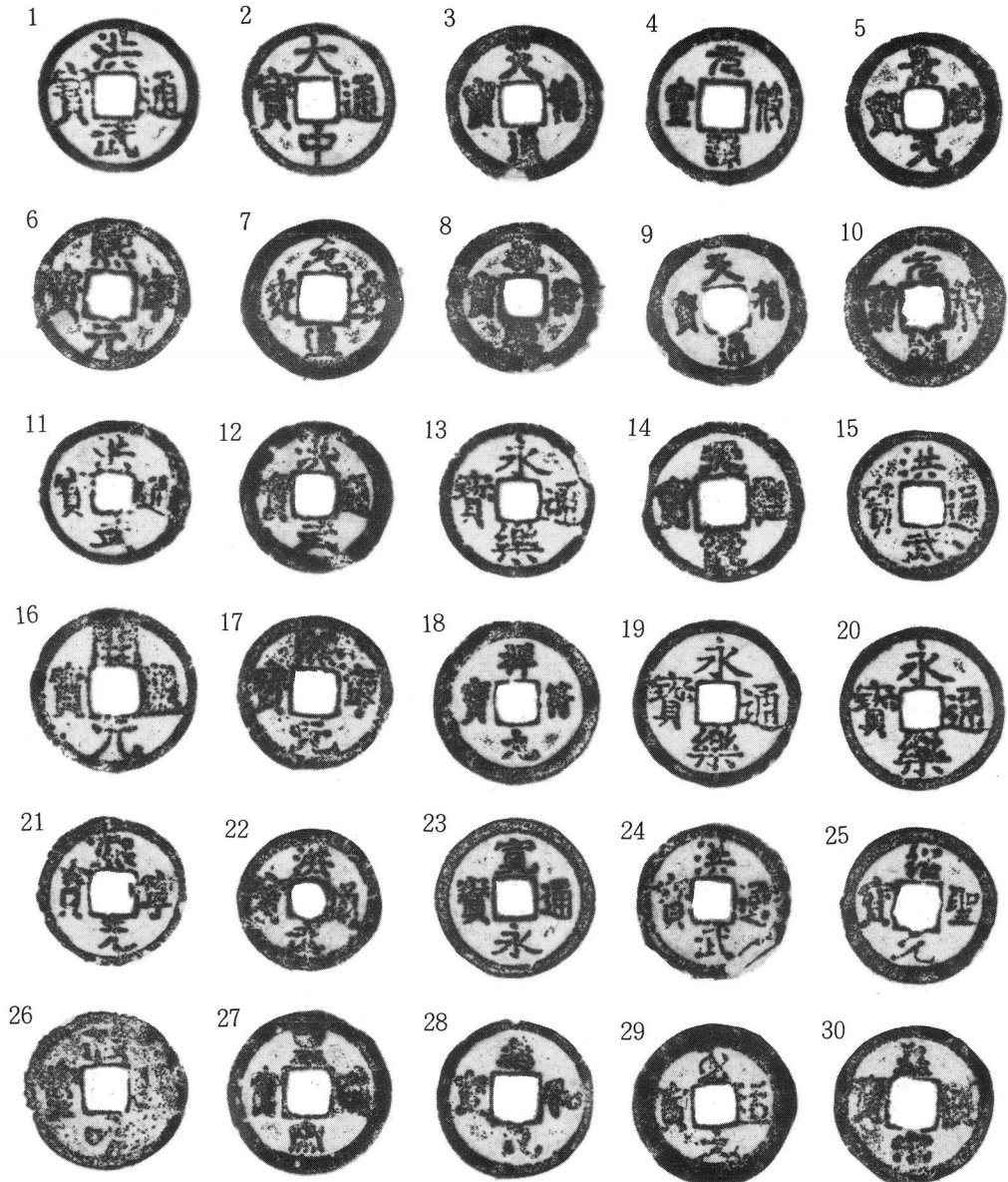


Fig. 53 古錢拓影圖(2)

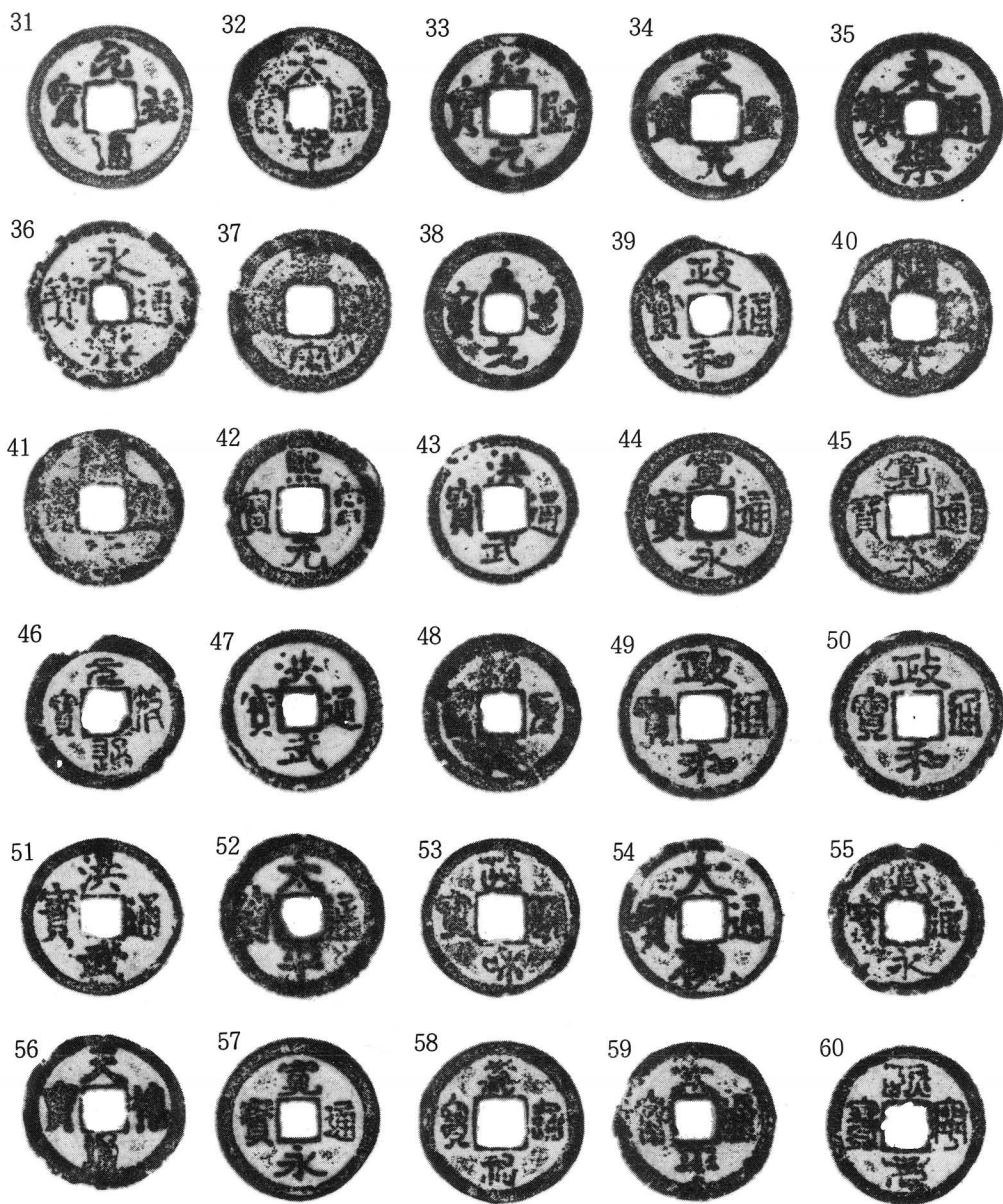
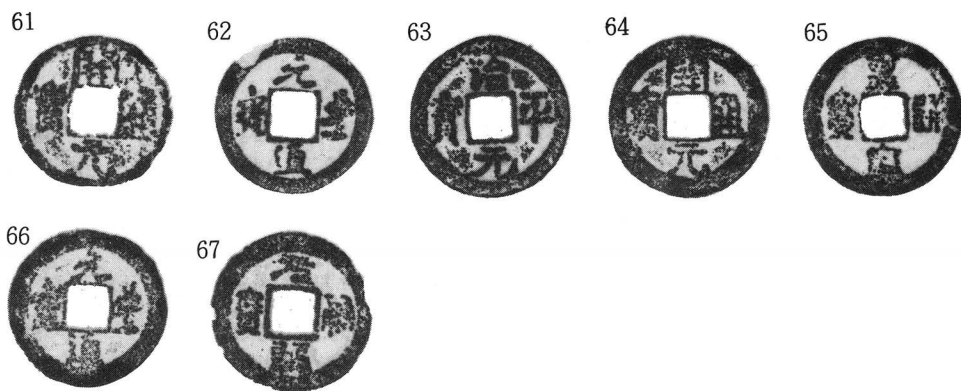


Fig. 54 古銭拓影図(3)



Ch.20 古銭集計表

No.	遺物 No.	Fig.	名 称	出 土 区	計測値 (外径×内径×厚さ)	備 考
1	78 C 1	52	洪 武 通 宝	K 47 S H04	23.5 × 5.9 × 1.2 mm	
2	78 C 3	"	大 中 通 宝	"	23.3 × 5.6 × 2.0	
3	78 C 4	"	天 禧 通 宝	"	24.0 × 5.9 × 1.2	
4	78 C 6	"	元 符 通 宝	"	24.3 × 6.4 × 1.3	
5	78 C 7	"	景 德 元 宝	"	24.0 × 5.1 × 1.2	
6	78 C 8	"	熙 寧 元 宝	"	23.7 × 6.7 × 1.4	
7	78 C 9	"	元 豐 通 宝	"	24.3 × 6.6 × 1.3	
8	78 C 10	"	祥 符 〇 宝	"	23.3 × 5.9 × 0.9	
9	78 C 13	"	天 禧 通 宝	N 69 S D01 フク土	23.9 × 6.7 × 1.6	
10	78 C 15	"	元 符 通 宝	I 47 フク土	24.6 × 6.4 × 1.2	
11	78 C 16	"	洪 武 通 宝	J 47 フク土	21.9 × 5.0 × 1.8	
12	78 C 18	"	"	H 47 III	22.9 × 6.2 × 1.5	
13	78 C 19	"	永 樂 通 宝	N 47	23.9 × 5.8 × 1.1	
14	78 C 21	"	〇 〇 〇 宝	M 69 S D01 フク土	24.6 × 7.0 × 1.1	
15	78 C 30	"	洪 武 通 宝	M 67 ピット底	23.0 × 5.8 × 1.2	
16	78 C 31	"	開 元 通 宝	"	24.9 × 7.0 × 1.0	
17	78 C 34	"	熙 寧 元 宝	H 47 S T08 フク土	23.4 × 6.3 × 1.3	
18	78 C 38	"	祥 符 元 宝	N 47 III	24.6 × 5.8 × 1.2	
	79 C 1		十 銭	L 58 II	22.0 × × 1.4	
	79 C 2		元 豐 通 宝	L 59 II	× ×	
	79 C 3		?	"	25.1 × × ?	
	79 C 4		開 元 通 宝	M 60 フク土	23.9 × 6.3 × 1.3	
19	79 C 5	52	永 樂 通 宝	S T 13 フク土	25.0 × 5.6 × 1.4	
	79 C 6		?	L 59 III	22.3 × 6.8 × 1.0	
20	79 C 7	52	永 樂 通 宝	K 60 II	25.0 × 5.8 × 1.3	
	79 C 8		大 〇 通 宝	"	24.5 × 6.3 × 1.4	
	79 C 9		〇 〇 〇 宝	K 59 III	24.0 × 7.0 × 1.2	
	79 C 10		〇 〇 〇 〇	L 59 II	24.5 × 6.2 × 1.8	
21	79 C 11	52	熙 寧 元 宝	S T 17 床面	22.4 × 5.5 × 1.2	
22	79 C 12	"	洪 武 通 宝	S T 13 フク土	21.7 × 5.0 × 1.7	

No.	遺物 No	Fig.	名 称	出土区 区	計測値(外径×内径×厚さ)	備 考
	79 C 13		洪 武 通 宝	L 58 II	22.4 × 5.1 × 1.9 <sup>mm</sup>	} 伴出
	79 C 14		○ ○ ○ ○	"	23.8 × 6.1 × 1.7	
	79 C 15		○ ○ ○ ○	"	23.8 × ? × 1.9	
23	79 C 16	52	寛 永 通 宝	I 59 II	22.3 × 6.1 × 1.0	
	79 C 17		紹 聖 元 宝	J 60 II	23.8 × 6.6 × 1.4	
24	79 C 18	52	洪 武 通 宝	S T 09 黒色土上面	22.4 × 5.5 × 1.5	
25	79 C 19	"	紹 聖 元 宝	J 60 II	23.8 × 6.0 × 1.4	
26	79 C 20	"	政 和 通 宝	J 59 II	24.4 × 6.4 × 1.0	
27	79 C 21	"	皇 宋 通 宝	M 60 II	24.2 × 6.2 × 1.2	
28	79 C 22	"	政 和 通 宝	S T 17 床面	24.1 × 6.7 × 1.2	
29	79 C 23	"	至 道 元 宝	I 59 II	24.7 × 5.8 × 1.2	
	79 C 24		○ ○ ○ 宝	S T 13 フク土	? × ? × 1.0	
	79 C 25		元 豊 通 宝	K 60 II	24.7 × 6.9 × 1.3	} 伴出
30	79 C 26	52	皇 宋 通 宝	"	24.55 × 6.7 × 1.3	
	79 C 27		○ ○ ○ ○	"	23.4 × 6.7 × 1.2	
31	79 C 28	53	元 祐 通 宝	I 59 II	24.4 × 7.2 × 1.3	
	79 C 29		○ ○ ○ ○	S T 14 フク土	23.5 × 6.6 × 1.7	
	79 C 30		十 銭	北館表採	22.2 × × 1.5	
	79 C 31		天 聖 元 宝	J 58 II	25.4 × 6.3 × 2.0	
	79 C 32		?	"	22.5 × 6.5 × 1.5	
	79 C 33		咸 平 元 宝	J 59 II	24.5 × 6.0 × 1.0	
	79 C 34		?	S T 14 フク土	24.0 × 6.3 × 1.9	
	79 C 35		?	K 59 II	26.0 × 4.9 × 1.5	
32	79 C 36	53	太 平 通 宝	K 60 II	24.3 × 5.6 × 1.2	
	79 C 37		?	"	23.3 × 6.5 × 1.1	
	79 C 38		?	J 58 II	24.3 × 5.5 × 1.3	
33	79 C 39	53	紹 聖 元 宝	J 60 II	24.0 × 6.4 × 1.2	
	79 C 40		○ ○ ○ 宝	J 58 II	22.9 × 7.2 × 1.3	
	79 C 41		開 元 通 宝	J 59 II	24.2 × 6.7 × 1.3	
34	79 C 42	53	天 聖 元 宝	S T 18 フク土	25.0 × 6.7 × 1.3	
35	79 C 43	"	永 樂 通 宝	J 59 II	25.3 × 5.5 × 1.8	
36	79 C 44	"	"	S T 14 フク土	25.0 × 5.3 × 1.6	
37	79 C 45	"	皇 宋 通 宝	S T 15 フク土	24.3 × 7.1 × 1.6	
	79 C 46		○ ○ 元 宝	S T 14 フク土	24.6 × 7.2 × 1.2	
38	79 C 47	53	至 道 元 宝	S T 18 フク土	23.8 × 6.4 × 1.0	
	79 C 48		皇 宋 通 宝	S T 15 フク土	24.8 × 7.0 × 1.2	
	79 C 49		?	S T 10 フク土	24.0 × 6.6 × 1.0	
	79 C 50		?	"	19.8 × 7.0 × 1.0	
39	79 C 51	53	政 和 通 宝	S T 15 フク土	24.0 × 6.4 × 1.0	
	79 C 52		天 聖 元 宝	S T 12 フク土	24.6 × 7.6 × 1.1	
	79 C 53		○ ○ 元 ○	"	26.9 × 8.4 × 1.0	
	79 C 54		?	S T 15 フク土	20.8 × 7.4 × 1.0	
	79 C 55		?	S T 15 フク土	26.4 × 7.0 × 1.2	
	79 C 56		○ ○ 通 ○	I 55 I	24.8 × 6.5 × 1.1	
	79 C 57		?	S E 10 フク土	19.2 × 8.0 × 0.8	
	79 C 58		寛 永 通 宝	"	23.1 × 6.5 × 1.0	
40	79 C 59	53	開 元 通 宝	M 58 表土	23.9 × 6.6 × 1.1	
	79 C 60		?	S T 25 フク土	20.0 × 7.5 × 1.0	
	79 C 61		?	S T 25 フク土	17.8 × ? × 1.2	} 伴出
	79 C 62		?	"	22.0 × 6.2 × 0.9	
	79 C 63		?	"	22.5 × 7.0 × 1.0	
	79 C 64		?	I 55 フク土	20.7 × 7.0 × 0.6	
	79 C 65		?	S T 14 フク土	24.0 × 6.6 × 1.1	
	79 C 66		?	J 55 II	21.9 × 6.3 × 1.1	
	79 C 67		開 元 通 宝	S T 13 フク土	24.0 × 7.5 × 1.1	
41	79 C 68	53	"	L 55 II	24.0 × 6.4 × 1.2	
42	79 C 69	"	熙 寧 元 宝	M 55 II	23.8 × 7.0 × 1.1	

No.	遺物 No.	Fig.	名 称	出 土 区	計測値(外径×内径×厚さ)	備 考
	79 C 70		?	S E 10フク土	22.0 × 6.8 × 1.1 mm	
	79 C 71		開元通宝	"	22.5 × 7.3 × 1.2	
	79 C 72		?	S X 04フク土	22.8 × 6.6 × 1.1	
43	79 C 73	53	洪武通宝	O 55 II	22.3 × 7.0 × 1.2	
	79 C 74		皇宋通宝	M 55 II	24.7 × 7.8 × 1.3	
	79 C 75		?	"	24.0 × 6.3 × 1.3	
44	79 C 76	53	寛永通宝	O 54 S A 02 II	24.5 × 5.8 × 1.2	
45	79 C 77	"	"	O 54土塁上面	23.8 × 6.3 × 1.2	
46	79 C 78	"	元符通宝	"	24.0 × 7.3 × 1.1	
	79 C 79		大観通宝	O 54 II	24.2 × 7.1 × 1.4	
47	79 C 80	53	洪武通宝	M 58 S T 34フク土	24.4 × 5.0 × 1.7	
48	79 C 81	"	紹聖元宝	"	24.0 × 5.8 × 1.55	
	79 C 82		嘉祐通宝	I 58 III	22.8 × 6.9 × 1.2	
	79 C 83		?	S T 27	22.5 × 6.5 × 1.3	
49	79 C 84	53	政和通宝	M 58 S T 36フク土	25.0 × 6.85 × 1.45	} 伴出
	79 C 85		?	"	24.2 × 7.1 × 1.7	
	79 C 86		咸平元宝	"	22.5 × 6.2 × 1.1	
50	79 C 87	53	政和通宝	M 58 S T 34フク土	24.25 × 6.4 × 1.35	
51	79 C 88	"	洪武通宝	K 58 S E 15フク土	23.9 × 5.8 × 1.6	
	79 C 89		○元通宝	K 55 II	23.2 × 6.9 × 1.5	
52	79 C 90	53	太平通宝	I 58 S E 10フク土	23.85 × 6.3 × 1.25	
53	79 C 91	"	政和通宝	S T 12フク土	24.0 × 7.15 × 1.1	
54	79 C 92	"	大観通宝	M 58 S T 35フク土	24.5 × 6.2 × 1.4	
	79 C 93		?	L 59 III	23.2 × 6.6 × 1.35	
	79 C 94		元符通宝	I 59 II	23.6 × 6.6 × 1.3	
	79 C 95		洪武通宝	表採	23.6 × 5.4 × 1.8	
	79 C 96		?	M 58 S T 35フク土	? × ? × 1.0	
	79 C 97		治平元宝	L 58フク土	24.55 × 6.0 × 1.8	
55	79 C 98	53	寛永通宝	P 55 I	23.6 × 6.0 × 1.2	
56	79 C 99	"	天禧通宝	M 58 S T 34フク土	24.35 × 6.3 × 1.3	
57	79 C 100	"	寛永通宝	M 58 S E 16フク土	24.2 × 5.5 × 1.45	
	79 C 101		?	"	? × ? × 1.2	
	79 C 102		?	K 59 III	22.6 × 6.3 × 1.4	
58	79 C 103	53	嘉祐通宝	M 58 S T 34フク土	24.55 × 7.3 × 1.2	
59	79 C 104	"	太平通宝	M 59 II	24.3 × 5.8 × 1.5	
60	79 C 105	"	熙寧元宝	S T 27フク土	24.2 × 6.45 × 1.6	
61	79 C 1	54	開元通宝	M 60 S T 17床面	23.4 × 6.8 × 1.35	
62	79 C 107	"	元豊通宝	I 55 II	24.35 × 6.7 × 1.5	
	79 C 108		洪武通宝	S E 12フク土	24.4 × 6.2 × 1.1	
63	79 C 109	54	治平元宝	M 58 S T 34フク土	24.5 × 6.5 × 1.3	
64	79 C 110	"	開元通宝	"	24.2 × 6.6 × 1.0	
65	79 C 111	"	皇宋通宝	"	24.3 × 6.2 × 1.4	
66	79 C 112	"	元豊通宝	"	23.8 × 6.2 × 1.3	
	79 C 113		皇宋通宝	S T 27フク土	23.8 × 6.8 × 1.0	
	79 C 114		?	L 55 II	22.8 × 6.1 × 1.0	
	79 C 115		紹聖元宝	"	24.2 × 6.8 × 1.2	
	79 C 116		?	K 58 S T 28フク土	19.9 × 6.9 × 1.0	
	79 C 117		?	O 47 III	17.4 × 6.8 × 1.0	
	79 C 118		○武○	O 47表土	? × ? × 1.5	
	79 C 119		?	S T 12フク土	? × ? × 1.2	
	79 C 120		?	I 55 II	22.8 × 6.6 × 1.2	
	79 C 121		開元通宝	M 58 S T 34フク土	24.2 × 6.7 × 1.6	
67	79 C 122	54	元祐通宝	"	24.3 × 6.7 × 1.0	
	79 C 123		無文銭	S T 36フク土	18.9 × 7.2 × 0.9	
	79 C 124		?	S T 30フク土	19.0 × 8.5 × 1.0	
	79 C 125		?	"	14.0 × 2.0 × 1.0	
	79 C 126		景德元宝	K 59フク土	24.0 × 7.0 × 1.0	

## V ま と め

浪岡城跡の発掘調査も3年目を終了し、検出遺構・出土遺物の面でかなりの資料を公開するにいたった。しかしながら、県内における中世という時代背景を考慮に入れた場合、数多くの問題点を提起しており、今後の調査時に注意すべき所を述べまとめにかえたいと思う。

### 〔検出遺構〕

防禦的機能の面で注目されるのは、土居跡（SA01）と堀跡およびそれに伴う中間土塁の検出である。土居跡は、北館東縁に添って構築されているもので、地業のあり方は非常に簡略なため、防禦施設として十分な機能を有するか疑問な点が多い。壁面の崩壊を防ぐためのものかもしれない。今後、明確な分布範囲と柵等の有無を十分に調査する必要がある。

堀跡と中間土塁の構築は、城跡存続期間内での数度にわたる改修が顕著に認められ、出土遺物との関係から築城期、最盛期、落城期、その後というように年代の変遷が明確になる可能性を有する。平場と違い、堀跡は自然堆積の状況が明瞭にみられ、層位的に時間の推移を理解できる利点があるため、単なる防禦機能としてでなく、浪岡城跡の年代、勢力関係を知るための重要な調査対象であるといえる。

平場内における生活遺構では、掘立柱建物跡・竪穴遺構・井戸跡・溝跡などが、どのような関連を有して配置するのか、明確に把握できない現状にある。特に、遺構面で重要なカギを握る竪穴遺構は、その性格が不明瞭なため、今回のように多数検出した場合は全体にぼんやりした印象を受ける。

浪岡城跡で検出されている竪穴遺構の主な特徴を述べると、(1)形状は方形で規模は一定しない。(2)炉・かまどがみられない。(3)張り出し施設を有するものが多い。方向は数例を除いて一定しない。(4)床面の整地がほとんどおこなわれない。(5)遺物の出土は非常に少ない例が多い。床面からの出土は数例しかなく、覆土から散発的に出土する。(6)堆積土は、一時的埋め戻しの状況を呈するものが多い。(7)柱穴の配置は、かなりの多様性がみられる。となる。

以上のことから、本遺構の機能としては、住居跡、土倉、やぐらなどが推測される。いづれにしても短期間の使用であること、遺物の出土が少ないことから、住居跡とみた場合は掘立柱建物跡との関連で季節的・階級的な面を考慮に入れなければならないであろうし、土倉とみた場合、全体の遺構配置を明確にとらえる必要がある。さらに、文献等にみえる「矢倉」「やぐら」などの記述がいかなる施設を示すものか、下部構造だけでなく上部構造の面からも検討する必要があると考えている。

### 〔出土遺物〕

出土遺物の中で量的に多い陶磁器類は、大別して舶載品、国産品、生産地不明品、地元生産



品の四つになる。舶載品は、中国明代の青磁・白磁・染付が大部分を占め、朝鮮からの搬入品も1点ある。また国産品の中でも、瀬戸・美濃を中心に越前・唐津・珠洲系の製品がみられることから、中世末期における日本海交易の盛行が推定される。今後、搬入品の組成面から他遺跡との比較対照が重要な課題となっている。

今回、瓦器と報告した瓦質手烙り・行火の類は、出土例が少ないだけでなく出土遺跡に限定がみられるようで、生産地の問題から搬入経路にいたる極めて広範囲な問題を提起している。ちなみに、尻八館、十三湊以外の遺跡では、近年調査が増加しているにもかかわらず、報告例が少ない現状である。類例があったら、是非ご教示願いたい。

中世における日常生活の中で、灯明という一般的行為がみられるはずであるが、浪岡城跡からは灯明皿やそれに類似するものが出土しない。県内の発掘事例でも、堀越城跡、尻八館、根城跡など、一般的傾向として灯明皿が皆無あるいは少ないことが知られ、関西・関東地方の灯明形態とは根本的相違があるように思われる。

鉄製品を機能的にみた場合、武具、工具、調理具、灯火具、化粧具、暖房具等に分類できるが、城郭という性格上武具の出土率が多く、城内における戦闘の様相も感じられる。特に小札は、散在して出土する傾向があり、量的にもかなりの数がみられることから、非戦闘の遺跡とは相違がある。日常的なものでは、釘の出土が圧倒的に多く、掘立柱建物跡、竪穴遺構の構築時に使用の度合が高かったことを示している。また、日常生活用具としての火打金・火箸・鉄鍋・その他の不明製品に関しては、年代的な意味から民俗資料との対比が必要条件となっている。

銅製品の中には、武具、宗教具、化粧具が多く、装飾的な製品に優品がある。特に筭・鐔などをみると武具の中でも奢侈なものも多く、文化的に高次な面がみられる。そのことは、仏具と考えられる高台、人面状足、香炉など密教文化に関係したような印象も受け、非常に高度な精神生活の存在を推測できるのである。

古銭は、唐銭・北宋銭・明銭などの渡来銭の他、寛永通宝などのように17世紀以降のものも出土しており、陶磁器における伊万里などととも落城以降の城跡内での人間生活が、いかなることでおこなわれていたのか、非常に問題となるところである。また、私鑄銭として、薄手、無文のものが相当数みられ、製銅との関連から、溶解物付着土器（坩堝）が重要な意味を持っていると思われる。

今後、調査は北館を中心として進展する予定であるが、発掘調査面積を拡大してゆく段階で、上記の問題が一つ一つ解明されることを期待している。

参考文献・引用文献等（年代順）

- 尾崎元春編 1968 甲冑 日本の美術No.24
- 広島県草戸千軒町遺跡調査研究所 1968～1978 草戸千軒町遺跡
- 福井県教育委員会 朝倉氏遺跡調査研究所 1969～1980 一乗谷朝倉氏遺跡 I～XI
- 平山久夫 1974 青森県の中世陶磁について 北奥古代文化 第6号
- 新谷武 1975 青森県前田野目砂田遺跡出土の篋書土器について 北奥古代文化第7号
- 葛西城址調査会 1975 青戸・葛西城址調査報告 III
- 榑崎彰一編 1977 世界陶磁全集 3 日本中世
- 青森県立郷土館 1977～1979 尻八館第1次・2次・3次調査概要 調査研究年報第3～5号
- 広島県草戸千軒町遺跡調査研究所 1977～1980 草戸千軒 調査研究ニュース第5・6・7巻
- 弘前市教育委員会 1978 石川バイパス遺跡発掘調査報告書 「史跡 堀越城跡」
- 東京国立博物館編 1978 日本出土の中国陶磁
- 同志社大学校地学術調査委員会 1978 同志社キャンパス内出土の遺構と遺物 同志社校地内埋蔵文化財調査報告資料編II
- 佐々木達夫 1979 津軽出土の陶磁器と日本海交易 白水
- 第一法規出版株式会社 1980 月刊 文化財 11
- 岩手県教育委員会 1980 東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書IV（柳田館遺跡） 岩手県文化財調査報告書第53集
- 青森県教育委員会 1980 碓ヶ関村古館遺跡発掘調査報告書 青森県埋蔵文化財調査報告書第54集
- 八戸市教育委員会 1980 八戸市埋蔵文化財調査報告書第2集 史跡根城跡発掘調査報告書II
- 盛田稔編 1980 日本城郭大系第2巻（青森県）
- ニュー・サイエンス社 1980 特集・近世考古学の動向 考古学ジャーナルNo.182

---

浪岡城跡 Ⅲ

昭和55年3月25日印刷

昭和55年3月30日発行

発行 浪岡町教育委員会  
印刷 浪岡町 成田印刷

---